

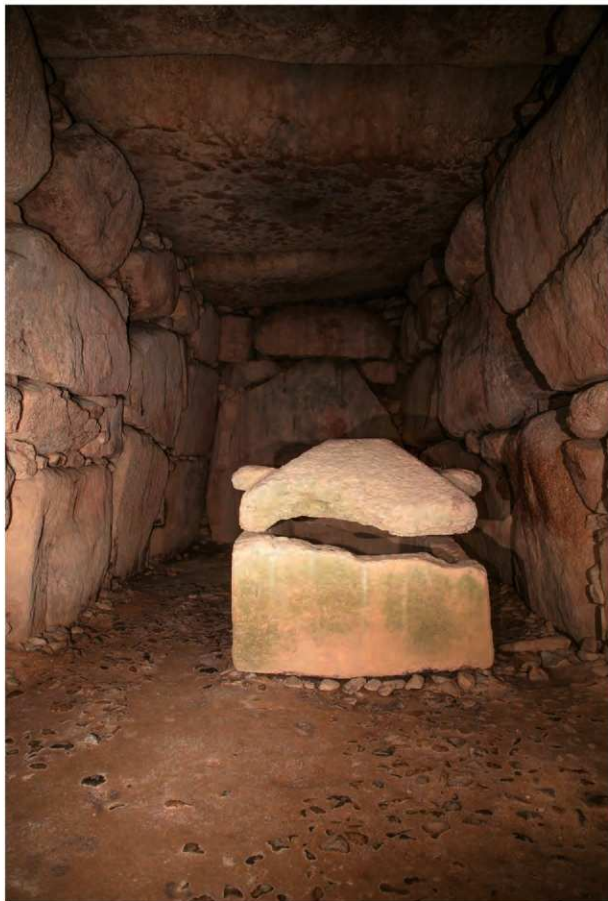
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 266

史跡 こうもり塚古墳

「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業に伴う保存活用総合調査

2023

岡山県教育委員会



こうもり塚古墳 横穴式石室（南から）

卷頭図版2



1 こうもり塚古墳 環頭大刀・馬具



2 こうもり塚古墳 須恵器・土師器

序

史跡こうもり塚古墳は、岡山県総社市南東の沖積平野の丘陵端部に位置します。この地域には史跡備中国分寺跡・国分尼寺跡をはじめ、全国第4位の規模を誇る造山古墳や作山古墳など全国的にも有名な遺跡が存在し、吉備路風土記の丘陵立自然公園として一般に広く親しまれています。

こうもり塚古墳は、昭和42年と昭和53年の発掘調査の結果、古墳時代後期に築かれた大型前方後円墳で、家形石棺を有する岡山県最大の横穴式石室からは金銅装の武器、馬具など貴重な遺物がみつかり、大和政権と繋がりを持つ吉備の大首長墓であることが分かっていました。

令和元年度、岡山県教育委員会は「岡山県文化財保存活用大綱」を策定し、その中で史跡こうもり塚古墳を含めたこの地域のさらなる魅力向上を見据えて調査・整備・活用の必要性を示し、翌年度に「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の第一歩として「史跡こうもり塚古墳保存活用計画書」を刊行しました。これを受け、岡山県古代吉備文化財センターでは、令和3年度から2か年にわたり、未解明であった墳丘構造を把握する目的で、こうもり塚古墳の発掘調査を行いました。その結果、本墳が長さ約96mを測り、古墳時代後期において中四国地方で最大級の古墳であることが確認できました。また、本事業では総合調査として過去の発掘調査で出土した資料の整理や関連する古墳の調査等も実施し、こうもり塚古墳が築造された時期やその背景についても貴重な知見を得ることができました。

これらの発掘調査成果等を掲載した本書が、今後の史跡こうもり塚古墳の保護・保存に活用されるとともに、わが国や地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施、報告書の作成に当たり御指導、御助言を賜りました調査指導会の皆様をはじめ、岡山大学考古学研究室、総社市並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 大橋 雅也

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会の「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の一環として、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が調査を実施した史跡こうもり塚古墳の発掘調査報告書である。令和2年度から4年度に文化財センターが実施した測量・発掘調査（墳丘）に加え、昭和42年に総社市教育委員会の依頼により岡山大学・岡山理科大学が実施した横穴式石室の発掘調査成果を掲載したほか、昭和53年度に岡山県教育委員会が実施し、昭和54年に「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35」で報告した調査成果も再整理の上、収載している。
- 2 史跡こうもり塚古墳は、総社市上林1166ほかに所在する。
- 3 地形測量及び周辺古墳群の測量調査は、令和2年度に文化財センター職員金田善敬・石田爲成・四田寛人が担当して実施した。
- 4 本書に収載した航空レーザ計測による地形測量図及び三次元計測による横穴式石室実測図は、令和2年度文化庁文化財保存事業費国庫補助金による成果である。
- 5 令和3・4年度の発掘調査及び報告書作成に当たっては、文化庁文化財保存事業費国庫補助金を得た。
- 6 墳丘の発掘調査は、令和3年度に文化財センター職員金田・藤井翔平・小林有紀子が、令和4年度に金田・藤井・小林・間所克仁が担当して実施した。調査面積は、令和3年度が225.7㎡、令和4年度が145.0㎡である。
- 7 事業の実施に当たっては、文化庁文化財第二課の指導を得た。また、「史跡こうもり塚古墳調査指導会」を設け、次の方々を委員を委嘱し、各委員から御指導、御助言を賜った。
史跡こうもり塚古墳調査指導会委員（所属は委嘱時）
亀田修一（岡山理科大学） 清家 章（岡山大学）
土生田純之（専修大学）
- 8 昭和42年及び昭和53年度調査分の整理作業は、岡山大学及び総社市から調査資料及び出土品を借用して実施した。
- 9 本書の作成は、令和2年度から4年度にかけて、文化財センターで実施した。
- 10 本書の執筆は、発掘担当者及び整理担当者が当たり、それぞれ文末に文責を記載した。また、全体の編集は金田が担当した。
- 11 本書の作成に当たり、遺構・遺物等について、次の諸氏から有益な御教示や玉稿を賜った。記して厚くお礼申し上げる（順不同）。
石室保存 脇谷草一郎（奈良文化財研究所） 石材鑑定 鈴木茂之（岡山大学）
胎土分析 白石 純（岡山理科大学）
陶棺鑑定 鐘方正樹（奈良市埋蔵文化財調査センター）
鳥取上高塚古墳墳丘測量 光本 順、山口雄治、ライアン ジョセフ（岡山大学）
- 12 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 13 本書に収載した出土遺物は総社市が、遺構・遺物の図面・写真等は、昭和42年の発掘調査分は岡山大学考古学研究室が、それ以外は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）が保管している。
- 14 脱稿後、本書作成のための整理段階において確認できていなかった金属製品の所在が判明した。これについては、後日、改めて報告する予定である。

凡 例

- 1 本書に記載した高度値は標高である。
- 2 遺構全体図・遺構図が示す北方位は、平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 3 遺構全体図・報告書抄録に記載したグリッド値・経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 4 本書に掲載した第2図の周辺遺跡分布図は国土地理院「電子地形図25000」を、第8図は総社市所管の総社市域図を基に加工して作成した。
- 5 遺構・遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しており、各図に縮尺率を明記している。
 遺構 トレンチ平面・断面図：1/50、1/80 横穴式石室：1/80
 遺物 土器・瓦：1/4、1/6 金属製品：1/1、1/2、1/3 玉類：1/1 石製品：1/2、1/3
- 6 遺物は、土器、金属製品、石製品、瓦、玉類に分け、通し番号を付している。土器以外は次の略号を番号の前に付けている。
 金属製品：M 石製品：S 瓦：R 玉類：J
- 7 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 8 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 9 横穴式石室各部の名称については基本的に「発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー」（文化庁文化財部記念物課 2013）等を参考とし、特に、袖や壁の方向については羨道口から奥壁を見たときの左右とした。
- 10 本書で用いる時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。また、使用した須恵器の型式は、田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981）に基づくが、特にTK10型式段階については、古段階をTK10号窯段階、新段階をMT85号窯段階と区別して記述した。なお、想定される年代観については第150図に示した。
- 11 過去に刊行されたこうもり塚古墳に関する報告等については、次の例のとおり略して記述している。

報告書名等	略称
永山卯三郎 1921 「三須ノ編組塚」『岡山縣史蹟名勝天然紀年物調査報告』第1冊 岡山県史蹟名勝天然紀年物調査会	『岡山縣史蹟報告』
永山卯三郎 1930 『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会	『岡山縣通史』
永山卯三郎 1937 『吉備郡史』上巻 吉備郡教育会	『吉備郡史』
葛原克人編 1979 「備中こうもり塚古墳ー「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査ー」 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会	『県報告35』
岡山県史編纂委員会 1986 『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県	『岡山県史』
総社市史編さん委員会 1987 『総社市史』考古資料編 総社市	『総社市史』

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査及び報告書作成の経緯と経過	7
第1節 こうもり塚古墳をめぐる調査	7
第2節 調査に至る経緯	12
第3節 調査及び報告書作成の経過	13
第4節 調査及び報告書作成の体制	15
第5節 日誌抄	17
第3章 発掘調査の概要	19
第1節 墳丘の調査	19
第2節 横穴式石室の調査	58
第4章 自然科学分野における鑑定・分析	109
第1節 横穴式石室石材の分析	109
第2節 こうもり塚古墳出土亀甲形陶棺の胎土分析	117
第5章 関連古墳の調査	121
第1節 緑山古墳群の測量調査	121
第2節 稲荷山古墳群の測量調査	134
第3節 赤磐市鳥取上高塚古墳の測量調査	151
第6章 総括	166
第1節 調査の概要	166
第2節 墳丘について	168
第3節 横穴式石室について	183
第4節 石棺・陶棺について	196
第5節 出土遺物について	207
第6節 こうもり塚古墳の歴史的意義	218
遺物観察表	229
図版	
報告書抄録	

目 次

第1図	史跡こうもり塚古墳の位置 (1/1,500,000) ……	1	第48図	出土遺物 (陶棺①) (1/10) ……	75
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……	2	第49図	出土遺物 (陶棺②) (1/10) ……	76
第3図	こうもり塚古墳周辺の古墳の変遷 ……	4	第50図	出土遺物 (陶棺③) (1/10) ……	77
第4図	こうもり塚古墳の墳丘及び横穴式石室測量図 (既往の研究) ……	8	第51図	出土遺物 (陶棺④) (1/10) ……	78
第5図	史跡こうもり塚古墳保存活用短期計画 ……	12	第52図	出土遺物 (須恵器①) (1/4) ……	80
第6図	こうもり塚古墳調査区配置図 (1/1,000) ……	14	第53図	出土遺物 (須恵器②) (1/4) ……	81
第7図	周辺地形測量図 (1/2,000) ……	19	第54図	出土遺物 (須恵器③) (1/4) ……	81
第8図	周辺の景観 (1/10,000) ……	20	第55図	出土遺物 (須恵器④) (1/4) ……	82
第9図	墳丘測量図 (1/1,000) ……	21・22	第56図	出土遺物 (須恵器⑤) (1/4) ……	82
第10図	墳丘断面図 (1/1,000) ……	23	第57図	出土遺物 (須恵器⑥) (1/4) ……	83
第11図	T 1 断面図 (1/80) ……	27・28	第58図	出土遺物 (須恵器⑦) (1/4) ……	84
第12図	T 1 断面図 (1/50) ……	29	第59図	出土遺物 (須恵器⑧) (1/6) ……	84
第13図	T 1 出土遺物 (1/4) ……	31	第60図	出土遺物 (土師器) (1/4) ……	85
第14図	T 2 断面図 (1/80) ……	32	第61図	出土遺物 (環頭大刀) (1/1) ……	87
第15図	T 2 断面図 (1/50) ……	33	第62図	出土遺物 (大刀) (1/3) ……	92
第16図	T 6 断面図 (1/80) ……	34	第63図	出土遺物 (馬具①) (1/3) ……	93
第17図	T 6 断面図 (1/50) ……	36	第64図	出土遺物 (馬具②) (1/2) ……	95
第18図	T 7 平面図 (1/80) ……	37	第65図	出土遺物 (鉄鎌①) (1/3) ……	96
第19図	T 7 断面図 (1/80) ……	38	第66図	出土遺物 (鉄鎌②) (1/3) ……	97
第20図	T 7 出土遺物 (1/4) ……	39	第67図	出土遺物 (鉄鎌③) (1/3) ……	98
第21図	T 5 断面図 (1/80) ……	40	第68図	出土遺物 (鉄鎌④ほか) (1/2・1/3) ……	99
第22図	T 5 断面図 (1/50) ……	41	第69図	出土遺物 (農工具ほか) (1/3) ……	100
第23図	T 5 出土遺物 (1/4) ……	41	第70図	出土遺物 (金具等) (1/3) ……	101
第24図	T 8 断面図 (1/80) ……	42	第71図	出土遺物 (鉄滓) (1/3) ……	102
第25図	T 4 断面図 (1/80) ……	45・46	第72図	出土遺物 (耳環) (1/2) ……	102
第26図	T 4 断面図 (1/50) ……	47	第73図	出土遺物 (玉) (1/1) ……	102
第27図	T 4 出土遺物 (1/3・1/4) ……	48	第74図	出土遺物 (古墳時代以外の遺物 瓦以外) (1/2・1/3・1/4) ……	103
第28図	T 9 断面図 (1/80) ……	49	第75図	出土遺物 (瓦①) (1/6) ……	104
第29図	T 9 断面図 (1/50) ……	50	第76図	出土遺物 (瓦②) (1/6) ……	105
第30図	T 10断面図 (1/80) ……	52	第77図	出土遺物 (瓦③) (1/6) ……	106
第31図	T 10出土遺物 (1/4) ……	52	第78図	出土遺物 (瓦④) (1/6) ……	107
第32図	T 3・T 11平面・断面図 (1/50・1/80) ……	53・54	第79図	遺跡周辺の地質図 ……	109
第33図	T 3 出土遺物 (1/4) ……	55	第80図	こうもり塚古墳石室の石材 (1/100) ……	113
第34図	T 12平面図 (1/80) ……	56	第81図	こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内 陶棺の比較① ……	119
第35図	T 12断面図 (1/80) ……	57	第82図	こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内 陶棺の比較② ……	119
第36図	T 12土坑2断面図 (1/30) ……	57	第83図	こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内 陶棺の比較③ ……	120
第37図	T 12出土遺物 (1/4) ……	57	第84図	こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内 陶棺の比較④ ……	120
第38図	横穴式石室実測図① (1/80) ……	59・60	第85図	緑山古墳群 (6～8号墳) 地形測量図 (1/1,000) ……	121
第39図	横穴式石室実測図② (1/80) ……	61	第86図	緑山6号墳墳丘測量図 (1/300) ……	123
第40図	横穴式石室土層断面図 (1/60・1/80) ……	63	第87図	緑山6号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	124
第41図	石棺 (1/40) ……	65	第88図	緑山6号墳横穴式石室天井土層図 (1/80) ……	125
第42図	石棺破損状況 (1/40) ……	66	第89図	緑山7号墳墳丘測量図 (1/500) ……	126
第43図	横穴式石室遺物出土状況 (1/80) ……	68			
第44図	横穴式石室遺物出土状況 (拡大) (1/40) ……	69			
第45図	出土遺物 (陶棺①) (1/10) ……	71			
第46図	出土遺物 (陶棺②) (1/10) ……	72			
第47図	出土遺物 (陶棺③) (1/10) ……	74			

第90図	緑山7号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	127
第91図	緑山7号墳横穴式石室天井見上げ図 (1/80) ……	128
第92図	緑山8号墳墳丘測量図 (1/500) ……	129
第93図	緑山7・8号墳墳丘測量図 (赤色立体地図) (1/500) ……	130
第94図	緑山8号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	131・132
第95図	稲荷山古墳群地形測量図 (1/5,000) ……	134
第96図	稲荷山C4号墳墳丘測量図 (1/300) ……	136
第97図	稲荷山C4号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	137
第98図	稲荷山C4号墳横穴式石室天井見上げ図 (1/80) ……………	138
第99図	稲荷山C10号墳墳丘測量図 (1/300) ……	139
第100図	稲荷山C10号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	139
第101図	稲荷山C36号墳墳丘測量図 (1/300) ……	141
第102図	稲荷山C36号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	142
第103図	稲荷山C40号墳墳丘測量図 (1/300) ……	144
第104図	稲荷山C40号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	144
第105図	稲荷山C41号墳墳丘測量図 (1/300) ……	146
第106図	稲荷山C41号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	147
第107図	稲荷山C41号墳横穴式石室天井見上げ図 (1/80) ……………	148
第108図	稲荷山C41号墳出土遺物 (1/4) ……	148
第109図	稲荷山C69号墳墳丘測量図 (1/300) ……	149
第110図	稲荷山C69号墳横穴式石室実測図 (1/80) ……	150
第111図	鳥取上高塚古墳と周辺の古墳 (1/10,000) ……	151
第112図	墳丘測量図① (1/800) ……	155
第113図	墳丘測量図② (1/400) ……	157
第114図	墳丘断面図 (1/400) ……	158
第115図	墳長の計測点 (1/600) ……	159
第116図	横穴式石室実測図 (1/80) ……	161・162
第117図	墓道土層断面図 (1/40) ……	163
第118図	こうもり塚古墳の築造工程模式図 ……	169
第119図	後門部の復元 (1/200) ……	172
第120図	前方部の復元 (1/200) ……	174
第121図	こうもり塚古墳の墳丘復元案 (1/1,000) ……	175
第122図	こうもり塚古墳の築造企画案 (1/2,000) ……	176
第123図	墳丘の構築方法 ……	177

第124図	五条野丸山古墳 (1/6,000) ……	179
第125図	こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の墳丘比較 (1/6,000・1/2,000) ……	179
第126図	こうもり塚古墳と鳥取上高塚古墳の墳丘比較 (1/2,000) ……	180
第127図	岡山県における横穴式石室規模の比較 ……	183
第128図	横穴式石室の変遷 (1/200・1/500) ……	184
第129図	横穴式石室の地域性 (1/400,000) ……	184
第130図	三須丘陵における横穴式石室の大きさの分布 ……………	186
第131図	横穴式石室の奥壁による分類 ……	187
第132図	三須丘陵における横穴式石室の変遷 (1/400) ……………	189・190
第133図	関連する横穴式石室 (1/400) ……	192
第134図	石棺の型式変遷 (概略) ……	197
第135図	こうもり塚古墳石棺と同じ特徴を有する石棺 (1/80) とその分布 ……	198
第136図	こうもり塚古墳出土陶棺の復元案 (1/20) ……	200
第137図	脚部の製作工程 ……	202
第138図	蓋の製作工程 ……	202
第139図	出現期～赤田2期における陶棺蓋下部の形状 と変遷 ……	203
第140図	出現期～赤田1期における陶棺身上部部の形状 と変遷 ……	203
第141図	龍王山系列の変遷 ……	207
第142図	こうもり塚古墳の馬具 (1/4) ……	209
第143図	こうもり塚古墳の鉄鍬 (1/4) ……	211
第144図	「鉛筆のキャップ形」鉄鍬の例 (1/3) ……	211
第145図	こうもり塚古墳出土杯の分類 (1/6) ……	212
第146図	備中南部 高杯 (B型) の変遷 (1/6) ……	213
第147図	備中南部 盃の変遷 (1/6) ……	214
第148図	備中南部 提瓶の変遷 (1/8) ……	214
第149図	こうもり塚古墳出土須恵器の時期 (1/10) ……	215
第150図	こうもり塚古墳の位置付け ……	219
第151図	6世紀後半における100m級以上の前方後円墳 ……………	221

巻頭図版目次

巻頭図版1 こうもり塚古墳 横穴式石室 (南から)

巻頭図版2 1 こうもり塚古墳 環頭大刀・馬具
2 こうもり塚古墳 須恵器・土師器

図版目次

図版1 1 こうもり塚古墳周辺 (南西上空から)
2 こうもり塚古墳 (南上空から)
図版2 1 こうもり塚古墳墳丘測量図 (1/1,000)
2 こうもり塚古墳鳥瞰図 (南から)
図版3 1 こうもり塚古墳全景 (南東から)

2 こうもり塚古墳全景 (西から)
3 こうもり塚古墳石室入口 (南から)
図版4 1 後門部 (西から)
2 後門部 (北東から)
3 前方部前面 (東から)

図版5	1 T1周縁部(南から)
	2 T1下段(南から)
	3 T1上段(南から)
図版6	1 T1上段(南西から)
	2 T2(北西から)
図版7	1 T2下段(西から)
	2 T6下段(南西から)
	3 T6上段(南西から)
図版8	1 T7(西から)
	2 T7(東から)
	3 T7西壁(北から)
図版9	1 T5(南から)
	2 T8(西から)
	3 T4(南から)
図版10	1 T4(南から)
	2 T4(南から)
	3 T9(南から)
図版11	1 T9(東から)
	2 T10(東から)
	3 T3(東から)
図版12	1 T3(北東から)
	2 T11(北東から)
	3 T12(東から)
図版13	1 T1墳丘断面オルソ画像(1/60)
	2 T2墳丘断面オルソ画像(1/60)
	3 T7西壁墳丘断面オルソ画像(1/60)
図版14	1 T5墳丘断面オルソ画像(1/60)
	2 T4墳丘断面オルソ画像(1/60)
	3 T9墳丘断面オルソ画像(1/60)
図版15	1 T1上段断面オルソ画像(拡大)(1/30)
	2 T9上段断面オルソ画像(拡大)(1/20)
	3 T9上段断面オルソ画像(拡大)(1/30)
図版16	1 玄室(北から)
	2 羨道(南から)
	3 石室入口(南から)
図版17	1 玄室内石棺(発掘調査前)(北から)
	2 玄門付近(発掘直後)(南から)
	3 羨道閉塞石(南から)
図版18	1 玄室遺物出土状況(南から)
	2 玄室遺物出土状況(北東から)
	3 陶棺脚部出土状況(東から)
図版19	1 石棺東側遺物出土状況(西から)
	2 羨道遺物出土状況(北から)
	3 羨道遺物出土状況(南から)
図版20	1 墳丘盛土断面(南から)
	2 閉塞石及び墓道充填土(北から)
	3 左:墓道開口(北から) 右:墓道内一括須恵器(西から)
図版21	1 石棺オルソ画像(1/40)
	2 石棺(南西から)
	3 石棺(北西から)
図版22	出土遺物(陶棺①)

図版23	出土遺物(陶棺②)
図版24	出土遺物(陶棺③)
図版25	出土遺物(陶棺④)
図版26	出土遺物(須恵器①)
図版27	出土遺物(須恵器②)
図版28	出土遺物(須恵器③)
図版29	出土遺物(須恵器④・土師器)
図版30	出土遺物(金属製品①)
	1 環頭大刀柄頭
	2 大刀
	3 馬具①
図版31	出土遺物(金属製品②) 馬具②
図版32	出土遺物(金属製品③)
	1 馬具③
	2 鉄鎌①
図版33	出土遺物(金属製品④)
	1 鉄鎌②
	2 鉄鎌③ほか
図版34	出土遺物(金属製品⑤・石製品・玉類)
	1 農具ほか
	2 鉄洋
	3 耳環・玉
	4 石鏃・石斧
	5 鉄斧
図版35	出土遺物(JC)
図版36	こうもり塚古墳周辺地形図(1/10,000)
図版37	1 緑山古墳群地形図(1/2,000)
	2 稲荷山古墳群ほか地形図(1/3,000)
図版38	1 緑山6号墳奥壁(西から)
	2 緑山6号墳石室入口(西から)
	3 緑山6号墳玄門(東から)
	4 緑山6号墳右側壁(北東から)
	5 緑山6号墳左側壁(南東から)
図版39	1 緑山7号墳奥壁(南西から)
	2 緑山7号墳石室入口(南西から)
	3 緑山7号墳玄門(北東から)
	4 緑山7号墳左側壁(南から)
	5 緑山7号墳右側壁(西から)
図版40	1 緑山8号墳奥壁(南西から)
	2 緑山8号墳右側壁(北から)
	3 緑山8号墳左側壁(東から)
	4 緑山8号墳玄門(北東から)
	5 緑山8号墳羨道(南西から)
図版41	1 稲荷山C4号墳奥壁(東から)
	2 稲荷山C4号墳全景(南から)
	3 稲荷山C4号墳玄門(西から)
	4 稲荷山C4号墳左側壁(東から)
	5 稲荷山C4号墳右側壁(南東から)
図版42	1 稲荷山C10号墳奥壁(東から)
	2 稲荷山C10号墳石室入口(東から)
	3 稲荷山C10号墳玄門(西から)
	4 稲荷山C10号墳右側壁(南西から)

	5	稲荷山C10号墳左側壁 (北西から)
図版43	1	稲荷山C36号墳奥壁 (南東から)
	2	稲荷山C36号墳右側壁 (西から)
	3	稲荷山C36号墳左側壁 (北から)
	4	稲荷山C36号墳玄門 (北西から)
	5	稲荷山C36号墳羨道 (北西から)
図版44	1	稲荷山C41号墳奥壁 (南から)
	2	稲荷山C41号墳玄門 (北から)
	3	稲荷山C41号墳羨道 (北から)
	4	稲荷山C40号墳全景 (南東から)
	5	稲荷山C40号墳奥壁 (南から)
図版45	1	稲荷山C69号墳奥壁 (南西から)

	2	稲荷山C69号墳石室入口 (南西から)
	3	稲荷山C69号墳玄門 (北東から)
	4	稲荷山C69号墳左側壁 (南から)
	5	稲荷山C69号墳羨道 (北東から)
図版46	1	鳥取上高塚古墳オルソ画像
	2	鳥取上高塚古墳遠景 (東から)
	3	鳥取上高塚古墳全景 (西から)
図版47	1	鳥取上高塚古墳 奥壁と天井 (南西から)
	2	鳥取上高塚古墳玄門 (北東から)
図版48	1	鳥取上高塚古墳左側壁 (南から)
	2	鳥取上高塚古墳右側壁 (西から)
	3	鳥取上高塚古墳石室入口 (南西から)

表 目 次

表1	こうもり塚古墳に関する調査等	9
表2	こうもり塚古墳調査区一覧	14
表3	文化財保護法に基づく文書一覧	18
表4	こうもり塚古墳出土陶棺の分析結果 (%)	118
表5	緑山古墳群 (6~8号墳) 計測表	122
表6	稲荷山古墳群 (C4・C10・C36・C40・C41・C69号墳) 計測表	135

表7	鳥取上高塚古墳に関する調査研究等 (1)	153
表8	鳥取上高塚古墳に関する調査研究等 (2)	154
表9	墳丘に関する計測値	171
表10	岡山県におけるこうもり塚古墳と共通する馬具を出土する古墳の例	210
表11	関連する横穴式石室	223

写 真 目 次

写真1	石棺	
	1	北西角 (北西から) 66
	2	南東側長側面突起 (北から) 66
	3	南側短側面突起痕跡 (南から) 66
	4	北側短側面突起 (北東から) 66
写真2	陶棺①	71
写真3	陶棺②	
	1	蓋2 文様 (飾り板 (図上面)) 73
	2	蓋2 文様 (飾り板 (図下面)) 73
	3	蓋2 文様 (波状突起部 (図上面)) 73
	4	蓋2 文様 (波状突起部 (図下面)) 73
写真4	陶棺③	
	1	脚内面粘土接合痕跡 (身1脚部) 78
	2	身底部の切断痕 (身12) (俯瞰) 78
	3	脚内面底部側の状況 (脚1) 78
	4	脚外面のハケメ (脚8) 78
写真5	環頭大刀①	
	1	A面鳳凰 88
	2	A面鳳凰 88
	3	B面鳳凰 88
	4	B面鳳凰 88
写真6	環頭大刀②	
	1	走龍文A (A面) 89
	2	走龍文A (B面) 89
	3	走龍文B (A面) 89

	4	走龍文B (B面) 89
	5	走龍文A (A面) 頭部 89
	6	走龍文A (B面) 頭部 89
	7	走龍文A (B面) 耳 89
	8	走龍文A (A面) 脚 89
写真7	環頭大刀③	
	1	走龍文B (B面) 頭部 90
	2	走龍文B (A面) 頭部 90
	3	走龍文B (B面) 耳 90
	4	走龍文B (B面) 脚 90
写真8	環頭大刀④	
	1	走龍文A (A面) 脚 91
	2	走龍文A (B面) 脚 91
	3	走龍文B (A面) 脚 91
	4	走龍文B (B面) 脚 91
	5	茎 (A面) 91
	6	茎 (B面) 91
写真9	花園四緑岩の例 (岡山市北区山上 (矢田))	110
写真10	カリ長石大結晶を伴う花園岩	
	1	矢喰の岩のカリ長石大結晶を伴う花園岩 111
	2	矢喰の岩の新鮮な面 (横約15cm) 111
	3	鷲尾塚古墳南東の転石 111
	4	3の拡大 (横約30cm) 111
写真11	こうもり塚古墳石室の石材	
	1	カリ長石大結晶を伴う花園岩 112

2	粗粒均質な花崗岩	112	2	こうもり塚古墳石棺の石材	115
3	細粒均質な花崗岩	112	写真13	石材表面の赤色部	
4	流紋岩	112	1	石材2の赤色部とその周辺	115
5	安山岩	112	2	赤色部非赤色部境界	115
6	花崗閃緑岩	112	3	石材2の赤色部と節理面	115
写真12	石棺の石材		4	石材1の赤色部	115
1	浪形石（井原市千手院）	115	写真14	蓋1端部裏面と粘土接合痕	202

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

こうもり塚古墳の所在する総社平野は岡山県の南西部に位置する、東西約8km、南北約5kmの東西に細長い平野である。総社平野の北側には経山や鬼城山など標高300～400m級の比較的急峻な山塊が横たわり、吉備高原の南縁となっている一方、平野の南側は福山や仕手倉山など標高200～300m程度の山塊が広がる。総社平野は古高梁川の東分流によって形成された平野で、東分流は平野の東端で南流する古足守川に合流し、現在の岡山市北区吉備津付近で瀬戸内海に注いでいたと考えられる。総社平野を含め、これらの旧河道流域には大小多くの自然堤防や後背湿地が残され、自然堤防などの微高地上には古くから現在に至るまで集落が営まれている。

こうもり塚古墳は、総社平野の南東に広がる三須丘陵に位置する。三須丘陵は、仕手倉山を含む山塊の北側に位置する独立低丘陵⁽²⁾であり、北東端に位置する庚申山から西端の作山古墳付近までの東西約4km、南北約2.5kmの規模を持つ。全体に谷の出入りの多い傾斜の緩やかな丘陵であり、高塚山、稲荷山などの複数の丘を連ねる。最高所は高塚山で標高80.3m、庚申山の頂は74.2mを測る。三須丘陵は近隣の山塊と同様に花崗岩とその風化土からなっているが、丘陵中央部には花崗閃緑岩も分布している。第4章で示しているように、こうもり塚古墳の横穴式石室の石材は、三須丘陵やこれら周辺の山塊から運ばれた可能性が高い。こうもり塚古墳は、三須丘陵南の南西方向に伸びる舌状の低い尾根を利用して築造されている。

第2節 歴史的環境

総社平野に生きた人々の足跡は旧石器時代にさかのぼり、浅尾遺跡などでナイフ形石器が採集されている。続く縄文時代前半の資料としては、押型文土器が長良山遺跡や真壁遺跡から出土しているが、出土量は僅かである。総社平野での人々の活動が活発化するのには縄文時代後晩期からであり、新たに形成された沖積地を中心に、南溝手遺跡や窪木遺跡など遺跡数が増加する。南溝手遺跡では初痕の付いた縄文土器が発見され、日本列島における稲作の開始を考える上で重要な資料になっている。また、同遺跡では、朝鮮半島の無文土器との関連が指摘できる孔列文土器が出土しているほか、窪木遺跡では朝鮮半島の影響を受けた



第1図 史跡こうもり塚古墳の位置
(1/1,500,000)



- | | | | | |
|----------------|---------------|-------------|----------------|-----------|
| 1 こうもり塚古墳 | 2 鬼城山(鬼ノ城) | 3 千引カナクロ谷遺跡 | 4 新山廃寺 | 5 随庵古墳 |
| 6 奥ヶ谷宮跡 | 7 浅尾遺跡 | 8 神明遺跡 | 9 窪木遺跡 | 10 南溝手遺跡 |
| 11 長良山遺跡 | 12 高塚遺跡 | 13 備中高松城跡 | 14 井手天原遺跡 | 15 栢寺廃寺 |
| 16 御所遺跡・伝備中国府跡 | 17 窪木薬師遺跡 | 18 真壁遺跡 | 19 三須高田遺跡 | 20 三須河原遺跡 |
| 21 緑山古墳群 | 22 福岡山古墳群 | 23 江崎古墳 | 24 法蓮古墳群 | 25 小造山古墳 |
| 26 雲上山古墳群 | 27 津寺遺跡 | 28 山津田遺跡 | 29 作山古墳 | 30 備中国分寺跡 |
| 31 備中国分尼寺跡 | 32 宿寺山古墳 | 33 造山古墳群 | 34 宮山墳墓群・天望台古墳 | 35 笠山古墳 |
| 35 天満遺跡 | 36 岩屋遺跡・岩屋古墳群 | 37 殿山古墳群 | 38 古代山陽道(推定) | 39 幸山城跡 |
| 40 角力取山古墳 | 41 鎌戸原遺跡 | 42 前山遺跡 | 43 道金山宮跡 | 44 末ノ奥宮跡群 |
| 45 江田池古宮跡群 | 46 栢梁遺跡 | | | |

第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

丹塗磨研土器が出土しており、稲作の導入期にこうした遠隔地との交流を示す遺物がみられる。

弥生時代前期から中期前半の遺跡として、真壁遺跡、窪木遺跡、南溝手遺跡、山津田遺跡、鎌戸原遺跡がある。南溝手遺跡では、「松菊里型」の竪穴住居が検出されているほか、集落内で玉作りを行っていることも明らかとなっている。続く中期後半から後期になると遺跡数が増加するとともに、集落の規模も拡大し、拠点的な集落形成が進む。前述の南溝手遺跡でこの時期の集落が知られるほか、三須畠田遺跡や天満遺跡ではこの時期から集落形成が始まっており、真壁遺跡なども遺構数が急増する。また、高塚遺跡や神明遺跡では銅鐸が埋納された状態で発見されており、集落の指導者による祭祀行為が行われていたことが想定される。こうした集落規模の拡大にあわせるように、丘陵上で墳墓が形成され始め、前山遺跡、岩屋遺跡で集団墓が営まれる。楯築遺跡は墳長約83mに復元される大型の墳丘墓で、全国でも最大級の規模を持つ。ここで使用された特殊器台を用いた埋葬儀礼は、宮山墳墓群など吉備南部を中心に継承されていく。この岡山県南部で創出された特殊器台を伴う祭祀は、次の古墳時代の前方後円墳を中心とする墓制の成立に大きな影響を与えたと考えられている。

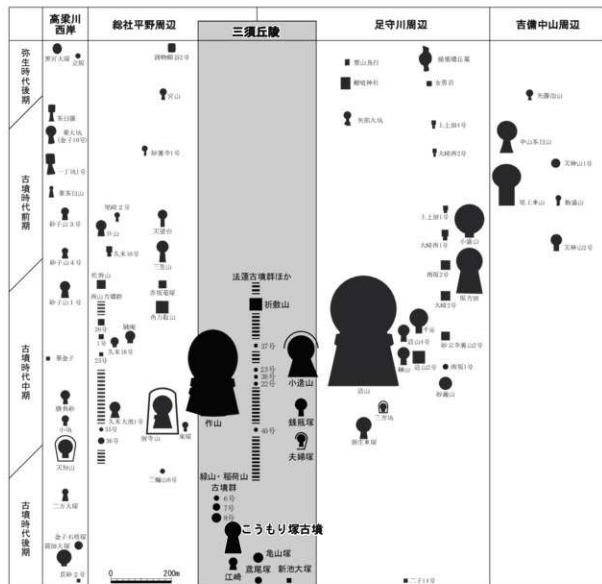
こうもり塚古墳の周辺には数多くの古墳が分布している。前期の古墳としては三輪山丘陵上において、天望台古墳や三笠山古墳などの前方後円墳が知られている。これらは墳長40～60mを測り、前期の前方後円墳としては中型の部類に属する。これらの前方後円墳の近辺には殿山古墳群・岩屋古墳群など古墳時代前期の小古墳群が展開している。一方、この時期の集落としては井手天原遺跡や真壁遺跡、窪木薬師遺跡が知られているが、足守川流域の津寺遺跡では大規模な集落も出現している。

その後、古墳時代中期になると造山古墳に続いて作山古墳という吉備を代表する巨大な前方後円墳が出現する。また、小造山古墳や宿寺山古墳など墳長100mを超す大型の前方後円墳が相次いで築かれる。この時期には三須丘陵上でも法蓮古墳群や雲上山古墳群など、木棺直葬や箱式石棺を埋葬施設とする小規模な古墳群が展開するようになる。造山古墳の築造された古墳時代中期前半の集落としては高塚遺跡や窪木薬師遺跡が知られている。高塚遺跡では陶質土器・初期須恵器が出土しており、こうもり塚古墳に近い窪木薬師遺跡では、鉄製品の素材と考えられている鉄錠が発見され、鍛冶集落と評価されている。また、総社平野北部の山裾にある奥ヶ谷窯跡は、この時期の初期須恵器窯として知られ、随庵古墳では鍛冶道具も出土している。中期にはこのように大陸から新しい技術や文物が盛んに導入されていたことが分かる。

古墳時代後期に入ると総社平野での前方後円墳の築造は少なくなる。特に、三須丘陵周辺においては、先述の宿寺山古墳以後、こうもり塚古墳の出現まで、少なくとも半世紀以上にわたり大型の前方後円墳が築かれていない。一方、周辺の三須丘陵では緑山古墳群など横穴式石室の本格的な採用がみられ、多数の横穴式石室が築造されている。緑山古墳群では、導入期の横穴式石室を持つ古墳と評価される緑山6号墳から、7号墳、8号墳と横穴式石室の大型化が進む。また、周辺の稲荷山などの丘陵においても多数の横穴式石室が築かれている。この地域における横穴式石室は特に規模の大きいものが多く、岡山県内だけでなく全国的にも注目されている。このような状況下で、古墳時代後期において、墳長約96mの前方後円墳であるこうもり塚古墳が出現する。こうもり塚古墳には全長19.9mを測る横穴式石室が伴っており、他の古墳を圧倒する。こうもり塚古墳築造後、同じく前方後円墳である江崎古墳が築かれるが、墳長約45mと半分程度の規模となる。この江崎古墳は当地における最後の前方後円墳で、これらを最後に前方後円墳の築造は終了する。横穴式石室の築造は7世紀に入っても続き、緑山17号墳や鷹尾塚古墳などが出現する。

この時期になると、古備では主に鉄鉱石を原料とした製鉄が開始され、須恵器生産など窯業も本格化する。総社市内には、日本で最古級の製鉄遺跡である千引カナクろ谷遺跡のほかにも数多くの製鉄遺跡が分布する。こうもり塚古墳に近い窪木業師遺跡においては、近辺で生産した鉄を加工する専門化した鍛冶集団の集落が営まれる。こうもり塚古墳や周辺古墳に供給された須恵器を生産した窯跡については十分な資料が蓄積されているとはいえないが、倉敷市矢部の江田池古窯跡群はその候補地の一つとなろう。また、こうもり塚古墳の近くでは、時期がやや新しくなるが7世紀以降になると道金山窯跡や末ノ奥窯跡群が操業する。道金山窯跡では、左右が逆になった「官」の文字が押印された須恵器が生産されているが、奈良県にまで持ち込まれ、達磨寺3号墳の周溝から出土している。また、末ノ奥窯跡群で生産された瓦が奈良県平吉遺跡まで運ばれており、この平吉遺跡は、蘇我氏が運営した豊浦寺と関連が深い遺跡と考えられている。

7世紀後半には、賀陽氏の氏寺と推定されている栢寺廃寺が創建され、現在も塔心礎が残る。また



図は松木2006を基に近年の調査成果を取り入れて作成したが、中には墳形や補属年代について不明なものが含まれている。

第3図 こうもり塚古墳周辺の古墳の変遷

同じ頃、『日本書紀』などの文献に記載はされていないが、古代山城の一つである鬼城山（鬼ノ城）が築かれた。約30haという広大な城で、城門や城壁が良好に残存しており、現在、西門が復元されている。

律令制下において、備中国は9郡を置く上国であった。備中国府の所在地については議論があるが、『和名抄』の記述によると賀陽郡に所在していたようである。こうもり塚古墳一帯は、備中国窪屋郡美箒（三須）郷に含まれていて、窪屋郡衙は「郡殿」の墨書土器が出土したことから三須河原遺跡に比定されている。また、こうもり塚古墳の南側には古代山陽道が東西に通っていたと推定され、備中国分寺、国分尼寺もその沿道に建立されている。

平安時代には、備中国府の一画を占める御所遺跡において、大溝で囲まれた方形居館や特殊な構造を持つ井戸が営まれている。また、福山山塊で福山寺や安養寺、鬼城山（鬼ノ城）に隣接して新山寺などの山上寺院が建立されている。平安時代末期の源平の争乱では、平氏を追って備前国に入った源義仲を、備中の武将である妹尾兼康が迎え撃ったが敗れ、備中国板倉で討ち死にしている。

備中国には、源平の争乱に際し平氏に加担する武士が多かったため、争乱後、鎌倉幕府は、土肥実平など御家人の中でも特に有力な武将を備中国の守護に任命し治安維持に当たった。また、東大寺復興のため備前国に赴いた重源は備中国にも関与し、備中別所（新山寺）の浄土堂を修理復興している。重源は仏教の布教に努められたから、土木事業を行い源平争乱後の復興にも貢献した。備中国の鎌倉時代の様相を現在に伝えるものとして「備中国賀陽郡服部郷図」がある。総社市長良・窪木付近に所在した服部郷の土地所有を条里によって記載した郷図で、図面に示されているように、この時期に土地所有関係の整理・統合が進んだものとみられる。

南北朝時代には、福山城による新田義貞方の武将、大江田氏経と足利直義との間で福山城を巡る攻防戦が行われ、新田方が敗走した。このとき、福山寺や備中国分寺が灰燼に帰したと伝わる。室町時代に備中守護となったのは幕府の管領を務めた細川氏であるが、高梁川以東の経営に当たっていたのは幸山城に居を構える守護代石川氏であった。応仁の乱を契機に細川氏の勢力が弱まると、石川氏は新たに台頭した備中松山城主の三村氏の傘下となった。しかし、三村氏は宇喜多氏との抗争に敗れてその勢力を失い、備中に進出した毛利氏により滅ぼされる。その後、天正10年（1582）、備中高松城を巡る攻防が織田（羽柴）氏優勢に終わり、結果として総社平野は羽柴（豊臣）氏にくみした宇喜多氏の支配するところとなった。

関ヶ原の戦いを経て、宇喜多氏・毛利氏の除封の後、総社平野は岡山藩・備中松山藩・足守藩・岡田藩・浅尾藩・旗本領に細かく分割された。こうもり塚古墳の所在する上林村も、宇喜多氏の支配ののち、はじめ浅尾藩、後に旗本領を経て再び浅尾藩に編入された。

備中国分寺は、中世には廃れていたが、江戸時代中期の享保年間に惣持院住職増鉄によって再興された。その後およそ1世紀を経て、20年余の年月をかけて五重塔が建立された。

廃藩置県とその後の行政区画の整理統合を経て、明治8年（1875）には現在の岡山県が成立し、あわせてこうもり塚古墳の所在する上林付近は岡山県窪屋郡三須村となった。明治33年には郡の再編に伴い都窪郡に属することとなった。さらに昭和29年（1954）には吉備郡総社町と合併し、同年、現在の総社市へと編入された。現在、こうもり塚古墳周辺は吉備路風土記の丘県立自然公園の一部となり、県内外から多くの観光客を受け入れる観光拠点となっている。

（金田）

注

総社平野東側には、国道429号を挟んで、標高100m以下の独立丘陵が二つ存在する。そのうち、作山古墳を含む西側の低丘陵は現在の地名（大字）では総社市三須に含まれているが、緑山・稲荷山古墳群等が存在する東側の丘陵は三須には含まれない。この三須丘陵の呼称は、この丘陵がかつての三須村の領域に存在していたことに由来するものであり、現在も使用されている。なお、三須丘陵の範囲については、西側のみ、あるいは東側のみ、又は両方を意味する場合があるが、本書では、東西両方の丘陵を含む範囲を三須丘陵として扱うことにする。

主要参考文献

- 阿部泰久・中岡敬善 1987「倉敷市矢部・江田池周辺の窯跡と陶板」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会
宇垣匡雅 2021『橋梁墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室
江見正己編 2000『高塚遺跡 三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会
岡田博編 1997『窪木遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 岡山県教育委員会
岡山県史編纂委員会 1986『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
小栗明彦編 2001『連磨寺3号墳範囲確認調査報告書』王寺町文化財調査報告書第2集 王寺町教育委員会
金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡 鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236 岡山県教育委員会
葛原克人編 1979『備中こうもり塚古墳—「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査—』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会
近藤義郎編 1987『緑山古墳群』総社市文化振興財団
近藤義郎編 1992『橋梁弥生墳丘墓の研究』橋梁刊行会
島崎東編 1993『窪木築師遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86 岡山県教育委員会
総社市教育委員会 2019『総社市埋蔵文化財調査年報28（平成29年度）』
総社市史編さん委員会 1987『総社市史』考古資料編 総社市
総社市史編さん委員会 1998『総社市史』通史編 総社市
武田恭彰編 1999『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市教育委員会
奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』8
平井泰男編 1995『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県教育委員会
松尾洋平編 2005『古代山城 鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告18 総社市教育委員会
松木武彦 2006『吉備地域における古墳築造パターンの変化』『畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会例会シンポジウム記録5 考古学研究会
渡邊恵里子・團奈歩編 2019『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告249 岡山県教育委員会

第2章 調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 こうもり塚古墳をめぐる調査

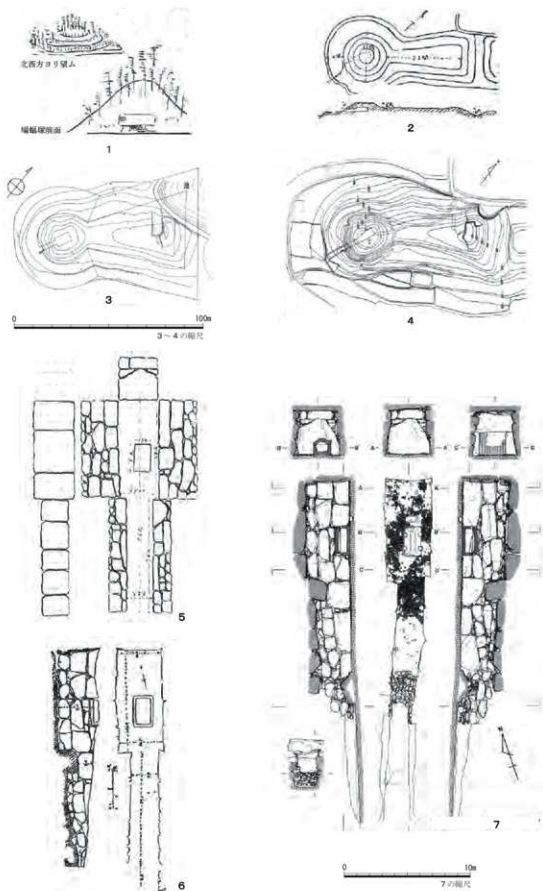
こうもり塚古墳は江戸時代の文献に記録があり、古くから知られていたことが分かる。永山卯三郎は、総社宮の宮司を務めていた堀安道（1829～1875）の記した『總社記』の記述を引用し、「文政初年発掘。玉、刀、鏡を出せし」と記述している（永山1930）。また、神野力は『總社宮の記録によると、この古墳は、元禄の頃に盗掘されて、かなりの副葬品が出土したようだが、今ではわからなくなっている』と記している（神野1967）。この『總社記』（惣社記）は、1980年代後半の総社市史編纂当時において所在不明となっており、現在、内容を確認できない状況となっているため（平井編2016、11頁）、こうもり塚古墳がどのように記述されていたかは不明である。

こうもり塚古墳の名称について、江戸時代末期の史料と考えられている『備中誌』には、こうもり塚古墳が地元で「籠り塚」と呼ばれ、また、コウモリが多かったことから俗に「こふもり塚」といわれていたことが記録されている。このことから、江戸時代後期は「籠り塚」が使用され、「こうもり塚」は俗称であったことが分かる。この「籠り塚」の由来について、春成秀爾は地元の古老の話として、子どもの頃、横穴式石室内で土地の人がバクチをうっていたとの証言を紹介し、「籠り塚」がバクチ穴に由来する可能性に言及した（春成1971）。大正10年（1921）に刊行された『岡山縣史蹟報告』では、こうもり塚古墳の他の名称について、「皇塚」、あるいは「古事記」や『日本書紀』に記載された人物の名をとって「黒塚塚」、「兄媛塚」等と呼ばれていることをあげているが、「適スルヤ否ハ疑ハシ」とし、「蝙蝠塚ノ名ニヨルヲ無難トス」としている（永山1921）。戦後、地元において「黒塚塚」ともいわれていたが、現在では、「こうもり塚古墳」と呼ばれている。

こうもり塚古墳の概要に関して、明治時代の史料は断片的であるが、大正時代以降は、地元地誌や学術雑誌にしばしば古墳の概要が報告されている。『岡山縣史蹟報告』では、こうもり塚古墳が三段の「圓丘」と「基底」（直径270尺）からなる円墳（第4図1）で、広大な横穴式石室と内部に石棺を有すると報告する（永山1921）。ここでいう「圓丘」は墳丘のことを指すが、「基底」は本書でいう「周縁部」に該当すると考えられる。なお、「発掘」された時期や副葬品の内容については不明とする。

大正14年、梅原末治は、踏査の結果、これまで円墳とされていたこうもり塚古墳を長さ約280尺の前方後円墳とした（梅原1925、第4図2）。梅原は、こうもり塚古墳を後円部二段で、前方部端部に「掘り割り」を設け「割合に長い」前方部を有する前方後円墳と報告した。また、稀にみる大きな横穴式石室を有するが（第4図6）、墳丘には埴輪も葺石もみられないとも報告している。これ以後、こうもり塚古墳は前方後円墳と認識され、その墳長については、昭和5年（1930）刊行の『岡山縣通史』で長径50間（永山1930）、昭和12年刊行の『吉備郡史』では長径70間（永山1937）と記載されている。昭和26年に三須丘陵一帯の分布調査にあわせ、岡山大学がこうもり塚古墳の測量調査を行い、等高線1m間隔の墳丘測量図を作成した（第4図3）。

その後、昭和42年の発掘調査に伴い墳丘の再測量が行われ、その成果は、『岡山県史』及び『総社



第4図 こうもり塚古墳の墳丘及び横穴式石室測量図（既往の研究）

表1 こうもり塚古墳に関する調査等

調査主体・文献等	内容・概要
『総社記』	文政初年発掘。玉、刀、鏡出土（『岡山縣通史』から引用）
『備中誌』	『奥行四五間計にて内の廣サ方二間半計其中に石櫃有』
永山卯三郎 『岡山縣史蹟報告』	円丘、三段ヨリ成ル 上段 直径（中心円丘）100尺 高18尺 中段 幅（第一外輪）32尺 同10尺 下段 幅（第二外輪）38尺 同10尺 基底、直径 270尺（45間） 横穴 全長56尺 甬室 奥行26尺、幅（奥）10尺6寸、（中央）10尺、（入口）10尺、 高（奥）11尺、（中央）10尺 棺 長8尺、内法6尺7寸、幅4尺6寸、内法3尺3寸5分、 深、埋リテ明ナラズ 蓋 長8尺、幅4尺6寸、高（直立）1尺6寸、（斜面）1尺8寸 頂、平長方形 長辺5尺5寸、短辺1尺3寸
梅原末治『備中郡諸郡の 二三の墳墓に就いて』	墳丘 前方後円墳、墳丘二段 全長（封土前後の径）約280尺 後円部径130尺、高さ第一段6尺、第二段13~14尺 前方部幅110尺、前方部高さ12尺 前方部に掘り割りの痕跡あり。 墳輪、葎石は瞥見したところなかったものらしい。 横穴式石室 玄室 長さ約27尺、幅11尺 羨道 約35尺、敷石（栗石）あり。 『家型彫抜石棺』長さ7尺9寸、幅4尺6寸、凝灰岩、縄掛突起あり。
永山卯三郎 『岡山縣通史』	前方後円式 長径50間、短径23間 石室 行56尺、甬室行26尺、幅10尺6寸、羨道行30尺 石棺 8尺、4尺6寸、『介殼石？（原文ママ）』
永山卯三郎 『吉備郡史』	前方後円式 長径70間、短径50間、高さ 前方部6間、後円部7間 石室 全長56尺、玄室奥行26尺、幅奥10尺6寸、羨道奥行30尺 石棺 長8尺、幅4尺6寸
岡山大学測量調査 （昭和26年調査）	墳丘測量調査
岡山大学・岡山理科大学 （昭和42年調査） 『総社市史』	墳丘 前方後円墳（墳長約100m、後円部径約55~60m、高さ約8m、 前方部長約60m、前方部高さ約5m）、二段築成、 葎石及び墳輪はみとめられず。 後円部後方に周庭帯のごとき平垣部あり（幅約15m）。 横穴式石室（両袖式、全長19.4m、玄室長7.7m、玄室奥壁幅3.61m、 奥壁高さ3.60m、羨道長11.7m、羨道入口幅1.50m） 石棺：家形石棺、貝殻石灰岩（浪形石） 棺身長さ2.38m、幅1.40m、高さ76cm。棺蓋長さ2.40m、 幅1.40m、高さ55cm 陶棺：棺身推定復元長約2m、推定高約55cm 出土遺物：耳環、大刀、鉄鎌、馬具、農工具、土師器、須恵器、瓦ほか
西川宏 『吉備の国』	墳丘 前方後円墳、全長92m、後円部高6.0m 横穴式石室 石室全長18.6m、玄室長8.1m、奥壁幅3.4m、奥壁高3.5m
岡山県教育委員会 （昭和53年度調査） 『県報告35』	墳丘 前方後円墳（上段、下段）、後円部に人為的な段（最下段）あり。 横穴式石室 全長19.7m 羨道・墓道の調査 羨道 東壁長11.9m、西壁長10.9m、高さ2.4~2.8m。 閉塞施設あり、赤色顔料付着 墓道 羨道入口から長さ8~9m。地山を切開し断面U字型に形成 出土遺物 環頭大刀、武器、馬具、陶棺、須恵器、土師器、鉄滓ほか
岡山県教育委員会 （令和3・4年度調査） 『史跡こうもり塚古墳』 （本書）	墳丘 前方後円墳（航空レーザ測量・墳丘確認の調査） 墳長約96m、後円部径約43m、高さ約8.4m、 前方部長約53m、前方部高さ約5.9m、葎石及び墳輪なし。 墳丘の周りに周縁部あり。 横穴式石室（三次元測量） 両袖式、全長19.9m、玄室長8.1m、玄室奥壁幅3.6m、 奥壁高さ3.6m、羨道長（右側壁）12.0m、羨道入口幅1.9m 石棺：家形石棺、縄掛突起あり、貝殻石灰岩（浪形石） 出土遺物（墳丘）：須恵器、土師器、瓦ほか

市史」に掲載された(第4図4)。その結果、こうもり塚古墳は墳長約100m、後円部径約55~60m、前方部長約60m、後円部高約8m、前方部高約5mを測る前方後円墳であることが分かった。また、後円部後方に周庭帯のような幅約15mの平坦部が広がることも指摘された(近藤1987)。この周庭帯のような平坦部は、「県報告35」では「最下段」と記されていて、後円部から両くびれ部辺りまで認められるとした。なお、この墳丘測量後、こうもり塚古墳は吉備路風土記の丘環境整備の一環で墳丘の整備が実施され、外部から土砂を搬入し、墳丘における盗掘穴や欠失部分の補填が行われたほか、後円部頂部にも盛土がなされた。したがって、昭和42年に作成された墳丘測量図は、現在においても、墳丘整備前の形状をうかがうことのできる貴重な図面となっている。

横穴式石室内の家形石棺については、明治33年(1900)に、和田千吉が石棺分布地名表に「黒塚塚」の名称でこうもり塚古墳の石棺を紹介した(和田1900)。石棺の法量や石材については、梅原は長さ7尺9寸で凝灰岩(梅原1925)、永山は長さ8尺で「介殻石? (原文ママ)」とした(永山1930)。石棺の石材については、貝殻を粉にして漆喰材としてタタキ固めた人造石であると考えられた時期もあったが、佐上静夫が踏査で「山ノ上部落(現井原市)付近の「化石岩」であるとした(佐上1955)。この石材は貝殻石灰岩で、通称、「浪形石」と呼ばれるものであり、産地から約25km程度の行程を経てこうもり塚古墳に運びこまれたということになる。

こうもり塚古墳の最初の発掘調査は、岡山大学・岡山理科大学によって昭和42年に行われた。これは、総社市教育委員会の依頼で両大学が実施したもので、玄室から羨道の一部を対象とした。その後、昭和53年度に、岡山県教育委員会が吉備路風土記の丘環境整備の一環で、石室の排水対策工事のために事前に羨道と墓道を発掘した(葛原編1979)。これらの発掘調査の成果は、岡山県教育委員会の調査については「県報告35」に、岡山大学・岡山理科大学の成果については、岡山県教育委員会の調査も含めて「岡山県史」及び「総社市史」に掲載された(葛原・近藤・鎌木1986、近藤1987)。

横穴式石室は両袖式で南側に開口していて、早い段階から盗掘を受けていた。以前から石室に入ることは可能であったが、石室内には厚さ約70cmの土砂が堆積していた。このような状況ではあったが、「岡山県史蹟報告」や「岡山県通史」では石室全長を56尺と報告している(第4図5)。石室全長については、岡山大学等による玄室発掘調査後で、岡山県教育委員会による羨道調査以前の昭和50年に刊行された文献「古備の国」には石室全長18.6mと記載されている(西川1975)。また、岡山県教育委員会の発掘調査成果を反映した「県報告35」では石室全長19.7mと報告された。その後、「岡山県史」、「総社市史」においては、石室全長19.4m、玄室長7.7m、羨道長11.7m、玄室奥壁幅3.61m、羨道入口幅1.5m、玄室奥壁高3.6m、玄門近くの羨道高2.81mと報告されている(第4図7)。こうもり塚古墳の横穴式石室は、花崗岩の巨石を利用し組み上げて、奥壁基石に高さ2.9m以上の一枚岩を使用することを特徴とする。また、玄室と羨道の境に羨道の天井より一段低く楣石が設置されていることも地域的な特徴として注目されている。発掘調査の結果、床面には円礫が敷かれていたことも分かった。閉塞施設は未調査で保存されている箇所があるが、角礫を積み上げて造られ、粘土を石材間に詰めて石室を封じていたと考えられている。なお、この閉塞石の前には、地山の花崗岩風化土をU字形に掘り込んだ墓道が8~9m先まで続いていることも分かり、玄室奥壁から墓道入口までの長さは約28mを測る。このように、こうもり塚古墳の横穴式石室は、県内のみならず全国有数の規模を誇る巨大な石室であることが改めて示された。

こうもり塚古墳は早くから盗掘が繰り返されていて、埋葬時の原位置を確認できる副葬品は皆無で

あったと報告されている(近藤1987)。そのため、多くの遺物が散逸した可能性が高いが、それでも武器、馬具、装身具、土器など貴重な遺物が多数出土している。主な副葬品は、車馬環頭大刀柄頭や大刀片、多数の鉄鎌、馬具、装身具、須恵器や土師器、鉄滓等である。馬具では轡、辻金具、鞍金具、障泥金具、鉸具等がある。鉄鎌は概数であるが100本以上を数えるときれた。尖根鎌が多数を占めるが、鎌身が板状の平根鎌も出土している。装身具では、ガラス製小玉、水晶製切子玉及び耳環が出土している。須恵器は、杯身、杯蓋、高杯、甕、提瓶、壺、甕など器種も豊富である。土師器は、高杯のほか、壺、把手付碗がある。これらの土器は、6世紀中頃から7世紀前半まで製作時期の異なるものが含まれている。

なお、こうもり塚古墳の墳丘であるが、昭和45年以後、「吉備路風土記の丘」建設構想の一環で、整備計画に基づき、明らかな盗掘穴を土砂で埋めたり、盛土流失防止のために芝張りを行ったり、遊歩道建設に伴い柵を設置するなどの整備が行われた。その後、柵は撤去され、現在に至っている。

(金田)

参考文献

- 梅原末治 1925「備中都窪郡の二三の墳墓に就いて」『歴史と地理』第15巻第1号 史学地理学同友会
 岡山県教育委員会 1980『岡山県の文化財』(一)
 神野力 1967『吉備路』岡山文庫16 日本文教出版
 葛原克人編 1979「備中こうもり塚古墳―「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査―」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会
 葛原克人 1979「総社市こうもり塚古墳の調査」『考古学ジャーナル』162号 ニュー・サイエンス社
 葛原克人・近藤義郎・鎌木義昌 1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
 近藤義郎 1987「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
 佐上静夫 1955「興味ある石棺の石質に就いて」『私たちの考古学』5 考古学研究会
 永山卯三郎 1921「三須ノ編蝠塚」『岡山縣史蹟名勝天然紀年物調査報告』第1冊 岡山県史蹟名勝天然紀年物調査会
 永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会
 永山卯三郎 1937『吉備郡史』上巻 吉備郡教育会
 西川宏 1975『吉備の国』学生社
 春成秀爾 1971「こうもり塚と「黒城塚」―こうもり塚古墳呼称の編年の研究―」『考古学研究』第18巻第3号 考古学研究会
 平井典子編 2016『国指定史跡作山古墳測量調査報告書』総社市埋蔵文化財発掘調査報告25 総社市教育委員会
 和田千吉 1900「石棺考(続)」『考古』1-3 考古学会

挿図出典

- 第4図1: 永山卯三郎1921「三須ノ編蝠塚」『岡山縣史蹟名勝天然紀年物調査報告』第1冊 岡山県史蹟名勝天然紀年物調査会 2・6; 梅原末治1925「備中都窪郡の二三の墳墓に就いて」『歴史と地理』第15巻第1号 史学地理学同友会 3; 岡山県教育委員会1980『岡山県の文化財』(一) 4・7; 葛原ほか1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会 5; 永山卯三郎1930『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会

第2節 調査に至る経緯

史跡こうもり塚古墳は、史跡備中国分寺跡・史跡備中国分尼寺跡のほぼ中間に位置しているほか、周辺には全国的にも著名な造山古墳や作山古墳などの文化財が集中している。この史跡こうもり塚古墳を含む東西約6kmの一帯は、昭和45年に県政100年記念事業で「吉備路風土記の丘」として保護され、以来、県立自然公園条例に基づき地域の広域保存と環境整備が図られてきた。

このように史跡こうもり塚古墳は、県立自然公園として親しまれ、地元をはじめ県内の小中学生も校外学習で見学に訪れるなど広く活用されている。しかし、近年、見学者の立ち入り等により墳丘が浸食したり、横穴式石室内への漏水により土砂や石材の転落が発生したりなど保存管理上の課題が指摘されるようになってきた。また、昭和42年に実施された発掘調査成果の一部は『岡山県史』や『総社市史』に公表されているが、最終的な調査報告書が未刊行であったため、これまでの調査成果を総括した総合調査報告書を刊行する必要性が認識されていた。

このような状況の中、岡山県教育委員会は、令和元年度に『岡山県文化財保存活用大綱』を策定した。この中で、史跡こうもり塚古墳については、吉備路全体のさらなる魅力向上を見据え、早期に保存活用計画を策定する方針が掲げられた。そこで、岡山県教育委員会では、外部有識者の意見や指導を受け、史跡こうもり塚古墳を確実に保存し次世代に伝えていくために、その本質的価値を明らかにした上で保存管理・活用・整備等の方向性を示した『史跡こうもり塚古墳保存活用計画書』を令和2年度に刊行した。この計画には、保存管理上の課題のほかに、調査研究に関する課題として、過去の調査記録と出土品の再整理及び墳丘規模・構造等の把握を試みる発掘調査の必要性が示された。

そこで、岡山県教育委員会では、保存活用計画書に示された史跡こうもり塚古墳保存活用短期計画(第5図)に基づき、「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の一環として、史跡こうもり塚古墳保存活用総合調査事業を立ち上げ、令和2年度から地形測量等を実施、令和3年度から、これまで未調査であった史跡こうもり塚古墳の墳丘部分について発掘調査を実施した。(金田)

年度	こうもり塚古墳	
2	史跡こうもり塚古墳保存活用計画策定 航空レーザ測量による地形測量、緑山・稲荷山古墳群の測量調査 公開活用事業：吉備の考古学講座、吉備路ウォーク、パンフレット刊行	↑ 短 期 計 画 ↓
3	史跡こうもり塚古墳発掘調査 関連古墳(鳥取上高塚古墳)の測量調査 公開活用事業：吉備の考古学講座、発掘調査現地説明会、吉備路ウォーク パンフレット刊行	
4	史跡こうもり塚古墳発掘調査 史跡こうもり塚古墳総合調査報告書刊行(本書) 公開活用事業：発掘調査現地説明会、吉備路ウォーク、 史跡こうもり塚古墳シンポジウム開催 ガイドブック刊行	
5	史跡追加指定	
6		

第5図 史跡こうもり塚古墳保存活用短期計画

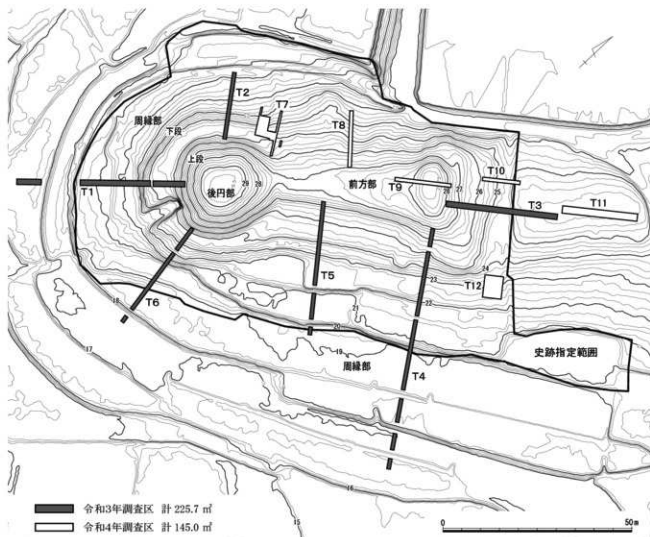
第3節 調査及び報告書作成の経過

こうもり塚古墳の墳丘及び横穴式石室の測量図は、令和2年度当初まで、昭和42年に岡山大学等が作成し、「岡山県史」や「総社市史」に掲載された測量図が最新のものであった。しかし、墳丘の周辺が十分に含まれていなかったり、等高線の間隔が50cmであったり、また、国土座標や標高値を欠くなど改善すべき点があった。そのため、発掘調査に先駆けて令和2年度に航空レーザ測量を実施した。航空レーザ測量は、こうもり塚古墳やその周辺に所在する備中国分寺跡、備中国分尼寺跡、江崎古墳、宿寺山古墳、緑山古墳群、稲荷山古墳群等を含む東西1.5km、南北2kmの範囲にかけて実施した(図版36)。また、こうもり塚古墳の横穴式石室についてもレーザ測量による三次元計測を行い、国土座標との整合を可能にしたほか、これに基づき、新たに横穴式石室及び石棺の実測図を再作成した。

発掘調査は令和3・4年度にかけて実施した(第6図、表2)。当初は墳丘本体の構造や盛土の状況確認を目的に計画したが、令和2年度の航空レーザ測量の結果、こうもり塚古墳の周辺にある程度の幅を持ったテラス状の施設が存在する可能性が推測できたため、墳丘周辺の構造解明も目的にした。

令和3年度の発掘調査は9月1日から12月24日にかけての4か月間実施し、墳丘上段下端から下段の墳丘端部及び周囲にかけてトレンチ6本(計225.7m)を設定した。そのうち、主軸方向に設定したトレンチ(T1、T3)では墳端を確認し、その結果、こうもり塚古墳の墳丘の残存長を約97mと公表した(その後、令和4年度の調査成果を踏まえ再検討を行った結果、墳丘残存長を約96mに修正した)。また、墳丘は二段で、基本的に下段は地山削り出して整形し、上段は盛土で構築されていることが判明した。上段の盛土は異なった土を交互に積み重ねた構造で、堅固に構築されていたほか、後円部の下段は、まず最初に溝を掘削し、下段を構築する際に、その溝を埋め戻していることが判明した。しかし、いずれのトレンチにおいても葺石や埴輪といった外表施設は検出できなかった。また、墳丘周囲のトレンチでは、後世の開墾で古墳築造当時の地形の大部分は失われていたが、T2、T4で古代以前の地形を確認でき、古墳築造当時の墳丘の周辺は緩やかな傾斜地であった可能性が推測できた(以下、これを「周縁部」という)。調査成果は、11月23日に開催した現地説明会で公開した。これは、こうもり塚古墳において昭和53年度調査以来、43年ぶりの発掘調査ということで話題を集め、新聞やテレビ等で広く報道された。現地説明会は、コロナ禍のため事前申込制で実施したが、定員の上限の120名の参加を得た。

令和4年度の発掘調査は5月6日から6月29日の約2か月間実施した。令和4年度は前年度の調査結果を踏まえ、特に古墳の北西側のくびれ部から前方部、前方部前端や南東隅部の形状把握及び北東側に位置する残丘における遺構の有無の確認を目的に調査区6か所(計145m)を設定した。調査の結果、前方部上段は異なる土を互層状に積み上げた盛土で堅固に築造されていたほか、前方部上段を構築するために前方部前端側に最初に土手状の盛土を築いていることが分かった。また、北西側のくびれ部から前方部にかけては段築の造作が行われていない可能性が指摘できたほか、後円部も通常想定される前方後円墳のくびれ部の位置まで墳裾の整形が及んでいないことが明らかになった。これは、この場所が古墳の南側を走る幹線道(後の古代山陽道)から望むことのできない背面に当たることに起因し、築造工程が簡略化された可能性が指摘できた。これらの調査成果は、6月18日に現地説明会を開催し公開した。前年度に引き続き、事前申込制とし、当日は109名の参加を得た。



第6図 こうもり塚古墳調査区配置図 (1/1,000)

表2 こうもり塚古墳調査区一覧

調査区	地番		長さ×幅 (m)	調査面積 (㎡)			主な出土遺物
	指定地内	指定地外		指定地内	指定地外	総面積	
T 1	1235, 1236-1	1167, 1171	33.6×1.5	40.65	9.75	50.4	土師器、須恵器、陶磁器、瓦
T 2	1236-1		17.8×1	17.8		17.8	陶器、瓦
T 3	1237	1215-1	29.6×1.5	22.65	21.75	44.4	須恵器、陶磁器、瓦、鉄滓
T 4	1225, 1226 1227, 1237	1219, 1222 1223, 1231	54.3×1	30.9	23.4	54.3	土師器、須恵器、陶磁器、瓦、鉄斧
T 5	1228-1 1228-3 1236-1	1223	31.2×1	29.1	2.1	31.2	土師器、須恵器、瓦
T 6	1234, 1236-1	1229-2, 1233	27.6×1	16.7	10.9	27.6	土師器
T 7	1236-1		—		35.0	35.0	土師器、須恵器、瓦
T 8	1236-1		15×1	15.0		15.0	陶磁器、瓦
T 9	1236-1, 1237		15×1	15.0		15.0	陶磁器
T 10	1237	1215-1	10×1	7.0	3.0	10.0	瓦
T 11		1215-1, 1215-2	20×2		40.0	40.0	瓦
T 12	1227		5×6	30.0		30.0	土師器、須恵器、陶磁器、瓦
	計			259.8	110.9	370.7	

過去の調査の再整理は令和2年度から岡山県古代吉備文化財センターで開始した。昭和42年の発掘調査の図面は岡山大学考古学研究室、出土遺物は総社市が所有していたが、再整理のため両機関から資料を借用した。出土遺物はほとんど接合作業まで終了していたが、一部、未整理の遺物については注記や接合作業を行った。遺物の実測図はその多くが既に作成されている、岡山大学考古学研究室に保管されていたが、再度点検し、必要に応じて再実測したほか、新たに実測を行ったものがある。陶棺については、すべての破片を再検討し、再復元を試みた。なお、遺物整理の過程で、実測図は存在するものの所在が整理期間中に確認できなかった遺物があった。これについては、岡山大学考古学研究室に保管されていた実測図の原図をそのままトレースして掲載し、その旨を本文と遺物観察表に明記している。また、昭和53年度の発掘調査成果は既に「県報告35」に報告されているが、必要に応じて再実測した上で再掲載した。このような方針で過去の再整理を行った結果、本書では、陶棺1基、土器120点、金属製品201点、玉類2点、石器7点、瓦19点を掲載した。令和3・4年度に実施した発掘調査の整理も岡山県古代吉備文化財センターで実施した。出土遺物は、令和3年度、令和4年度でそれぞれ整理箱3箱を数え、内容は主に須恵器や古代瓦、陶磁器、近世以降の瓦であった。そのうち、土器18点、瓦11点、金属製品1点を本書に掲載した。遺物写真はすべて岡山県古代吉備文化財センターで撮影した。

なお、調査及び報告書の作成に当たり、横穴式石室の石材については、岡山大学鈴木茂之名誉教授に鑑定を依頼した。また、陶棺の復元については、陶棺研究で実績のある奈良市埋蔵文化財調査センター鐘方正樹氏から指導や助言を得た。陶棺の胎土分析については、岡山理科大学白石純教授に依頼し玉稿を得た。

なお、本事業において、こうもり塚古墳の歴史的背景を考察する上では、同時代の横穴式石室を持つ古墳の調査を実施する必要がある。これについて、こうもり塚古墳と同じ三須丘陵に所在する緑山・稲荷山古墳群9基の測量調査を実施したほか、岡山大学考古学研究室と協同で、こうもり塚古墳と同規模の墳丘や横穴式石室を有する赤磐市鳥取上高塚古墳の測量も行った。これらの調査成果については本書に収載し、特に鳥取上高塚古墳の墳丘測量調査に関しては岡山大学考古学研究室から報告をいただいた。

事業全般については、有識者3名からなる史跡こうもり塚古墳調査指導会委員の指導を得た。また、調査の計画段階から文化庁文化財第二課の指導・助言を得たほか、岡山大学考古学研究室並びに総社市観光プロジェクト課からも有益な助言を得た。さらに、地元上林地区の関係者にも調査について御理解と御協力をいただいた。

(金田)

第4節 調査及び報告書作成の体制

令和2年度		課長	小林 伸明
岡山県教育委員会		参事(文化財保存・活用担当)	
教育長	鍵本 芳明		大橋 雅也
岡山県教育庁		総括参事(埋蔵文化財班長)	柴田 英樹
教育次長	高見 英樹	主幹	河合 忍
文化財課		主事	九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長	小見山 晃
次長(総務課長事務取扱)	佐々木雅之 (～10月14日)
参事(文化財保護担当)	亀山 行雄
〈総務課〉	
課長	甲元 秀和 (10月15日～)
総括副参事(総務班長)	甲元 秀和 (～10月14日)
総括主任(総務班長)	多賀 克仁 (10月15日～)
主任	多賀 克仁 (～10月14日)
主任	井上 裕子
〈調査第一課〉	
総括参事(調査第一課長事務取扱)	高田恭一郎
	金田 善敬 (調査・報告書作成担当)
主幹	石田 爲成 (調査・報告書作成担当)
主事	四田 寛人 (調査・報告書作成担当)

令和3年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事(文化財保存・活用担当)

尾上 元規

総括主幹(埋蔵文化財班長) 河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長(総務課長事務取扱) 浅野 勝弘

参事(文化財保護担当) 亀山 行雄

〈総務課〉

総括主幹(総務班長) 多賀 克仁

主任 井上 裕子

〈調査第一課〉

総括参事(調査第一課長事務取扱)

高田恭一郎

総括副参事(第二班長) 金田 善敬

(調査・報告書作成担当)

主任 藤井 翔平

(調査・報告書作成担当)

主事 小林有紀子

(調査・報告書作成担当)

令和4年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 浮田信太郎

文化財課

課長 江草 大作

副課長 尾上 元規

総括副参事(埋蔵文化財班長) 河合 忍

副参事 松尾 佳子

主事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長(総務課長事務取扱) 浅野 勝弘

参事(文化財保護担当) 柴田 英樹

〈総務課〉

総括副参事(総務班長) 福池 光修

主幹 井上 裕子

〈調査第一課〉

総括参事(調査第一課長事務取扱)

高田恭一郎

総括副参事(第二班長) 金田 善敬

(調査・報告書作成担当)

主任 藤井 翔平

(調査・報告書作成担当)

主事 小林有紀子

(調査・報告書作成担当)

〈調査第三課〉

主事 間所 克仁

(調査担当)

第5節 日誌抄

令和2年度

- 5月28日(木) こうもり塚古墳周辺の航空レーザ測量実施
- 7月30日(木) 川畑純文化庁文部科学技官現地指導
- 8月20日(木) 浅野啓介文化庁文化財調査官現地指導
- 10月6日(火) 岡山工業高校生徒によるこうもり塚古墳横穴式石室VR作成
- 11月17日(火) 脇谷草一郎奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長現地指導
- 30日(月) パンフレット『吉備路の歴史遺産』刊行
- 12月5日(土) 吉備路ウォーク開催
- 11日(金) 岡山工業高校生徒によるこうもり塚古墳横穴式石室VR作成
- 15日(火) こうもり塚古墳横穴式石室三次元測量実施
- 1月20日(水) 総社市所蔵こうもり塚古墳出土品借用、過去調査再整理開始
- 2月16日(火) 緑山・稲荷山古墳群測量調査開始
- 18日(木) 岡山大学所蔵こうもり塚古墳図面・実測図借用

令和3年度

- 4月7日(水) 史跡こうもり塚古墳調査指導会設置要項策定
- 18日(日) ~19日(月) 鳥取上高塚古墳測量調査
- 26日(月) 総社市所蔵こうもり塚古墳出土品借用
- 6月4日(金) 第1回調査指導会開催
- 8月2日(月) こうもり塚古墳横穴式石室VR映像公開
- 24日(火) 岡山理科大学白石純教授へ胎土分析依頼
- 9月1日(水) 発掘調査開始、資材搬入

- 6日(月) T3・T4調査開始
- 9日(木) 測量基準杭打設
- 21日(火) T5調査開始
- 10月4日(月) T1調査開始
- 7日(木) T2調査開始
- 11日(月) T3写真撮影・実測
- 13日(水) T4写真撮影・実測
- 21日(木) T6調査開始
- 11月9日(火) 川畑純文化庁文化財調査官現地指導
- 12日(金) 第2回調査指導会開催
- 19日(金) パンフレット『国指定史跡こうもり塚古墳』刊行
- 23日(火) 現地説明会開催
- 12月3日(金) T5写真撮影・実測
- 4日(土) 吉備路ウォーク開催
- 7日(火) T2写真撮影・実測
- 13日(月) T4写真撮影・実測
- 15日(水) T6写真撮影・実測
- 16日(木) T3埋め戻し
- 17日(金) T5埋め戻し
- 20日(月) T1写真撮影・実測
- T4埋め戻し
- 23日(木) T1・T2埋め戻し
- 24日(金) T6埋め戻し、資材搬出
- 発掘調査終了
- 2月3日(木) 第3回調査指導会開催
- 3月30日(水) 岡山大学所蔵図面・実測図返却
- 令和4年度
- 4月25日(月) こうもり塚古墳360°動画公開
- 5月6日(金) 発掘調査開始、資材搬入
- 9日(月) T10・T11調査開始
- 10日(火) T8・T9調査開始
- 18日(水) T12調査開始
- 19日(木) 斉藤慶史文化庁文化財調査官現地指導
- 20日(金) T8・T10写真撮影
- 23日(月) T7調査開始

30日(月)	T 8・T10実測	29日(水)	T 9埋め戻し、資材搬出 発掘調査終了
6月7日(火)	T12写真撮影	8月22日(月)	岡山大学鈴木茂之名誉教授による 石室石材の鑑定
8日(水)	T 9写真撮影	26日(金)	奈良市埋蔵文化財調査センター 鐘方正樹氏による陶棺の鑑定
9日(木)	T12実測	11月1日(火)	第2回調査指導会開催
13日(月)	第1回調査指導会開催	12月3日(土)	吉備路ウォーク開催
14日(火)	芝康次郎文化庁文化財調査官現 地指導	2月28日(火)	史跡こうもり塚古墳ガイドブック 「吉備最後の大型前方後円墳とそ の時代」刊行
16日(木)	T 9実測	3月4日(土)	史跡こうもり塚古墳シンポジウ ム開催
17日(金)	T11実測・写真撮影	15日(木)	史跡こうもり塚古墳報告書(本 書)刊行
18日(土)	現地説明会開催		
20日(月)	T 7写真撮影、T 8埋め戻し		
22日(水)	T10埋め戻し		
23日(木)	T 7実測、T11埋め戻し		
24日(金)	T12埋め戻し		
28日(火)	T 7埋め戻し		

表3 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 目付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡古調 第124号 R4.1.17	周知外	古墳 こうもり塚古墳	総社市上林 1171ほか	67.9㎡	保存目的	有	岡山県古代古備文化財 センター所長	金田善敬 藤井瑞平 小林有紀子	R3.9.1 ～ R3.12.24
岡古調 第44号 R4.7.5	周知外	古墳 こうもり塚古墳	総社市上林 1215-1ほか	43㎡	保存目的	有	岡山県古代古備文化財 センター所長	金田善敬 藤井瑞平 小林有紀子	R4.5.6 ～ R4.6.29

国指定史跡の現状変更許可申請(法第125条)

文書番号 目付	種類及び名称	所在地	目的	申請者	期間	許可条件	許可文書 番号 目付
教文理 第1245号 R2.11.25	史跡 こうもり塚古墳	総社市上林 1236-1ほか	工作物の設置 (測量)	岡山県教育委員会 教育長	R2.12.15 ～ R2.12.17	実施に当たっては、総社市長の指示 を受ける。	総社市指合 観第17号 R2.12.8
教文理 第359号 R3.6.11	史跡 こうもり塚古墳	総社市上林 1236-1ほか	発掘調査	岡山県教育委員会 教育長	R3.9.1 ～ R3.12.24	実施に当たっては、岡山県文化財担 当部局の指導を受ける。	3文庁 第655号 R3.7.16
教文理 第1886号 R4.3.4	史跡 こうもり塚古墳	総社市上林 1236-1ほか	発掘調査	岡山県教育委員会 教育長	R4.5.6 ～ R4.6.29	実施に当たっては、岡山県文化財担 当部局の指導を受ける。	4文庁 第19号 R4.4.22
岡古調 第38号 R4.7.5	史跡 こうもり塚古墳	総社市上林 1236-1	工作物の設置 (鑑定)	岡山県古代古備文化財 センター所長	R4.8.22	実施に当たっては、総社市長の指示 を受ける。	総社市指合 観第11号 R4.7.19

埋蔵文化財発見通知(法第100条第2項)

文書番号 目付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地 所有者	現保管場所
委保第14 の1280号 S54.1.30	須恵器6点、他破片、武器(環頸 鎧1、大刀残欠、鉄鏃残欠18)、馬 具4、陶棺片1、装身具2、他	総社市上林原屋 中こうもり塚古墳	S53.12.1 ～ S54.1.31	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県教育庁文化課分 室
教文理 第1510号 R3.12.28	土師器、須恵器、陶磁器、瓦、鉄 斧ほか 計整理箱3箱	岡山県総社市上林1236-1 ほか 史跡こうもり塚古墳	R3.9.1 ～ R3.12.24	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代古備文化財 センター
教文理 第583号 R4.6.30	土師器、陶磁器、瓦ほか 計整理箱3箱	岡山県総社市上林1236-1 ほか 史跡こうもり塚古墳	R4.5.6 ～ R4.6.29	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代古備文化財 センター

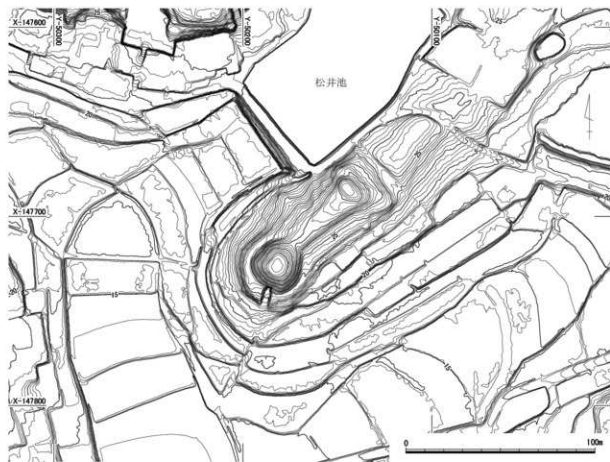
第3章 発掘調査の概要

第1節 墳丘の調査

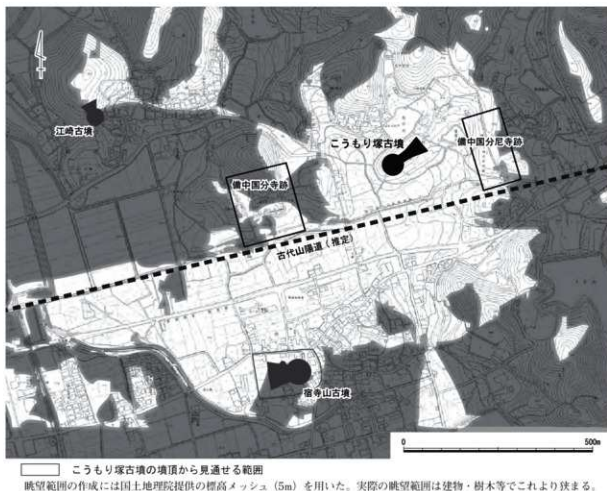
1 墳丘の状況と調査の概要

こうもり塚古墳は、標高約20m台の南西方向に延びる長さ約300mほどの低い尾根を利用して造られている（第7図）。後円部頂部の標高は29.6mであり、尾根根部の田面の標高が約14mであることから、この丘陵の高さは約15mを測る。こうもり塚古墳はこの丘陵の上半部に造られているが、尾根全体が古墳と一体化して見えるため、実際の墳丘規模以上の大きさを感じさせる。この尾根の北側には浅い谷が入り、その一部は現在、ため池（松井池）となっている。南側は緩やかに傾斜し南北に狭い平野に至る。古墳は丘陵尾根を切断して築かれており、尾根の先端に後円部が位置する。

こうもり塚古墳の周辺には、北には谷を挟んで低い丘陵が、東西には備中国分寺跡あるいは備中国分尼寺跡がある低丘陵が広がっているため、その眺望は主に南側に限られる（第8図、図版1-1）。こうもり塚古墳が南からの眺望を意識して築造された可能性が高いことは、このような立地に加え、



第7図 周辺地形測量図 (1/2,000)

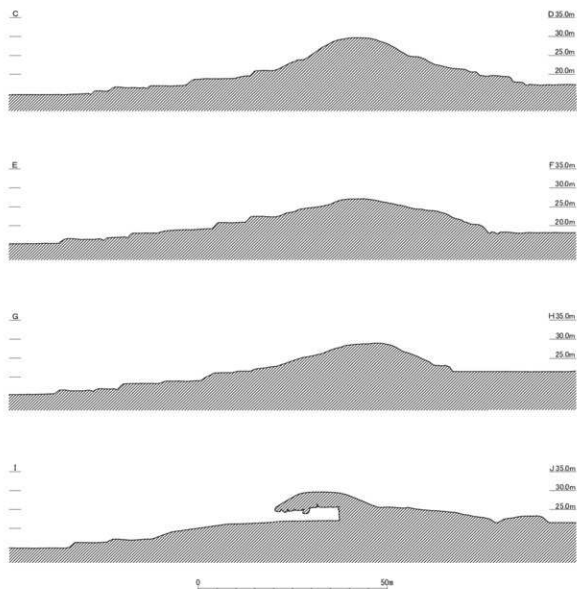


第8図 周辺の景観 (1/10,000)

後述するように、古墳の前面に当たる南東側から南西側には段築を設けているのに対し、背面に当たる北西側の整形は不十分で、段築もみられないという調査成果からもうかがえる。

古墳の墳丘には樹木が繁茂していたが、近年、後円部を中心に伐木整理がなされている(図版1-2)。地籍図には、横穴式石室の墓道入口脇から後円部下段、前方部下段にかけて道が示されているが、付近に残る木杭を利用したしごら痕跡は、この道に伴う工作物であった可能性が考えられる。こもり塚古墳は昭和43年の史跡指定後に公有化され、園路整備等が行われた。そのため、後述するように、墳丘には各所で整備による改変が認められる。この整備に関する詳細な記録は残っていないが、明らかな盗掘穴を土砂で埋めたり、土砂流出防止用の芝を張ったり、園路(歩道や柵)を整備したり、墳丘上に客土を施したりしたことが報告されている(春成1971、葛原編1979)。また、このとき、467㎡の盛土(客土)を搬入したことが記録に残っている。

こもり塚古墳では、これまで3度にわたり墳丘測量図が公表されてきた。そのうち、『岡山県史』や『総社市史』に掲載され、最も利用されている測量図は昭和42年に岡山大学考古学研究室が作成したものである。これを基に、こもり塚古墳の大きさについて、これまで増長約100m、後円部径約55~60m、高さ約8m、前方部長約60m、前面幅約44m、高さ約5mという測量値が公表されている。この測量図は史跡指定後に実施された整備以前に作成されたもので、今となっては古墳の形状のみならず、整備前の古墳の残存状況が分かる貴重な資料である。しかし、測量図の等高線間隔が0.5mで現



第10図 墳丘断面図 (1/1,000)

在においては精度が不足しているほか、標高や国土座標も記載されていないこと、また、古墳周辺の、特に前方部北東側の残丘部分や南側周辺の情報を欠くなど、古墳を詳細に検討する上で課題を残していた。そこで、岡山県古代古備文化財センターでは、令和2年度にこうもり塚古墳を含めた周辺地形を航空レーザを用いて測量し、こうもり塚古墳の墳丘測量図を新たに作成した（第9・10図、図版2）。そして、この測量図を基に令和3・4年度に実施した発掘調査の成果を踏まえた結果、こうもり塚古墳は、主軸がN-43度-Eを測る前方後円墳で、墳長約96m、後円部径約43m、前方部長約53mで、後円部及び前方部とも二段築成（上段・下段）の古墳であることが分かった（図版3・4）。

残存している後円部は、現状で標高29.6mの墳頂を中心とする径約40m、高さ約8mの高まりである。二段築成であることが確認でき、現状で高さ約3mの下段の上に、径約25m、高さ約5mのドーム状に小高くなった上段がある。横穴式石室は後円部中央に築かれており、墳丘の主軸に対して31度南に振れて南側に開口している。

後円部上段について、T1の調査の結果、上段地表面には整備時に搬入された客土（真砂土）が残っていることが判明し、墳頂部も古墳本来の残存面から整備時に幾分高上げされている可能性が高くなった。昭和42年に作成された整備前の墳丘測量図には後円部墳頂の標高は記載されていないが、後円部墳頂は前方部頂部より0.12m高いことが示されている。T9の調査によると、前方部頂部は古墳本来の残存面を残していることが分かっており、その標高は29.12mを測る。したがって、整備前の後円部墳頂の標高は29.24mと推定できる。先述のとおり、現在の後円部墳頂の標高は29.6mであるので、整備前の墳丘に比べ0.36m高くなっていることが分かる。したがって、古墳の整備に当たっては、後円部墳頂に厚さ0.3～0.4mほどの造成土が搬入されたことが推定できる。

後円部下段であるが、後円部南側の下段は石室の墓道として現在開口している。元は天井石近くまで土砂が堆積していたが取り除かれ、現在、閉塞施設の一部が保存されている。北西側の下段は改変が少なく、残存状況は良好である。ここでは現状においても墳頂を反映している傾斜変換点を確認することができるほか、約30度の傾斜を持つ墳丘や、幅3m程度のテラスを観察することができる。一方、南西から南東側にかけての下段は墳裾まで畑地の開墾が及んでおり、墳丘の一部が破壊されている可能性がある。特に、墓道東側のT6付近は後世の改変を受けていて、古墳築造当初の墳頂は残っていなかった。後円部下段では4か所（T1、T2、T6、T7）の調査区を設定したが、後円部築造に当たって、まず、地山に溝を掘削していることが分かった。この溝は後円部すべてのトレンチで確認できたことから、盛土を行う以前に後円部のテラス及び下段に相当する位置に、径30m程度の弧状の溝を巡らしていたことが推測できた（以下、この溝を「墳丘内埋没溝」という。ただし、同一段落内等で明らかな場合は単に「溝」と略する場合がある。）。その後、横穴式石室を構築し、上段となる盛土を溝の内側に積み上げたと推定できる（以下、この盛土を「第一次墳丘」という。）。第一次墳丘が確認できたT1では、異なる土を交互に積み上げた盛土が観察でき、約30～35度の傾斜を持つ墳丘を堅固に構築していた。他方、下段はこの墳丘内埋没溝を埋め戻して造られていた（以下、墳丘内埋没溝の埋土も含む下段盛土を「第二次墳丘」という。）。第二次墳丘は、第一次墳丘とは異なり、下段周辺を整形する過程で生じた地山等の土を利用して短期間に埋め戻したような様相で、第一次墳丘ほど堅固ではなかった。最終的に下段は、裾の地山を削り込みながら整形されたと考えられるが、その整形はT7の途中までで、そこから前方部側については十分に行われていなかったことが分かった。

前方部は長さ約60m、前端部幅約40mが残る。前方部南東側の下段には、かつて道が設けられていて、それに伴うしごら痕跡が残るほか、T5では墳裾に隣接したため池の痕跡がみられる。また、前方部北側隅部は、松井池に隣接する道路で削平を受けるほか、昭和42年作成の墳丘測量図では土取り痕跡が示されており、残存状況は良くない。しかし、前方部南東側は上段・下段の段築が明らかで、等高線も前方部の形状を反映して直線状に伸びていることから、概ね良好に残存していると考えられる。南東側には一部で等高線が凸状に屈曲する箇所があるが、これは、後世に搬入された土砂の堆積によるものと推測できる。反対に北西側は、南東側にみられたような段築は明瞭ではなく、等高線も南東側と比べると屈曲の度合いが大きい。前方部は調査の結果、下段は主に地山を削り出して造られていたのに対し、上段は盛土であった。また、前方部南東側の墳丘斜面の傾斜は、上段は30～35度であるのに対し、下段は約20度と緩やかであった。しかし、T8の位置する前方部北西側では、調査において段築が確認できず、本来施工すべき墳丘の整形が省略されている可能性が高くなった。この付近の等高線の乱れは、墳丘の整形を簡略化したことにも起因すると思われる。

前方部頂部には現状で長さ約17m、幅約10mほどの高まりが残っており、頂部の標高は29.1mを測る。調査以前において、この高まりは後世のものである可能性も指摘されていたが、T9における調査の結果、すべて墳丘盛土で構築されていることから、古墳に伴う高まりであることが判明した。前方部頂部付近では盛土の観察から、まず、前方部下段前端の上の段前端にあたる部分に土手状の盛土を設け、次に、その内側に盛土を互層状に積み上げながら墳丘を構築していることが分かった。前方部前端は、元の尾根を直交方向に掘削し、尾根から古墳本体を切り離して造られていた。T3における調査の結果、前端では二段の段築とテラスを確認することができ、下段は地山削り出しで、上段は盛土で造られていたことも分かった。墳丘の傾斜は上段、下段ともに約20度であった。

こうもり塚古墳の墳丘の周囲であるが、これまでも、特に後円部西側から前方部南側にかけて幅20～30mの段（テラス）が巡っていることが指摘されており、「最下段」と称されてきた（葛原編1979）。この部分については、これまでに作成された墳丘測量図の範囲に十分含まれてこなかったため、先述のとおり、今回実施した航空レーザ測量で、こうもり塚古墳の周辺を含む詳細な地形測量図を作成した。これによると、墳丘周辺の畦畔が盾形に古墳本体を囲んでいるように見え、墳丘の外側に一定の区画が存在した可能性がうかがえた。そこで、各所においてトレンチを設定し調査した結果、墳丘の残存状況が良いT2では、墳端から外側に向かって約10度の傾斜で幅15mほどの緩傾斜が続いていることが分かった。しかし、その他の調査区では、その多くが田畑や畦畔として開墾されており、古墳築造当時の様相が分かる部分は少なかった。しかし、その中で、特にT4では、古代以前の旧地形を残している可能性がある箇所を確認でき、その形状がT2でみられたような緩斜面であったことから、こうもり塚古墳の墳丘の周囲は緩斜面状に整形されていた可能性が推測できた（以下、この範囲を「周縁部」という）。この周縁部については、その範囲を明確に示すような堤あるいは溝のような遺構を今回の調査では確認できておらず、将来的に課題を残すことになったが、こうもり塚古墳は、墳丘周辺の一定の範囲に緩斜面状の区画である周縁部を伴っていた可能性が考えられる。

こうもり塚古墳は、三須丘陵から派生して南西方向に延びる幅約40～50mの細長い尾根を切断して築造されているが、墳丘以外の部分に相当するのが北東側にある残丘である。この残丘は途中で市道で切断されて、現在は市道から墳丘の間の長さ40mほどが舌状の高まりとして残っている。ここは、これまで果樹園として利用されてきており、頂部は平坦面をなしている。この部分で古墳に関連した遺構の有無を確認する目的でトレンチ（T3・T11）を設け発掘調査を実施したが、果樹園の造成に伴う攪乱もあり、地山は確認できたものの、目的とした遺構を発見することができなかった。

以上の調査の結果、こうもり塚古墳は、墳長約96mを測る二段築成の前方後円墳で、後円部は径約43m、前方部の長さは約53mに復元できた。特徴としては、後円部が急傾斜でドーム状に小高くなっていること、また、後円部の大きさに比し前方部が長いことがあげられる。後円部では、墳丘構築前に墳丘内埋没溝を掘削したこと、上段（第一次墳丘）構築後、溝を埋め戻して下段（第二次墳丘）を造ったことが明らかになったほか、前方部下段は基本的に地山削り出しで、上段は盛土による造成であったことも分かった。特に、第一次墳丘及び前方部の盛土については、異なった土を互層状に堅固に積み上げたものがみられた。しかし、古墳の背後となる北西側では段築や墳端の整形が簡略化されていることが判明した。その他、墳丘の周辺に緩斜面状の周縁部が取り付く可能性も指摘できた。なお、こうもり塚古墳では、葺石、埴輪等の外表施設が見当たらないことがこれまでも指摘されていたが、今回の調査でも確認できなかった。（金田）

2 発掘調査の成果（令和3・4年度調査）

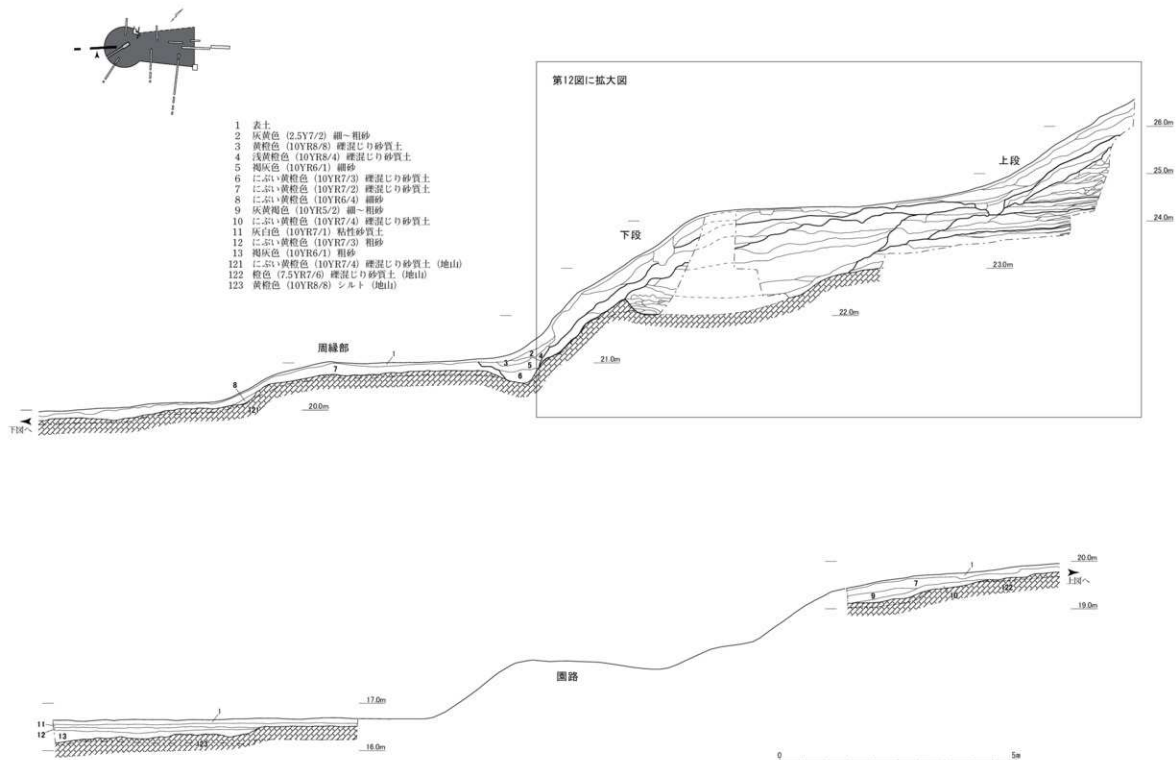
T1（第11～13図、図版5・6-1・13-1・15-1）

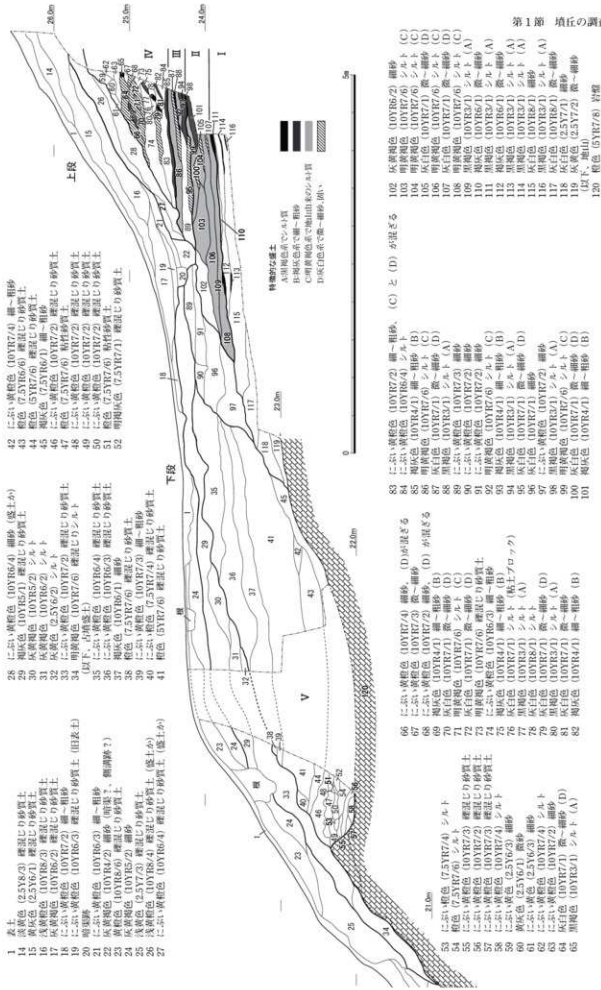
T1は、後円部南西側の上段下端から周縁部にかけて設定した、総長33.6mに及ぶトレンチで、古墳の軸を意識して設定した。調査の結果、上段・下段において墳丘盛土を確認した。墳丘は、盛土以前に墳丘内埋没溝を掘り込み、横穴式石室を覆う第一次墳丘（上段）を構築した後に、溝を埋め戻して第二次墳丘（下段）を築造していることが分かった。また、周縁部は田畑による造成で改変を受けていたが、残存する地山の状況を確認できた。

第11図は、T1全体の土層断面図で、墳丘裾から周縁部の土層を示したものである。墳丘裾から園路まで、表土下約0.2～0.4mで橙色及びにぶい黄橙色砂質土の地山を検出できた。下段の墳丘裾では幅1.5m、深さ0.8mの畑地境の区画溝が掘削されていた。そのため、墳丘裾はこの区画溝や畑地造成で削平されていると想定したが、下段の地山の傾斜は区画溝の墳丘側の肩まで続いており、区画溝の外側の地山の形状を考慮すると、この区画溝の墳丘側肩付りに古墳の墳端を示す傾斜変換点が存在していた可能性が高い。したがって、この区画溝の墳丘側肩付近を本来の墳端と推定できる。墳丘裾から西側は、近年まで畑地として利用されており段状に改変を受けていた。しかし、園路に近い10層下では園路側に向かって下がる地山の緩斜面がみられ、畑地造成以前の地山の形状を留めている可能性が考えられた。園路から西側のトレンチであるが、墳丘に近い側では表土下約0.15mで上面が水平に削平された地山を確認できた。また、13層の下では緩やかな地山の傾斜がみられ、旧地形が残っている可能性もうかがえた。しかし、地山と上層（13層）との層界面は極めて明瞭で土層の攪拌も少ないことから、この地山の上面が古いものと考え難くはなかった。したがって、園路から下の部分はかなりの削平を受けていて、旧地形は残っていないと考えられる。なお、T2では古墳の築造に伴い、周縁部に約10度の地山の緩傾斜が造成されていた。T1の周縁部は田畑の造成で古墳築造当時の形状はうかがえないが、残っている地山の形状を踏まえると、T2と同様の緩斜面がT1にも存在していた可能性は否定できない。

第12図は、墳丘下段と上段下部の土層断面図である。こうもり塚古墳では昭和45年以後、墳丘の整備が行われており、墳丘上段からテラスにかけてその影響がみられる。特に20層は暗渠の跡で、22層もそれに先行する側溝あるいは暗渠の痕跡と推測できる。したがって、これより上層は、墳丘整備以後の堆積土であり、よって、上段では26・27層上面、下段では29層上面が整備前の地表面であったと考えられる。それ以下の下層は流土あるいは墳丘盛土と推測できるが、そのうち、26～28層は盛土の土質に近いことから、本来は盛土であったものが土壌化した層であるとも推測できる。また、須恵器燧片（2・3）が34層で出土している。これが古墳の副葬品の一部である可能性が考えられることから、34層から上の層は、古墳築造以後の堆積土と考えられる。

墳丘下の地山は橙色を呈する風化した岩盤層である。古墳の構築に当たって、まず、地山上に断面形が皿状を呈する幅約4.7m、深さ約0.9mの溝（墳丘内埋没溝）を掘削したと考えられる。T2やT6等の状況を踏まえると、この溝は横穴式石室を中心に後円部下段を巡るように掘削されたと考えられる。溝の外側は土手状に削り残されている。掘削当初からこのような土手を仕上げたかどうかは不明であるが、T2やT7では、盛土後に周縁部の地山を整形することで溝の外側を土手状に整えていると考えられるため、T1も同様であったと推定する。なお、溝の底面の標高は22.0mである。





第1節 填丘の調査

第12図 T1断面図 (1/50)

- 1 赤土 (2.5Y6/2) 硬況じり砂質土
- 15 灰赤色 (2.5Y6/1) 硬況じり砂質土
- 16 灰赤色 (10YR8/3) 硬況じり砂質土
- 17 灰赤色 (10YR8/6) 硬況じり砂質土
- 18 赤土 (10YR7/2) 細～粗砂
- 19 赤土 (10YR6/3) 硬況じり砂質土
- 20 明褐色 (10YR6/2) 細～粗砂
- 21 灰赤色 (10YR4/2) 硬況じり砂質土
- 22 灰赤色 (10YR8/6) 硬況じり砂質土
- 23 灰赤色 (10YR8/5) 細砂
- 24 灰赤色 (2.5Y7/3) 硬況じり砂質土
- 25 灰赤色 (10YR8/4) 硬況じり砂質土 (盛土か)
- 27 赤土 (10YR6/4) 硬況じり砂質土 (盛土か)
- 28 赤土 (10YR6/4) 細砂 (盛土か)
- 29 灰赤色 (10YR5/2) 細砂質土
- 30 灰赤色 (10YR5/2) シルト
- 31 灰赤色 (10YR6/2) シルト
- 32 灰赤色 (2.5Y6/2) シルト
- 33 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 34 明褐色 (10YR7/2) 粘性質土
- 35 赤土 (10YR6/4) 硬況じり砂質土
- 36 赤土 (10YR6/3) 硬況じり砂質土
- 37 赤土 (10YR6/1) 細砂
- 38 赤土 (7.5YR7/6) 硬況じり砂質土
- 39 赤土 (10YR7/4) 細～粗砂
- 40 赤土 (7.5YR7/4) 硬況じり砂質土
- 41 赤土 (10YR7/6) 硬況じり砂質土

- 42 赤土 (10YR7/0) 細～粗砂
- 43 赤土 (10YR7/0) 硬況じり砂質土
- 44 赤土 (7.5YR7/6) 硬況じり砂質土
- 45 赤土 (7.5YR6/7) 細～粗砂
- 46 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 47 赤土 (10YR7/6) 粘性質土
- 48 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 49 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 50 赤土 (10YR7/2) 粘性質土
- 51 赤土 (7.5YR7/6) 粘性質土
- 52 明褐色 (7.5YR7/1) 硬況じり砂質土
- 53 赤土 (10YR7/2) 細～粗砂
- 54 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)
- 55 灰赤色 (10YR7/6) シルト (C)
- 56 明褐色 (10YR7/6) 硬況じり砂質土
- 57 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 58 赤土 (10YR7/4) シルト
- 59 赤土 (2.5Y6/3) 細砂
- 60 灰赤色 (2.5Y6/1) 細砂
- 61 赤土 (10YR7/2) 硬況じり砂質土
- 62 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 63 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 64 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (D)
- 65 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 66 赤土 (10YR7/4) 細砂 (D) が見える
- 67 赤土 (10YR7/3) 細砂 (D) が見える
- 68 赤土 (10YR7/2) 細砂 (D) が見える
- 69 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)
- 70 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (D)
- 71 灰赤色 (10YR7/6) シルト (C)
- 72 明褐色 (10YR7/6) 硬況じり砂質土
- 73 明褐色 (10YR7/6) 硬況じり砂質土
- 74 赤土 (10YR6/3) 細～粗砂
- 75 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)
- 76 灰赤色 (10YR7/1) シルト (粘土プロック)
- 77 灰赤色 (10YR3/1) シルト (A)
- 78 灰赤色 (10YR8/1) 細砂 (D)
- 79 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 80 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 81 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (C)
- 82 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)
- 83 赤土 (10YR7/2) 細～粗砂
- 84 赤土 (10YR4/1) シルト (B)
- 85 灰赤色 (10YR7/6) シルト (C)
- 86 明褐色 (10YR7/6) 細～粗砂 (D)
- 87 灰赤色 (10YR3/1) シルト (A)
- 88 明褐色 (10YR3/1) 細砂
- 89 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 90 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 91 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 92 明褐色 (10YR7/6) シルト (B)
- 93 明褐色 (10YR4/1) 細～粗砂 (C)
- 94 灰赤色 (10YR3/1) シルト (A)
- 95 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (D)
- 96 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 97 赤土 (10YR7/2) 細砂
- 98 赤土 (10YR3/1) シルト (A)
- 99 明褐色 (10YR7/6) シルト (C)
- 100 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)
- 101 灰赤色 (10YR4/1) 細～粗砂 (B)

特徴的な露土
 A: 灰褐色系で細～粗砂
 B: 明褐色系で細～粗砂
 C: 明褐色系で細～粗砂

0 20.0m 40.0m

- 102 灰赤色 (10YR6/2) 細砂
- 103 明褐色 (10YR7/6) シルト (C)
- 104 明褐色 (10YR7/6) 細～粗砂 (D)
- 105 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (D)
- 106 明褐色 (10YR7/6) シルト (C)
- 107 灰赤色 (10YR7/1) 細～粗砂 (D)
- 108 明褐色 (10YR7/6) シルト (C)
- 109 明褐色 (10YR7/6) 細～粗砂 (D)
- 110 明褐色 (10YR6/1) 細～粗砂 (D)
- 111 明褐色 (10YR6/4) シルト (A)
- 112 明褐色 (10YR6/4) 細～粗砂 (C)
- 113 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 114 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 115 明褐色 (10YR3/1) シルト (A)
- 116 明褐色 (10YR3/1) 細～粗砂 (A)
- 117 灰赤色 (10YR8/1) 細～粗砂 (A)
- 118 灰赤色 (2.5Y7/2) 細～粗砂
- 119 灰赤色 (2.5Y7/2) 細～粗砂
- 120 赤土 (5YR7/8) 岩盤

後部部の墳丘は、この墳丘内埋没溝の内側の横穴式石室を覆う上段（第一次墳丘）と、その後、この溝を埋め戻して構築した下段（第二次墳丘）からなっている。調査時に、先に第一次墳丘を構築した後に、溝を掘削した可能性も検討したが、地山上の上段盛土は傾斜角度が約45度と急であり、かつ、傾斜面に凹凸がみられ不整形であるのに対し、溝の上段側の傾斜は約30度と緩やかで凹凸も少ないこと、そして45層下の地山が段状で、溝の傾斜と上段盛土の傾斜に非連続性が認められることから、溝の掘削後に第一次墳丘を盛り上げたと考えた。

盛土は、土層断面観察の結果、次の5工程（I～V）に分けることができた。I～IV工程は第一次墳丘の、V工程は第二次墳丘の構築に伴うものである。また、第一次墳丘の盛土は検出した部分だけでも多くの土層が観察できたが、中には土質のよく似た層が複数確認できた。そのため、第12図では、使用頻度が高く特徴的な盛土として次の4種類（A～D）を抽出し表示した。Aは黒褐色系のシルト質土で、Bは茶色に近い褐色を基調とした細砂や粗砂を含む砂質土である。Cは明黄褐色のシルト質土で、地山を起源とする土である。Dは灰白色の微砂や細砂で非常によく締まっている。

盛土の構築は、まず地山から標高23.9mまで土を盛る工程I（109～119層）から始まる。調査した範囲内において、古墳築造前に存在したと考えられる表土層は確認できず、溝を掘削する段階あるいは盛土段階までに表土層は除去されていた可能性が考えられる。工程Iで使用された土は比較的均質で、かつ、縮りのある灰白色を基調とするもので、その間に黒褐色シルト（A）の薄層が含まれる。次の工程II（98～108層）は工程Iの盛土を覆う工程である。ここでは明黄褐色土（C）が多く利用されていることが特徴である。この明黄褐色土はこの付近の地山を起源とする土と考えられ、古墳に近い場所から採取された可能性がある。このほかに、横穴式石室に近い側で黒褐色土（A）や褐色土（B）の使用がみられる。この工程IIの盛土を覆うように工程IIIの盛土（86～97層）がみられ、後述するテラス面の高さに近い標高24.5m付近まで水平に堆積している状況が観察できる。この工程IIIでは、にぶい黄褐色土等を利用して積み上げているが、墳丘中心に近い側では、にぶい黄褐色土とは異なり、A～Dに相当する黒褐色土や灰白色土などを利用している。工程IIIの盛土の上面に工程IVの盛土（59～85層）が観察できる。この工程IVの盛土には70・74・83層のように一単位が水平方向に長さ1m以上にわたる広いものがある一方、厚さが数十cm単位の薄層や小さなブロック状の層などもみられる。この工程IVの土層には黒褐色土（A）、褐色土（B）などのほかに様々な土が使用され、積み方も水平以外に、墳丘斜面に沿うように傾斜するものもみられる。このことから、この工程IVでは、厚さ数十cmといった細かいブロック状の塊を含む多様な盛土を、墳丘の中心に向かって傾斜させながら構築していることが分かる。調査箇所が限定的で狭小であったことから詳細な工法は不明であるが、土を水平に積み上げる傾向が強い工程I～IIIと比べ、工程IVでは高さ1m以上を積み上げており、盛土を高くする意図がうかがえる。

第一次墳丘構築後は、墳丘内埋没溝を埋め戻し、下段の構築と同時にテラスを整備したと考えられる（工程V）。工程Vの溝の埋土は大きく上層と下層に分けることができる。下層は42～58層で、特に墳端側の層はブロック状に細かく分けることができる。これらの土層には、墳丘盛土にも使用されている地山に由来する橙色を基調とする土や、にぶい黄褐色土などが含まれており、溝の底近くに集積していた。その状況から、古墳築造時に、この溝を利用して持ち込まれた土の残滓が堆積したものと推定しておきたい。上層（35～41層）のうち、特に41層は厚さ0.5mを測る厚い層であるが比較的均質であり、これ以上の分層は困難であった。41層上面の35～37層も同様であった。このことから、

溝の上層は比較的短期間に均質な土を用いて埋め戻された可能性が想定できる。35層上面はテラス面と考えられ、検出できた最も高い地点で標高24.2mを測る。テラスの幅は下段層に相当する部分の残存状況が良くないため不明な点があるが、4m程度ではなかろうか。

なお、墳丘上面で葺石や埴輪といった外表施設は検出されていない。

T1で調査した墳丘盛土か

ら遺物は確認されていない。しかし、表土や流土から土師器、須恵器、瓦等が僅かに出土した。1は須恵器甕の口縁部であり、墳端付近の表土で出土した。須恵器甕106と同一個体の可能性がある。2～4はいずれも須恵器甕の体部であり、墳端付近の流土中で出土した。これらの須恵器甕片は、古墳の埋葬に伴う遺物であった可能性が高い。5は土師器碗である。高台を持つ内面黒色土器で、平安時代のもと考えられる。(金田)

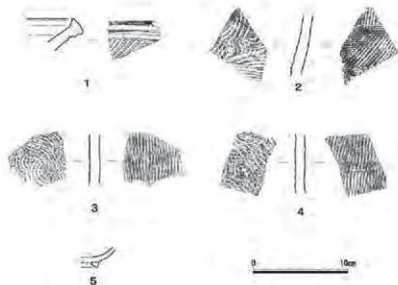
T2 (第14・15図、図版6-2・7-1・13-2)

後円部北側の上段下端から周縁部にかけて設定したトレンチである。調査の結果、第一次墳丘(上段)、第二次墳丘(下段)及び墳丘内埋没溝を確認した。墳丘はT1と同様、溝の掘り込みと第一次墳丘(上段)の構築を行った後に、溝を埋め戻して第二次墳丘(下段)を築造している。周縁部は、地山が墳端から約10度の傾斜で緩やかに下っていることを確認した。後世の開墾等による造成の痕跡があまりみられないことから、古墳築造時の状態を良好に残している可能性が高い。

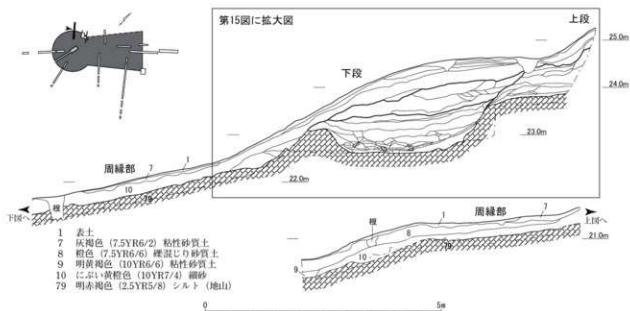
第14図は、周縁部の土層断面図である。墳端より外側では表土から0.2～0.3mほど掘り下げた位置で明赤褐色の地山を検出している。堆積土としては、主に流土(10層)やそれ以降に堆積した層(8・9層)が該当する。トレンチ北端から約2.5mの標高21.0m付近で地山の傾斜が変化しているが、北側が本来の丘陵の傾斜であり、南側は周縁部の築造に伴って造成を受けている可能性が高い。

第15図は、墳端から第一次墳丘(上段)にかけての土層断面図である。このうち、6層は昭和45年以降に行われた墳丘整備の際の真砂土や碎石に覆われたそれ以前の表土であり、10層上面が整備前の地表面と考えられる。10層について調査時には一部が土壌化した盛土である可能性も想定したが、T7で同層の下部から古代以降の土師器8が出土したため、流土と判断した。墳端付近で確認した11～13層も盛土の可能性が想定されたが、T7において同様の土層が確認できなかったことから、これも流土と判断した。

墳丘下の地山は褐色～明赤褐色を呈するシルト質の土で、第一次墳丘下の標高23.8m付近では旧表土と考えられるにぶい黄褐色土層(76層)を確認した。このことから、後円部北側において盛土以前に行われた丘陵上面の整形は第一次墳丘(上段)より外側だけであったことが分かる。



第13図 T1出土遺物(1/4)

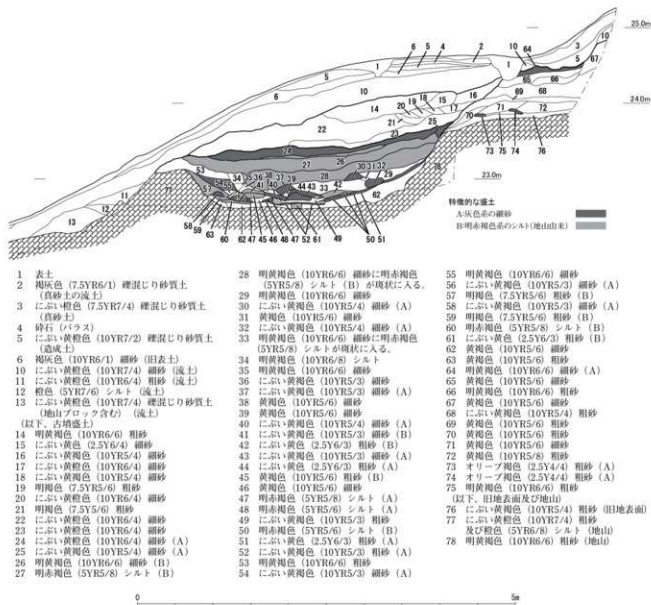


第14図 T2断面図 (1/80)

地山を掘り込んでいる墳丘内埋没溝は、断面逆台形を呈し、幅約3.5m、深さ約1.1m、溝の底面の標高は22.6mである。溝の墳裾側はT1と同様、地山が土手状に削り残されており、第二次墳丘（下段）斜面の下半から墳裾、周縁部にかけては地山削り出しで造成されている。墳丘内埋没溝と第一次墳丘の構築順序については判然としませんが、T1の状況から溝の掘削が先行していた可能性を想定しておきたい。

第一次墳丘（上段）の盛土（64～75層）は、旧地表面の上から拳大のクサリ礫を含む黄褐色～明黄褐色の砂質土を、水平を意識しながら積み上げている。この土は地山起源と考えられるが、T2周辺の地山とは色調や土質が異なっており、別の場所から運ばれてきた可能性が指摘できる。T1のような非常に固く締められた互層状の構造は確認できなかったが、これはT1ほど墳丘内部までトレンチを掘削していないためと考えられる。64層の上面で第一次墳丘が平坦になっているが、上層の5層が墳丘整備時の造成土であることから、その際に削平されたためと考えられる。本来の盛土は一段目のテラスから約35度程度の傾斜で墳頂に達していたと想定される。

第二次墳丘（下段）の土層は、大きく上層（14～23層）と下層（24～63層）に分けることができる。下層は墳丘内埋没溝の埋土で、底面付近では黄褐色土（62・63層）のほか、灰色に近い土（A）、にぶい黄褐色土、明赤褐色土、明黄褐色土、拳大～人頭大の礫などが比較的細かい単位で観察できるのに対し、上半部では周辺の地山土と考えられる明赤褐色土をブロック状に含む土（B）である26層から28層で一挙に埋められており、細かな土層単位は不明瞭である。下層で検出した礫は岡山大学の鈴木茂之氏の鑑定によると細粒花崗岩に分類でき、発見当初は石室構築時に発生した石室石材の破片である可能性も想定したが、T7調査時に検出した地山の岩脈の礫と類似していることから、周辺の地山由来の礫と判断した。埋土の上層に当たる24・25層は地山由来の土とは明らかに異なるにぶい黄褐色等を呈し、墳丘内埋没溝の埋土とそれより上下の下段盛土との境を形成している。どのような理由で色調の違う土を用いたかは定かではないが、何らかの作業単位を反映している可能性が想定できる。



第15図 T2断面図 (1/50)

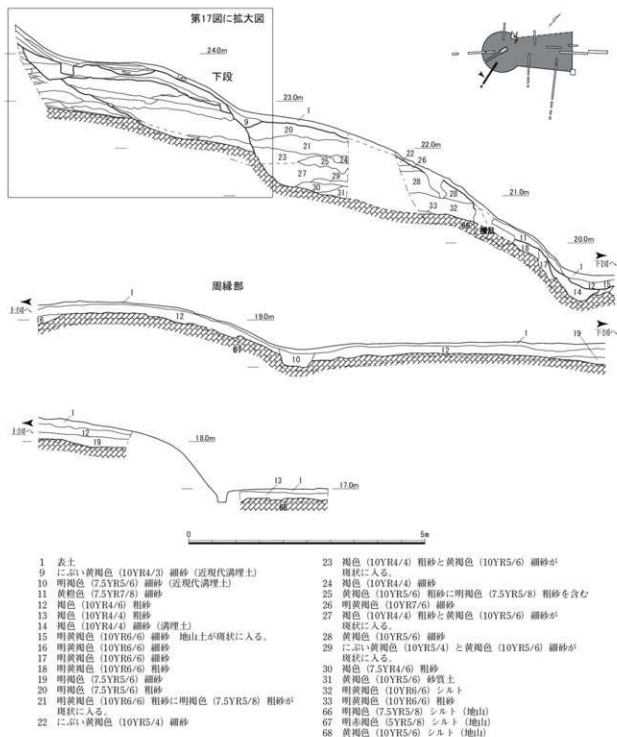
第二次墳丘 (下段) の盛土 (14~23層) は第一次墳丘 (上段) の盛土に似た黄褐色を基調とする地山起源の土であるが、T2周辺の地山に特徴的なシルト質の明赤褐色土を含まず、別の場所から搬入された可能性が高い。16~21層は比較的細かな単位で分層できるものの、基本的には同色同質の土で盛り上げられており、互層状の構造や固く締められた土層はなかった。

第二次墳丘 (下段) の本来のテラス面の高さは判然としないが、盛土上面 (14~16層) の標高24.4mを下ることはないと考えられる。その場合、墳裾から第二次墳丘 (下段) テラス面までの高さは約2m、テラス面から現状の墳頂までの高さは約5mとなる。第二次墳丘 (下段) の斜面は地山削り出しの面が当時の状況を残しているかと仮定した場合、35度ほどの傾斜となり、テラスの復元幅は約3mとなる。

なお、T2から古墳に関連する遺物は出土しておらず、外表施設も検出されていない。(藤井)

T 6 (第16・17図、図版7-2・3)

後門部南側に設定したトレンチである。調査の結果、第一次墳丘(上段)、第二次墳丘(下段)及び墳丘内埋没溝を確認した。墳丘はT 1・T 2と同様、溝の掘り込みと第一次墳丘(上段)の構築を行った後に、溝を埋め戻して第二次墳丘(下段)を築造している。ただ、第二次墳丘(下段)及び墳丘内埋没溝の中ほどから墳裾側にかけては大規模に削平されており、第二次墳丘(下段)と墳丘内埋没溝



第16図 T 6断面図 (1/80)

の肩、墳端は失われていた。周縁部についても、階段状に耕地の造成が入っており、古墳築造当時の地形を残すと考えられる土層は確認できなかった。

第16図は、第二次墳丘（下段）外側から周縁部の土層断面図である。10～19層は近現代の耕作土や造成土、地境の溝に関連した土層である。周縁部では表土下約0.2～0.5mの標高18～19mで地山を検出した。この付近の地山の標高は、後円部に設定したT1やT2の周縁部に相当する地山面と比較して2～3mも低い。当初から地山が低かったとも考えられるが、地山上に堆積している12層も流土とみるよりは、これも本来の地山で、耕作により地山土が土壌化したものとみられるので、この付近は後世にかなり削平されたものと推測できる。したがって、墳端とみられる場所に位置する14層も畑地境に設けられた区画溝により、古墳の墳端位置を残していないものと考えられる。また、T6最下段のトレンチも、耕作土直下で地山を検出し、こども大規模な削平を受けていた。

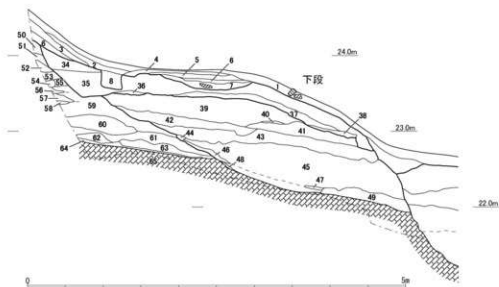
20～33層は墳丘を一度削平した後、再び他の土で埋め戻した造成土で、黄褐色あるいは褐色を基調とする礫を多く含む締まりの弱い砂質土を主体とする。土層は全体的に乱雑な堆積状態で、埋め戻しに当たっては土砂を無造作に投げ入れたかのような印象を得た。このような変更の意図は定かではないが、造成土中には、図示していないが平安時代のもと考えられる土師器の小破片が含まれており、古墳とは無関係の、平安時代以降の盛土と判断できる。古墳の周辺には、このような平安時代の土師器片が散見され、この時期の変更と考えることもできる。

第17図は、第一次墳丘（上段）及び第二次墳丘（下段）の土層断面図である。2～8層は昭和の墳丘整備に伴う造成土や暗渠の埋土である。34～38層は古墳上面に堆積した流土の可能性もあるが、盛土が土壌化して変質した層である可能性もある。墳丘下の地山には、いぶい橙色を呈する砂質の非常に固い土で、第一次墳丘盛土下の標高22.7～22.9m付近では旧地表面と考えられる黒褐色土層（64層）を確認した。ここから、第一次墳丘の盛土は元の丘陵を加工することなく行われたと考えられる。

地山を掘り込んでいる墳丘内埋没溝は、墳裾側が削平で消失しているが、断面は皿形を呈すると推測でき、残存する深さは約0.8m、底面の標高は21.9mである。第一次墳丘下の旧地表面は墳丘内埋没溝の肩の少し手前で途切れているが、これは盛土に先行して溝の掘削が行われたためと考えられる。

50～63層は第一次墳丘（上段）の盛土である。下層は、周縁部の地山土と考えられる明褐色の粘質土を含む土（60～63層）と、いぶい黄褐色土が比較的大きな単位で盛られている。一方、トレンチ北端の標高23.4m付近から上では、僅かな範囲であるがこれら2種類の土が細かな単位で互層状に積まれている状況を確認した。第一次墳丘内の場所による盛土の違いはT1でも確認されており、何らかの作業単位を示している可能性が想定される。ただ、T6の互層状盛土は、掘削の容易な、比較的締まりの弱い土であった。

39～49層は墳丘内埋没溝の埋土を含む第二次墳丘（下段）の盛土である。溝の最下層にはいぶい黄褐色土等（46・47・49層）が薄く堆積するが、その後は標高22.9～23.3m付近まで周縁部の地山土を含む土（42・43・45層）で一気に積み上げ、その上にいぶい黄褐色～明黄褐色土（39・41層）を積み上げている。溝の下層に、44・46～48層のように細かな土層が観察できるが、下層にこのような細かな土層がみられる傾向はT1やT2でも確認でき、溝が埋め戻される前段階で、第一次墳丘（上段）の盛土として利用された土の一部が流入・堆積したとも推測できる。その後、溝は、地山由来の土を用いて一気に埋め戻されており、その上に別の土を盛り上げてテラス面が構築されている。この方法は、T1やT2で確認された第二次墳丘（下段）の構築方法と同様である。



- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1 表土 | 46 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 | 47 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂 |
| 3 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂 (旧表土) | 48 黄褐色 (10YR5/6) 細砂 |
| 4 灰黄色 (2.5Y6/2) 硬混じり細砂 (バラス) | 49 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂と黄褐色 (10YR5/6) 細砂が塊状に入る。 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 | 50 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂 |
| 6 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 (負砂土) | 51 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 細砂 |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂 | 52 黄褐色 (10YR5/6) 細砂 |
| 8 黄褐色 (2.5Y5/3) 硬混じり土 (暗栗色) | 53 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂 |
| 34 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂 | 54 明褐色 (7.5YR5/6) 細砂 |
| 35 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 | 55 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 36 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 | 56 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 37 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 | 57 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 38 明黄褐色 (10YR6/6) 細砂 | 58 明褐色 (7.5YR5/6) 細砂 |
| (以下、古墳盛土) | 59 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂に |
| 39 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト | にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトが混ざる。 |
| 40 明褐色 (7.5YR5/6) 細砂 | 60 明褐色 (7.5YR5/6) シルト |
| 41 明黄褐色 (10YR6/6) 細砂 | 61 明褐色 (7.5YR5/6) シルト |
| 42 明褐色 (7.5Y5/6) シルト | 62 明褐色 (7.5YR5/6) シルト |
| 43 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 | 63 明褐色 (7.5YR5/6) シルト |
| 44 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 細砂 | (以下、旧地表面及び地山) |
| 45 赤褐色 (5YR4/6) シルトと明黄褐色 (10YR6/6) 細砂 | 64 黒褐色 (10YR3/2) 細砂 (旧地表面) |
| | 65 にぶい褐色 (7.5YR7/3) 粗砂 (地山) |

第17図 T6断面図 (1/50)

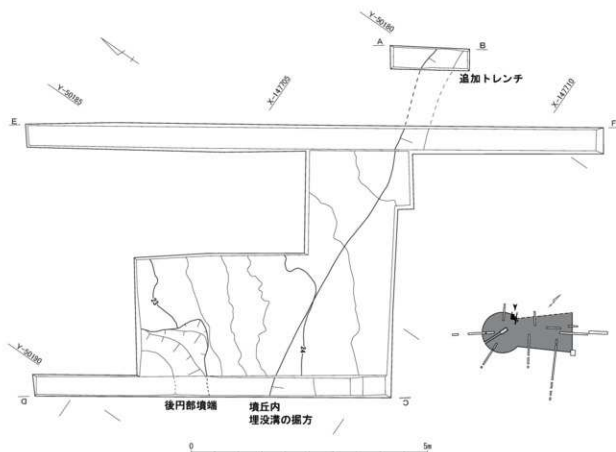
調査成果から築造当時の状況を想定すると、第一次墳丘（上段）は標高22.7m付近から、35度程度の傾斜角度で墳頂まで達していたと考えられる。問題となるのは第二次墳丘（下段）に関するテラスや墳端の形状であるが、大きな削平を受けているため、テラス面の高さやテラスの幅、傾斜角度や墳端の位置などの手掛かりを得ることができなかった。T6で残存している第二次墳丘（下段）で、最も高い地点のレベルは23.5mで、残存しているテラスの幅は4m程度を測る。最も近い位置にあるT1では、残存するテラス面の標高24.2m、テラス幅約4mであるので、T6のテラス面は約0.7mほど低くなっていることが分かる。また、墳端の位置であるが、T6でT1の墳丘内埋没溝と同程度の規模の溝が存在していたとすれば、標高21.0m付近に墳端を想定することができる。推測の域を出ないが、標高21.0m付近で残存する地山の傾斜が大きく変化していることは、当時の墳端の位置を反映しているのかもしれない。このように考えると、T6ではテラス面は元の高さより0.7m前後、墳端は幅3.5m前後にわたって削平を受けていることになる。

なお、T6からは、古墳に伴う遺物は出土しておらず、葺石や埴輪といった外施設も検出されていない。（藤井）

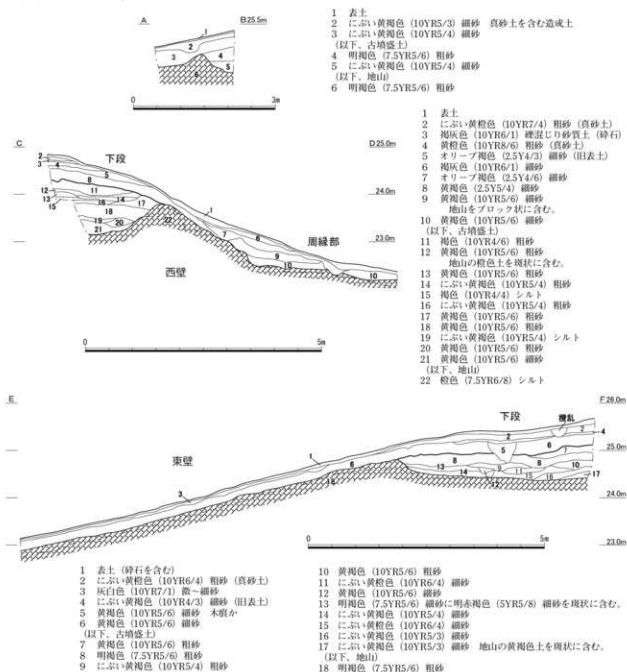
T7 (第18~20図、図版8・13-3)

T7は墳丘北西側の後円部からくびれ部にかけて設けたトレンチである。当トレンチの目的は北西側のくびれ部を検出することであったため、くびれ部が想定された位置(T7から東に約5mの場所)に調査区を設定した。最初にこの調査区の西端に幅50cmのサブトレンチ(T7東端のサブトレンチ)を設けて、T2で確認できたような墳丘斜面や墳丘裾部の検出を試みた。しかし、想定された位置に墳端を示すような痕跡が確認できなかったほか、T2をはじめ他の調査区とは異なる傾斜角度の緩やかな地山面が検出されたとどまった(第19図東壁)。そこで、T2でみられたような後円部の造作はこの場所まで及んでいない可能性が推測できたため、関係機関との協議の上、トレンチの場所を当初計画位置から西へ約5m移動し、第18図に示すT7の位置に変更した。その結果、トレンチ西隅で後円部の墳端を確認したほか、トレンチ上半部で墳丘内埋没溝を検出した。その後、溝がトレンチ東隅で前方部側に振れるような平面形を呈したため、その方向を確認するために、T7東端から約1.5m離れた場所に追加トレンチを設定した。

T7の上端部では墳丘内埋没溝の掘方を確認できた。溝は地山(西壁は橙色シルト土、東壁は明褐色砂質土の地山)を掘り下げて造られている。溝の掘方は、後円部の形状に沿うように、等高線を斜行しながら弧状に巡る。T7の東端では前方部側に屈曲する様子がみられたが、追加トレンチで確認した結果、後円部を周回する方向に戻るため、この溝は当初から後円部下段下付近に円形に掘削されていたことが推定できる。検出した溝はT7西壁で幅2.4m以上、深さ1.6m、東壁で幅4.2m以上、深



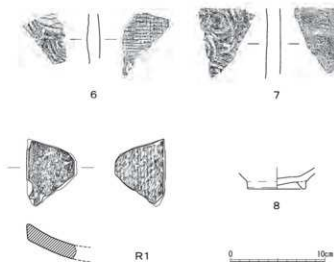
第18図 T7平面図 (1/80)



第19図 T7断面図 (1/80)

さ0.4mである。溝全体の幅はT7の調査範囲では確認できなかった。T2では幅約3.5mを測ることから、T7付近における溝の幅は、T2と同程度か、それ以上あったと推定できる。西壁における溝の埋土は大きく黄褐色土と褐色・にぶい黄褐色土に分けられる。前者は12、13、17、18、20、21層が該当し、地山起源の褐色土等を含むため周辺の地山に由来する土と考えられる。17、18、21層は厚くて、一気に溝を埋め戻した様子が想起できる。後者は、11、14、15、16、19層がこれに相当する。中には標高24.0m付近で広範囲に薄く敷かれているような層がみられ、T2で観察できたように、埋め戻しの工程を反映したのかもしれない。西壁で確認した溝の北西側は土手状に整形されている。T1、T2でみられた形状と同様に、溝を埋め戻したのちに墳裾の地山を削平した結果、土手状になったものと考えられる。一方、東壁で検出した墳丘内埋設溝では、にぶい黄褐色やにぶい黄褐色細砂が

底部に堆積している。溝の上層は礫を多く含む明褐色土で、礫混じり土を一気に埋め戻したような印象を受ける。なお、東壁の溝の北西側の肩は、西壁のように高い土手にはなっていない。これは、溝を埋め戻した後に行うべき墳塚の整形工程を簡略化した結果と考えられる。溝の底のレベルは西壁で標高23.2m、東壁で24.4mを測り、東壁の方が高い。T2の墳丘埋没溝の底は22.6mで、溝は後円部のくびれ部に至るにつれて底の標高が高くなっている。



第20図 T7出土遺物 (1/4)

T7では、西壁の地山の傾斜が標高

22.5m付近で緩やかとなるため、ここを墳端と考えた。ここで検出された墳丘の傾斜角度は約35度である。しかし、このような墳端の整形はT7西壁から北東に約1mまでで、それより東側ではなされていなかった。ここでは岩盤や風化した地山面が検出されたが、これらの地山の表面は比較的凹凸も少なく平滑であり、人力による整形がなされていた可能性はある。しかし、後円部のほかの調査区でみられたように傾斜角度30度にも及ぶ墳丘斜面を整形したり、墳端を示すような傾斜変換点の構築はなされていなかった。したがって、こうもり塚古墳の北西側はくびれ部を形成しておらず、後円部の造作は途中までとなっており、墳丘構築の一部を省略していたことが分かった。

テラス上面には流土（西壁8層、東壁6層）が堆積しており、西壁8層で土師器碗8が出土した。このことから、この流土は少なくとも古代以降のもものと判断した。したがって、墳丘内埋没溝埋土（第二次墳丘）の最上層は西壁で11層、東壁で7層となり、残存するテラス面の高さは標高約24~25mと推定できる。テラスの幅は不明であるが、少なくとも西壁で2m以上、東壁で3.5m以上を測る。

墳丘盛土（墳丘内埋没溝）からの出土遺物はなく、また、埴輪や葺石などの外表施設も検出されなかった。しかし、表土あるいは流土中から土師器、須恵器、瓦が出土している。6・7は須恵器甕の体部の破片で、R1は古代の平瓦である。これらはともに表土除去中に出土した。8は土師器碗の高台部であり、墳丘内埋没溝上層の流土（西壁8層）から出土した。（金田）

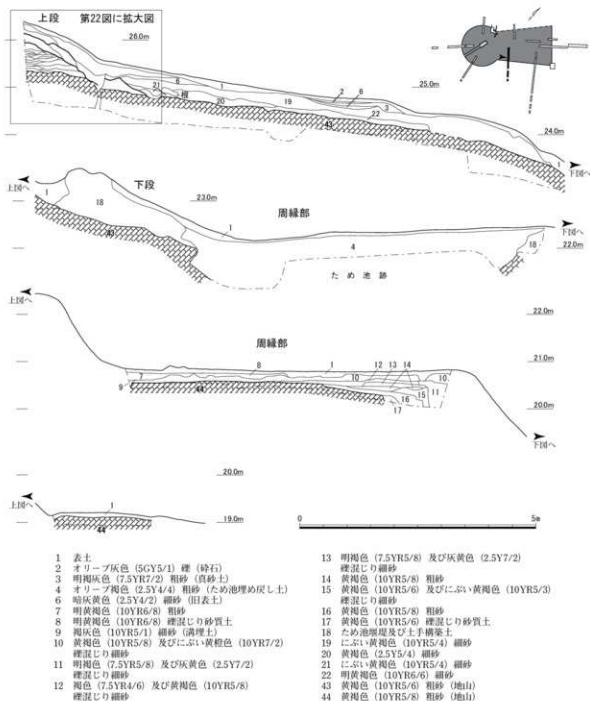
T5（第21~23図、図版9-1・14-1）

前方部南東側の、後円部に近い位置から周縁部にかけて設定したトレンチである。調査の結果、前方部下段斜面からテラス及び上段の盛土を検出した。ただ、墳端から周縁部にかけては後世の改変が著しく、古墳時代の地形はほとんど遺存していなかった。墳丘は、下段斜面からテラスにかけてを地山削り出して整形した後、上段を盛土で積み上げることで構築しており、後円部とは築造方法が異なっている。

第21図は下段から周縁部にかけての土層断面図である。テラスの土層のうち、2・3層は昭和の園路の造成土で、4層はこの場所にかつてあったため池を埋め戻した際の真砂土の堆積である。7~17層は古墳周辺の開墾に伴う耕作土や造成土であり、18層は墳丘裾に設けられた土手やため池南側の土

手構築土である。埴埴付近の土手構築土下部からは古代以降の土師器9~11や須恵器12が出土しているが、ため池の構築自体は古くはない。全体的に後世の改変が激しいが、16層下の地山の緩傾斜は旧地形を反映している可能性がある。

19~22層は地山上に堆積した流土である。この層の下で地山がみられることから、下段は地山削り出しで整形されていた可能性が高く、この付近がテラス面と考えられる。下段の斜面は標高23.8m付近を肩として、埴埴まで約20度の傾斜で削り出されていたと考えられる。埴埴はため池など後世の改変の影響で明確でないが、T4の埴埴が標高22.8m、T1の埴埴が標高21.1m付近と、後円部に近づ



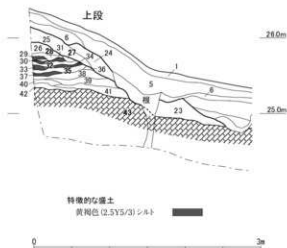
第21図 T5断面図 (1/80)

くほど低くなる傾向があることから、おおむね標高22.5m付近を墳端と想定することができる。テラスは、下段側の肩が標高23.8m、上段の裾が標高25.0mなので、この間に想定できるが、テラス面の傾斜によっては約5～6.5m程度の幅が想定できる。T3で確認された前方部テラスの幅は約3mなので、南東側のテラスは前方部前端よりも広い幅を持つ可能性が高いと良い。

第22図は上段盛土の土層断面図である。1、5、6層は昭和の墳丘整備の際の造成土と、その前後で形成された旧表土（腐植土）である。23・24層は流土の可能性もあるが、25層もあわせ、地表面に近い場合、土壌化の影響を受けて盛土の構造を喪失した層である可能性も想定できる。

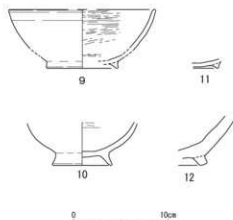
26～41層は古墳の盛土である。42層は古墳築造以前の地表面と考えられ、その上から盛土を行っている状況が確認できた。ただし、上段の裾付近は、旧地表面が認められず、地山を削り出した形跡があり、盛土に先行して地山の整形を行っていた可能性が高い。上段の盛土は、地山由来と考えられる明黄褐色の砂質土、にぶい黄色のシルト、黄褐色のシルトを細かな単位で互層状に積み上げていた。しかし、T9やT1で確認された互層状盛土のように非常に固く締まった土ではなく、掘削は容易であった。上段の盛土は現状の地形から標高27m付近まで積まれていたと想定され、高さは下段と同じ約2mとなる。一方、上段斜面の角度は裾付近の立ち上がりがそのまま続いていたとした場合約35～40度となり、下段の傾斜約20度と比較して倍近くの急勾配となる点が特徴として指摘できる。

T5から古墳に関連する遺物は出土していないが、墳裾付近の土手構築土（18層）下部で古代以降の土器が数点出土しており、そのうち、4点を図化した。9は内面が黒色の土師器碗である。10・11は土師器碗である。12は須恵器壺の底部と考えられるが、焼成は良くない。（藤井）



- 1 表土
- 5 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (真砂土)
- 6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂 (旧表土)
- 23 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 (盛土か)
- 24 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂 (盛土か)
- 25 明黄褐色 (10YR6/6) ～黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂 (盛土か)
- (以下、古墳盛土)
- 26 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂
- 27 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂
- 28 明黄褐色 (10YR6/6) 細砂
- 29 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 30 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- 31 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 32 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- 33 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 34 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 35 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- 36 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗砂
- 37 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 38 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂
- 39 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂
- 40 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- 41 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂
- (以下、旧地表面及び地山)
- 42 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂 (旧地表面)
- 43 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 (地山)

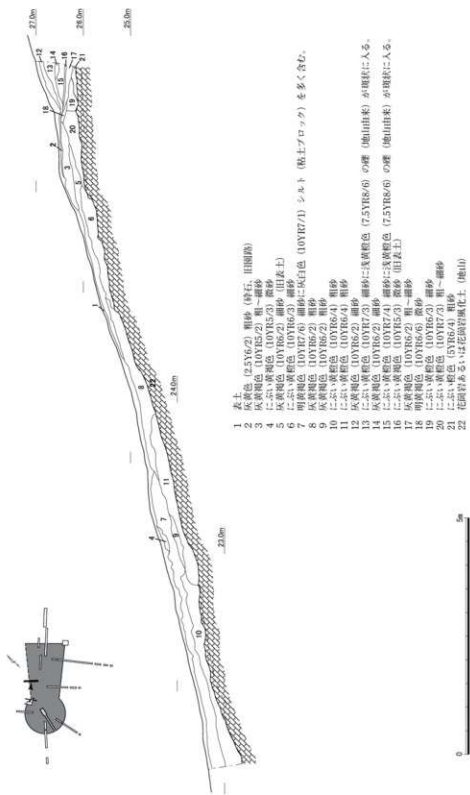
第22図 T5断面図 (1/50)



第23図 T5出土遺物 (1/4)

T 8 (第24図、図版9-2)

T 8は前方部北西側に設けたトレンチで、段築などの墳丘構造を解明するために設定した。トレンチでは表土から約0.5m下で地山面を検出した。この地山面の緩斜面面上には黄褐色や黄褐色を基調とする均質でない流土(5~11層)が堆積しており、地山直上の土層(7~11層)では図示していないが、



第24図 T 8断面図 (1/80)

近現代のものと思われる陶磁器等が出土しており、地山面が露出していた時期があった可能性がある。7層は明黄褐色土に灰白色の粘土ブロックを多く含む層である。この粘土ブロックはT3やT10でもみられ、外部から持ち込まれた土と考えられる。地山面はトレンチ上端から約3m付近から約15度の傾斜で下っている。T8は前方部北西側の側縁に相当すると仮定でき、前方部南東側のT5あるいは後円部北西側のT2の調査成果を踏まえるならば、T8の範囲内の標高24~25m付近に幅3~5mほどのテラスが存在することが想定できた。しかし、検出された地山面には、想定された付近あるいはそれ以外の場所においても、テラスを示すような平坦面を確認することはできなかった。したがって、このT8ではテラスの整形は行われておらず、この前方部北西側では段築は施工されなかった可能性が高い。なお、T8では標高23.4m付近の地山面において傾斜変換点がみられた。しかし、直上の堆積土(10・11層)は近現代に属するものであることから、この地山の形状を古墳時代までさかのぼらせて考えることは難しい。加えてT8では段築整形といった墳丘構築工程が省略されている可能性も考慮すると、これを墳端とするには慎重を期す必要がある。

トレンチの上面では地山上に土砂が堆積しており、上層(12~15層)と下層(16~21層)に大別できる。上層にはぶい黄褐色あるいは黄橙色を基調とする土層で、地山由来の礫などが斑状に混ざり、明らかに人為的に盛られた土であった。遺物は含まれておらず、この上層が形成された時期は不明であるが、土層の性質はT6で検出された20~33層(第16図)と類似する。このT6の層は古代以降の堆積土と推測されていることから、この上層も同様に古代以降の堆積土と考えておきたい。下層に相当する16層は上下の層に比べると黒く、有機物を多く含有していると推測できるので、かつての地表面であった可能性がある。この16層以下の土層は、19層で土坑状の痕跡もみられるが、全体として均質な土で構成されていることから自然堆積である可能性が高い。この下層についても出土遺物がなく、堆積した時期は不明である。この下層下の地山面は比較的平坦で、古墳の築造に伴い整形された可能性がある。周辺のトレンチの状況から推測すると、ここにはT5やT9で検出したような互層状の盛土が存在しても良い場所であるが、このような層は確認できていない。したがって、T8上端の盛土は削平されている可能性を想定したい。

なお、古墳に伴う遺物は出土していない。

(金田)

T4 (第25~27図、図版9・3・10-1~2・14-2・34-5)

T4は前方部頂部から南側に約65mの長さにわたって設けたトレンチで、前方部側縁の形状及び周縁部の状況を把握するために設定した。調査の結果、トレンチの上部では前方部上段及び下段の盛土や地山を利用した下段を検出した。それ以外の場所は後世の開墾により大きな削平を受けていたが、周縁部で古墳築造時の地形を反映している可能性のある地山の緩斜面を確認した。

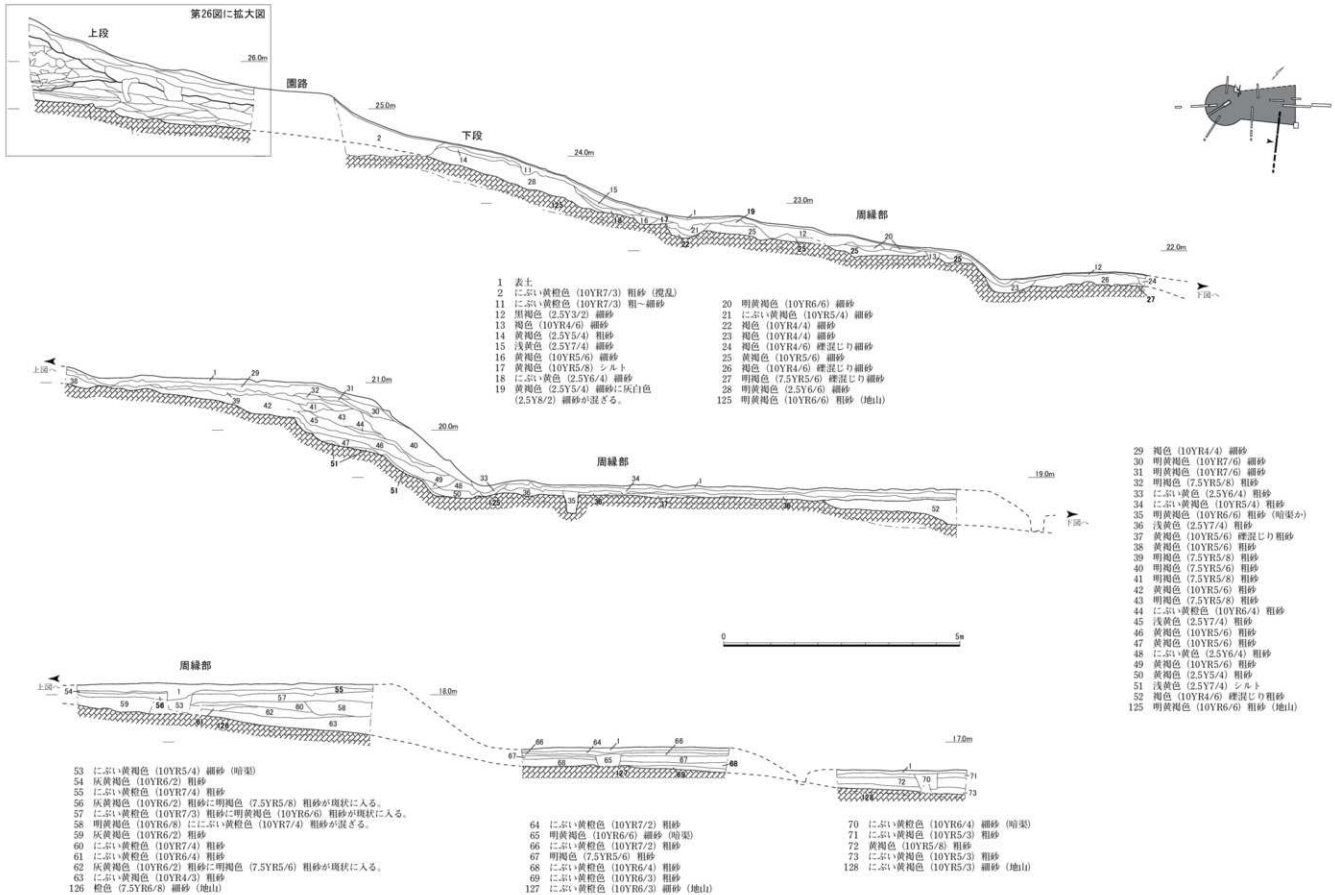
トレンチ上端から12~13m付近までは前方部と考えられる。園路の位置に攪乱(2層)があるが、そのほかは概ね良好に残存していた。トレンチ上端の1、3~10層は古墳築造以後の堆積土である。6、7、9、10層は古墳盛土とよく似たにぶい黄褐色のシルト土であったが、土層中から古代瓦R2~R4や鉄斧M1が出土したことから流土と判断した。遺物は9層を中心に出土していることから、これが古代以降の堆積層と判断できるため、これより下の層を古墳に伴う盛土と考えた。

74~123層は古墳築造に伴う盛土で、後述するように74~100層は上段、101~123層は下段に伴う盛土と考えられる。上段に伴う盛土は、95、98、100層のように薄く広がる層もみられるが、77、79、80、85、88、91層などのようにブロック状になる層もある。盛土は、大きく褐灰色系(A)、灰色系

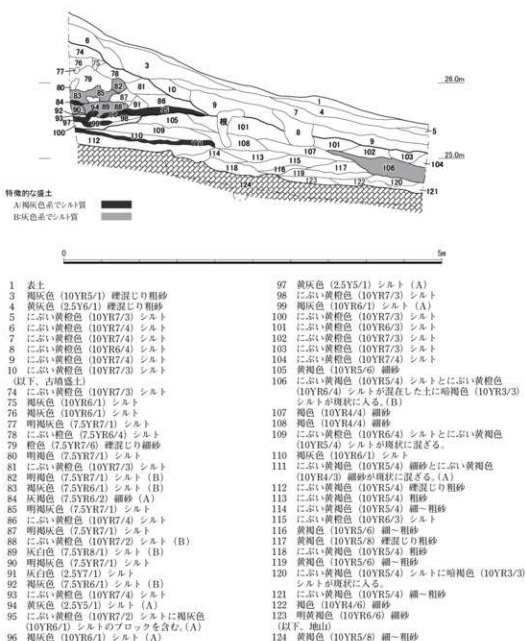
(B) 及び橙色系の土が使用されているが、下方は褐灰色系 (A)、中ほどは灰色系 (B)、上方では橙色系の土が多く用いられていることが特徴である。各層はいずれも締まってはいるが、T1やT9でみられた互層状の盛土ほど堅固ではない。この上段盛土は、後述する下段盛土の上に構築されているが、その境目は明瞭ではない。ここでは、土層が比較的細かな単位でみられる100層から上の層を上段盛土と考えたい。このように考えると、上段盛土の下面の標高は25.4~25.6mで、上段傾斜角度は約30度である。なお、T4の上段盛土は、T5上段盛土のように明瞭な互層状にはなっていない。むしろ、T9で報告する土手状盛土に近い。したがって、T4の上段盛土は前方部前面に築造された土手状盛土の一部である可能性が考えられる。

101~123層は主に下段を形成する盛土である。この下段盛土の範囲であるが、園路付近の攪乱(2層)の南西側でも観察できたことから、トレンチ上端から9m付近まで広がっていたものと推定できる。T3やT5の下段はほぼ地山削り出しであるが、T4では、地山が低かったためか、下段上部を盛土で補っていたと想定できる。この下段盛土は、上半部はにぶい黄橙色を基調とするシルト土で、下半部は黄褐色を基調とする砂質土で構成されている。土層は均質なものが存在するが、105、109、111、120層では異なる土がブロック状に包含されている状況が観察できた。地山は黄褐色を呈する風化土であったが、この地山上に旧地表面と考えられる土層は確認できなかったため、盛土構築前に、この付近の地山は整地されていた可能性がある。また、下段盛土の上面がテラス面と考えられ、101~104層上面がこれに相当すると考えられる。現状ではテラスの下段側の肩は確認することはできないが、テラスの標高は25.3~25.6m程度と推定できる。地山は、園路下の攪乱(2層)の底から20度ほどの傾斜で下っていき、18層下で傾斜が緩やかになっている。このことから、この標高22.8m付近の傾斜変換点を墳端と想定できる。したがって、前方部下段の下半部は地山を削り出して造られていたと推定できる。なお、この下段の傾斜を基にテラスの幅を推定すると約3mを測ることができる。

墳端から下方は開墾で段状に大きく改変されている。ここは、古墳の周縁部に当たるが、後円部周辺に残存している緩斜面状の周縁部が前方部でも存在するかどうかを確認する目的で調査した。墳端下方の25層下の地山は一部削平を受けているが、8度ほどの傾斜を残している。26層が堆積している段から下方は削平を受けていて、古墳築造当初の形状は残っていない。29~51層は高さ2.4mを測る大きな段を構成しているが、この段は傾斜約25度の地山の上に最大1.2mの高さの土砂を積み上げて造られている。段の下半の46層で近世以降の瓦R5が出土しており、この段は近世以降に形成されたものと考えられる。この段の下は近年まで水田として利用されており、水田造成の影響を受けている。しかし、52層の下部まではその影響が及んでおらず、52層下で地山が緩やかに傾斜する状況が確認できた。この52層では須恵器14や土師器15が出土しており、52層は中世以降に堆積した包含層であることが分かった。したがって、この地山の緩斜面は古代以前の地形を反映している可能性が推測できる。同様の包含層は62・63層でも検出され、その下に緩斜面の地山が残存していた。この62・63層は古代以降の須恵器13等が出土しており、地山の緩斜面も古代以前の地形を反映している可能性がある。これらの包含層下で検出された地山面であるが、地山直上で出土した遺物があることから、この緩斜面の形状は自然地形ではなく、古代以前の造作で整形された可能性が想定できた。この造作がなされた時期は特定できないが、この緩斜面が約8度とT2やT7でみられた周縁部の傾斜に近いものであることを踏まえると、この整形が古墳築造時に実施された可能性も残しておきたい。このように考えると、T2やT7でみられた後円部の周縁部は前方部南側まで及んでいたことになる。なお、これよ



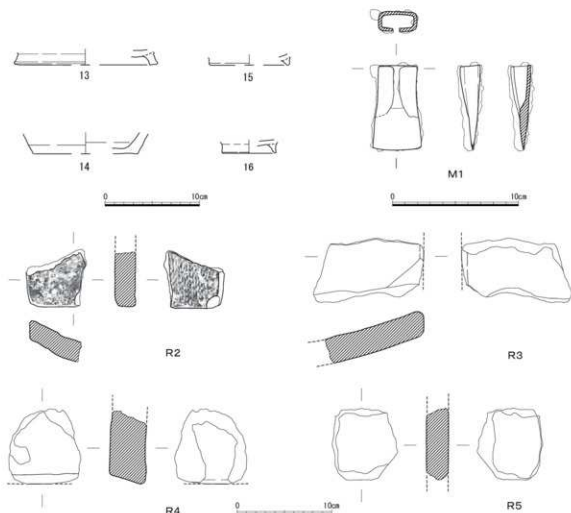
第25図 T4断面図 (1/80)



第26図 T4断面図 (1/50)

り下のトレンチでは、表土下約0.4mで地山を検出したが、いずれも地山まで削平されている様子がかがえた。

T4からは須恵器、土師器、瓦、鉄製品が出土しているが、盛土からの遺物の出土はない。13は須恵器壺で高台が付く。14も須恵器壺の底部であるが平底である。15・16は土師器椀の高台の小破片である。R2~R4はいずれも平瓦であり、国分寺あるいは国分寺に伴う瓦であろう。R3・R4の表面は摩滅しており、拓本は付していない。R5は近世以降の煙瓦片である。M1は有袋鉄斧である。9層で出土したことから古代以降のものであろう。(金田)



第27図 T 4出土遺物 (1/3・1/4)

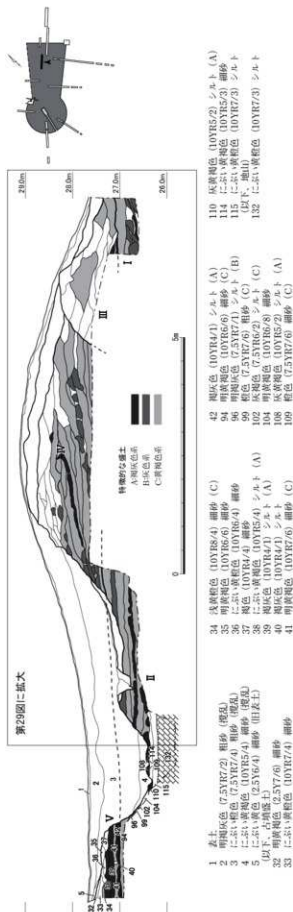
T 9 (第28・29図、図版10-3・11-1・14-3・15-2~3)

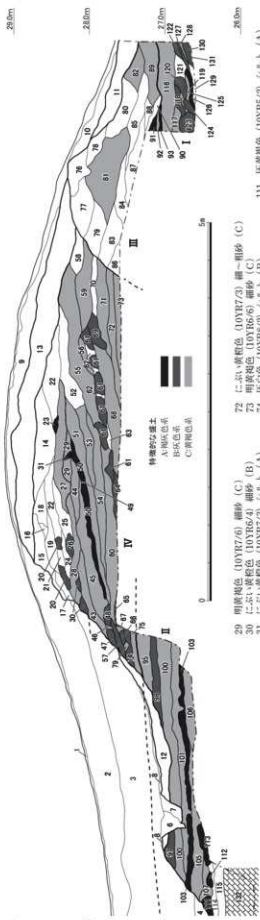
T 9は前方部頂部に設定したトレンチである。先に調査し前方部前端の状況が明らかになったT 3に続き、前方部における盛土の状況を観察することに加え、前方部頂部に位置する1 m程度の高まりが古墳に伴うものかどうかを確認することも目的に調査した。掘り下げを開始後、トレンチの南西半部で表土下から真砂土を主体とする幅約8 m、深さ約1.2 mに及ぶ埋土(2~4層)を確認した。これは、昭和42年に測量された図面に描かれている北西方向に延びる土取り痕跡と位置や形状が似ていることに加え、埋土中から近代以降の陶磁器が出土したことから、墳丘整備前に存在していた土取り痕跡と判断した。したがって、この埋土である真砂土を主体とする土砂は、測量後の昭和45年以後に実施された墳丘整備に伴い搬入された造成土である。一方、T 9上層の11層はT 3の19層(第32図)に対応すると考えられる。T 3の19層は同トレンチの20、21層と同一層と推定でき、21層から古代瓦(R 8・R 9)が出土していることから、T 9の11層は古代以降の堆積土と考えられる。

T 9における墳丘の構築は5工程(工程I~V)からなると推測できる。盛土は数多くの土層で成り立つが、中には類似する土層が観察できるため、これについてはA~Cと抽出して図示した(第28・29図)。最初の工程Iは116~131層が該当し、前方部前端側の上段斜面の下半部を構築する工程である。T 9付近の地山はT 9南西側で標高約26.2 mを測る地山面と、T 3においても同様の高さの地山

を確認している。工程Ⅰの盛土はこの地山上から積み上げられているが、地山上に旧地表面を示す土層は確認できなかった。そのため、盛土構築前に表土を除去するような整地作業が行われた可能性がある。工程Ⅰでは、地山から高さ約0.8mほどの盛土を積み上げたと推測できる。117～131層は、ブロック状あるいは斜状に堆積する灰色を基調とするシルト土(B)の間に、地山に由来する黄褐色を基調とする砂質土(C)が入り込む土層で構成され、比較的乱雑な様相を呈していた。これは後述するT3における盛土構築の工程Ⅰに対応するものと考えられる。工程Ⅰに属する117～131層はT9南西側の土層とは対応していないことから、前方部頂部のどこかで途切れている可能性が高い。このように考えると、この工程Ⅰは、後述する工程Ⅲとあわせ、前方部前端に構築された土手状の盛土の基部にあたる可能性が想定できる。その場合、この土手状の構築物はT3で検出された盛土とあわせると、少なくとも幅7m程度あったと推定できる。なお、工程Ⅰの最上層に位置する116層は厚さ0.2m程度の地山由来の黄褐色砂質土(C)で、比較的均質な土層で一気に土砂を搬入したような印象を受ける。これは、T3における工程Ⅱに対応すると考えられる。

工程Ⅰ後の盛土工程であるが、T9南西半部を構成する94～115層あるいは工程Ⅰでできた土手状の構築物をさらに盛り上げる76～93層のいずれかの工程が想定できる。その前後関係はT9中央下部を調査していないため不明であるが、ここでは、工程Ⅱとして94～115層の盛土構築を考えておく。工程Ⅱでは、いずれも厚さ3～15cm程度の茶色に近い褐灰色や灰色及び黄褐色を基調とする土を水平を意識しな





- 1 表土
 2 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (混乱)
 3 不₂黄褐色 (7.5YR7/4) 粗砂 (混乱)
 4 明褐色 (7.5YR7/4) 粗砂 (混乱)
 5 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (混乱)
 6 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (混乱)
 7 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (混乱)
 8 明褐色 (7.5YR7/2) 粗砂 (混乱)
 9 不₂黄褐色 (10YR7/3) 粗砂
 10 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 11 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 12 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (混乱)
 13 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (混乱)
 (以下、同様)
 14 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 15 明褐色 (10YR6/1) 粗砂
 16 明褐色 (10YR6/1) 粗砂
 17 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂
 18 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗砂
 19 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗砂
 20 浅黄褐色 (10YR8/2) 粗砂
 21 浅黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 22 浅黄褐色 (7.5YR8/3) 粗-細砂
 23 浅黄褐色 (10YR6/3) シルト (A)
 24 浅黄褐色 (7.5YR8/3) シルト
 25 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗砂
 26 明褐色 (10YR7/2) 粗砂 (混乱)
 27 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 28 黄褐色 (10YR8/6) 粗砂 (C)
 29 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 30 不₂黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 (B)
 31 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (C)
 32 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (C)
 33 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 34 浅黄褐色 (10YR8/6) 粗砂 (C)
 35 黄褐色 (10YR8/6) 粗砂 (C)
 36 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (C)
 37 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 38 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 39 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 40 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 41 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 42 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 43 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 44 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 45 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 46 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 47 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 48 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 49 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 50 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (A)
 51 浅黄褐色 (7.5YR8/4) 粗砂 (A)
 52 不₂黄褐色 (10YR7/2) 粗砂
 53 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 54 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 55 浅黄褐色 (7.5YR8/4) 粗-細砂 (C)
 56 浅黄褐色 (7.5YR8/4) 粗-細砂 (C)
 57 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (B)
 58 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 59 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 60 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 61 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 62 不₂黄褐色 (7.5YR7/3) 粗砂
 63 不₂黄褐色 (7.5YR7/3) 粗砂
 64 灰白色 (10YR8/1) シルト (B)
 65 灰白色 (10YR8/1) シルト (B)
 66 灰白色 (10YR8/2) シルト (B)
 67 不₂黄褐色 (10YR7/2) 粗砂 (C)
 68 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 69 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 70 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト (B)
 71 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 72 不₂黄褐色 (10YR7/3) 粗-細砂 (C)
 73 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 74 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 75 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 76 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂
 77 明褐色 (10YR6/6) 粗砂
 78 明褐色 (10YR6/6) 粗砂
 79 不₂黄褐色 (7.5YR7/3) 粗砂
 80 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 81 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 82 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 83 明褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 84 不₂黄褐色 (7.5YR7/3) 粗砂
 85 明褐色 (10YR6/8) 粗砂
 86 明褐色 (10YR6/8) 粗砂
 87 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト
 88 不₂黄褐色 (10YR7/2) シルト
 89 不₂黄褐色 (10YR7/4) 粗砂 (C)
 90 明褐色 (10YR6/8) 粗砂 (C)
 91 不₂黄褐色 (10YR6/4) シルト (A)
 92 不₂黄褐色 (10YR7/6) シルト (C)
 93 不₂黄褐色 (10YR7/4) シルト (A)
 94 不₂黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 95 不₂黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 (C)
 96 灰白色 (10YR8/2) シルト (B)
 97 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 98 明褐色 (10YR8/2) シルト (A)
 99 明褐色 (10YR8/2) シルト (A)
 100 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 101 明褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 102 明褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 103 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 104 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 105 浅黄褐色 (10YR8/4) 粗砂 (C)
 106 黄褐色 (5YR6/8) 粗砂 (C)
 107 黄褐色 (10YR8/8) シルト (C)
 111 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 112 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 113 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 114 不₂黄褐色 (10YR5/3) シルト
 115 不₂黄褐色 (10YR7/3) シルト
 116 黄褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 117 黄褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 118 灰黄褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 119 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 120 灰白色 (10YR8/1) シルト (B)
 121 明褐色 (10YR7/6) 粗砂
 122 不₂黄褐色 (10YR7/3) シルト (B)
 123 灰白色 (10YR8/1) 粗砂 (B)
 124 明褐色 (10YR8/1) 粗砂 (B)
 125 明褐色 (10YR8/1) 粗砂 (C)
 126 不₂黄褐色 (10YR6/3) シルト (A)
 127 黄褐色 (10YR5/2) シルト (A)
 128 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 129 不₂黄褐色 (10YR7/3) シルト
 130 灰白色 (10YR8/1) 粗砂 (B)
 131 明褐色 (10YR7/6) 粗砂 (C)
 132 不₂黄褐色 (10YR7/3) シルト

第29図 T9断面図 (1/50)

が互層状に盛っている。ただ、これらの互層状の盛土は、水平を指向するものの、各層の層界面は凹凸に富み、整然とした平滑なものではなかった。土層の中央は先述した土取りによる攪乱で破壊を受けるが、94層と95層（C）、96層と97・98層（B）、99あるいは102層と100層（C）は同一層と考えられる。また、96層と97・98層、103層（A）、110～113層（A）はとても固く締まったシルト質の土層であった。また、同一層と考えられる94層と95層上面の42層と75層はまったく異なった土であり、この層間で盛土工程の区切りがあったことが想定される。工程Ⅱと前方部前端の工程Ⅰ・Ⅲとの関係は、その間を調査していないため詳細は不明であるが、工程Ⅱは前方部前面の土手状盛土の内側を埋めていく工程であったことが推定できる。

工程Ⅲとして前方部前端の上段上層を構成する土層（76～93層）が考えられ、幅約3.5m、高さ約1.3mを測る。工程Ⅰで構築した土手状盛土をさらに盛り上げる工程である。土層は下層に僅かであるがシルト質の薄層が存在するが、それより上は厚さ0.2～0.3mのレンズ状の堆積を特徴とする。76～89層は明黄褐色系の細砂を中心とする土層で締まりはなかった。これらの土層はT3における盛土工程Ⅲに対応すると推定できる。

工程Ⅳは14～75層が該当し、前方部頂部を構成する盛土である。上半部は明黄褐色や浅黄褐色を基調とするあまり締まりのない土であり、27層以下の下半部は黄褐色を基調とする砂質土（C）を多用していた。各層の厚さは5～15cm程度とばらつきもあるが、一定の厚さを意識して積み上げたようである。ただ、積み上げ方であるが、各層において水平ではなく、先述した工程Ⅲの土手状盛土に擦り付けるように斜行している。土層の中にはシルト質で締まりの良い薄層が部分的にみられ、その中でも50層（A）は約12度の傾斜で長さ約2.2mにわたり良好に残存している。20層、26層と30層、61層と64層もそれぞれ同様の傾斜をなす灰色を基調とする薄層（B）であるが、ブロック状に分割された状態で残存している。これは土塊状に積み上げたというより、木の根などの攪乱で層が分断した可能性、あるいは、この層を敷く際に隙間が生じてしまった可能性を考えておきたい。なお、前方部頂部の後円部側の傾斜はすべて攪乱を受けており、古墳築造当初の形状がうかがえる箇所はない。

工程Ⅴは32～42層に相当し、T9で最後に構築された盛土で、水平を意識しながら互層状に積み上げられている。特に、38、39、42層は厚さ約5～8cmのこげ茶色で硬質のシルト土（A）で良好な状態で残存していた。その間層として浅黄褐色あるいは明黄褐色の地山由来の花崗岩風化土（C）が観察できた。これらの土層は、攪乱で大きく削平されているが、14～75層で構成される前方部頂部の盛土とは対応しないため、攪乱土の範囲内までしか施工されていない可能性が高い。したがって、工程Ⅴは、工程Ⅳにおいて前方部頂部の盛土を構築したのちに、前方部側を嵩上げするため施された盛土と考えられる。

このように、T9では盛土構築に当たって5段階の工程が想定できた。特に、工程ⅠとⅢは前方部上段の前端部分を土手状に構築したものであるが、これは前方部前端を定める意図もあったと推定できる。この工程ⅠやⅢで使用された盛土の特徴は、T3やT4の上段盛土と共通した部分もみられることから、前方部上段の構築は、まず前方部前端の地山（下段）上に、主軸に直交するかたちの土手状盛土を設置したことから始まったと想定される。

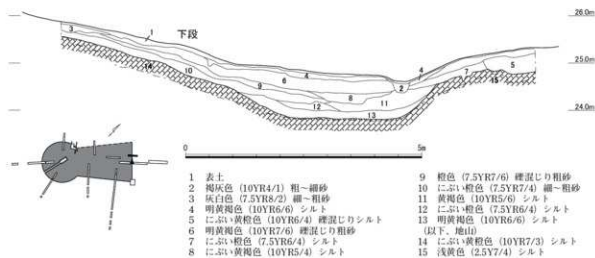
T9では、表土や攪乱土から陶磁器等の遺物は出土したが、盛土中からの出土遺物はなかった。また、埴輪や葺石といった外表施設も確認できなかった。（金田）

T 10 (第30・31図、図版11-2)

前方部前端に設定したトレンチである。調査の結果、北東から延びる丘陵を堀切状に切断して造り出した前方部前端下段の斜面及び墳端を検出した。T 3とT 10で検出した墳端を結ぶラインは直線である。盛土は確認できず、下段斜面から墳端までは地山削り出しで造成している。

1～7層は近～現代の堆積層で、6層からは近代以降のものと考えられる瓦片が多く出土した。8～13層は墳丘側と丘陵側の双方から流れ込んだ流土である。最下層の13層からは奈良時代のもと考えられる平瓦R6が出土している。このことから、この堀切状の施設は古墳築造後、長期にわたり埋没することなく機能していた可能性がある。

墳端は、トレンチ東端から約4.9m、標高23.8mの地点にある地山の傾斜変換点と考えられ、下段は約20度の傾斜を有している。堀切の底の幅は約2.3mで、幅約3.2mを測るT 3の底よりもやや狭くなっている。丘陵側の斜面は約40度で、T 3丘陵側の傾斜角度(約25度)と比べてかなり急である。



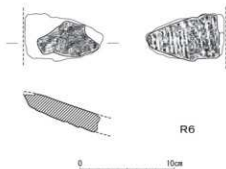
第30図 T 10断面図 (1/80)

このように、前方部前端では、切り通しの底部の幅は北西に向かうほど狭くなり、また、丘陵側斜面の傾斜はきつくなるという傾向がうかがえる。これはT 7・8で確認された前方部北西側の造成の簡略化と関連付けられる。

なお、T 10では古墳に関連する遺物は出土していないが、先述したように古代の瓦(R 6)等が出土している。(藤井)

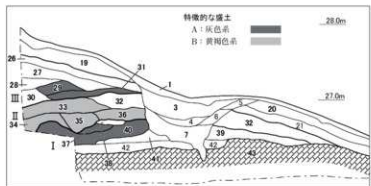
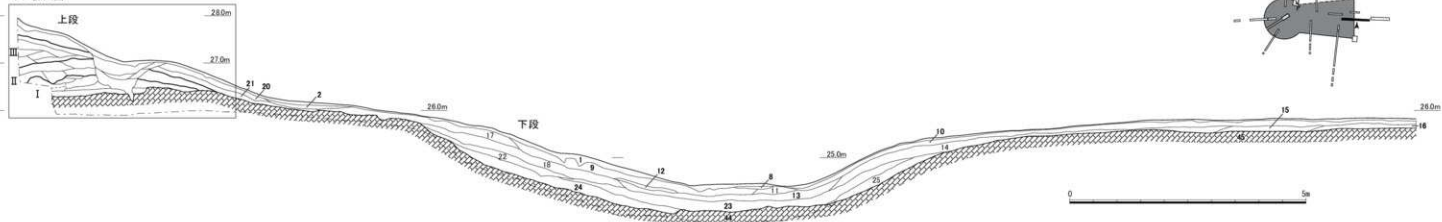
T 3・T 11 (第32・33図、図版11-3・12-1～2)

T 3は前方部前端からその北東に続く丘陵上面に設けたトレンチである。T 3よりさらに北東側に設けたのがT 11である。調査の結果、T 3の前方部では、地山を削り出した下段とテラス及び上段盛土を確認した。

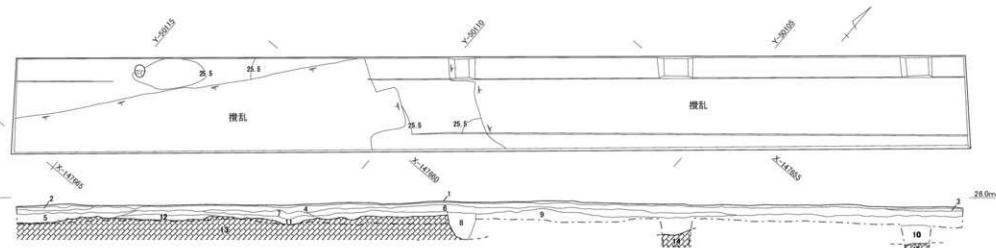


第31図 T 10出土遺物 (1/4)

下に拡大図



- | | | |
|---|---|---|
| <p>1 表土</p> <p>2 明褐色 (7.5YR5/6) 硬澁じり粗砂</p> <p>3 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粗砂</p> <p>4 褐色 (10YR4/1) 粗砂</p> <p>5 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>6 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>7 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>8 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>9 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂に灰黄色 (2.5Y6/2) シルトが塊状に入る。</p> <p>10 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂</p> <p>11 褐色 (10YR4/6) 微-細砂</p> <p>12 褐色 (10YR4/4) 粗砂及びにぶい黄褐色 (10YR5/4) 硬澁じり粗砂</p> <p>13 黄褐色 (10YR5/8) 微-細砂</p> <p>14 褐色 (7.5Y6/8) 微-細砂</p> <p>15 黄褐色 (10YR5/8) 硬澁じり粗砂</p> <p>16 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>17 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> | <p>18 黄褐色 (10YR5/6) 粗-粗砂</p> <p>19 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>20 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂</p> <p>21 明黄褐色 (10YR7/6) 粗砂</p> <p>22 黄褐色 (10YR5/6) 粗-粗砂</p> <p>23 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>24 黄褐色 (10YR5/8) シルト</p> <p>25 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂</p> <p>(以下、古墳盛土)</p> <p>26 黄褐色 (10YR5/6) 微-細砂</p> <p>27 明黄褐色 (10YR6/6) 微-粗砂</p> <p>28 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂</p> <p>29 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 (A)</p> <p>30 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂に黄褐色 (10YR5/8) がブロック状に入る。</p> <p>31 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗-粗砂 (A)</p> <p>32 黄褐色 (10YR5/8) 硬澁じり粗砂</p> <p>33 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂 (B)</p> | <p>34 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 (B)</p> <p>35 黄褐色 (10YR5/8) 硬澁じり粗砂 (B)</p> <p>36 黄褐色 (10YR5/8) 硬澁じり粗砂 (B)</p> <p>37 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト</p> <p>38 にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト (A)</p> <p>39 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂</p> <p>40 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト (A)</p> <p>41 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂</p> <p>42 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粗砂</p> <p>(以下、地山)</p> <p>43 黄褐色 (10YR5/6) 硬澁じり粗砂</p> <p>44 褐色 (7.5YR4/6) 粗砂</p> <p>45 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂</p> |
|---|---|---|



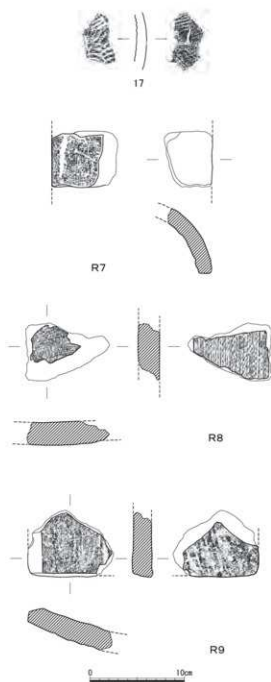
- | |
|--|
| <p>1 表土</p> <p>2 褐色 (10YR4/6) 微-細砂</p> <p>3 黄褐色 (10YR5/8) 微-細砂</p> <p>4 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂</p> <p>5 黄褐色 (10YR5/8) 硬澁じり粗砂</p> <p>6 明褐色 (7.5YR5/6) 硬澁じり粗砂</p> <p>7 明褐色 (7.5YR5/6) 粗砂</p> <p>8 褐色 (7.5YR4/6) 硬澁じり粗砂</p> <p>9 明褐色 (7.5YR5/6) 微-細砂</p> <p>10 明褐色 (7.5YR5/8) 硬澁じり粗砂</p> <p>11 明褐色 (7.5YR5/6) 硬澁じり粗砂</p> <p>12 褐色 (5YR7/6) シルト</p> <p>(以下、地山)</p> <p>13 褐色 (7.5YR6/8) 粗砂</p> <p>14 明褐色 (7.5YR5/8) 微-粗砂</p> <p>15 褐色 (7.5YR6/6) 粗砂</p> |
|--|

第32図 T3・T11平面・断面図 (1/50・1/80)

T3の上段は地表面から約0.2mの厚さの流土(19~21層)に覆われている。黄褐色を基調とする砂質土で、上段盛土と非常に区別しづらいものであったが、21層で瓦(R8・R9)が出土したことから、確実に21層までは後世の堆積土である。

T3墳丘側の下段では、標高26.2m以下で黄褐色を基調とする地山を検出した。特に、標高約26.0m付近で幅約3mにわたって地山の平坦面が確認でき、この面が地山を水平に削り出すことで造られたテラス面であると判断した。T3ではテラスの下から尾根を横断するように幅約11m、深さ約2mにわたる堀切状の切断痕跡がみられた。この付近の地山は上段下段では花崗岩風化土の様相を呈するが、下段の地山はさらに風化が進んでおり、そのため、流土と地山の境目が不明瞭な箇所も多くあった。調査の結果、この堀切状の溝の断面形は浅い皿状を呈しており、前方下段は、これに伴う掘削とあわせ、地山を削り出して造成されたものと推測できる。地山自体が脆弱な土質であったこともあり、下段の墳丘面は凹凸に富み、古墳の造作としては粗雑な印象がぬぐえない。下段の傾斜角度は約20度で、下段の墳丘の標高は23.8mを測る。したがって、下段の高さは2.4mと復元できる。この切断痕跡には南北両側から土砂が流入して埋没していたが、T10では地山直上の層で古代瓦(R6)が出土していることから、古墳築造後しばらくは堀切状の溝が残っていたようである。この溝は、その後、埋積が進み、現在は標高約24.5m付近まで土砂が堆積している。埋土中からR7の古代瓦のほか、図示していないが、上層では近世・近代の瓦が多く出土している。

墳丘上段の構築は、大きく3工程(I~Ⅲ)に分けられ、灰色系のシルト土(A)や地山に由来する黄褐色土(B)といった特徴的な土が使用されていた。地山直上の土層は42層で、にぶい黄褐色土を呈するが、他のトレンチで検出された旧表土と色調が異なることから、42層は旧表土ではなく盛土の一部と判断した。したがって、上段を構築する際には、事前に表土の除去を伴う整地が行われた可能性が高い。工程Iは37~42層が相当し、にぶい黄褐色土や灰黄色シルト土(A)などの土が使用されている。この工程Iは、T9において前方部上段の基底を造成した工程Iに対応するものと考えられる。工程IIは32~36層が対応し、黄褐色を基調とする土(B)で、工程Iを覆うように盛り上げられている。T9の116層に対応するものと考えられる。工程IIIは26~31層が該当し、工程IIの墳丘



第33図 T3出土遺物(1/4)

側を盛り上げており、T9の工程Ⅲに対応するものと考えられる。このように、T3では傾斜角度約20度で長さ4m、高さ2mほどの上段盛土を検出したが、この上段盛土は、T5でみられた上段盛土、いわゆる互層状の盛土とは異なっている。むしろ、先述したように、T5の上段盛土は、T4やT9と同様に、前方部前面の下段上面にあらかじめ構築された土手状盛土に相当すると推測できる。

前方部北西側の丘陵は、近年まで果樹園として利用されていた。0.2～0.3mほどの深さで棕色を基調とする地山を検出した。丁寧に遺構の検出を試みたが、遺構、遺物は確認できなかった。

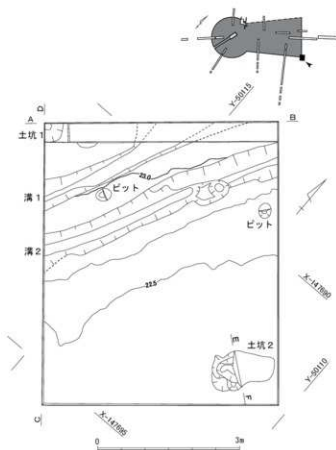
T3では墳丘盛土から遺物は出土していないが、墳丘上の流土及び堀切状の切断痕跡の埋土中から遺物が出土した。17は須恵器甕の体部の小片である。R7～R9は瓦である。いずれも小片で、凸面に縄目印き、凹面に布目痕跡を残すものがある。備中国分寺等で使用された瓦である。

T11はT3の北東側に設定したトレンチである。調査区内の地山の大部分は地盤改良に伴う攪乱を受けており、元の地山面が検出できたのは調査区南西半部の標高25.5m付近の僅かな範囲であった。T3では墳丘テラスに相当する標高26m付近から地山が検出されていることから、元の根根と墳丘下段の地山の高さは元々同程度であったことが推測できる。T11では、ビット1基を検出したが、出土遺物はなく時期も不明である。

調査区内の表土や表土直下から近世以降の瓦や陶磁器の破片が出土しているが、古墳に関連する遺物は確認できなかった。

(金田)

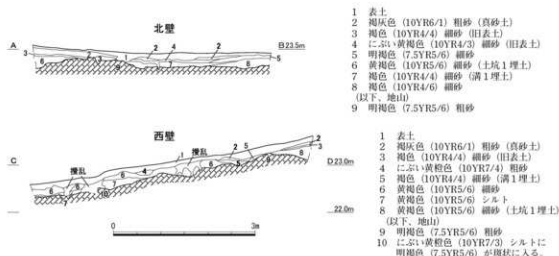
T12 (第34～37図、図版12-3)



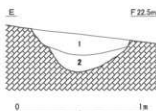
第34図 T12平面図 (1/80)

前方部南東の隅角に設定したトレンチである。前方部東隅部の確認を目的に調査したが、調査の結果、古墳に関連する地形や土層は確認できなかった。

調査区北西では平行に走る溝を2条検出した。西側の溝(溝1)は幅0.6m程度、検出面からの深さ約0.2mの溝で、近現代の遺物を含む包含層を切っていることから、掘削時期は比較的新しい。東側の溝(溝2)は溝1よりも幅がやや広く幅0.7m、検出面からの深さ0.1m程度を測る。西側の溝(溝1)より古いと考えられるが、埋土は近現代の遺物を含む包含層と同質であり、近世をさかのぼる可能性は低い。調査区東隅と西隅では土坑を2基検出した。いずれも出土遺物はなく時期は不明である。ビットは溝の周辺で2基検出した。いずれも浅く、西側のビットでは埋土直上から近現代の陶磁器の破片が出土していることから、新しい時代のものと考えられる。なお、地山は、



第35図 T12断面図 (1/80)



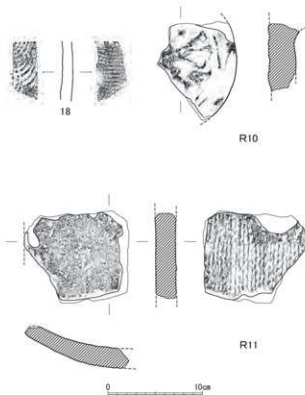
- 1 褐色 (10YR4/6) 細砂
2 にぶい橙色 (2.5YR6/3) 細砂と明赤褐色 (5YR5/6) が混ざる。

第36図 T12土坑2断面図 (1/30)

上半部は花崗岩が風化した明褐色土で、下半部はにぶい黄橙色土や明褐色土を含むシルトであった。

このように、T12では地山の直上に近現代の遺物を含む包含層(北壁8層、西壁6層)が堆積していることから、調査区全体にわたって後世の削平を受けており、おそらくは地山を削り出して造られていた前方形隅部は消失している可能性が高い。ただ、地山は調査区の西隅で高くなっており、そうした地形が古墳の隅角の名残である可能性は指摘できる。

T12からは古墳と周辺の国分寺・国分尼寺に関連すると考えられる遺物が出土している。R18は須恵器の甕の破片である。R10は軒丸瓦で、瓦当面の剥離が激しいが、平縁の周縁や圏線、間弁の一部が観察できる。瓦当面の復元径は約16cmで、厚さは3.0cmと比較的厚い。国分寺の軒丸瓦第1類の可能性が考えられる。R11は平瓦の破片である。遺物はいずれも表土からの出土である。(藤井)



第37図 T12出土遺物 (1/4)

第2節 横穴式石室の調査

1 横穴式石室の調査概要

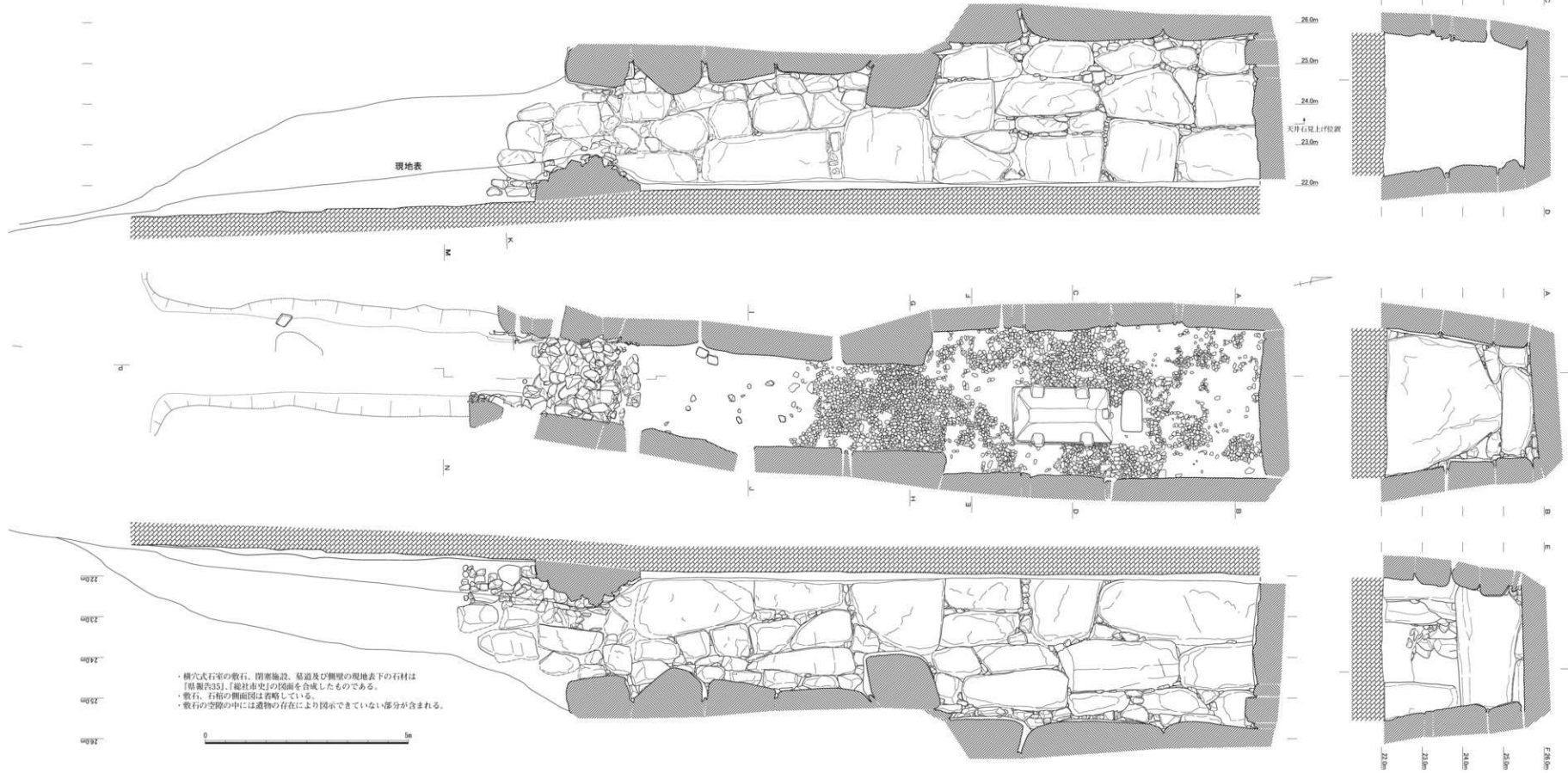
こうもり塚古墳では、昭和42年の岡山大学・岡山理科大学の調査により主に玄室の、昭和53年度の岡山県教育委員会による調査で羨道と墓道の発掘調査が行われた。その結果、閉塞施設等の一部を残し、横穴式石室のほぼ全体の構造が明らかになった。石室の実測図はそれまでも公表されているものがあつたが、この昭和42年と昭和53年度の調査成果を反映した『岡山県史』及び『総社市史』の実測図が最新のものとなっていた。このたび、史跡こうもり塚古墳保存活用総合調査にあわせ、現状の石室の三次元計測を行い実測図を再作成した(第38・39図)。ただし、三次元計測に当たり、石室の敷石や墓道のように、発掘調査後、埋め戻されていたり、経年により土砂が堆積していたりして計測できなかった箇所がある。そのため、このように計測不可能であった部分については、『県報告35』や『総社市史』等に掲載された図を引用している。(金田)

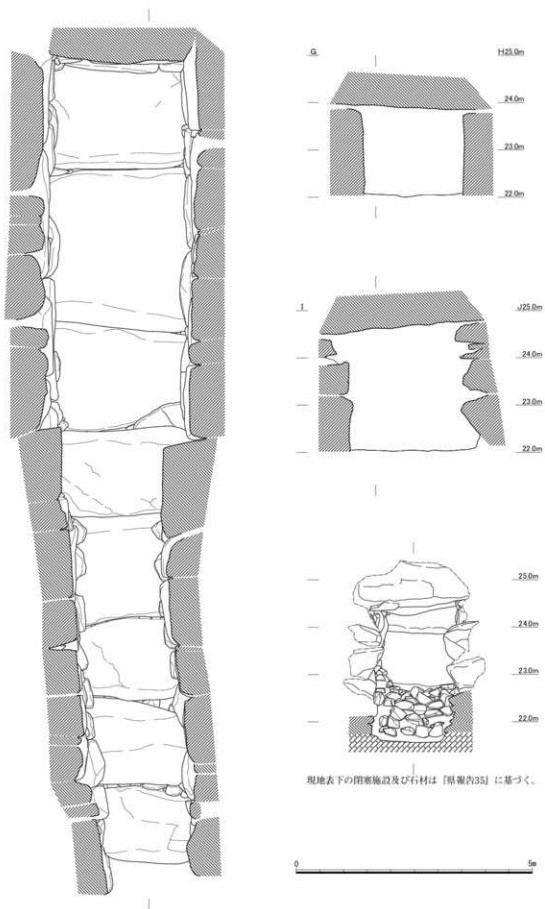
2 横穴式石室の構造

こうもり塚古墳の後円部に位置する横穴式石室は、羨道が玄室中央に取り付く両袖式石室で南側に開口している(巻頭図版1、図版16・17)。石室の主軸はN-12度-Eで、墳丘の主軸に対しては31度南に振れている。石室の全長は奥壁から墓道右側壁(東壁)の石材までで19.9m、奥壁から羨道天井石までで17.1mを測る。玄室長は左側壁(西壁)で8.1m、右側壁で7.9m、玄室奥壁幅は3.6m、玄門近くの玄室幅は3.5m、玄室奥壁の高さは3.6m、玄門近くの玄室高は3.5m、羨道長は右側壁側で12.0m、左側壁側で11.0m、羨道入口幅は1.9m、玄門幅は2.1m、玄門近くの羨道の高さは2.7mである。床面の標高は奥壁で22.1mを測る。なお、今回実施した三次元計測の結果、これまで公表されてきた測定値と石室全長や玄室長等が異なっている。

玄室の平面形は長方形で、断面は台形、天井は平天井である。石室内には家形石棺が残っている。玄室床面の幅は羨道側で0.1mほど狭くなり、高さも羨道側で0.1mほど低くなっている。奥壁基底石として高さ2.9m以上の巨石を使用しており、やや内傾するものの、ほぼ垂直に立ち、その壁面は平滑である。中央付近が赤くなっており、塗布された赤色顔料が残存していると指摘されているが、赤色部が特に石材節理面で顕著であることから自然のものである可能性も考えられる(第4章第1節)。奥壁基底石上面には幅約2.2mを測る横長の石材とその横にもう一つ石材が設置されており、天井石を支えている。

玄室両側壁にはともに大型の石材を使用しており、全体として隣どうして高さをそろえながら構築されている。左側壁は基底部に方形に近い石材を4石配置し、その上に同程度の石材を4石設置する。その上面には一回り小さい石材を並べ、全体として3～4段で壁面を構成する。石材の積み上げに当たっては、一段目で標高約23.5m、二段目で約24.8mとそれぞれの段で高さをそろえようとする意図がうかがえる。石材間には間詰石があり拳大から人頭大のものが多く、中には数cm程度と小さいものも含まれている。右側壁には、奥壁側に設置された長さ4m以上の横長石材を含め基底石に3石を配置する。羨道側の基底石は2段積み重ねることによって他の基底石と高さを標高約23.7m辺りでそろえて





第39図 横穴式石室実測図② (1/80)

いる。その上部には横長の石材を利用してさらに壁を積み上げている。奥壁側では標高約24.8mで高さを一旦そろえているが、これは左側壁の下から二段目の目地と一致する。その上にもさらに石材を積み上げ、右側壁は基本的に奥壁側3段、羨道側4段の壁面構成となっている。

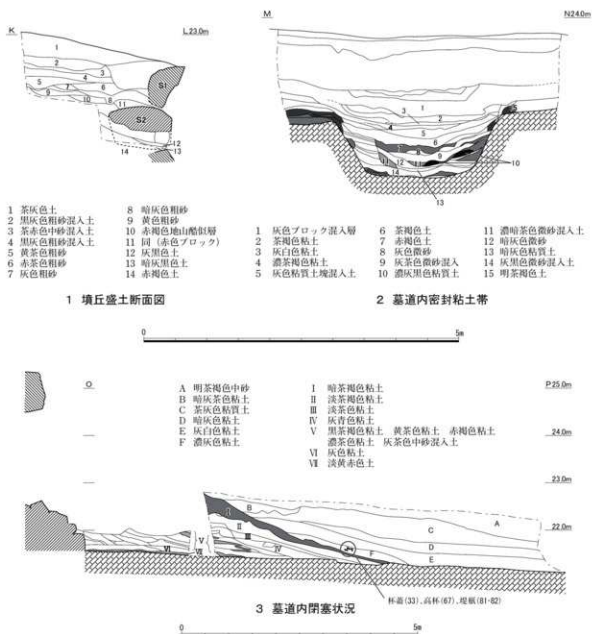
玄室の天井石は3石で、下面を標高約25.5~25.7m付近にそろえている。袖石は左右ともに1石で、左側の袖幅は0.9m、右側で0.5mを測る。袖石上には楣石が玄室の天井より1.6mほど低く、また羨道の天井よりも0.9m低く架設されている。この楣石は幅3m以上、高さ1.6m以上を測る巨大なものである。

羨道は玄門で幅2.1m、高さ1.9mを測る。羨道は中ほどから入口までの区間が屈折しており、玄室の主軸に比べ約6度ほど西に振っている。羨道入口には閉塞石が残っているため、基底部の状況は不明であるが、羨道に使用されている石材は基底石を除き、玄室石材に比べ小さいものを使用している。左右側壁は、確認できる範囲であるが、ともに基底石に横長の大型石材を2石ずつ使用する。基底石の上面は、左側は入口に向かって低く、右側は高く傾斜しており、その上に2~3段の石材を積み上げ、天井石を支える。天井には4石を架構するが、玄室よりも小さい石材を使用している。入口に向かうにつれ高さが低くなるが、天井石の下面を概ね標高24.7mでそろえている。この左側壁の入口部分では側壁の土層断面図が「累報告35」に掲載されており（第40-1図、図版20-1）、それによると石材の裏込め土は水平にいずれも堅く突き固められていたと報告されている。

石室床面では、奥壁から入口方向に向かって約11.5mの範囲に敷石が確認されている。敷石は盗掘などで部分的に欠失しているが、「総社市史」によると、地山の花崗岩質土壌の上に径5、6cmないし10cm前後の円礫がほぼ二重に敷かれていたとされる。敷石は閉塞施設から奥壁側の約4mまでの範囲には確認できず、この部分は土床であったと考えられている。床面は全体として外方に緩やかに下降している。なお、床面下に排水溝は確認されていない。

横穴式石室に使用された石材の大部分は花崗岩であった（第4章第1節）。その中で、羨門の天井石が花崗閃緑岩で、他の石材と異なっていた。これらの石材は古墳周辺に分布している。また、羨道の天井下の石材には安山岩が多用されていた。敷石の石材には流紋岩質凝灰岩が大部分を占め、ほかに流紋岩や泥岩ホルンフェルスも含まれていた。これらの敷石は、こうもり塚古墳から西に5.5kmほどの高梁川の河原で採取できる。なお、「総社市史」等には、石室の石材間は粘土で目張りされていたと記述されているが、現状でそのような痕跡を残すところは少なくなっている。また、石室内は玄室、羨道とも部分的に赤色顔料の痕跡がみられ、元は壁面全体が丹彩されていたと推測されているが、この赤色部については自然のものも含まれている可能性も考慮する必要がある。

羨道の入口には前後約2.5mにわたって石積みの閉塞施設があり、これについては、「累報告35」や「総社市史」に詳細な報告がある。これによると、閉塞施設は角礫を積み上げて造られ、石材間に粘土を詰めて厳重に石室を封じていた。閉塞施設は、石積みが5~6段ほど残り、最も高いところで1.59mを測った。元は最前部の天井石下端にまで達していたものが、盗掘の際に除かれたものと推定される。閉塞石は、床面全体を若干掘り込み地山上面に粘質の強い灰色微砂混入土を厚さ0.2mばかり敷きつけ、その上に一段目をのせていたらしい。閉塞石は小さいもので10×20cm、大きなもので40×55cmほどの角礫であった。一段6列または7列の石列を構成して、各石の間隙に灰色ないし暗褐色の粘土を詰め、同様の作業を順次繰り返して横穴式石室を完全に封じていたと考えられている。各石は無秩序に積まれたようにみえるが、石室軸線上に直交する方向を意図して積んだとしている。



第40図 横穴式石室土層断面図 (1/60・1/80) (高原編1979を基に再トレース)

この閉塞施設の前面には、墓道が約8～9m先まで続いている。「県報告35」や「総社市史」によると、墓道は地山の花崗岩風化土をU字形に掘り込んで造られていると記載されている(第40図-2、図版20-2)。墓道は浅道前端から長さ8.9m、幅(上縁)2.5～2.7m、幅(下底)1.4～2.0m、底面は外方へ約3～5度で傾斜している。石室先端より約6m付近を起点として、一見、版築層を思わせる互層状の粘土帯が確認でき、約20度の傾斜角をもって石室の方向へせりあがっている(第40図-3)。この角度で復元すると、粘土帯は閉塞施設を包括して天井石の前端にまで達していたと推定される。この閉塞に伴う土盛に接する付近(F層)で、杯蓋1(33)、高杯1(67)、提瓶2(81・82)からなる須臾器が一括して検出されている(図版20-3右)。(金田)

3 石棺

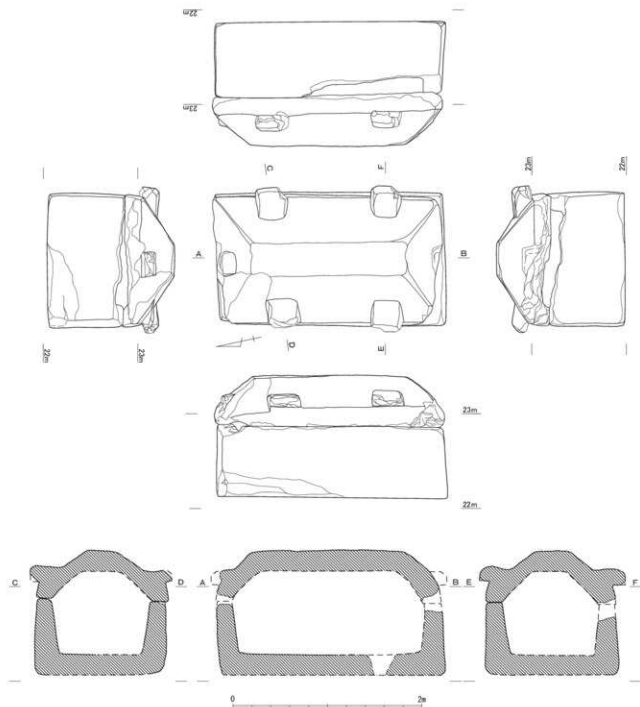
朝抜式の家形石棺で、玄室中央やや南東寄りの地点に、主軸が玄室の主軸と平行になるように置かれている（第41・42図、写真1、図版21）。玄室敷石上に設置されており、床石を敷設後に搬入されたと考えられる。奥壁までの距離3.7m、玄門までの距離1.6m、左側壁までの距離1.3m、右側壁までの距離0.7mを測る。現在は蓋と身が重ねられているが、昭和42年の発掘調査以前は蓋が西側にずれていた（図版17-1）。棺内からは遺物や人骨などは一切出土していない。蓋と身の合わせ目を中心に激しく打ち欠かれているが、全体の形状は把握でき、現状で突起を含む現存長247cm、最大幅155cm、最大高130cmを測る。使用石材は、「浪形石」と称される、岡山県井原市に産出する貝殻石灰岩である（第4章第1節）。石棺の実測図は既に「総社市史」などで公表されているが、今回の報告に当たり、フォトグラメトリを用いて石棺の三次元データを作成し（図版21-1）、実物と照合させつつ、それを基に新たな実測図を作成した（第41図）。石棺内部の断面の一部はデータの作成ができなかったため、発掘調査時の実測図や実際の計測値を基に復元し、点線で示している。

棺身は全長245cm、最大幅142cm、最大高80cmを測る。幅は南側の下端幅136cmに対し北側は129cm、長さは東側の下端239cmに対し西側は233cmとなり、南・東側に対し北・西側がやや短くなっている。高さは西側面中央で75cm、東側面で80cmと、東側面が高い。内寸は、上端で長さ204cm、幅99cmを測り、底面で長さ191cm、幅86cmを測る。長さ・幅ともに底面が10cm以上小さく、内側の断面は逆台形を呈する。深さは西側で54cm、東側で59cmである。厚さは底部で推定22~25cmを測る。側面は上に行くほど薄くなり、下端で約26cm、上端で約15~17cmを測る。なお、南から南東側はやや厚手に作られており、その厚さは上端で19cm前後となる。棺底部南側には直径30cmほどの穴が認められるが、後世の攪乱によるものである可能性が高い。

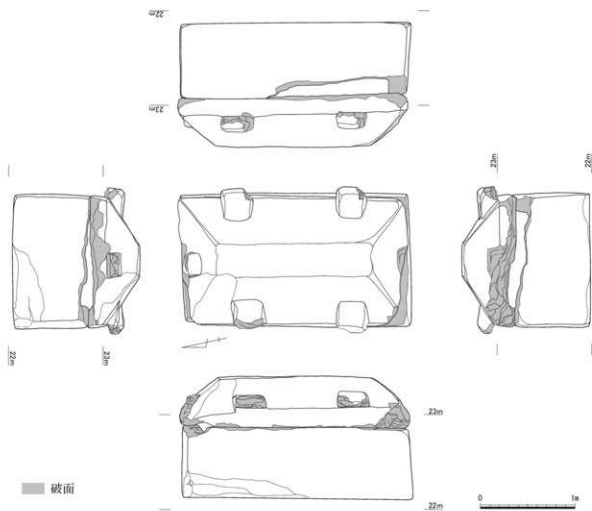
棺蓋は、突起を含む現存長243cm、最大幅155cm、最大高57cmを測る。突起を除いた大きさは長さ243cm、最大幅138cmを測る。高さは西側で55cm、東側で51cmと西側がやや高いが、これは東側が高く西側が低い身のいびつな形状と対応しており、天井部が水平になるよう工夫されている。頂部平坦面は長さ162~165cm、幅35cmで、平面指数（平坦面幅/蓋幅×100）は突起を含めない場合で25.4（突起を含めた場合で22.6）となる。全体的に角が丸く、稜線がはっきりしないが、北西側の傾斜面はそれが特に顕著で（写真1-1）、稜線を引くのが困難なほどである。当初からこのような状態であった可能性もあるが、北西の角には石室天井からの滴下で穿掘された箇所のみられる黒色の汚れが天井部から扇状に付着しており（図版21-3）、滴下による浸食の可能性も否定できない。傾斜面の角度は35~40度ほどで、垂直面も実際は下に向かって10~15度ほど開くように削り出されている。垂直面の高さは西側面で20~22cm、東側面で17~18cmほどである。北西の角は一部幅が狭くなり13~14cmほどになっているが、先述のようにこれが製作当初からなのか、浸食によるものかは不明である。内寸は、現存長198cm、幅101cm、高さ32~35cmを測り、厚さは天井部で22cmを測る。おおむね外面と平行に削り出されており、端部の厚さは15~16cmとなるが、身と同様に南から南東側はやや分厚く、20cmほどになる。

蓋の突起は、南側が失われているが、短側辺に一つずつ、長側辺に二つずつの合計6か所に配されていたと考えられる。長側辺の突起は棺の縁から6~11cmほど外側に飛び出すよう作り出されており、下端が蓋の傾斜面と垂直面の境の稜線にそろうように配置されている。短側辺と長側辺の突起は

大きさが異なっており、長側辺の突起が高さ12~18cm、幅33~35cm、長さ21~34cmを測るのに対し、短側辺の突起は高さ15cm、幅27cmであり、長側辺の突起と比べて幅が6~8cmほど狭い。断面は五角形に面取りされており(写真1-2)、上面は水平より5~15度ほど上向きの角度で蓋の傾斜面から突き出している一方、下面はほぼ水平となる場合が多い。南側の突起は後世の破壊によって失われているが、割れ面を視察すると中央の傾斜部と垂直部にかけて方形の痕跡が認められ(写真1-3)、この部分に突起が付いていたと推測できる。垂直部の稜線から割れ面上端までの高さは約13cmとやや低い、やはり垂直部の稜線に下端をそろえていた可能性が高いと考えられる。(藤井)



第41図 石棺 (1/40)



第42図 石棺破損状況 (1/40)



1 北西角 (北西から)



2 南東側長側辺突起 (北から)



3 南側短側辺突起痕 (南から)



4 北側短側辺突起 (北東から)

写真1 石棺

4 遺物出土状況

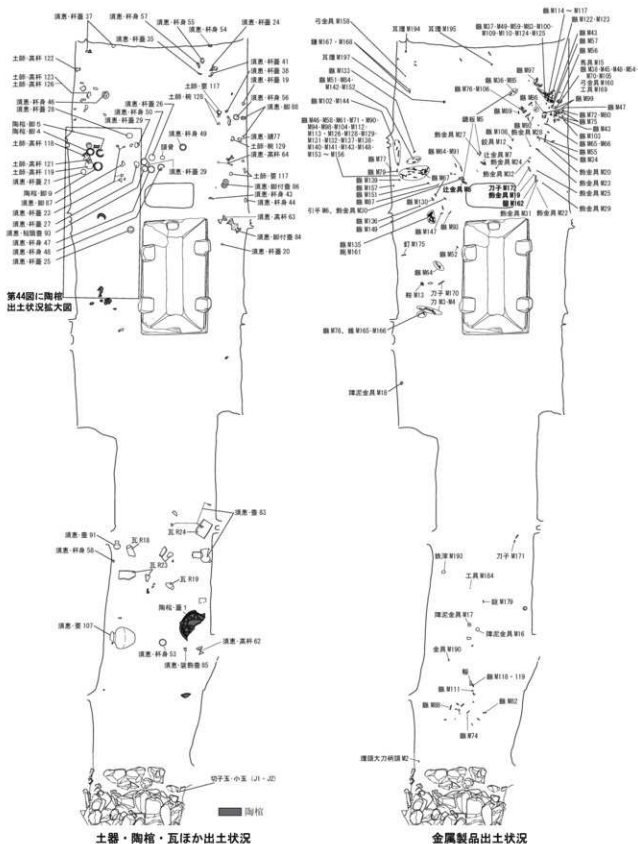
横穴式石室内は著しい盗掘を受けていた。江戸時代の文献にも詳細な年代は定かでないが、玉、刀、鏡などの副葬品が出土したことが記録されている（永山1930）。昭和42年の発掘成果を記載した『総社市史』によると、発掘時、石室内には厚さ約70cm未満の流入土が堆積しており、玄室の家形石棺の蓋は向かって左側外方にずれ動かされていて（図版17-1）、発掘が進むにつれ、床面も乱されていることが判明したとある。また、盗掘はおそらく棺内はもとより棺外についても何回となく行われたとみえるところあり、特に、床面の敷石が失われた箇所、石棺と奥壁の間及び石棺の前面においては甚だしかったという。また、石棺の北側には敷石の失われた約1×0.5mほどの攪乱坑も存在している。このように、石室内はかなりの攪乱を被っており、また、数多くの遺物が盗掘で持ち出されたことが容易に想定できる。一方、出土遺物の中には古墳時代に属さない古代以降の遺物もみられ、何らかの理由で持ち込まれたと推測できる。中でも、隣接する国分寺や国分尼寺に使用されたと推定される瓦や古代の土師器も出土していることから、こうもり塚古墳の石室は、築造後、数世紀を経た古代には既に開口し、再利用あるいは盗掘がなされていた可能性が高い。この盗掘等を受けた時期について、『総社市史』には、石室内の瓦が被熱していることから、備中国分寺の倒壊後である可能性を指摘する。また、平安時代の土師器の出土をもって、この時期に石室が再利用されたとする説もある（武田1991）。

このように、『総社市史』にも記述されているように、石室内は、石棺以外に原位置を保っていると考えられる遺物は皆無に近いといえる。しかし、厳密に副葬位置が特定できなくても、特定の遺物が集中していれば、遺物が副葬されたおおよかな位置を推測する手掛かりにはなるであろう。以下、このような観点を踏まえ、石室内で出土した遺物の出土状況を示す（第43・44図）。

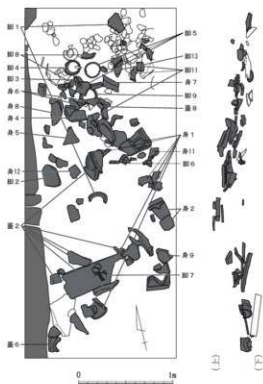
陶棺は、玄室北西部からまとも出土しているほか、羨道からも蓋1を含め破片が出土している（図版19-3）。蓋身とも攪乱により激しく損壊しており、また、失われた破片も多く、回収できた破片は全体の半分以下である。破片の量及びその特徴から、陶棺は一個体のみであったと考えられる。原位置を保つと考えられる破片はほとんどないが、脚4・脚5・脚9はL字に並んだ状態で発見されており（図版18-3）、その間隔は身1で確認された脚の行間・列間とほぼ同じであることから、陶棺の原位置から近い位置を保っている可能性がある。この陶棺が埋葬時の位置から大きく動かされていないと仮定するならば、陶棺は石棺よりも奥に安置されていたことになる。

その他の棺痕跡については、羨道部分も含めて確認できていない。なお、『県報告35』等には石室内で釘や鋸が多数検出されていることから、腐朽した木棺の存在を想定する記述があるが、後述のとおり、鉄釘使用木棺を特定できるほど良好な鉄釘や鋸が確認できていない現状では、鉄釘使用木棺の存在には慎重にならざるを得ない。

土器は、玄室北半、羨道、墓道の3か所でまとも出土している（図版18・19）。玄室北半では、右側壁沿い、奥壁沿い、石棺北西側の3か所に遺物のまとまりがある。右側壁沿いには比較的口径の大きい蓋杯（19・20、43・44）や、高杯（63、64）、甕（77）、脚付壺（84、86）などが出土している。奥壁沿いには口径の小さい蓋杯の一群（35・37、54・55・57）がみられる。石棺北西側には天井部若しくは底部にヘラ記号を持つ蓋杯の一群（26～29、46～50）がまとまっているほか、短頸壺（93）や脚付壺の脚部（87）、土師器の高杯（118、119、121）などが出土する。先述のように、玄室内は激しい攪乱を受けていると想定されるが、特に蓋杯については同じ特徴を持つものがまとまって



第43図 横穴式石室遺物出土状況 (1/80)



第44図 横穴式石室遺物出土状況(拡大) (1/40)

とから同一個体の可能性がある。馬具は石室内に広く散在する。玄室北半では鏡板(M5)、引手(M6)、辻金具(M7、M8)が、鞍金具や障泥金具はいずれも石棺付近から羨道にかけて出土した。特に鏡板は玄室北半を中心に破片で3か所に分かれて出土した。半球形飾金具(M19、M20、M22~25、M27~29)は主に石棺北東角から約1mほど北の右側壁寄りでも多く出土した。鉄鎌は主に玄室北半の左側壁及び右側壁際、また、羨道で出土している。長頸鎌は石室内各所でみられるが、その中でも特に玄室北半の右側壁際でも多く出土している。出土点数の少なかった平根鎌(M126、M128、M129、M131、M132、M137)は、石室北半の左側壁際でも多く出土した。同じく、この左側壁際ではいわゆる「鉛筆のキャップ形」の鉄鎌(M138~141、M143、M147~149、M151、M153~157)がまとまって検出されている。農具も玄室内に散在している。鉄鎌(M167・M168)は玄室北西隅で、鉈(M161)や刀子(M170)は石棺西側で出土している。鉄釘は石棺西側にM175が出土するが単独の出土である。その他の鉄釘は羨道で出土するが、原位置を保つものはない。鉄滓(M193)は羨道の敷石の境目付近の床面上で出土している。耳環のうち3点(M194、M195、M197)については出土位置の記載があるが、いずれも奥壁付近に散在している。そのほか、切子玉(J1)が閉塞石上で検出されており、その中からガラス小玉(J2)がみつかった。

瓦は玄室から出土した数点を除き、いずれも羨道からまとまって出土している(R18、R19、R23、R24)。

なお、被葬者を推定するものとして、石棺から奥壁に向かって約1.4mの場所に頭骨片が残されていた。しかし、骨の残存状況は良くなく、詳細な情報は不明である。(金田・藤井)

出土している傾向が確認できる。

羨道では、敷石のある範囲において広口壺(83)、直口壺(91)と、最も新しいと考えられる須恵器杯身(58)が出土している。敷石の範囲外では、須恵器甕(107)、杯身(53)、装飾須恵器の子器(85)、長脚一段透しの高杯(62)が横並びで出土しているが、これらがどこまで原位置を保っているかは不明である。

墓道からは、先述のように閉塞土盛に接する付近(F層)で、杯蓋(33)、高杯(67)、提瓶(81・82)が一括で検出されている(図版20-3右)。

このほか、墓道流土中からは、杯蓋(34・40)、杯身(45、52)、蓋(61)高杯(66、69、70)、甕(74、79)、壺(89、92)、器台(95~105)、甕(106、108~111)が出土している。

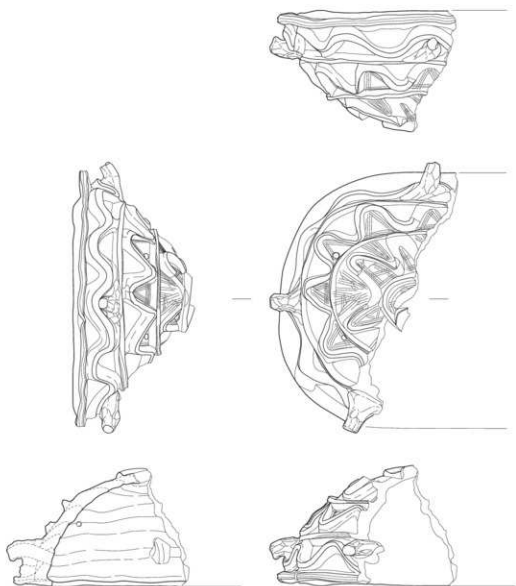
金属製品としては、羨道左側壁に密着し床面から約1mほど高い位置で、頭環大刀柄頭(M2)が出土している。大刀(M3、M4)は石棺と左側壁の間の玄門寄りでも出土した。近接していること

5 横穴式石室からの出土遺物

陶棺 (第45～51図、写真2～4、図版22～25)

蓋1は、蓋の小口側の破片で、残存長49.5cm、残存幅71.5cm、残存高32.2cmを測る。色調は内外面ともに橙色(2.5YR7/8)を呈する。横方向の突帯によって上・中・下段の3段に区画されており、各段には波状突帯が平行に貼り付けられている。上段で一部波状突帯が平行にならない箇所があるが、これは蛇行の間隔が狭くなりすぎないように調整した結果と思われる。中段の波状突帯凹部と上段には櫛状工具による文様が描かれており、突帯と文様の順序は、横突帯→波状突帯→文様の順となる。中段の小口側には、直径1.5cmほどの孔が2か所に開けられているが、その意図は不明である(写真2)。下段には鉤状の突起が付いている。突起は先端部に円形の平坦面が認められ、その直径は3.0～3.5cmを測る。蓋の裏面には、幅3～5cmほどの間隔で粘土接合痕が認められる。断面を観察すると、まず横幅10cm、厚さ1～2cm程度の幅広粘土帯を据え、その上から縦幅5cm、厚さ3～4cmほどの粘土を断面が山形になるよう積み重ね、ドーム状に成形していることが確認できる(第6章第4節)。調整は、外面は丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げられており、内面もナデ調整が行われているが、先述のように粘土の接合痕が明瞭に残っており、外面より雑な仕上げである。焼成は良好で、黒斑等は認められない。蓋2は現在石膏で完形に復元されているが、実際に遺存しているのは側面と隅角の一部のみである。蓋1で述べた基本的な構造に加えて、頂部にトサカ状に張り出した飾り板が設けられている点の特徴である。色調は内外面ともに赤褐色(2.5YR4/6)を呈し、蓋1と比べてかなり赤みが強い印象を受ける。文様は、頂部の飾り板のほか、上・中段の波状突帯凹凸部や下段の一部にも施されている。文様の意匠は両側面で異なっており、施文原体やタッチにも微妙な違いが認められる(写真3)。下段小口側の破片と側面の中段には、直径5～7cmほどの孔が認められ、現在、この孔には石膏で突起が復元されている。しかし、突起の装着位置が明らかな破片では全て下段の波状突帯凹部に付けられており、下段の孔は突起の差し込み孔と考えると問題ないが、中段の孔は突起の差し込み孔とは断定できず、その用途は不明である。裏面には、粘土の接合痕が3～4cm程度の間隔で平行に認められる。接合痕は天井付近まで及んでおり、蓋1と同様に粘土紐の積み上げによって製作されたことが分かる。内外面の調整は、蓋1と同様、外面は丁寧なナデ調整が行われる一方、内面はやや雑である。蓋3～6は蓋の側面の破片である。蓋4は色調や文様の特徴から蓋2の図上側の面に対応する可能性が高い。蓋5は突帯凹部に孔があり、突起の差し込み孔とすれば蓋2の図下側の面に対応する可能性がある。蓋6は端面から中段にかけての破片で、突起が付けられている。色調や文様の特徴から蓋2の図上側の面に対応する可能性が高く、下端面には黒斑が認められる。蓋7・8は突起の破片である。色調から、蓋7は蓋2、蓋8は蓋1に対応する可能性が高い。なお、蓋どうしの合わせ目の破片は出土しておらず、蓋どうしがどのような方法であわせられていたかについては不明で、蓋の全長を推定できるような破片も出土していない。

身1は身の中央切断部の破片である。現在、身2及び脚4・9と石膏で復元されているが、実際に接合するのは中央切断部の片側側面から二列目の脚にかけてのみである。身の高さは51.5cm、底面から側面上端までの高さは32.5cm、厚さは側面で3.0～4.0cm、底部は側面よりやや薄く、2.5cmを測る。側面の立ち上がりは直線的ではなく、中ほどで若干内傾気味になった後、上端に向かって緩やかに外反している。側面の外面は、平行に貼り付けられた3本の横突帯によって2段に区画されており、横



蓋1

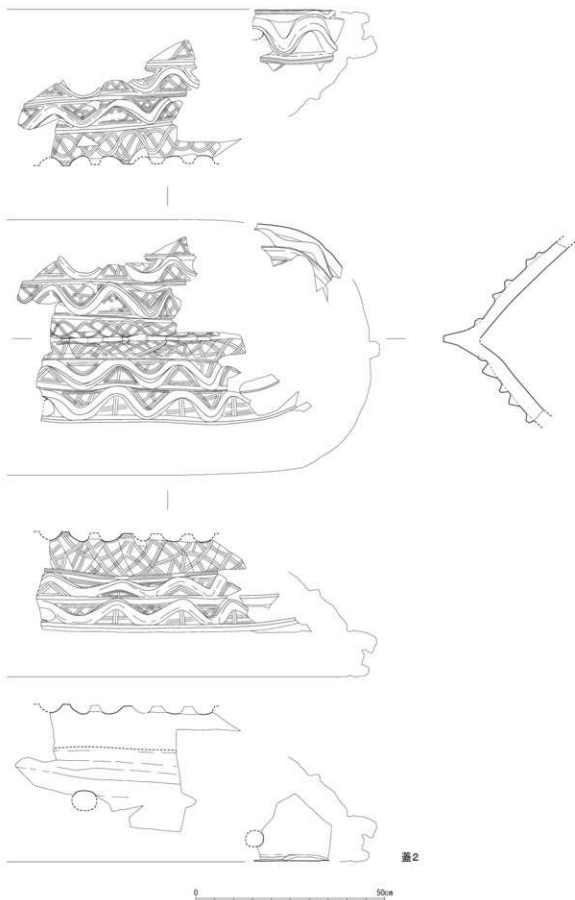


第45図 出土遺物(陶棺①)(1/10)

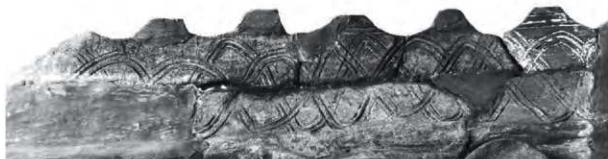
突帯の間は縦突帯が互い違いになるように貼り付けられていた痕が残る。突帯の貼り付け順序は横→縦である。切断部は平滑で、まず身全体を一体で製作した後、中央をヘラ状工具で一気に切断している。断面を観察すると、側面は縦幅10cmほどの粘土帯を外傾接合によって3段に積み重ねた後、口縁端部のみ幅3cmほどの粘土帯を接合していることが分かる。側面の調整は、外面は丁寧なナデ調整のほか、部分的にハ



写真2 陶棺①



第46図 出土遺物(陶棺②)(1/10)



1 蓋2 文様 (飾り板 (図上面))



2 蓋2 文様 (飾り板 (図下面))



3 蓋2 文様 (波状突帯凸部 (図上面))

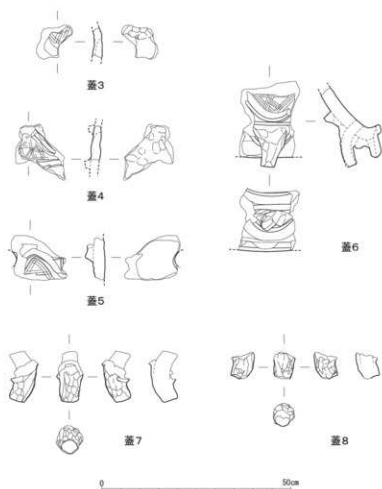


4 蓋2 文様 (波状突帯凸部 (図下面))

写真3 陶棺②

ケメが認められる。内面は外面より雑で、ナデの単位や粘土接合痕が線状に認められる。底部の調整は、内面は丁寧なナデ調整によって製作の痕跡がほとんど消されている一方、外面（裏面）には横方向の強いナデによる凹凸が明瞭に残っている。底部にはこのほか、脚に対応する位置に直径1.5cmほどの孔が認められる。孔は上から穿たれており、底部を貫通している。孔は他の脚の破片でも確認されており、全ての脚に開けられていたと考えられる。その用途や目的は不明であるが、全ての脚に開けられていることを考えると、焼成時の脚内部への火の回りを考慮した可能性が考えられる。脚は、先述のように2列目が接合する。円筒形で、下端部の直径と高さはともに16.5cm、厚さは1.3～2.0cmを測る。円筒のほぼ中央に幅2.0cm、高さ0.5cmの突帯が貼り付けられているほか、突帯直下には直径3.0cmの透かし孔が2か所に開けられており、全体として埴輪を思わせる作りである。透かし孔は突帯貼り付け後に穿たれており、その向きは陶棺の主軸から約45度斜行している。脚の外面は丁寧なナデ調整で仕上げられる一方、内面は粘土接合痕が明瞭に認められ、幅4.0～5.5cm程度の粘土帯を輪状に

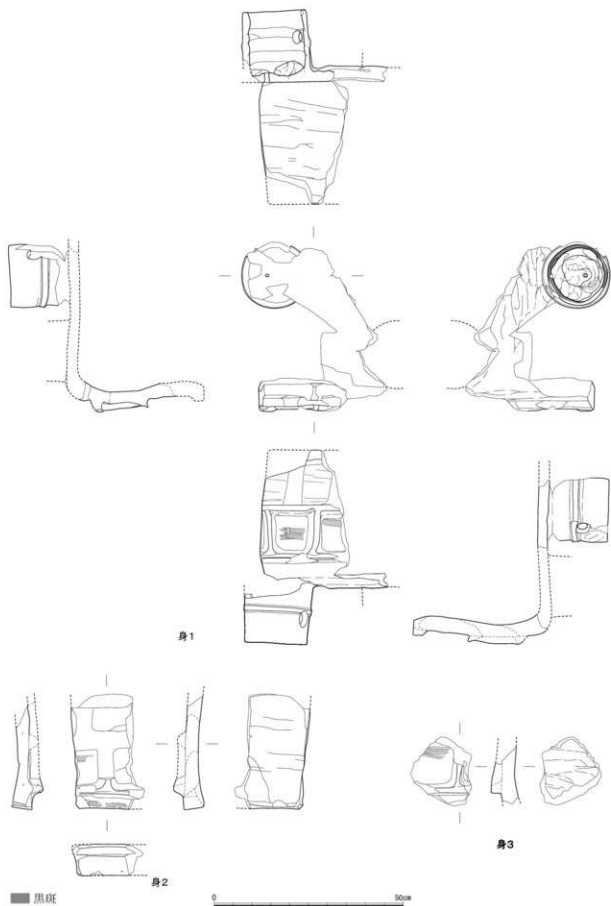
作り、これを土台としてその上に幅2.5～3.5cmの粘土紐を内傾接合で積み重ねながら成形していることが分かる(写真4-1)。脚内部の底面側には、中央に幅3.5cmほどの粘土紐を渦巻き状にした直径8cmほどの粘土塊と、それを輪状に取り囲む幅3.5cmほどの粘土紐が認められた。輪状の粘土紐には指頭圧痕が多く残っており、これらは陶棺の底部を成形するための工夫であると考えられる(第6章第4節)。脚端部にはほぼ全周に黒斑が認められ、焼成は正立状態で行われた可能性が高い。なお、身底部側面側には他の脚を接合した痕と考えられる僅かな粘土の盛り上がり認められ、ここから脚の行間が約14cm、列間が約4cm



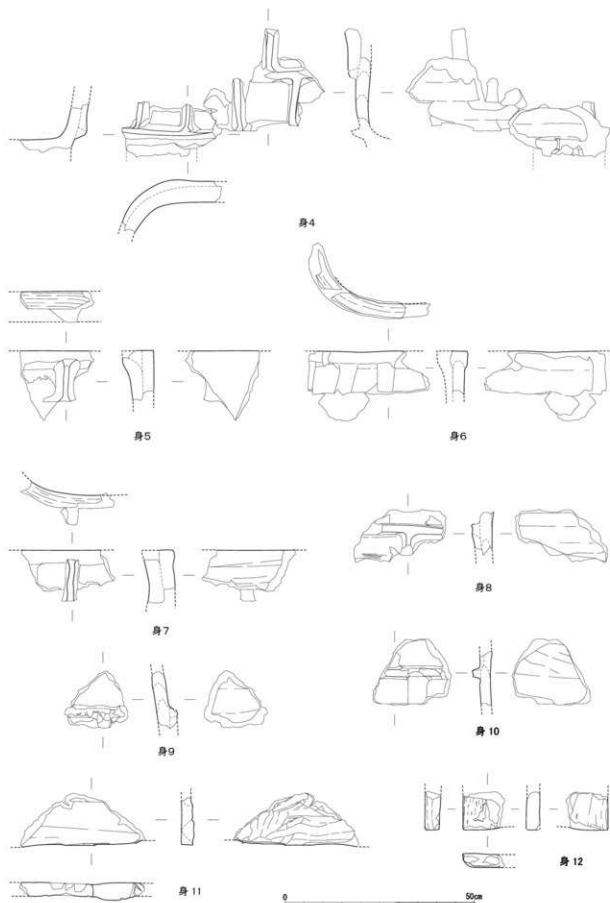
第47図 出土遺物(陶棺③)(1/10)

だったことが分かる。ほかに脚の行間を推定できる破片は出土していない。身2も身の切断部の破片である。現在、身1と一体に復元されているが、接合箇所はなく独立した破片である。横方向の切断面が認められ、現在はその部分を上端として復元されているが、突帯の貼り付け位置から考えると実際は天地逆である。切断面には、側面を縦に切断した後、底部付近で方向を変え、横方向に切断した痕が残る。外面には一部にハケメが認められ、内面には粘土接合痕が残る。身3は身2と色調が類似しており、近い部位の破片である可能性が高い。身4は身の隅角部の破片である。突帯は側面と同じく、縦突帯を互い違いに貼り付けている。身5～7は身上端部の破片である。いずれも身1と同じく上端部に突帯を貼り付けており、上端面にはナデによる擦痕が認められる。身8～10は突帯が認められる身の破片で、詳細な部位は不明である。身11・12は身中央の切断面を残す底部の破片である。身11は長さ13.5cm、幅33.0cmを測り、内面には丁寧なナデ調整と、一部に粘土接合痕が認められ、外面には指で強くなてたような凹凸が明瞭に認められる。比較的大きな底部の破片であるが、脚を接合した痕跡は認められない。身12は切断部の底部隅角の破片である。内面に幅約5cmの切断痕跡が認められ(写真4-2)、身2下端の切断面と対応している可能性が高い。

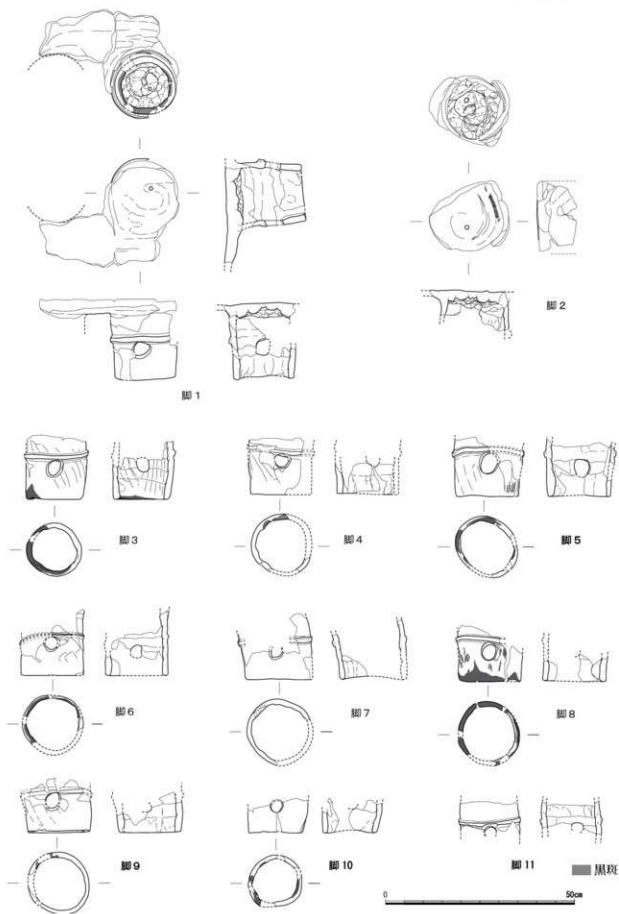
第50図は脚の破片で、基本的な作りや調整は身1の脚と同一である。脚1は身底部から脚部にかけての破片で、底部外面(裏面)には隣の脚の接合痕と考えられる粘土の盛り上がり確認できる。透かし孔は、推定される身の中軸線に平行する。脚2も身底部から脚部にかけての破片で、身底部外面



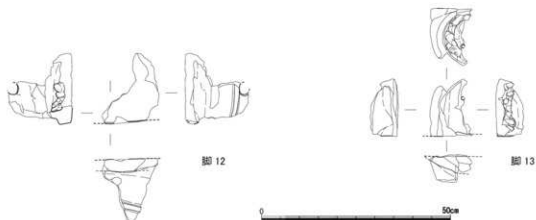
第48図 出土遺物(陶棺④)(1/10)



第49図 出土遺物(陶棺⑤)(1/10)



第50図 出土遺物（陶棺⑥）（1/10）



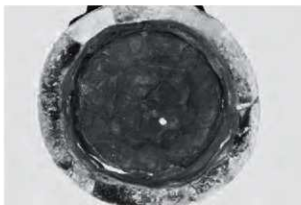
第51図 出土遺物(陶棺⑦)(1/10)



1 脚内面粘土接合痕跡(身1脚部)



2 身底部の切断痕(身12)(俯瞰)



3 脚内面底部側の状況(脚1)



4 脚外面のハケメ(脚8)

写真4 陶棺③

(裏面)には一部にハケメと、渦巻き状の粘土の盛り上がりが見られる。脚3～11は底部と接合しない脚の破片である。脚3の内面では、幅3～4cmの粘土帯を螺旋状に巻き上げている様子が確認できる。脚4・9は身1の破片と石膏でつながれている脚で、脚4が切断面側から見て左側、脚9が右側に当たる。脚5・8の外面には部分的にハケメが認められる(写真4-4)。脚12・13は底部の中央切断面を残す破片で、身11に対してかなり脚に近い場所を切断していることが分かる。脚12の透かし孔は推定される身の中軸線に対して直交している。(藤井)

須惠器（第52～59図、図版26～29）

19～42は杯蓋である。19、20は口径15cmを超える比較的大型の杯蓋で、19の内面には当て具痕が認められる。22～24は灰白～黄灰色を呈する一群で、天井部のヘラケズリがやや粗雑である。25～29は色調や胎土、器形の特徴が類似する一群で、口径は13.2～14.1cm、器高は4.0～4.9cmを測り、天井部外面に「一」のヘラ記号が入るものが多い。29の口唇部には刻み目が認められる。30、31は内外面が黒に近い灰色、断面が灰赤色を呈し、胎土に砂粒をほとんど含まない特徴を持つ一群で、30の天井部には「一」のヘラ記号が、31の口唇部には刻み目が施されている。32は所在を確認できていないが、残されている実測図にある「黒灰色」「赤紫褐色の緻密な胎土」との記載から30、31と同じグループである可能性が高い。33は口径13.9cm、器高4.3cmを測るが、天井部が未調整で、やや新しい様相を示す。34～42は口径9.8～10.6cm、器高2.8～3.3cmと小型で、胎土に1～2mm前後の砂粒を多く含むという特徴を有する一群である。天井部にはヘラケズリが施され、強いナデにより肩に明確な段を有するものがある。

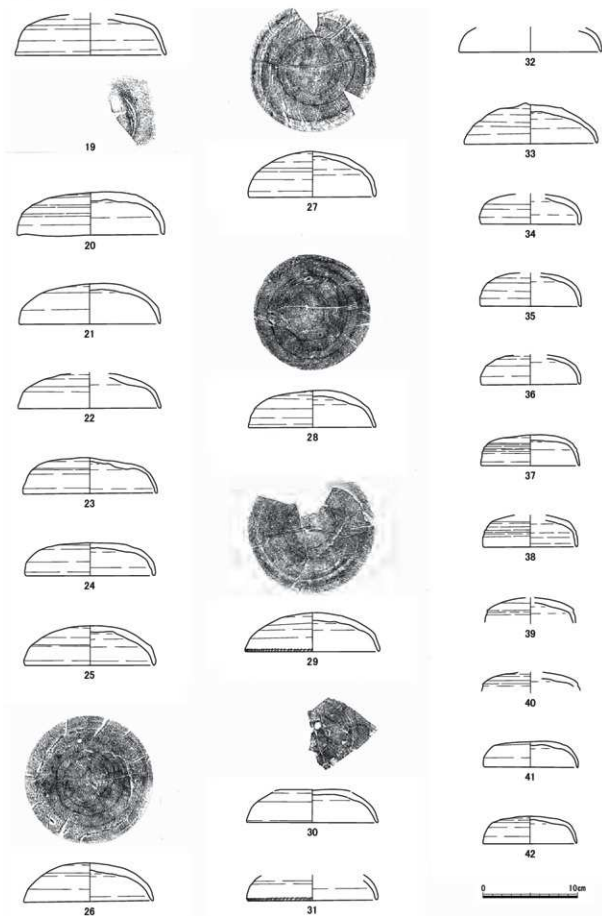
43～58は杯身である。43、44は口径14.0～14.1cmを測る比較的大型の杯身で、接合はしないが同一個体の可能性もある。46は特徴的な灰白色を呈する。47～50は色調や胎土、器形の特徴が類似する一群で、口径は11.1～11.8cm、器高は4.0～4.2cmを測り、「一」のヘラ記号が入るものが多い。51、52は内外面が黒に近い灰色を呈し、胎土に砂粒をほとんど含まない特徴を持つ一群である。53は口径12.3cm、器高4.1cmを測るが、底部には明瞭なヘラケズリ痕がみられない。54～57は口径8.3～9.0cm、器高3.1～3.7cmと小型で、胎土に1～2mm前後の砂粒が多いという特徴を有する一群で、底部にはヘラケズリが施される。58は大きさが先の一群体に似ているが、胎土が緻密で、口縁部の立ち上がりが高く、底部が未調整である点に違いがある。

59～61は蓋である。59、60はどちらも天井部に櫛描き連続刺突文が施されている。59は特徴的な褐灰色を呈する。61は壺の蓋と考えられ、天井部には櫛描き連続刺突文が観察できる。

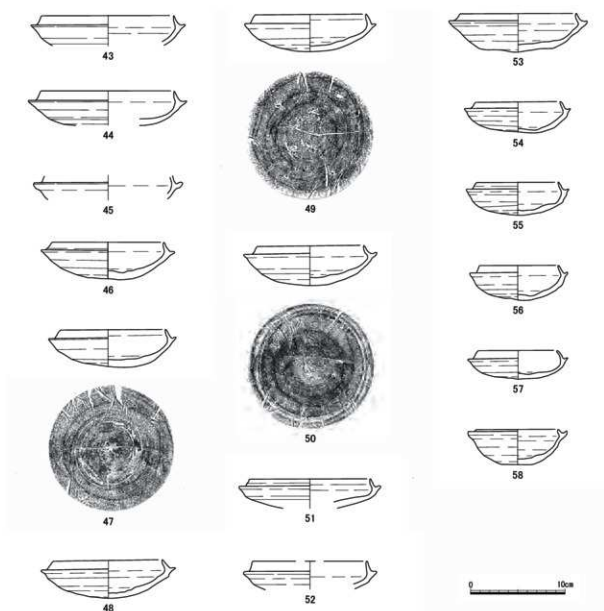
62～73は高杯である。62は長脚一段三方透かしの高杯で、杯部に櫛描き連続刺突文、脚部やや下寄りの位置に2条の凹線と、その上下に櫛描き波状文が施される。63は透かし孔のない長脚高杯で、杯部に櫛描き連続刺突文、脚部中央には2条の凹線とカキメがみられる。64は長脚二段三方透かしの高杯で、明瞭な稜と連続斜線文が杯部に施される。65は杯部の破片で、赤褐色を呈し、2条の凹線と連続刺突文がみられる。66は杯底部の破片で、連続刺突文が施される。67は杯底部から脚部にかけての破片で、文様や透かし孔は認められない。68は脚部の破片で、二段三方透かしと想定される。69～73は脚下端部の破片である。73は小型で明褐色を呈し、他の脚部片とは特徴が異なっている。

74～80は壺である。74は色調や胎土、文様などが共通する二つの破片で、同一個体と判断できる。口縁部から頸部にかけて縦位の連続沈線文が施されており、体部には凹線と連続刺突文が認められる。75は口縁部から頸部にかけての破片で、頸部には櫛描き波状文が施されている。76は体部の破片で、凹線で区画された位置に2列の連続刺突文が認められるほか、底部外面にはヘラケズリが施されている。75、76はどちらも暗赤灰～赤灰色の特徴的な色調を呈する。77～79は口縁部から頸部にかけての破片である。77、78には櫛描き波状文が、79には縦位の連続沈線文が施されている。78は特徴的な赤灰色を呈する。80は口縁部の破片で、縦位でやや幅広い連続沈線文がみられる。

81、82は提瓶である。81は体部片で外面に不明瞭であるがカキメとヘラケズリが施される。82は口縁部から体部にかけての破片で、肩に小型の鉤状突起があるほか、ヘラケズリがみられる。

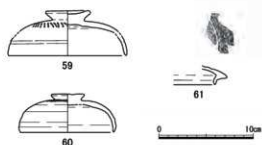


第52図 出土遺物（須恵器①）（1/4）



第53図 出土遺物（須恵器②）（1/4）

83~94は壺である。83は広口壺で、頸部には凹線で区画された各段に櫛描き波状文がみられる。体部は連続斜線文が施されるほか、櫛描き波状文の痕跡も僅かに認められる。体部下半にはカキメが、底部にはヘラケズリが施されている。84は脚付広口壺で、頸部には櫛描き波状文と2条の凹線が施され、下半にはカキメが認められる。体部下半にもカキメが認められるが、部分的にケズリなどで掻き消されている。脚部は三方透かしで、色調は灰赤色を呈する。85は子持壺の子器と考えられる破片で、赤褐色を呈する。86は脚付直口壺で、体部下半にはヘラケズリが施されている。焼成が悪く、全体に灰白色を呈する。87~90は壺の脚部と考えられる破片である。87~89はいずれも三方向の透かし孔を有す

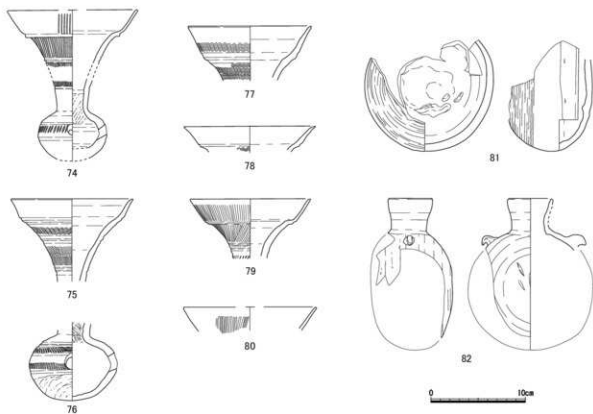


第54図 出土遺物（須恵器③）（1/4）

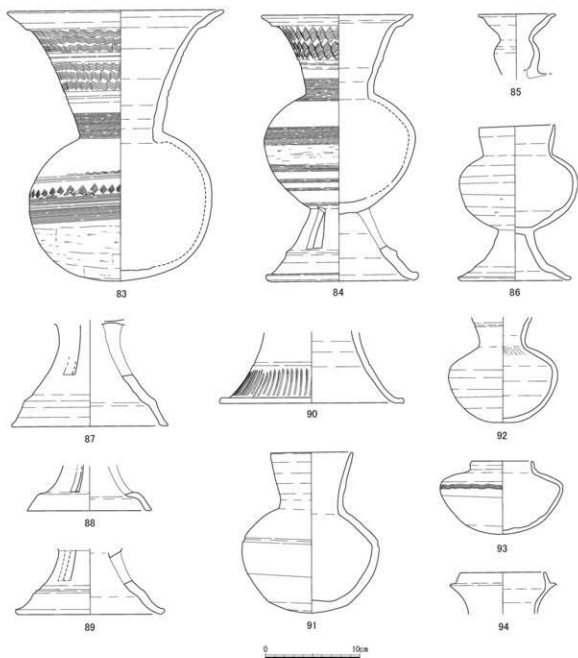
87~90は壺の脚部と考えられる破片である。87~89はいずれも三方向の透かし孔を有す



第55図 出土遺物（須恵器④）（1/4）



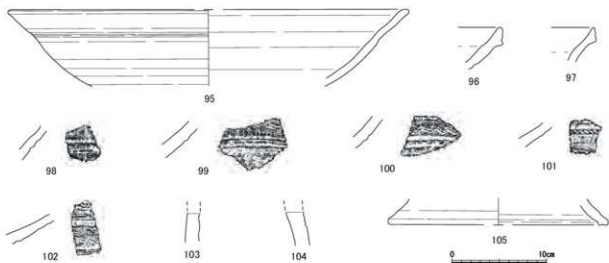
第56図 出土遺物（須恵器⑤）（1/4）



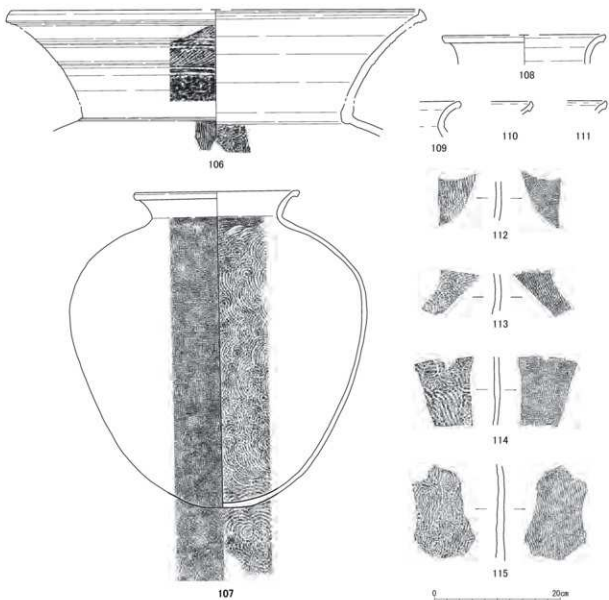
第57図 出土遺物（須恵器⑥）（1/4）

る。90は形状から高杯の脚にも考えられたが、底径が19.4cmと大型であることから脚付壺の脚部と判断した。縦位の櫛描き直線文が施されている。91は直口壺で、体部には1条の凹線のほか、下半にはヘラケズリが施される。92は『県報告35』で疑と報告されていたが直口壺と判断した。頸部に1条の凹線のほか、体部下半にはヘラケズリが施されている。93は短頸壺で、櫛描き波状文のほか、体部下半にはヘラケズリがみられる。94は有蓋壺の口縁部と考えられる破片で、特徴的な褐色を呈する。

95～105は器台である。95は口縁部の破片で、特徴的な紫灰色を呈し、外面に2条の凹線のほか不明瞭なカキメとヘラケズリが施される。96・97も口縁部の破片で、端部に1条の凹線がみられる。98～102は器台受部の破片である。98～101は未確認のため、詳細は不明であるが、凹線や櫛描き波状



第58図 出土遺物（須恵器⑦）(1/4)



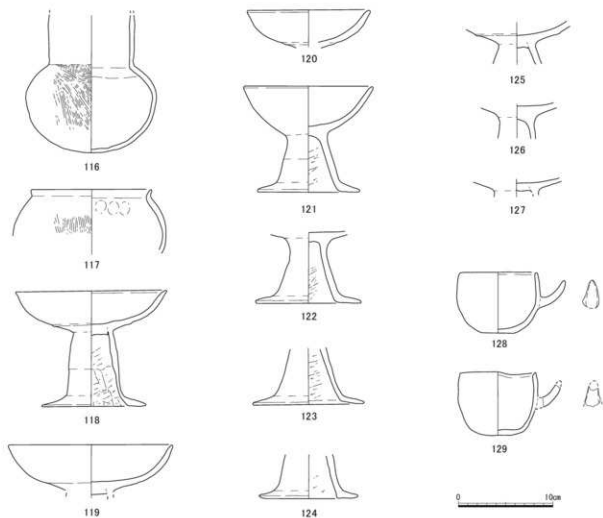
第59図 出土遺物（須恵器⑧）(1/6)

文、列点文などが施されている。102の外面には3条の凹線と飾描き波状文が施されている。103・104は脚部の破片で、どちらも透かし孔の痕を有する。なお、過去の報告では色調や胎土の特徴から96・98～101、103・104は同一個体とされており、97・102も色調や胎土の特徴から同一個体の可能性がある。105は脚端部の破片で、色調や胎土の特徴が一致する破片はない。

106～115は甕である。106は口径64.9cmの大型の甕で、実物を確認できていないが、残された実測図から口縁部に凹線と連続斜線文が、体部外面には平行タタキが、内面には同心円状の当て具痕が認められる。107は完形の甕で、口径25.3cm、器高50.5cmを測る。体部外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が認められる。108～111は口縁部の破片である。112～115は外面に平行もしくは格子目タタキ、内面に同心円状の当て具痕が認められる体部の破片である。 (藤井)

土師器 (第60図、図版29)

116は直口壺、117は甕で、いずれも外面にハケメが認められる。118～127は高杯である。118は唯一の完形で、器高は12.3cmを測る。杯部下半には接合時の段が認められ、脚内面にはヘラケズリが施されている。119・120は杯部の破片である。121は全体が復元できる破片であるが、杯部が深く、接合の段が認められないなど、他の高杯とはやや特徴が異なる。122～127は高杯の脚部及び脚部から杯底部にかけての破片である。128・129はコップ形の碗で、舌状の把手が付けられている。 (藤井)



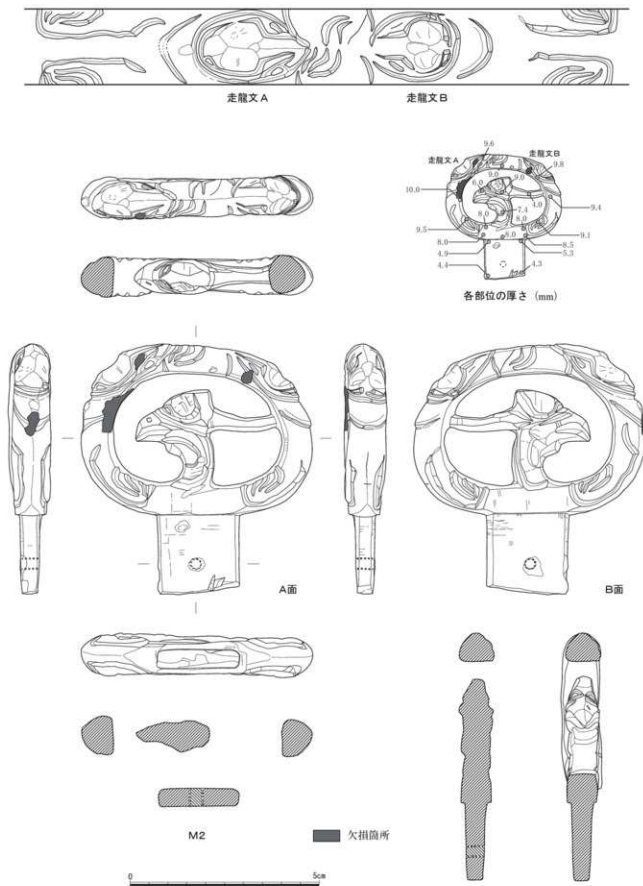
第60図 出土遺物 (土師器) (1/4)

金属製品 (第61～71図、写真5～8、図版30～34-1・2)

M2は単鳳環頭大刀の柄頭である。昭和53年度の岡山県教育委員会による発掘調査で出土し、『県報告35』で報告されている。しかし、この段階では銹落としを含む処理が不十分であったため、細かな観察を伴った実測図となっていなかった。その後、柄頭の保存処理が終了し、昭和62年に刊行された『総社市史』において詳細な実測図が公開された。しかし、紙面の都合もあって、柄頭の詳細な説明は伴っていなかった。このような問題点を踏まえ、上榎武は金工技術上の観察を目的として実測図を再提示し、これまで十分に報告されていなかった柄頭の観察結果を詳述した(上榎2019)。しかし、本書作成に伴う再整理に当たり、これまで公開されてきた柄頭の実測図を点検した結果、図面に表現されていない部分等が確認できたため再実測を行うこととし、あわせて、これまで公開されていなかった側面図や環部走龍文の展開図を新たに作成した(第61図)。なお、柄頭の裏表であるが、通常、鳳凰が左側を向く面が佩表である例が多いことから、この面をA面(佩表)、反対側をB面(佩裏)とし、さらに、環部に配置されている走龍文で、A面左上に頭部が位置するものを走龍文A、右上に頸部を有するものを走龍文Bと呼称する。

この柄頭は、環内に横を向いた鳳凰1羽を配し、環外縁に走龍文が描出されている。柄頭の寸法は、全長6.6cm、環部長軸6.1cm、短軸4.4cmを測り、最大の厚さは1.0cm、重さは99.3gである。環部の各部位の厚さは第61図に示しているが、僅かにA面環部の左側が厚めであった。この柄頭は、これまで青銅の地金に金箔を貼り付けたとか、鉄地の金銅品であるとする記述がみられたが、澤田秀実らが実施した理化学的分析等から、本製品は青銅の鑄造品であり、アマルガム法による鍍金を施していることが判明している(澤田編2022)。本品の肉眼観察においても、僅かではあるが、ところどころに緑青の表出を確認することができ、環部や鳳凰の部分だけでなく茎にも鍍金の痕跡を観察することができる。X線写真撮影を行ったが、この柄頭には、環部基部と鳳凰との境目に両者を接合した痕跡は確認できなかったことから、鳳凰と環部を一体に鑄造した製品と判断できる。A面の環部上面や茎に鑄込み不足と考えられる窪みがみられるほか、A面の環部の左半分は、研磨による最終仕上げを簡略化しているようで、表面に凹凸の鋳肌面を残す。なお、この時期の環頭大刀柄頭は合范によって製作されたと推測されているが、こうもり塚古墳の柄頭については、仕上げによる研磨等もあり、明確な型割り線を確認することはできなかった。

環内の鳳凰(写真5)であるが、上面には不整楕円状の冠羽がみられる。冠羽の前面は眉(目)に接するが、その他は鋳形りによる溝で区画される。両側が高く中央が窪むように加工されており、本来の羽毛の表現はみられない。目は浅い線刻で囲まれた薄肉彫りで表現されている。両面とも眉(上脛)は目の上で大きく湾曲するが、端部では垂れ下がる。嘴は閉じており、先端は屈折する。玉は噛まない。上嘴と下嘴の間には切削による深い線刻がみられる。A面には鼻孔が打刻されているが、B面はない。B面には耳に相当する位置に短い線刻があるが、A面にはない。後羽はあまり屈曲せず環部と接合する。後羽のA面には鋳上がり面がそのまま残る部分があるが、B面は表面が薄く削られ、面取りがなされている部分がある。下顎髭は嘴と頸部の境目に、肉垂は環部下の頸部に取り付く。この肉垂は、B面は周囲を削り立体的に表現されているが、A面は線刻で区画しただけの平面的な表現となっている。頸毛は外縁に線刻を施し、下半部を屈曲して表現される。なお、体表には打刻による羽毛の表現等は確認できない。また、A面の頸部と環部の境目付近の鋳上がりは良くなく、僅かであるが、鋳込み不足による窪みが残る。



第61図 出土遺物（環頭大刀）（1/1）



1 A面鳳凰



2 A面鳳凰



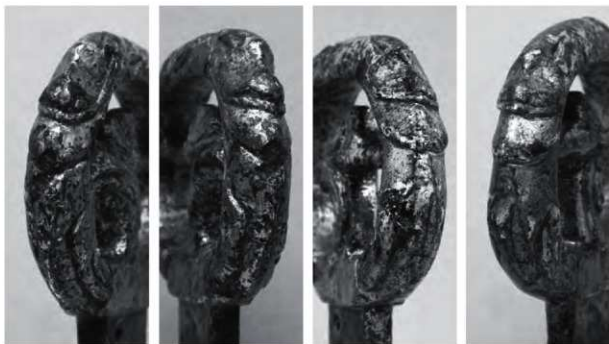
3 B面鳳凰



4 B面鳳凰

写真5 環頭大刀①

環部には走龍文が施されている(写真6~8)。龍の配置は背中合型である(大谷2006)。かなり単純化されているが、龍の目、眉、耳、冠毛などの諸要素を確認することができる。走龍文A・B面ともに目が確認できる。走龍文AのA面の目は周囲に線刻を施して仕上げたもので、薄肉彫りで表現されている(写真6-5)。B面の目は、A面と様相が異なっており判別しづらいが、幅をやや広く仕上げた線刻とその上面の三角形の狭小な平坦面で表現されていると推測できる(写真6-6)。走龍文Bの目は、A面、B面とも細い線刻で長三角形に目を区画して描出している(写真7-1・2)。上顎は下縁に相当する位置に線刻を施して表現される。走龍文Aの上顎は、下半を線刻で区切るほか、鼻に相当する位置がやや盛り上がる。走龍文Bの上顎は縁がやや肥厚する。冠羽は走龍文A・Bともに環部の両方を匙状に窪ませて表現する。走龍文Bは冠羽の上下が瘤状にやや盛り上がるが、走龍文Aの盛り上がりは走龍文Bと比べると僅かである。冠羽脇には角の表現がみられ、また、走龍文A・Bともに耳と推測される描出がある。走龍文AのA面の耳は周囲に線刻を施した薄肉彫りで作り出されているが、B面は浅い線刻のみである(写真6-7)。走龍文Bの耳はA面では浅い線刻で表現されるが、B面は細線のみとなっている(写真7-3)。脚は走龍文A・Bとも前脚と後脚が線刻されている。環部両面の12時方向にある脚は、それぞれの走龍文の片方ずつの脚で、指が3本の線で表現されている。走龍文Bに伴う前脚の指の線のうち1本は毛彫り状の細線のみとなっているが、その他は切削による溝状の線刻となっている(写真7-4)。後脚はともに指を表現する3本の線刻を囲むよう

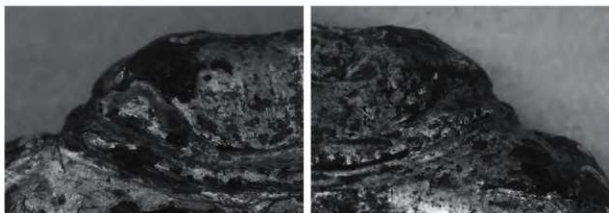


1 走龍文A (A面)

2 走龍文A (B面)

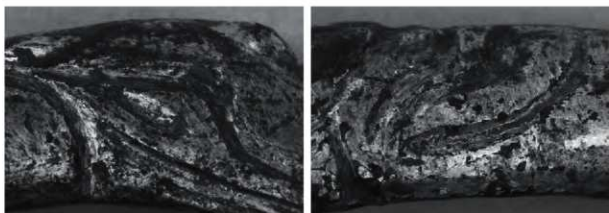
3 走龍文B (A面)

4 走龍文B (B面)



5 走龍文A (A面) 頭部

6 走龍文A (B面) 頭部



7 走龍文A (B面) 耳

8 走龍文A (A面) 脚

写真6 環頭大刀②



1 走龍文B (B面) 頭部



2 走龍文B (A面) 頭部



3 走龍文B (B面) 耳



4 走龍文B (B面) 脚

写真7 環頭大刀③

に、脛や膝などを表現する長い線刻が巡る。この線刻の上端の屈曲の度合であるが、走龍文Bは大きく屈曲するが、走龍文Aは僅かとなっている。ただ、走龍文AのB面はほとんど屈曲していないが、先端に屈曲した罫書状の細線を辛うじて確認することができ(写真8-2)、本来は彫金を意図していたが、作業を省略した可能性がある。なお、龍体に鱗状の表現は認められない。また、茎に接する環部には、両面とも長さ0.7cm、幅2.5cmほどの平坦面があり、研磨痕が確認できる。

茎は長さ2.0cm、幅2.1cm、厚さ0.4~0.6cmを測る。A面に鑄込み不足の窪みがみられる(写真8-5)。表面は両面とも基本的に横方向の研磨が施されており、その上面に鍍金が残る。四隅の角はA面の左側面以外は面取りがなされている。下端部には粗い切断痕跡があるが、どのように切断したかは明瞭ではない。切断面の縁に鍍金が僅かにみられることから、鍍金前に切断する部分に浅い溝を彫り、鍍金後に残った部分を切断した可能性も推測できる。なお、現在は塞がって視察できないが、X線により目釘孔を確認しており、孔径は0.4cmを測る。この柄頭自体に磁性は確認できないが、この目釘付近にのみ僅かな磁性がある。そのため、目釘は鉄製と考えられる。

このように、この柄頭は、ある程度まで立体的に表現された鑄造品を彫金後、鍍金を施して製作されたと考えられる。鑄上りは、全体的にB面のほうが良い。肉垂の表現がB面は立体的でA面が平面的であるのは、このような鑄上りの差が反映されている可能性がある。

柄頭の彫金技法であるが、大部分は鑿等の工具を用いた切削で、V字状の断面を呈するものが多い。



1 走龍文A (A面) 脚



2 走龍文A (B面) 脚



3 走龍文B (A面) 脚



4 走龍文B (B面) 脚



5 茎 (A面)

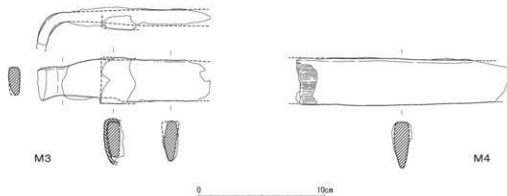


6 茎 (B面)

写真8 環頭大刀④

しかし、いわゆる毛彫りによる細線（走龍文BのB面の前脚：写真7-4）や、底部がU字状で、最終的に底部を整形（滑めくった）ような痕跡（走龍文AのB面の耳：写真6-7）も観察できる。

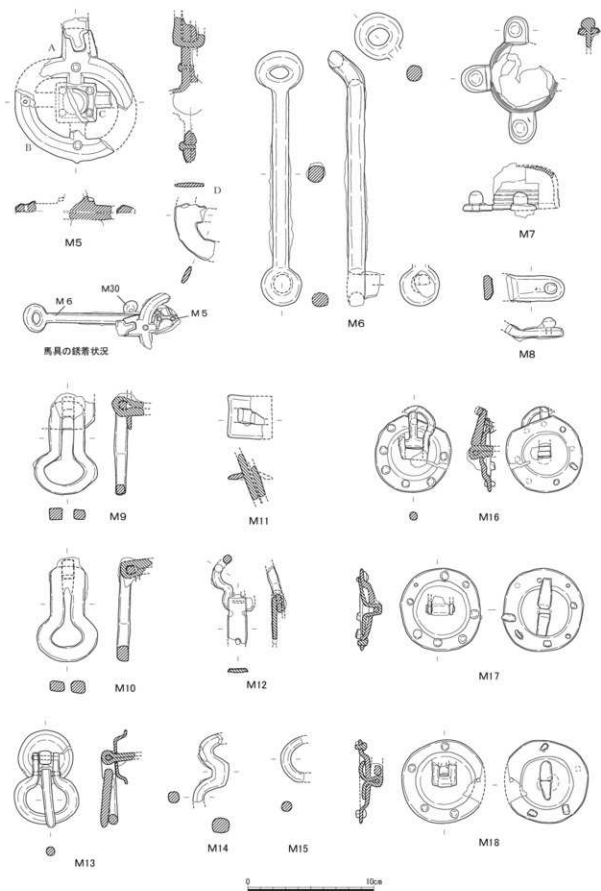
M3・M4は大刀の破片である。出土位置が近いので、同一個体の可能性がある。M3は刀身から茎にかけての部分で両端は欠損している。残存長13.6cm、刀身残存長8.6cm、刀身幅3.3cm、棟の厚さ1.2cm、茎の幅3.0cm、茎の厚さ0.8cmで全体的に錆化が激しい。刃部と茎の下端が鋸を扶んで一致しないことから片岡と考えられるが、X線写真を踏まえて検討したが、形状は把握できなかった。茎は



第62図 出土遺物（大刀）（1/3）

大きく折れ曲がり端部が破損する。鍔は鉄地で隅部に残存し、断面は刀身の断面形にあうような倒卵形をなす。欠損しているため、鍔の幅や厚さは不明である。なお、刀身、茎とも木質の付着は確認できない。M4も刀身である。残存長16.7cm、刃幅3.6cm、棟の厚さ1.2cmを測る。刀身の表面の一部に木質が残り、鞘木と考えられる。

M5は心葉形十字文透鏡板である。3片（A～C）に分かれている上、錆等による変形も激しく、実測図では一部復元的に示している。鏡板は、鉄地金銅装で厚さ約0.4～0.5cmの鉄製地板の上に、厚さ約0.5～0.6cmの金銅板で覆った上板を鉾留めする。上板は錆で膨張したり、変形したりしているが復元することは可能であった。しかし、地板は総じて残存状況が悪かった。Aは鏡板上半部の破片である。立間が付随しており、立間孔には吊り金具が残存する。吊り金具は幅2.0cmの鉄板に鉤部分を作り出したもので、立間孔を通じて本体を懸垂する。鏡板本体の環状部には、円形の頭を持つ鉾が1か所残存しており、鉾頭は径0.6cm、高さ0.3cmを測る。環状部の上板は幅1.6cmで、両側辺が斜めに加工され、金銅板で覆われている。Aは環状部中央にあたる方形部（C）と接合する。この方形部は半分欠損するが、右側辺で長さ3.0cm、上辺で幅3.2cmの長方形に復元できる。鉾が隅部に2か所確認できることから、四隅に鉾が打たれていたことが推定できる。鉾は頭部径0.6cm、高さ0.3cmを測る。基部のみであるが中央にドーム状の覆い部の痕跡が残る。覆い部は復元で径約2.2cmを測り、残存状況が悪いが、上板と一体的に作り出されているものと考えられる。右側の連結部は現状では大きく屈曲しており、環状部分には接合しない。方形部は銜先環と結合していると考えられるが、X線写真を基に検討もしたが、膨張した錆のため連結部分の詳細な構造は確認できていない。Bは鏡板の下半部から左半部にかけての部分である。環状部の構造はAと同様であり、端部を斜めに加工した上板を金銅板で覆っており、一部で金装が確認できる。金銅板は上板を包み込むように内側に折り込まれている。なお、地板の方はほとんど残存していない。環状部には鉾留部分が2か所に残るが、左側は孔のみで孔径0.2cm、下部は鉾頭が残存し頭部径0.6cm、高さ0.3cmを測る。鉾の位置から中心に向けて十字文を構成する連結部の痕跡がみられる。また、Bの下端部が僅かに突出しており、心葉形の先端であると判断できる。その他に、現物は確認できなかったが、この鏡板と考えられる破片（D）の実測図が残されている。環状部の破片で、裏面からの実測図であれば、その形状からAの左側からBに繋がる破片、そうでなければBの地板の可能性が考えられる。推測ではあるが、掲載した鏡板の復元形は歪んではいないが、その平面形の信頼性は高いと考える。なお、この心葉形十字文透鏡板については『総



第63図 出土遺物（馬具①）（1/3）

社市史』に既に実測図が掲載されている。今回の整理で、鏡板上部の破片(A)と中心の方形部(C)が接合したこと、また、心葉形の端部を示す破片(B)が存在していたことなどが新たに判明した。今回の知見を踏まえると、この鏡板は楕円形に近い心葉形をなし、立間を含む残存長は11.6cmで、環状部は長軸9.7cm、短軸8.4cmに復元できる。

M6は、引手壺を「く」の字に屈折させた完形の引手である。全長20.1cmで、径約1.2cmの鉄棒を使用しており、引手には鏡板(M5のC)と半球形飾金具(M30)が付着する。端環は復元で外径3.2cm、内径1.4cm、引手壺は外径3.8cm、内径1.5cmと引手壺の環の方がやや大きい。端環には衝の破片が一部残存するが、錆が膨張しており、その形状は不明である。

M7は金銅装の辻金具である。破損している上に変形しているため、復元的に実測図を作成している。3脚が残存し、復元径5.4cm、高さ3.7cmの鉢部を持つ。鉢の頂部は変形が激しく原形をうかがえないが、鉢部の下半には幅1.5cmの範囲に凹線状の装飾が施されている。脚は爪形で、長さ2.0~2.4cm、幅1.9~2.2cm、厚さ0.5cmを測る。脚表面の金銅板は下端部を鉄板の内側に折り曲げている。左側の脚部基部には幅0.3cm程度の貴金具の痕跡が残存している。この辻金具の表面には僅かであるが金装が確認できる。一方、裏面における有機質の付着などは明確には確認できない。また、いずれの脚にも鉾が残存している。鉾頭は径1.1cm、高さ1.0cmを測る大型で、軸部は径0.4cm程度である。**M8**も金銅装の金具で、辻金具の脚と考えられる。爪形で残存長4.6cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmで、表面に金銅板を巻き付けるが、金装が確認できる部分は僅かである。基部は上方に緩やかに折れ曲がっていて、脚の先端には径1.0cm、高さ0.8cmの鉾頭を持つ。『総社市史』ではM7と同一個体の可能性を示しているが、M7の四つめの脚部破断面とは接合しないことから別個体と考える。

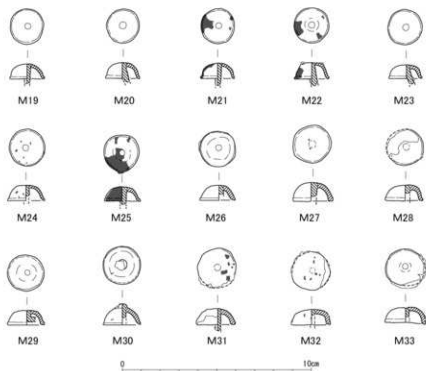
M9~M11・M13は鞍金具である。**M9・M10**は刺金を持たないタイプで、断面が方形気味の鉄棒の上方を長方形に、下方を不整楕円形に仕上げ、基部に脚金具を付けたものである。脚の大半は欠損しており、輪金基部に巻き付け部のみ残存する。M9は残存長7.7cm、幅4.9cmを測る。脚金具の付根には八角形の座金具が残存する。脚金具の裏面には木質が残存する。M10も同様の金具であり、残存長8.1cm、幅4.8cmである。座金具は残存していないが、脚の付根に座金具の付着痕跡が残る。脚には木質が残存する。**M11**は一辺3.4cmの方形の座金具に脚金具が残存する。座金具は1/3程度欠損するが、鉄板を裏から打ち出して、中央がやや盛り上がる形状をなす。脚部下半には木質が残存し、座金具の裏面にも木質が残る。**M13**も鞍金具で、鉸具部の長さ6.0cm、幅5.1cmを測る。輪金に刺金と基部を挟み、基部に脚金具と座金具を付ける。刺金はT字形で基部を環状部に差し込む。脚金具の一部が欠損するが、円形の座金具はほぼ完形で残存し、周囲に縁が巡る。座金具は径4.3cm、高さ1.1cmを測る。下面に木質痕などの有機質は残存していない。

M12は鉸具である。残存長6.2cm、幅は復元で約4.2cmを測る。鉸具の基部にT字形の刺金が僅かに残存する。また、同じく基部に鉄地金銅張りの金具が装着されている。金具は鉄板を金銅板で覆い、上端を鉸具端部の内側に折り曲げている。鉸具に接する部分の金銅板の両端が窪んでいることから、貴金具が存在した可能性がある。また、革帯に装着したと考えられる孔が1か所残存する。

その他、鉄棒を曲げた製品の破片が出土している。**M14**は残存長5.4cmで径約1cm程度の鉄棒を「8」の字状に折り曲げる。馬具に伴う金具とも考えられるが詳細は不明である。**M15**は環状の鉄製品で半分欠損しているが、外径4.3cm、内径2.9cm程度に復元できる。M14・M15は馬具としての可能性を考慮し掲載したが、古墳時代以外の遺物である可能性も考えておく必要がある。

M16～M18は障泥金具である。いずれも円形の座金具に懸垂用の鉸具が中央に取り付く。M16は脚金具が欠失しているがほぼ完形に復元できる。鉸具は輪金にT字状の刺金を挟み込んで作られている。座金具は円形で径6.0cmを測るが、一端がやや直線的に切断されている。帽子のつば状の縁部に鉸が8か所打たれている。鉸頭はいずれも鉄地で、径0.6cm程度を測る。鉸の軸部は大半が欠損しているが、残存している箇所では先端が折り曲げられていることが確認できる。鉸具の基部には脚金具が巻き付けられており、座金具の内部で折り曲げられている状況が確認できる。この裏面での有機質の付着は確認できない。M17も同様の金具であるが、鉸具は基部以外欠損している。座金具は円形で径6.6cmを測り、外周に縁部を持つ。縁部には鉸が8か所に打たれる。鉸頭は7か所で残存し、径約0.6cmを測る。鉸の軸部先端は破損しているが、そのうち残存状況の良い3か所で外方や接線方向に折れ曲がっている状況が確認できる。脚金具は完存しており、座金具内部の凹部でそれぞれ反対方向に折り曲げられている。裏面に有機質の痕跡は確認できない。M18の鉸具は刺金と基部の一部が残存するのみであるが、座金具や脚金具の残存状況は良好である。座金具は円形で、径6.6cmを測る。中央が膨らみ縁部をもち、縁部に鉸が5か所打たれる。M16・M17では鉸の数が8か所であるのに対し、M18は5か所と少ない。鉸頭は径0.6cmで鉄地である。鉸の軸部先端は裏面で先端を外方や接線方向に折り曲げられている。鉸具の基部には脚金具が巻き付けられており、座金具の裏面で折り曲げられる。裏面に有機質の付着は確認できない。

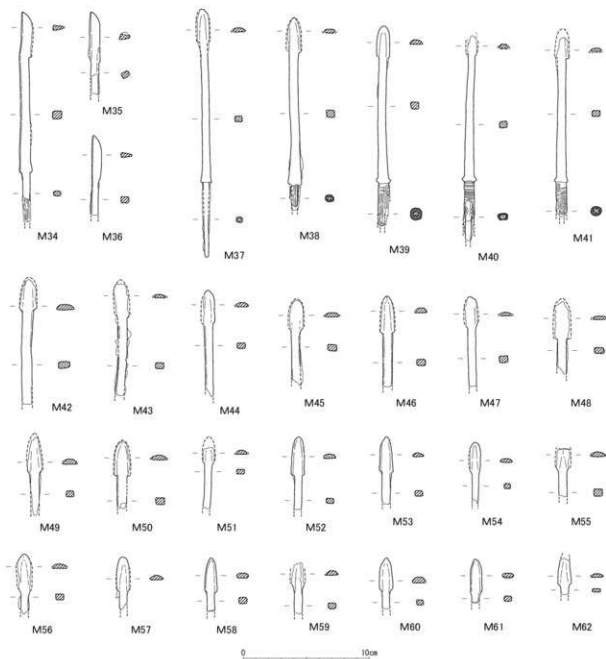
M19～M33は半球形飾金具で、15点出土しており、そのうち1点(M30)は引手(M6)に付着する。径1.8～2.0cm、高さ0.7～1.0cmの鉄地金銅装の金具で、下端の縁部がやや肥厚する。鉢部には局所的であるが、金箔が残存する。頂部から鉸釘を打ち込み革帯などの繫に装着したと推定できるが、いずれも釘の先端を欠失しているため、詳しい装着方法は不明である。しかし、軸部が曲がるもの(M20・M23)があるので、折り曲げての装着が想定できる。なお、鉸頭はM30のみに残存しており、径0.6cmを測る。



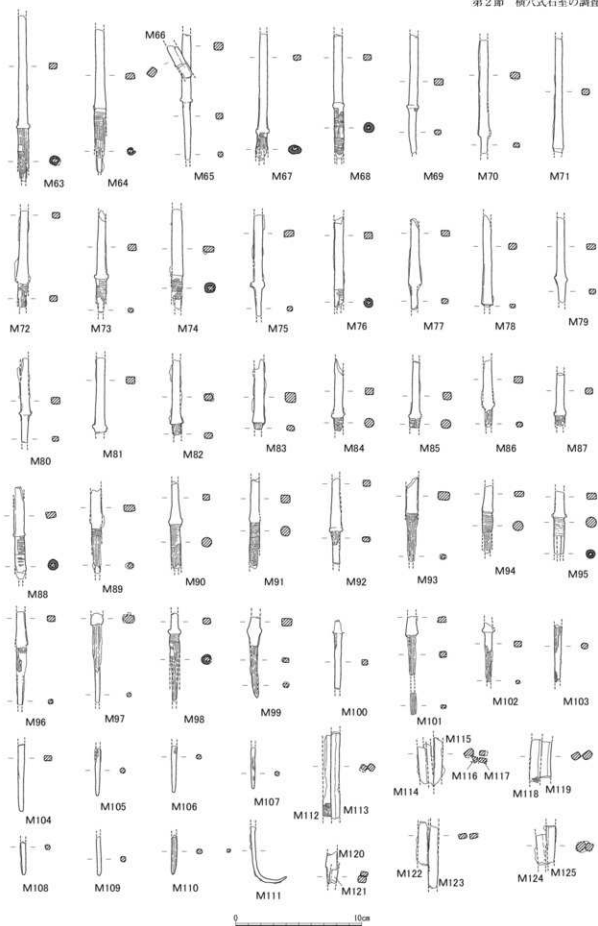
第64図 出土遺物(馬具②)(1/2)

M34～M157は鉄鎌である。「総社市史」によると、鉄鎌は概算で109本出土したと報告されており、その内訳は「尖根鎌98本、平根鎌11本」と記載されている。しかし、今回の整理で確認した破片の総数は、長頸鎌301点（茎部のみを含む）、平根鎌12点であった。ただ、この数字はすべての鉄鎌の破片を数えたもので、中には同一個体のものも存在する可能性があることを留意する必要がある。

M34～M125は長頸鎌である。「総社市史」では、「尖根鎌のうち身部の形状が判るものは53本」で、うち「3本は刀子形」、「50本は柳葉形」と報告する。今回の整理では、長頸鎌の破片総数301点のうち、鎌身部から茎部まで残るもの6点、鎌身部を中心に残るもの43点、閘部を中心に残るもの82点を確認した。そのため、長頸鎌は少なくとも82点以上副葬されていたことに間違いはない。また、長頸鎌の種類別では、片刃形5点（うち3点を掲載）、柳葉形44点（うち26本を掲載）を確認した。



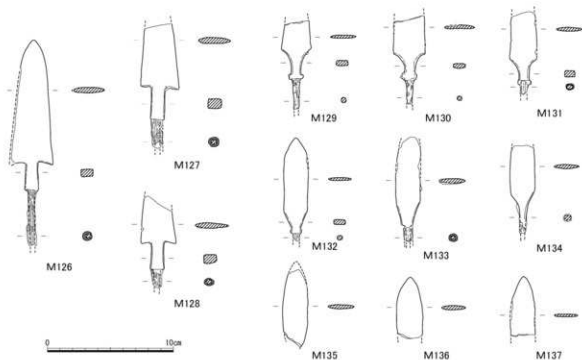
第65図 出土遺物（鉄鎌①）(1/3)



第66図 出土遺物 (鉄②) (1/3)

M34～M36は片刃形の鉄鎌である。M34は鎌身部から茎部にかけて残存する唯一の片刃形である。鎌身部は平片刃造で残存長16.6cm、鎌身長3.5cm、頸部長9.1cmを測る。『総社市史』の番号3に相当する鉄鎌であり、『総社市史』には棘関のように実測されているが、台形関と考える。茎部は欠損するが木質が残存する。M35・M36は鎌身長3.5～3.9cmを測る。M35は錆で不明な部分もあるが、平片刃造と考えられる。**M37～M62**はいずれも柳葉形の鉄鎌である。M37～M41は鎌身部から茎部まで残存する資料である。鎌身長2.5～2.8cm、鎌身幅1.0～1.2cm、頸部長9.7～11.1cmを測り、鎌身部はいずれも片切刃造である。関の形状はM37・M38が台形関、M39～M41は棘関である。M39～M41は茎部に矢柄と樹皮巻が残っており、復元すると矢柄の径は約0.8cmとなる。M42～M62は柳葉形の鎌身部が残る鉄鎌である。刃部は基本的に片切刃造であるが、中には種が不明瞭なものがある。鎌身長2.3～3.0cm、鎌身幅0.9～1.4cmを測る。**M63～M102**は頸部から茎部にかけての破片である。関の形状は、中には不明なものもあるが棘関（M63、65、67～69、73、75、79～81、84～88、92、95、98、102）、台形あるいは角関（M70～72、74、76～78、82、83、89、91、93、94、96、97、101）がある。矢柄や樹皮巻が残存する鉄鎌も出土しており（M63、64、67、68、72、73、74、88、89、90、91、93、94、95、98）、径約1cm程度の矢柄が装着されていたことが分かる。M65には別の鉄鎌片（M66）が錆着する。**M103～M111**は茎部の破片である。茎部が完存する個体は存在していないが、もっとも長いもの（M97）で約6cmを測る。M111は鉄鎌の茎部と考えたが、曲がっており、他の器種の可能性もある。**M112～M125**は複数の鉄鎌が錆着している破片である。このことから、長頸鎌が東になって副葬されていた可能性を推測させる。

M126～M137は平根鎌である。『総社市史』では「身が長い三角形のもの」が3点、「柳葉形のもの」が8点出土したと報告するが、今回の整理で長三角形鎌は同数の3点、柳葉形鎌は9点確認した。**M126～M128**は長三角形鎌であり、浅い逆刺を持つ。関は台形関あるいは角関である。いずれも茎部

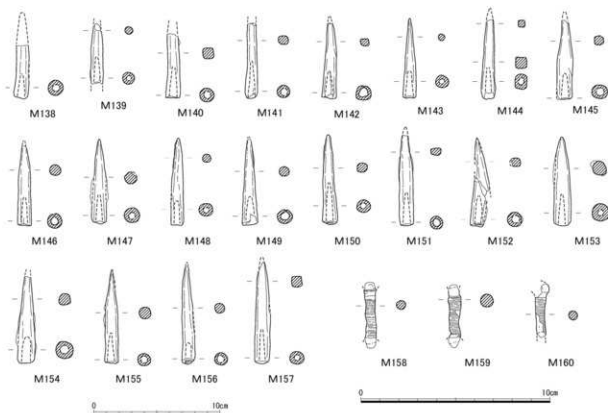


第67図 出土遺物（鉄鎌③）（1/3）

には矢柄の痕跡が残存する。M126は基部の先端を欠失するがほぼ完形で、残存長16.2cm、鎌身部長9.9cm、頸部長2.2cmを測る。基部には樹皮巻が残る。「総社市史」の4に相当するもので、その実測図では棘関で表現されているが、台形関と考えられる。M127、M128も同型式の鉄鎌であるが先端及び基部が欠けている。M129～M137は柳葉形である。頸部の屈曲具合により2種類に分類でき、大きく屈曲するM129～M131と緩やかに曲がるM132～M134に分けられる。前者は、いずれも鎌身部先端と基部を欠くが、棘関であることが確認できる。後者では、M132が鎌身部が完存する唯一の例であり、鎌身部長5.9cm、鎌身部幅2.0cmを測る。M132のみ棘関と考えられる。いずれも基部にも矢柄の痕跡を確認することができる。M135～M137は関部から基部にかけての部分に欠くが、柳葉形鎌の鎌身部分と推測できる。

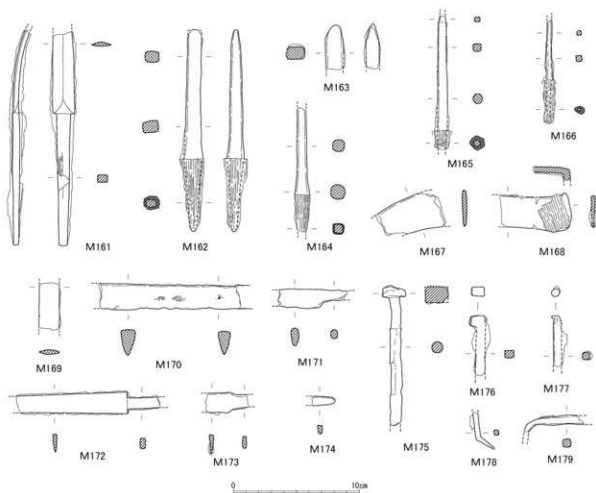
M138～M157は「総社市史」において「エンピツのキャップ形の鉄器」と報告されている鉄製品で、鉄鎌の可能性が指摘されている。「総社市史」では「23本」発見されたと報告されているが、今回の整理では20点を確認した。確認できるもので長さ6.3～8.1cm、幅0.9～1.4cmを測る。先端部分は鋭く、断面形状は剛丸方形気味のものもあるが、円形のものが多い。基部の袋部は鉄板を両側から折り曲げて閉じている。中には、その閉じ合わせが観察できるものもあるが、不明瞭なものもある。X線写真等で確認した結果、袋部の深さは約2～3cmであると推測できる。袋部内部には木質を残すものがあり、これらは径0.4～0.7cm程度の木製軸部の先に装着されていたものと考えられる。

M158～M160は弓金具である。「総社市史」では5点出土したと報告されるが、今回3点を確認した。いずれも完形品はないが、軸部断面は円形、両端が膨らみ中央部分に木質痕が認められる。木質の幅は、M158で2.5cm、M159で2.3cmを測る。

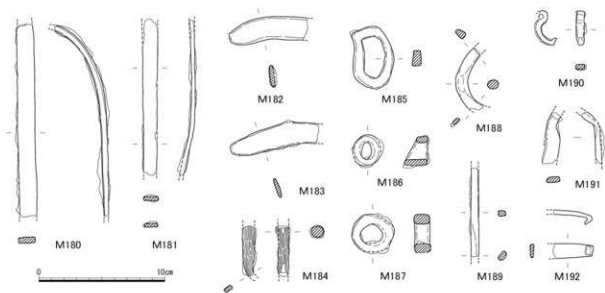


第68図 出土遺物（鉄鎌④ほか）（1/2・1/3）

こうもり塚古墳の横穴式石室から農具も出土している。「総社市史」では、農具として鍬1点、鑿4点、錐1点、鎌2点、刀子5点が報告されているが、今回の整理では鑿3点、錐2点、鎌2点、刀子2点などの鉄器を確認した。M161は鍬であるが、実物を確認できていない。そのため、「総社市史」に掲載されている実測図を再掲載している。残存長16.9cmの大型品であり、先端を欠失するが、刃先の残存長は6.2cmで反り上がる。M162～M164は鑿である。M162はほぼ完存しており、全長15.9cm、身部の長さ10.1cm、同部最大幅1.5cm、同部厚さ1.3cmを測る。先端部は両刃で先端から1.3cmほどが尖る。基部の長さは5.8cmで、木質が残存する。M163は鑿の先端部である。残存長3.6cm、幅1.5cm、厚さ1.0cmを測る。M164は残存長9.9cmの鉄器であり、基部に木質が残存する。先端部が欠損しているが、鑿の可能性が想定できる。M165、M166は錐と想定される。M165は先端部と基部の一部が欠損するが、残存長10.5cm、残存する身部9.2cmを測る。基部には木質が残存する。先端部は先から0.5cmほどが急に細くなる。M166も先端部と基部の一部が失われているが錐と考えられる。残存長8.2cmで、身部の断面は方形や円形で先に至るにつれて細くなる。柄には木質が残存している。木質の下端に基部が確認できないことから、基部の長さは3cm程度と推測できる。M167、M168は鎌である。M167は刃部がやや不明瞭であるが、曲刃鎌の先端に相当すると考えられる。M168も鎌であり、基部に折り返しがある。柄の痕跡があり、幅2cmの柄が約20度の角度で装着されていたと推定できる。M169は両刃の利器である。剣の可能性もあるが幅1.6cmと狭いため、工具に分類した。M170～M174



第69図 出土遺物（農具ほか）(1/3)

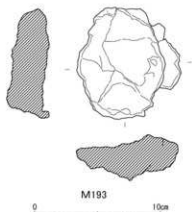


第70図 出土遺物（金具等）（1/3）

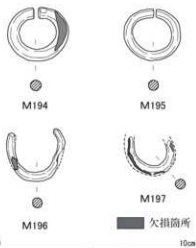
は刀子である。そのうち、M170～M172は実物を確認できていないが、実測図が残されているため、それを基に作図した。M170は残存長12.3cmを測る。M171は関付近の破片と考えられる。M172は「総社市史」の6の刀子であるが、現物を確認できていない。残存長11.4cmで両刃である。M173は関部付近の破片で残存長3.4cm、刃幅1.5cmで両刃である。M174は残存長1.8cm、幅0.7cmで茎尻の破片と考えられる。

M175は鉄釘で、実物を確認できていないが、実測図が残されている。これによると、この鉄釘は残存長11.0cmで、長さ1.8cm、幅1.3cmの方形の頭部を持つ。M176、M177は頭部を折り曲げた鉄釘である。M178は釘、M179は錠の可能性が考えられるが詳細不明である。なお、「県報告35」等には、鉄釘の出土を根拠に、鉄釘を使用した木棺があったとするが、棺痕跡自体は発見されておらず、また、形態が分かる釘の本数も少なく、さらに、石室内に後世の遺物も混入している状況を踏まえるならば、こうもり塚古墳に鉄釘使用木棺が存在した根拠は乏しい。特に、M175のような方形の頭部をなす鉄釘は、奈良県平城宮等に類例⁽²⁾があり、古代の鉄釘の可能性が指摘できる。

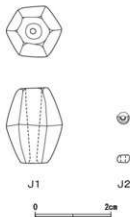
M180～M192は用途不明の鉄製品である。こうもり塚古墳の石室は床面まで攪乱を受け、後世の遺物も混在していることから、これらの鉄製品はすべてが古墳時代のものとはできず、後世のものである可能性もある。M180、M181は細長い鉄板で、M180は残存長15.2cm、幅1.4cmで上半部が大きく曲がる。M181は残存長12.3cm、幅1.2cmで下半部が僅かに内湾する。いずれも刃部や孔、木質の痕跡は確認できない。M182、M183は先がやや屈曲する鉄製品で、鎌の可能性もあるが明確な刃をもたない。M184は断面円形の棒で下端が薄くなり鉤状に屈曲する。工具等の柄の可能性もある。M185は断面方形で、不整楕円形を呈する環状の鉄器である。隅に木質が付着している。M186、M187は筒状の鉄製品である。M186は外径2.4cmで、一端が斜めに加工されている。M188は断面が楕円形の湾曲した鉄棒で、両端がやや扁平な方形になるよう鍛打されている。M189は残存長7.0cmで、断面が方形の棒状製品である。下端がよじれている。M190は先端が破損した「乙」状の鉄製品である。留金具の可能性はあるが、木質は確認できない。M191も先端が屈曲した鉄片である。M192は一端が折れ曲がっており、用途は不明である。



第71図 出土遺物（鉄滓）（1/3）



第72図 出土遺物（耳環）（1/2）



第73図 出土遺物（玉）（1/1）

M193は長径8.6cm、短径8.0cm、厚さ2.9cmを測る不整形の鉄滓である。肉眼観察ではあるが、楕円錐状と推定できる。長楕円形の平面を呈する錐状面に、別の鉄滓が包含されている。複数回の操業を経たものか、あるいは操業時に別の鉄滓を含み込んだものと推定される。重量は出土当時において245.0gを量った。（金田）

装身具（第72・73図、図版34-3）

耳環は4点出土している。M194は銅芯金張りで、外径3.2cm、内径1.9cmで、径0.6cmの銅芯を折り曲げ、端部では金箔を寄せて銅芯を被覆している状況が確認できる。M195は外径3.0cm、内径2.0cmで、径0.5cmの銅芯を折り曲げている。M196とM197は破損するが、同一種類と考えられる。外装は不明である。これらの耳環については、澤田秀実らによる自然科学分析（澤田編2022）が公表されている。その成果によると、M194（澤田報告による耳環1）の表装は金、M195（同報告、耳環2）は金と銀の合金、M196・M197（同報告、耳環3・4）は金装となっている。

J1は水晶製の透明な六面体の切子玉で、長さ2.1cm、胴径1.47cm、片面穿孔で中央の貫通孔は上径4.2mm、下径2.7mmを測る。J2はブルーのガラス製小玉で、水晶製切子玉の孔の中から発見された。一部欠損しており、径3.5mm、高さ2.0mm、中央孔の径1.4mmを測る。（金田）

古墳時代以外の遺物（第74図、図版34-4）

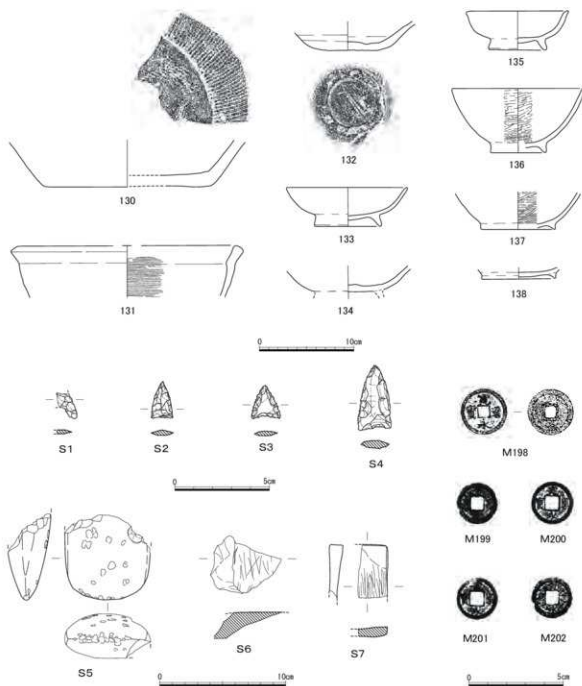
こうもり塚古墳の横穴式石室は早い時期から盗掘されており、石室では、古墳時代以後の遺物も多く出土している。130は播鉢の底部で、内面にすり目が観察できる。131は瓦質の鍋である。内面にはハケメがみられるが、外面は煤に覆われ調整は不明である。132は土師器の杯あるいは碗の底部である。比較的厚手で粘土紐の痕跡がみられる。底部にヘラオコシの痕跡がある。焼成は良くない。133~138は高台付の土師器碗である。133~137は実物を確認しておらず、残された実測図によるものである。それによると、133の内面は平滑で灰褐色とある。134の色調は黄褐色で焼成はやや不良とある。135の調整はヨコナデを主体とする。136は3分の1程度が残存する土師器で内外面に横方向のヘラミガキが施されている。内面の色調は灰白色とある。137は内面が暗黒色とあり、内面黒色土器と考えられる。138は内面黒色土器で底部のみである。

なお、こうもり塚古墳の石室から出土した土師器碗3点は、武田恭彰により実測図を伴って紹介されている(武田1990)。これによると、133、135、136がそれぞれ武田論文の120、121、119に対応すると考える。武田は、本書の136をいわゆる早鳥式土器碗の初現と位置付けている。

S1～S4はサヌカイト製の石鎌である。S1は欠損するが、そのほかは完形である。石室の前庭を中心に出土している。S5は大型蛤刃石斧で、先端のみが残存する。石材は安山岩質凝灰岩である。S6、S7は砥石で、S6はシルト質泥岩、S7は流紋岩である。S1～S5は弥生時代のものであるが、砥石の所属時期は不明である。

M198～M202は寛永通宝である。M199～M202は実物を確認できていない。

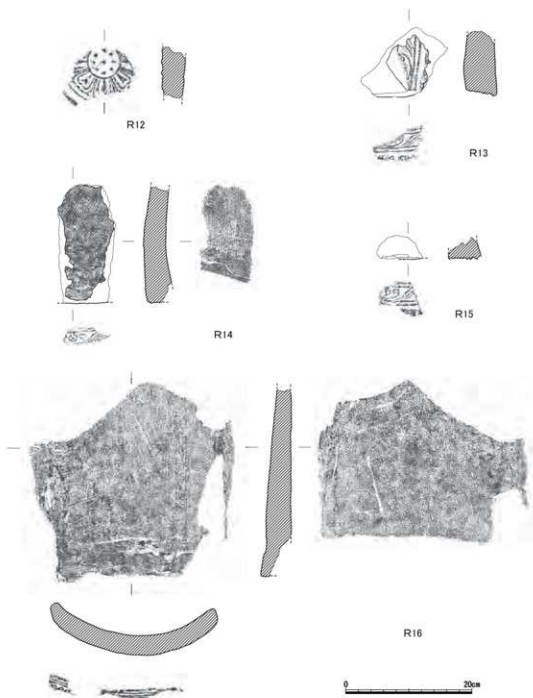
(金田)



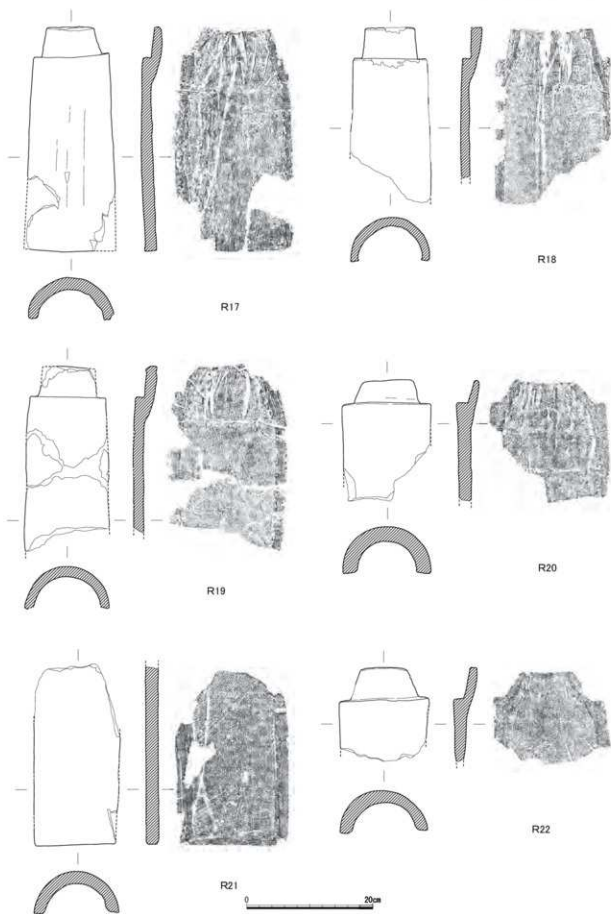
第74図 出土遺物(古墳時代以外の遺物 瓦以外)(1/2・1/3・1/4)

瓦 (第75～78図、図版35)

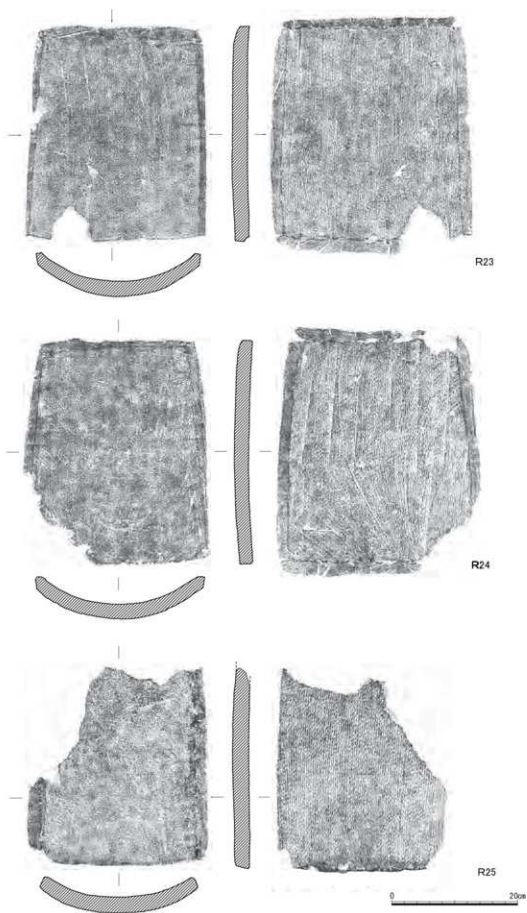
R12は軒丸瓦の瓦当部分の破片である。文様は中央に1+8の蓮子を配する単弁蓮華文である。花弁は縁を隆起させ、中にふくらみのある子葉を配する。周縁は平縁である。備中国分寺跡出土の軒丸瓦第1類(単弁八葉蓮華文軒丸瓦)に該当し、国分寺の創建瓦といわれている(高橋・葛原・松本1991)。R13～R16は軒平瓦の破片である。瓦当文様は全て均整唐草文と考えられる。R13、R14は軒平瓦の中心垂飾りの花頭付近の破片である。R13とR15は軟質で、全体像は不明であるが、軒平瓦第2類に相当する可能性が高い。R14は須恵質であり、軒平瓦第4類に該当すると考えられる。R16



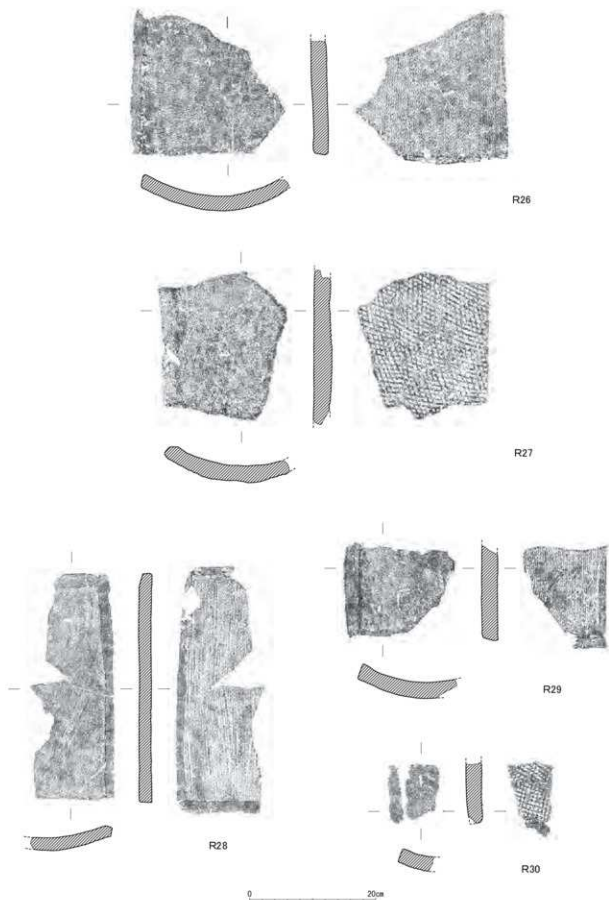
第75図 出土遺物(瓦①)(1/6)



第76図 出土遺物 (瓦②) (1/6)



第77図 出土遺物（瓦③）（1/6）



第78図 出土遺物 (瓦④) (1/6)

は瓦当面の大部分が欠失している。上端部の界線と圏線と左端に僅かに支葉の痕跡を残す。焼成は軟質である。R17～R22は丸瓦である。凹面には糸切り痕や布目が認められ、凸面にはナデや縄タタキの痕跡を残すものがある。端部が残るものは全て玉縁である。完形に近いR17は長さ35.7cm、幅13.8cmを測る。R23～R30は平瓦である。凹面には糸切り痕や布目が認められ、凸面には糸切り痕のほか、縄タタキや格子目タタキの痕跡が認められる。完形に近いR23は長さ34.7cm、幅27.5cmを測る。瓦当文様などから、付近の国分寺・国分尼寺に関連する瓦と考えられる。(金田)

注

例えば、M175に似た鉄釘として、平城宮東院地区第446次調査出土鉄釘などがある(国武2011)。

参考文献

- 上府武 2019「岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀」『文化財と技術』第9号 工芸文化研究所
大谷晃二 2006「龍鳳環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター
葛原克人編 1979「備中こうもり塚古墳―「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査―」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会
葛原克人・近藤義郎・鎌木義昌 1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
国武貞克 2011「東院地区の調査―第446・469次」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所
近藤義郎 1987「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
澤田秀実編 2022「日本列島における銅、鉛原材料の産出地同定と使用開始年代に関する学際的研究」くらしき作陽大学
高橋護・葛原克人・松本和男 1991「備中」『新修 国分寺の研究』第4巻 吉川弘文館
武田恭彰 1990「古代土器生産についての一予察(2)―備中の10・11世紀の土器様相を中心に―」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会
武田恭彰 1991「横穴式石室の再利用について」『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告9 総社市教育委員会
永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編 岡山縣通史刊行会
春成秀爾 1971「こうもり塚と「黒媛塚」―こうもり塚古墳呼称の編年の研究―」『考古学研究』第18巻第3号 考古学研究会

第4章 自然科学分野における鑑定・分析

第1節 横穴式石室石材の分析

岡山大学 鈴木茂之

こうもり塚古墳石室石材の岩石鑑定を肉眼観察によって行った。泥が表面を覆って鑑定が不可能なものが少数あったが、花崗岩（カリ長石大結晶を伴うもの、粗粒均質なもの、細粒均質なもの）、花崗閃緑岩、安山岩、流紋岩、泥岩ホルンフェルスが観察された。花崗岩がほとんどを占める。また、これらの岩石と似たものが遺跡周辺に分布している。

1 遺跡周辺の地質

こうもり塚古墳周辺の地質図は地質調査所（現産総研地質調査総合センター）で作成されたもの（赤木1927、寺岡ほか1996、松浦ほか2002、産総研地質調査総合センター2022）と西部技術コンサルタント株式会社が作成したもの（岡山県内地図作成プロジェクトチーム2020）がある。地質図は点在する露頭の地質から地域全体の地質を推定して作成したものであるため、それぞれの地質図ごとに地質や分布が異なっている。

古生代斑レイ岩及び玄武岩

斑レイ岩は暗緑色で角閃石と斜長石の結晶からなる。玄武岩は暗緑色をなし微粒なため識別しにくい鉱物からなる塊状岩である。ペルム紀のものと推測されている。両者は伴って産出し、境界が不明



第79図 遺跡周辺の地質図

（産総研地質調査総合センター2022 20万分の1日本シームレス地質図V2より）

瞭で岩石の識別が困難な場合が多い。いずれも白亜紀花崗岩形成による熱変成作用を受けており、変質部を伴うことが普通で、脈クラックが発達している。このような性質は石材に向かないらしく、岡山県南部では石材としての利用はごく稀である。第79図では斑頁岩及び玄武岩は福山城から軽部神社にかけて分布するように示されているが、岡山県内地質図作成プロジェクトチーム（2020）では幅100m程度の岩体で示され、赤木（1927）では花崗斑岩になっている。

古生代泥岩

ペルム紀に堆積した泥岩である。元は海に堆積した泥が固結したものであるが、白亜紀花崗岩形成による熱変成作用でホルンフェルス化しているため、珪質緻密である。節理によって方形をなす傾向がある。新鮮なものは優黒色であるが風化すると明灰白色になっていく。葉理がなく塊状なものと、1mm以下の薄いシルトの葉理が平行に入って縞模様をなすものがある。前者が大半を占め、似たものが石室石材として少数認められた。後者は吉備の中山の一部などに分布している。葉理に沿って平行に割れやすく、うまくいくと平らな石材を作ることができる。津島岡大遺跡出土の粘板岩製石包丁はこれと似た岩石で作られている。

白亜紀流紋岩質凝灰岩

白亜紀後期にアジア大陸東縁の広い範囲でおこった火山活動で形成された岩石である。灰白色を呈す微粒緻密な硬い岩石で、石英と長石の結晶片と岩石片を含む。少数であるが礫サイズの岩石片が含まれているので、溶岩ではなく凝灰岩であることが分かる。県南を中心に広く分布するが、こうもり塚古墳周辺地域では福山城付近の小分布に限られる。なお砥石に使われる微粒均質な流紋岩は、これとは違った時代と成因のものらしく、今のところ産地は不明である。

花崗閃緑岩

白亜紀後期に形成された深成岩である。写真9のように角閃石と斜長石が多く石英を伴う。角閃石は濃い緑色をなす。角閃石の集合体に黒雲母が含まれることが多い。ごく新鮮な斜長石は透明であるが、白色不透明になっていることが多い。石英は灰色で透明感がある。こうもり塚古墳周辺では新庄下などに花崗閃緑岩が露出するが、正確な分布ははっきりせず、既存の地質図によって違いがある。石室石材には2個のみ花崗閃緑岩が認められた。

花崗岩

白亜紀後期に花崗閃緑岩と同時期に形成された深成岩である。石英、カリ長石、斜長石、黒雲母からなる。構成鉱物のサイズと量比の違いなどによって岩相は多様である。深成岩なので鉱物のサイズは大きく、明確に定義されていないが、2mm程度以上のものは粗粒、1～2mm程度の中粒、1mm以下のものは細粒と記載されている。こうもり塚古墳周辺では粗粒で1cm近いカリ長石の大きな結晶を含むもの、粗粒で均質なものの、細粒なものなど多様である。これらはある範囲でまとまった分布をなすが、狭い範囲内でも混ざり合って存在することがある。カリ長石の大きな結晶を伴うものは、おそらく「ボタ



写真9 花崗閃緑岩の例（岡山市北区山上（矢田））



1 矢喰の岩のカリ長石大結晶を伴う花崗岩



2 矢喰の岩の新鮮な面（横約15cm）



3 鳶尾塚古墳南東の転石



4 3の拡大（横約30cm）

写真10 カリ長石大結晶を伴う花崗岩

ン石」と呼ばれるものに相当すると考えられる。このタイプの花崗岩は庚申山に典型的に露出するほか、第79図中Loc. 1の矢喰の岩（写真10-1・2）やLoc. 2の鳶尾塚古墳南東のため池東側（写真10-3・4）にも見出される。また、こうもり塚古墳の南側の丘陵地には粗粒花崗岩の露頭が見出されたが、広い範囲で露出と転石がないため、かつてボタン石の巨岩があった可能性を否定できない。

安山岩・流紋岩岩脈

第79図の地質図には示されていない。厚さ50cmから2m程度の板状の岩脈をなし、上記の岩盤中に貫入して分布する。白亜紀後期の大規模な火山活動後に割れ目に沿って貫入したものと考えられる。こうもり塚古墳の南側の丘陵地で安山岩と流紋岩が確認できたので、これらの岩石はこうもり塚古墳周辺に存在していると考えられる。このタイプの流紋岩は灰白色微粒の堅硬な岩石で、たつき石、すり石、石皿に使われることがある。石英の斑晶が多い流紋岩は石英斑岩とも呼ばれる。花崗岩中に貫入した流紋岩は、花崗岩より風化しにくいので、花崗岩が風化した砂状の真砂土の上に角礫になって散在することがある。安山岩は石英を含まない緑色の岩石で、斜長石の四角い斑晶を伴うことが多い。風化しやすいが、粘りがある硬さの玉石として地表に残ることがある。成形しやすいので、石斧として利用されている。安山岩と流紋岩はこうもり塚古墳石室の石材に少数認められた。

山砂利層礫岩

およそ2千8百万年前頃の古第三紀に堆積した礫岩である。当時の河原に堆積した地層で、細長い分布は河川があった場所を示す（鈴木ほか2009）。中礫から大礫サイズの円礫～亜円礫からなる。礫の種類は流紋岩質凝灰岩、流紋岩、安山岩、泥岩ホルンフェルスが多い。これらの礫は石錘などに利

用されることがある。現河川の河原石とは表面の風化や色調で区別できる。河原石は常に水流の影響を受けて新鮮であるが、山砂利層の礫の表面は、風化による劣化や変色が認められる。

2 こうもり塚古墳石室の石材

花崗岩、花崗閃緑岩、安山岩、流紋岩、泥岩ホルンフェルスが識別できた。また花崗岩はさらに大結晶をなすカリ長石を伴うもの、粗粒均質なもの、細粒均質なものに区別した。

カリ長石大結晶を伴う花崗岩

粗粒な石英と斜長石の中に1cm程度の大きなカリ長石の結晶が斑点状に含まれる(写真11-1)。黒雲母の結晶は細粒で少ない。石室に利用されている大型の石材など大半の石材がこのタイプである。



1 カリ長石大結晶を伴う花崗岩



2 粗粒均質な花崗岩



3 細粒均質な花崗岩



4 流紋岩

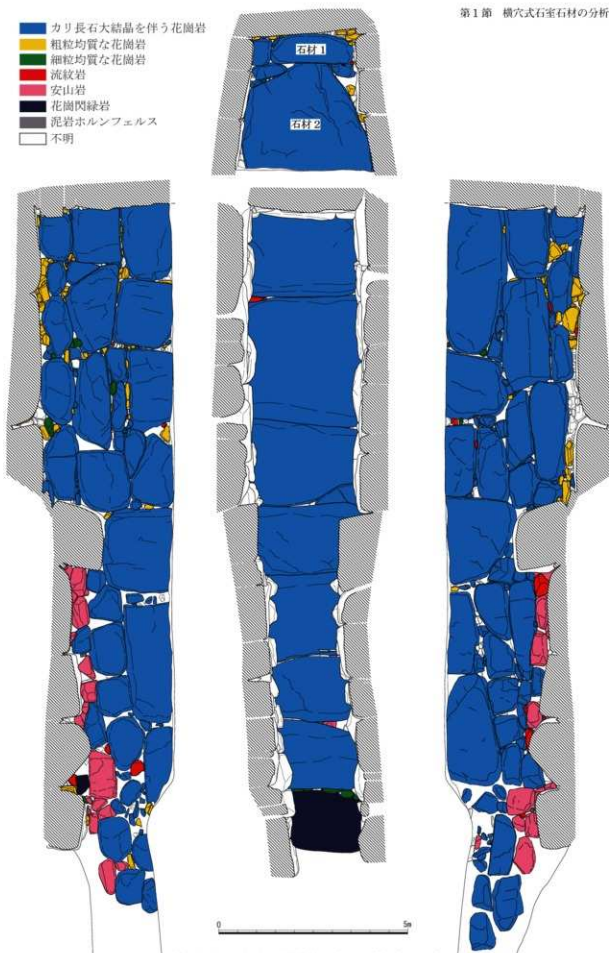


5 安山岩



6 花崗閃緑岩

写真11 こうもり塚古墳石室の石材



第80図 こうもり塚古墳石室の石材 (1/100)

これによく似た花崗岩は庚申山をはじめ、こうもり塚古墳の北側に分布するが、南側での分布も否定できない。

粗粒均質な花崗岩

1～2mm程度の石英、斜長石、カリ長石の結晶がほぼ同じサイズをなして構成している（写真11-2）。黒雲母は少ない。この粗粒な花崗岩とカリ長石大結晶を伴う花崗岩のカリ長石大結晶がない部分とは区別しがたい。採取地はカリ長石大結晶を伴う花崗岩と同一岩体だった可能性もある。

細粒均質な花崗岩

石英、斜長石、カリ長石、黒雲母からなるが、結晶のサイズは1mm以下のものが多く、大きさにばらつきがある（写真11-3）。黒雲母は微粒である。このような細粒の花崗岩は数m程度の小規模な岩体として、大きな花崗岩体中に産出することが多い。石材としても少ない。上記花崗岩の分布域に局部的に産出したものと推測される。

流紋岩

灰白色の石英主体の硬い岩石である（写真11-4）。珪質で微粒な鉱物からなるが、石英や長石と識別できる程度の大きさの結晶も含む。おそらく岩脈として産出するタイプの流紋岩と推測される。

安山岩

濃緑色の微粒な石基に、白色四角形の斜長石と暗緑色の角閃石の斑晶が混じっている（写真11-5）。流紋岩と同様に岩脈として産出したものと推測される。

花崗閃緑岩

2mm程度の斜長石、角閃石、黒雲母、石英からなる塊状均質な岩石である（写真11-6）。濃緑色から黒色の角閃石と黒雲母の割合は花崗岩より多く目立つ。

泥岩ホルンフェルス

黒色緻密な硬い岩石で、石室石材としてごく少数認められた。こうもり塚古墳周辺では、軽部、中山あるいは足守川上流の黒谷にこれと似た岩石が分布する。

3 石室床面の敷石

流紋岩質凝灰岩がほとんどを占め、流紋岩、泥岩ホルンフェルスなどからなる。これらはいずれも硬く割れにくい。敷石は円礫形をなし、いずれも堅硬新鮮で表面がよく磨かれていることから、山砂利層由来ではなく、現河川の高梁川のもと考えられる。流紋岩質凝灰岩は高梁川流域に広く分布する。流紋岩は流紋岩質凝灰岩より分布域は少ないが、流域に普通に存在する。泥岩ホルンフェルスは美袋周辺に分布している。

4 石棺の石材

これまでの見解どおり浪形石（写真12-1）である可能性が最も高い。石棺の石材は貝殻片からなる石灰岩である（貝殻石灰岩）（写真12-2）。貝殻は数mm～1cm程度の破片になっている。まれにパイプ状をなす巣穴化石が認められる。破片となった貝殻が潮流によって浅海に運ばれて地層になったものである。井原市に分布する浪形層には同じ産状の貝殻石灰岩が分布している。産出する貝化石（Matsubara,2013）とサメの歯化石（田中ほか2006）から浪形層は古第三紀の地層であることが明らかにされた。



1 浪形石 (井原市千手院)

2 こうもり塚古墳石棺の石材

写真12 石棺の石材

5 石材表面の赤色部について

石室奥壁の石材1と2には赤い色が付いている(第80図)。いずれも岩石はカリ長石大結晶を伴う粗粒花崗岩である。石材2では赤色部と非赤色部の境界が認められる(写真13-1)。境界部は漸移的である(写真13-2)。この赤色部は節理面にそって顕著である(写真13-3)。石材1の赤色部では赤色になっていない鉱物(石英らしい)がある(写真13-4)。これらの産状は自然の作用で形成されたものに似るが、塗料が長年の劣化で漸移的にはがれたり、鉱物によって剝落しやすいものがあることも考えられる。



1 石材2の赤色部とその周辺

2 赤色部非赤色部境界



3 石材2の赤色部と節理面

4 石材1の赤色部

写真13 石材表面の赤色部

参考文献

- 赤木健 1927 「岡山」『75,000分の1地質図』地質調査所
- 岡山県内地質図作成プロジェクトチーム 2020 『改訂版岡山県地質図 (5万分の1・岡山県全域/21図幅) 及び説明書』西部技術コンサルタント株式会社
- 産総研地質調査総合センター 2022 『20万分の1日本シームレス地質図V2』 (<https://gbank.gsj/seamless>) (閲覧日: 2022年9月12日)
- 鈴木茂之・松原尚志・松浦浩久・檀原徹・岩野英樹 2009 「岡山市周辺の吉備高原に分布する古第三系〔山砂利層〕と海成中新統」『地質学雑誌』vol.115 補遺
- 田中猛・藤田義朝・森信敏 2006 「岡山県井原市の浪形層より産出したサメの歯化石とその生層序学的意義」『瑞浪市化石博物館研究報告』第33号
- 寺岡易司・松浦浩久・牧本博・吉田史郎・神谷雅晴・広島俊男・駒澤正夫・志知龍一 1996 「高梁」『20万分の1地質図幅』地質調査所
- 松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・斉藤文紀・牧本博・利光誠一・巖谷敏光・駒澤正夫・広島俊男 2002 「岡山及丸亀」『20万分の1地質図幅』産総研地質調査総合センター
- Matsubara Takashi 2013 「Molluscan fauna of the "Miocene" Namigata Formation in the Namigata area, Okayama Prefecture, southwest Japan.」『地質学雑誌』vol.119 (4)

第2節 こうもり塚古墳出土亀甲形陶棺の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

1 はじめに

こうもり塚古墳出土の土師質亀甲形陶棺の胎土分析を行い、この陶棺の生産地や胎土の特徴について検討した。そして、生産地推定の比較試料としては、津山市内と赤磐市土井遺跡出土（岡山県内で唯一の埴輪・陶棺焼成窯）の陶棺である。また、陶棺ではないが、前内池古墳群出土の埴輪も比較試料とした。比較した理由としては土井遺跡や前内池古墳群が位置する可真川の流域では、畑古墳、八つ塚古墳、小丸古墳、土井谷1号墳で出土している陶棺の外面に波状文を施すものが出土しており（岡山県教育委員会2005）、こうもり塚古墳との関係を推測するために陶棺以外の器種も比較試料とした。

胎土分析は蛍光X線分析法と肉眼観察（マイクロスコープで土器表面の砂粒を観察）で実施した。

2 分析方法・試料

分析は蛍光X線分析法で胎土の元素濃度を、また、マイクロスコープでは土器表面の砂粒観察を行った。

蛍光X線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した陶棺、須恵器の差異について検討する方法である。測定した元素は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 、 Rb_2O 、 SrO 、 ZrO_2 の13元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下のとおりである。

測定装置：エレメントアナライザー JSX-3203EV（日本電子）を使用した。

測定条件：X線照射径3mm、電流1.00mA、電圧30kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）の3試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100～200メッシュ）にしたものを加圧成形機で約 10^4 の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。また、マイクロスコープでは10～30倍で土器表面を観察し、砂粒構成について調べた。

分析試料は、表4に示しているこうもり塚古墳から出土した同一個体の陶棺6点（蓋、身、脚）である。また、生産地推定の比較試料としては、赤磐市土井遺跡の集積地などから出土した陶棺、埴輪と前内池古墳群出土の埴輪、津山市内の各古墳出土の陶棺である。

3 分析結果

この分析ではCaO（酸化カルシウム）、K₂O（酸化カリウム）、Rb₂O（ルビジウム）、SrO（ストロンチウム）、ZrO₂（ジルコニウム）の5元素で散布図を作成し検討した。

第81図K₂O-CaO、第82図K₂O-TiO₂、第83図Rb₂O-SrOの各散布図では、こうもり塚古墳出土の陶棺は、津山市内出土の陶棺と胎土が類似していた。しかし、第82図K₂O-TiO₂散布図は、こうもり塚陶棺と前内池の埴輪がほぼ重なることも分かった。そして、第84図Rb₂O-ZrO₂の散布図では、こうもり塚古墳と土井遺跡の陶棺にはZrO₂の量が多く含まれており、この散布図では津山市内、土井遺跡、こうもり塚古墳の三つの胎土に分類が可能であった。また、土井と前内池の埴輪は土井遺跡の陶棺とほとんど同じであった。ただ、前内池の埴輪にはこうもり塚古墳の陶棺の胎土に近いものがあった。

次に、こうもり塚古墳出土陶棺のマイクロスコープによる表面観察では、6点の陶棺とも2mm以下の石英を多く含み、0.5mm以下の長石、黒雲母を稀に含んでいた。なお、砂粒構成より花崗岩起源の粘土と考えられる。

4 まとめ

こうもり塚古墳出土の陶棺と土井遺跡（生産地）の陶棺・埴輪、前内池古墳群の埴輪、津山市内の陶棺と比較したところ、第84図Rb₂O-ZrO₂の散布図では、いずれの陶棺も胎土が異なっており、こうもり塚古墳出土の陶棺の生産地は、はっきりしなかった。また、こうもり塚古墳と土井遺跡、前内池古墳群の埴輪でも胎土が異なりほぼ識別ができたが、前内池の埴輪のうち1点、こうもり塚古墳と類似するものがあった。

なお、こうもり塚古墳、土井遺跡、前内池古墳群はZrO₂の含有量が津山市内の陶棺に比べて多いことが分かった。この含有量の違いとして考えられることは、土井遺跡が立地する地質構造は花崗岩地帯で、津山市内は堆積岩、変成岩地帯であり、この違いが胎土にもあらわれたことが考えられる。つまり、一般的にZrO₂の含有量は花崗岩などの深成岩に多く含まれることがいわれており、このことがこの分析結果にも出たことが十分考えられる。したがって、こうもり塚古墳出土陶棺は花崗岩地域の粘土で製作されたことが考えられる。

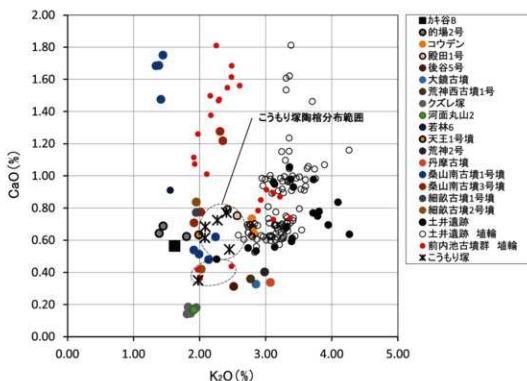
この分析では、こうもり塚古墳出土の陶棺と胎土が完全に一致するものはなかったものの、土井遺跡、前内池古墳群が位置する可真川上流域の陶棺や埴輪に近いものがあり、この地域に生産地があることが推測される。

引用・参考文献

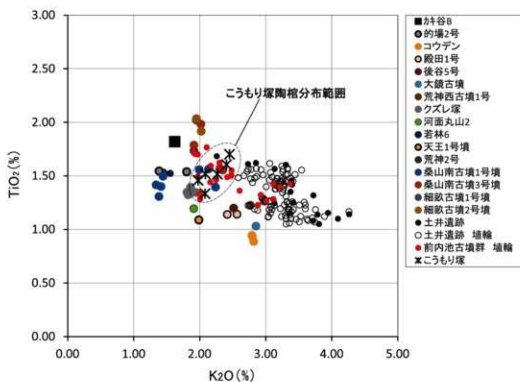
- 黒田吉益・諏訪兼位 1989『偏光顕微鏡と岩石鉱物（第2版）』共立出版株式会社
 岡山県教育委員会 2003『前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告174
 岡山県教育委員会 2005『土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告191

表4 こうもり塚古墳出土陶棺の分析結果（%）

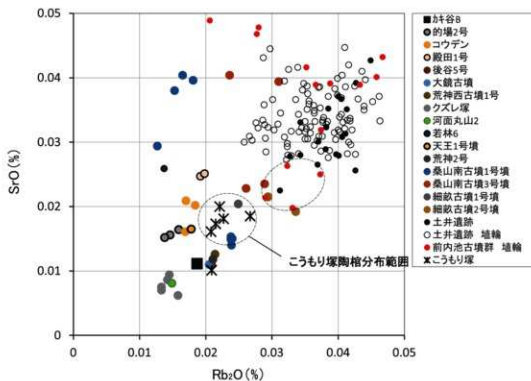
番号	器種	部位・特徴	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
1	陶棺	蓋 (赤褐色)	65.745	1.516	18.311	10.712	0.072	0.000	0.724	0.037	2.268	0.442	0.0267	0.0185	0.1266
2	陶棺	蓋 (褐色)	68.902	1.605	13.842	11.065	0.055	0.000	0.771	0.122	2.406	1.070	0.0221	0.02	0.116
3	陶棺	身 (赤褐色)	68.747	1.333	16.748	9.533	0.068	0.000	0.615	0.212	2.080	0.518	0.0208	0.0161	0.1058
4	陶棺	身 (褐色)	69.298	1.457	15.757	10.583	0.083	0.000	0.350	0.000	1.976	0.357	0.0209	0.0101	0.1015
5	陶棺	脚 (赤褐色)	67.934	1.518	14.762	11.883	0.179	0.000	0.684	0.000	2.086	0.789	0.0227	0.0181	0.1216
6	陶棺	脚 (褐色)	68.787	1.702	12.184	11.603	0.044	0.000	0.543	0.000	2.451	2.506	0.0215	0.0173	0.1347



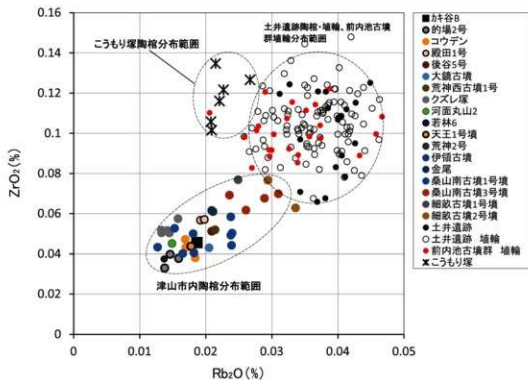
第81図 こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内陶棺の比較①



第82図 こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内陶棺の比較②



第83図 こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内陶棺の比較③



第84図 こうもり塚古墳陶棺と土井遺跡・津山市内陶棺の比較④

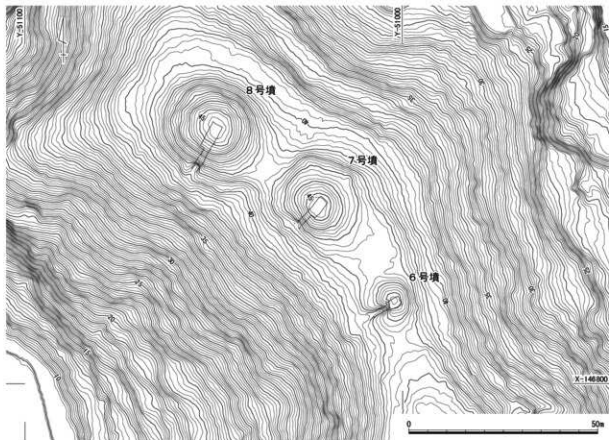
第5章 関連古墳の調査

第1節 緑山古墳群の測量調査

1 調査の経緯と経過

緑山古墳群は、総社市上林に位置する東西約250m、南北約300m、標高約45mの丘陵上に所在する(第85図)。現在、19基の古墳が知られており、うち17基が横穴式石室を有する古墳である。丘陵の北西頂部から8号墳、7号墳、6号墳、4号墳が並んでおり、そのほかの古墳の大部分は丘陵南斜面に分布する。そのうち、緑山4号墳、7号墳、8号墳は横穴式石室の全長が10mを超え、特に8号墳は全長15.2mを測り、群中で最大規模、県内の横穴式石室でも屈指の規模を誇る。

本古墳群は古くから『岡山縣通史』(永山1930)、『吉備郡史』(永山1937)で紹介され、特に『吉備郡史』では4基の横穴式石室の略図が掲載された。その後、昭和27年に岡山大学考古学研究部が実施した分布調査(近藤編1987、以下、『分布調査1952』)で12基、昭和50年に刊行された岡山県教育委員会による『岡山県遺跡地図』(岡山県教育委員会1975、以下『県遺跡地図1975』)では15基、昭和51年



第85図 緑山古墳群(6～8号墳)地形測量図(1/1,000)

に刊行された岡山大学考古学研究部による分布調査（岡山大学考古学研究部1976、以下「分布調査1976」）で16基、昭和62年に刊行された緑山古墳群調査団による同古墳群の発掘調査報告書（近藤編1987、以下、「緑山調査報告」）では19基（消滅古墳を含む）、平成15年度刊行の「岡山県遺跡地図」（岡山県教育委員会2003、以下「県遺跡地図2003」）では22基（不明古墳を含む）が報告されている。

緑山古墳群について、西川宏は、昭和50年に出版した「吉備の国」（西川1975、以下「吉備の国」）で、この古墳群が首長墓級の大規模古墳を世代を重ねて築いていることから、「とくに有力な首長家（首長の世帯共同体）の墓地」であった可能性を指摘し、あわせて、緑山古墳群の主要な横穴式石室の計測値を掲載した（西川1975）。緑山古墳群を含む三須丘陵の分布調査を行った岡山大学考古学研究部は、「分布調査1976」の中で、緑山頂上グループの古墳が三須丘陵の他のグループの古墳と比べ、墳丘・石室規模がきわだって大きいことを述べている（岡山大学考古学研究部1976）。その後、「総社市史」の編纂を契機に岡山大学考古学研究室を中心とする緑山古墳群調査団が、昭和57年から59年にわたり緑山6号墳の発掘と緑山1・4・7・8号墳の横穴式石室の実測を行い、その成果を「緑山調査報告」に収載した（近藤編1987）。この調査により、この地域の横穴式石室の編年研究が進み、玄室の平面形が細長くなる傾向や、奥壁や側壁最下段の石材が大型化する方向性などが示された（新納1987）。これは、今日に至るまで、こうもり塚古墳や江崎古墳をはじめとする周辺の大型横穴式石室の変遷を考える上で重要な指標となっている。さらに、昭和57年に市道改良拡幅工事に伴い緑山17号墳が発掘され、その結果、この古墳が、径約16m前後の円墳で全長9.8mの横穴式石室を有することが明らかになった。その横穴式石室から蓮華文や唐草文の象嵌を施した鉄装銀象嵌大刀が出土したことは特筆される（村上編1984）。

このように、緑山古墳群は吉備中枢地域に所在する大型の横穴式石室を有する古墳群と評価されてきた。しかし、これまでに公表されている緑山古墳群の地形及び墳丘測量図は、国土座標を欠く上、特に、緑山7・8号墳の墳丘測量図は略測図での公開となっており（近藤編1987）、詳細な研究を行う上で精度を欠いていた。そこで、岡山県教育委員会は、令和2年度に、こうもり塚古墳の出現背景などを考える上で不可欠な緑山古墳群を含む周辺の古墳群の測量を、史跡こうもり塚古墳の航空レーザ測量にあわせて実施した（図版37-1）。さらに、総社市、地権者及び岡山大学考古学研究室の協力を得て、令和3年2月に緑山6・7・8号墳の横穴式石室の再測量をデジタル写真を利用したSfM（フォトグラメトリ）で実施した。（金田）

表5 緑山古墳群（6～8号墳）計測表

古墳名	墳形規模	内部施設	石室全長	玄室			羨道			主軸	備考
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ		
6号墳	円墳 径15.6	横穴式石室 (両袖)	(6.2)	3.7	2.5	2.2	(2.5)	1.0	1.3	N-64°-E	発掘調査あり 高さは推定床面 (41.4m) からの高さ
7号墳	円墳 径約30	横穴式石室 (右片袖)	(10.3)	5.4	2.6	(2.8)	(4.9)	1.4	(1.2)	N-44°-E	
8号墳	円墳 径約33	横穴式石室 (左片袖)	(15.2)	7.0	2.9	4.1	(8.2)	1.8	2.3	N-29°-E	一部発掘調査あり 高さは推定床面 (39.2m) からの高さ

内容は今回の測量成果による。単位はすべてメートル。括弧内の数値は計測可能な範囲での残存値

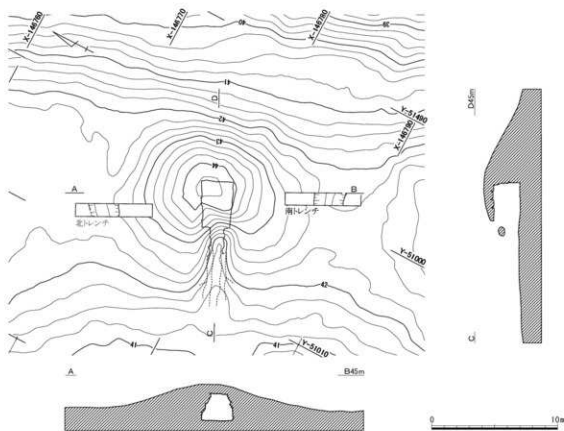
2 緑山6号墳

これまでの調査

緑山6号墳は緑山山頂から50mほど北西の尾根上に位置する。「吉備の国」では「緑山9号墳」、「分布調査1976」では「115号墳」と呼称されている。昭和58・59年に緑山古墳群調査団が緑山6号墳として発掘調査を実施しており、その成果は「緑山調査報告」で公表されている。横穴式石室から須恵器、土師器、刀、鉄鎌、馬具、鉄釘などが出土した。現在は羨道や横穴式石室内の埋土が除去された状態で保存されているが、発掘調査当時は羨道が埋没し、天井石1枚が外されてできた穴から横穴式石室内に入入りできたと記述されている。

墳丘（第86図、図版38）

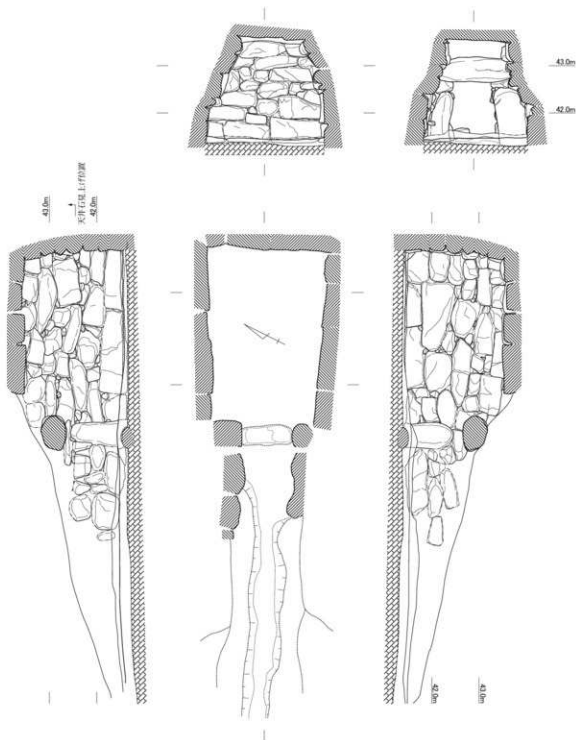
発掘調査前の緑山6号墳の形状については、「吉備の国」に径18.0mの円墳と記載されている。現在は、標高約44.3mの墳頂を中心に径16mほどの楕円状の高まりが残存し、北西側に緑山7号墳が隣接する。墳丘の長軸方向は緑山の尾根に繋がり、尾根に直交する短軸方向は前面、背面とも急傾斜となっている。墳丘については発掘調査が行われており、横穴式石室主軸に直交する方向にトレンチが設定された。調査の結果、墳丘南側のトレンチでは尾根方向に直交するかたちで設けられた幅2.35m、深さ0.45mの周溝を、北側のトレンチでは墳丘中心から7.8mのところまで周溝の屑を検出している。この周溝の位置から、緑山6号墳は直径15.6m、高さ2.4mを測る円墳であることが分かった（「緑山調査報告」）。なお、埴輪や葺石といった外表施設は確認されていない。



第86図 緑山6号墳墳丘測量図 (1/300)

横穴式石室 (第87・88図、図版38)

先述のとおり、横穴式石室は発掘調査が実施されており、その成果は『緑山調査報告』に掲載されている。このたび作成した石室実測図(第87・88図)は新たに実測したものであり、細部は『緑山調査報告』のものとは若干異なる。発掘調査以後、床面に流入土が堆積しており本来の床面は確認できなかったため、埋没していた部分は『緑山調査報告』の実測図で補足した。



・横穴式石室の現地地表下の石材は『緑山調査報告』の図面を合成したものである。

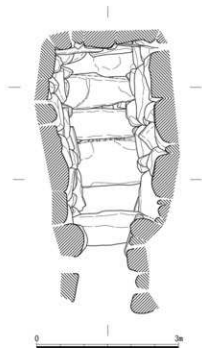
第87図 緑山6号墳横穴式石室実測図 (1/80)

横穴式石室は両袖式で、今回の測量による石室の寸法は、残存長6.2m、玄室長3.7m、玄室幅2.5mで、玄室高は2.2m、羨道は長さ（左壁）2.5m、高さ1.3mを測る。主軸は「緑山調査報告」ではN-68度-Eとあるが、今回の調査ではN-64度-Eを測った。「緑山調査報告」では、墳丘に設けられたトレンチで地山に相当する風化花崗岩が検出されたとあり、旧地表面から深さ1m余りの墓坑を掘った後に石室を構築したと推定される。石材の多くは花崗岩である。

奥壁は横方向に長い小振りの石材を6段積み上げる。最下段には細長いやや大型の石材を右側から大きい順に3石設置している。そのうち、大きな二つの石材は石室中軸に近い位置を境にして据え置かれている。基底石から上面は、横方向に部分的に目地をそろえながら、ほぼ垂直に積み上げられている。特に標高42.7m付近では積み方に大きな差異が認められ、同レベル以下では、奥壁を扶むように側壁が構築されるが、これより上ではそのようになっていない。「緑山調査報告」では奥壁中央の床面から0.6m付近の四角い石に赤色顔料がよく残るとあるが、現状でも確認できる。左右両側壁も同様に、最下段には横長の大きな石材3~4個を直列に配置し、その上面に同じく横方向に長い石材を5~6段積み上げる。「緑山調査報告」にも言及されているが、特に標高42.5m付近で目地が横に通っている部分があり、ここで作業工程が分かれたことが推測できる。玄室の天井石は1石分が失われており、4石が残存している。欠失している天井石から、前壁は2段以上であった可能性が高い。左右の袖石には細長い石材を利用し、その上に薄い石材で高さを調整した後に天井石を架構している。袖の幅は右側で0.45m、左側で0.7mを測る。玄門は幅1.0m、高さは床面から1.3mを測る。「緑山調査報告」では榎石が報告されているが、測量時には埋没しており確認できなかった。発掘調査の結果、玄室は礎敷で、鉄釘を使用した木棺が、石室主軸方向に2基並べられていたことが報告されている。

羨道は玄室より小振りの石材を使用している。羨道は3段が残るが、「緑山調査報告」では本来は4段であったのではと推測する。天井石は1石が残存している。「緑山調査報告」ではほかに1~2枚の天井石の存在を想定しているが、羨道部には天井石が当初からなかったとする説もある（藤田2003）。しかし、緑山6号墳と同規模で同構造の緑山11号墳（塩毛古墳）で羨道の天井石が2石確認されていることから、緑山6号墳も複数枚の羨道の天井石を想定すべきであろう。また、緑山11号墳では榎石が一段下がり、この地域の特徴を示すが、緑山6号墳については不明である。「緑山調査報告」によると、羨道部分には主に土盛による閉塞施設が存在し、本来は榎石まで達していたと推測されている。さらに、断面をU字形に掘り窪めた形状の墓道が羨道から4m程度外側に延びている。

緑山6号墳の築造時期であるが、発掘調査の結果、TK10型式からTK209型式に相当する須恵器が出土している。このことから、本墳は6世紀中葉に築造され、7世紀初頭まで追葬が続いたと推測できる。現段階では、緑山古墳群中における初期横穴式石室と評価されている。（金田）



第88図 緑山6号墳横穴式石室天井見上げ図（1/80）

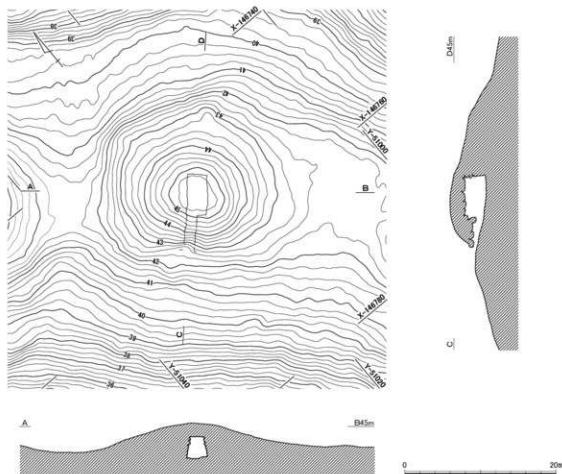
3 緑山7号墳

これまでの調査

緑山7号墳は緑山山頂から北西に約80m離れた場所に立地し、緑山6号墳と8号墳の間に位置する。「吉備郡史」では「緑山二ノ塊」、「吉備の国」では「緑山10号墳」、「分布調査1976」では「114号墳」と報告されている。緑山7号墳の墳丘については、「緑山調査報告」に等高線50cm間隔の測量図が掲載されている。横穴式石室の実測図については、「吉備郡史」と「分布調査1976」で略測図が示されているが、「緑山調査報告」において詳細な実測図が報告されている。発掘調査は行われていない。

墳丘（第89・93図、図版39）

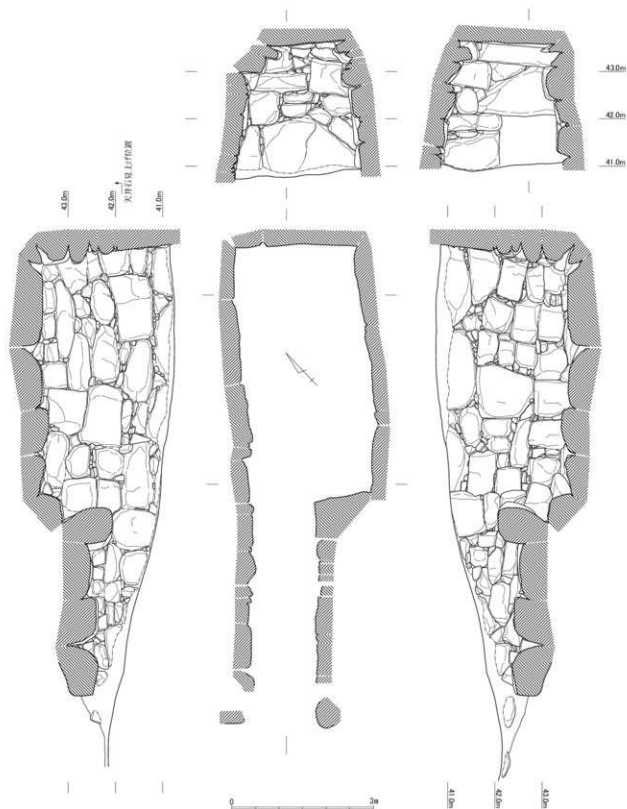
墳丘は、現状では標高約45.5mを測る頂部を中心に径25m、高さ4mほどの高まりとして残存する。「吉備の国」では径26m、高さ4.6m、「分布調査1976」では径17.4m、高さ5.3m、「緑山調査報告」では径26m、高さ3.8mの円墳と記す。墳丘の発掘調査は行われていないが、尾根方向で標高41.5m付近の、尾根と直交方向で標高40.75m付近の傾斜変換点を墳端と推定すると、径約30m、高さ約4.5mの円墳に復元できる。尾根方向の東西には浅い周溝状の遺構が存在する。なお、葺石や埴輪などの外表施設は確認されていない。



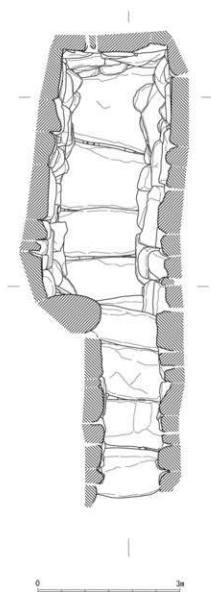
第89図 緑山7号墳墳丘測量図（1/500）

横穴式石室 (第90・91図、図版39)

横穴式石室は片袖式で、石室の主軸はN-44度-E (『緑山調査報告』ではN-47度-E) と南西方向に開口する。石室入口には土砂が厚く堆積していて、人が這って入れるほどの穴が開いている



第90図 緑山7号墳横穴式石室実測図 (1/80)



第91図 緑山7号墳横穴式石室
天井見上げ図 (1/80)

る。楣石は長さ1.6m以上、幅0.8m、高さ0.9m以上の大きな石材を使用しており、前壁を高くみせようとする意識がうかがえる。その形状から巨大な石材を割り、平坦な破面を下面と利用している。楣石の下面は羨道の天井石から0.5mほど下がった位置にある。羨道は入口に向かうにつれ土砂が堆積しており詳細は不明であるが、使用されている石材は玄室のものより小振りである。羨道の天井石は楣石をのぞき3石が残存する。『緑山調査報告』では本来もう一枚架構されていた可能性を指摘する。なお、『緑山調査報告』では開口部拡幅中に閉塞施設の一部とみられる石積みが確認されており、人頭大の角礫を利用していたと報告する。

先述のとおり、緑山7号墳では発掘調査が実施されておらず、出土遺物も知られていない。奥壁基底部の大きさ等から、緑山6号墳よりも後出し、緑山8号墳にやや先行する時期に築造されたと推定でき、6世紀中葉の古墳と考えられる。(金田)

ないが、内部には広い空間が存在する。石室残存長10.3m、玄室長5.4m、玄室幅2.6mで、床面は埋没しているため本来の高さは不明であるが、現状で2.8mを測る。羨道の残存長は約4.9m、幅1.4m、高さは現状で1.2mを測る。なお、『緑山調査報告』では石室全長を11.2mと計測するが、これは石室入口の天井石の端から約1.3mほど南西の位置にある石材までを計測したものである。しかし、今回の測量では、この石材は遊離している可能性が考えられたため、除外して扱った。石材の大部分は花崗岩である。

奥壁の基底石は幅2.1mの大型石材と幅0.55mの細長い石材の2石で構成されている。その上面から石材を積み上げ、標高42.6m付近で一旦水平に高さをそろえ、さらに上部に2～3段の石材を積み上げて天井石を架している。奥壁は約10度で内傾する。左右の側壁の最下段は流入土で不明であるが、幅1.0～1.8mほどの横長の石材を使用しているようである。左側壁は基底石4石が確認でき、標高42m付近まで不ぞろいながらも横方向の目地を意識しながら積み上げている。そして、天井石まで、さらに4～5段積み上げる。石材は、横方向に長い石材もみられるが、長方形あるいは方形に近い石材も目立つ。右側壁は3石の基底石が確認でき、その上面から2～4段の石材を積み上げている。側壁の中央部に幅1.1m、高さ1.2mの大型の石材を据え、その間に小さい石材を充填する。この大型石材の上面の標高43m付近に横目地がみられ、そこからさらに一段積み上げて天井石を架構する。左右側壁は10度ほど傾いているが、天井に近い標高43m付近から持ち送りがやや急になる。天井石は5石で構成される。玄門の楣石は現在2段を確認できる。下段の石材は楣幅1.2m、残存高約0.7mを測り、上面に1石積み上げたのちに楣石を架構す

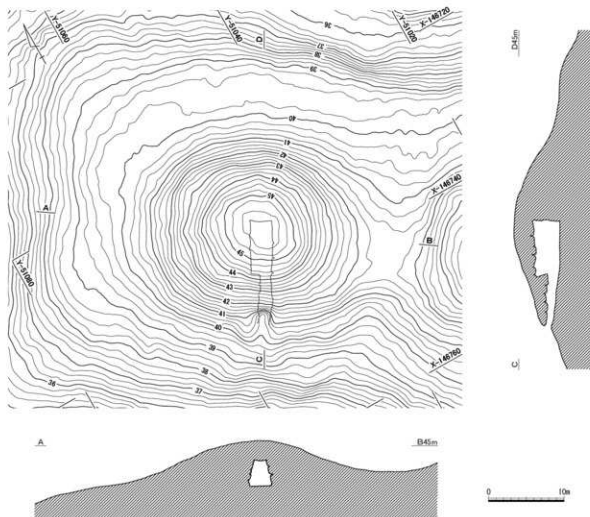
4 緑山8号墳

これまでの調査

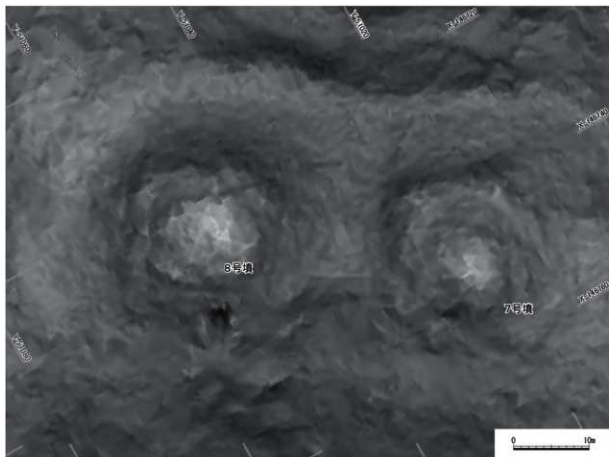
緑山8号墳は緑山丘陵北西端の標高45.7m付近に位置する。ここは、総社平野を広く望むことができる好位置である。「吉備郡史」では「緑山一ノ坊」、「吉備の国」では「緑山11号墳」、「分布調査1976」では「113号墳」と報告されている。「吉備郡史」には横穴式石室の略図が掲載されており、あわせて「裝飾付忌瓮（裝飾付脚付壺）」、「蓋付高杯（有蓋高杯）」、「大高杯（大形高杯）」、「横瓮（横瓶）」の4点が出土したことが報告されている。「分布調査1976」でも横穴式石室の略測図が示されるが、昭和62年刊行の「緑山調査報告」に詳細な石室実測図が掲載された。あわせて墓道と玄室の一部が調査され、須恵器や土師器が出土した。このたび、新たに墳丘測量図とあわせて石室実測図を作成した。

墳丘（第92・93図）

墳丘の大きさについては、「吉備の国」では径33.0m、高さ8.1mの、「分布調査1976」では径32m、高さ4.2mの、「緑山調査報告」では径約30～33m、高さ6.0mの円墳と記載されている。いずれにしても緑山頂部に所在する4、6～8号墳の中では最大の規模を誇る。墳丘の発掘調査は実施されておらず、正確な墳端を示すことはできないが、墳丘裾の傾斜変換点を目安に墳端を想定すると、径約33m



第92図 緑山8号墳墳丘測量図（1/500）



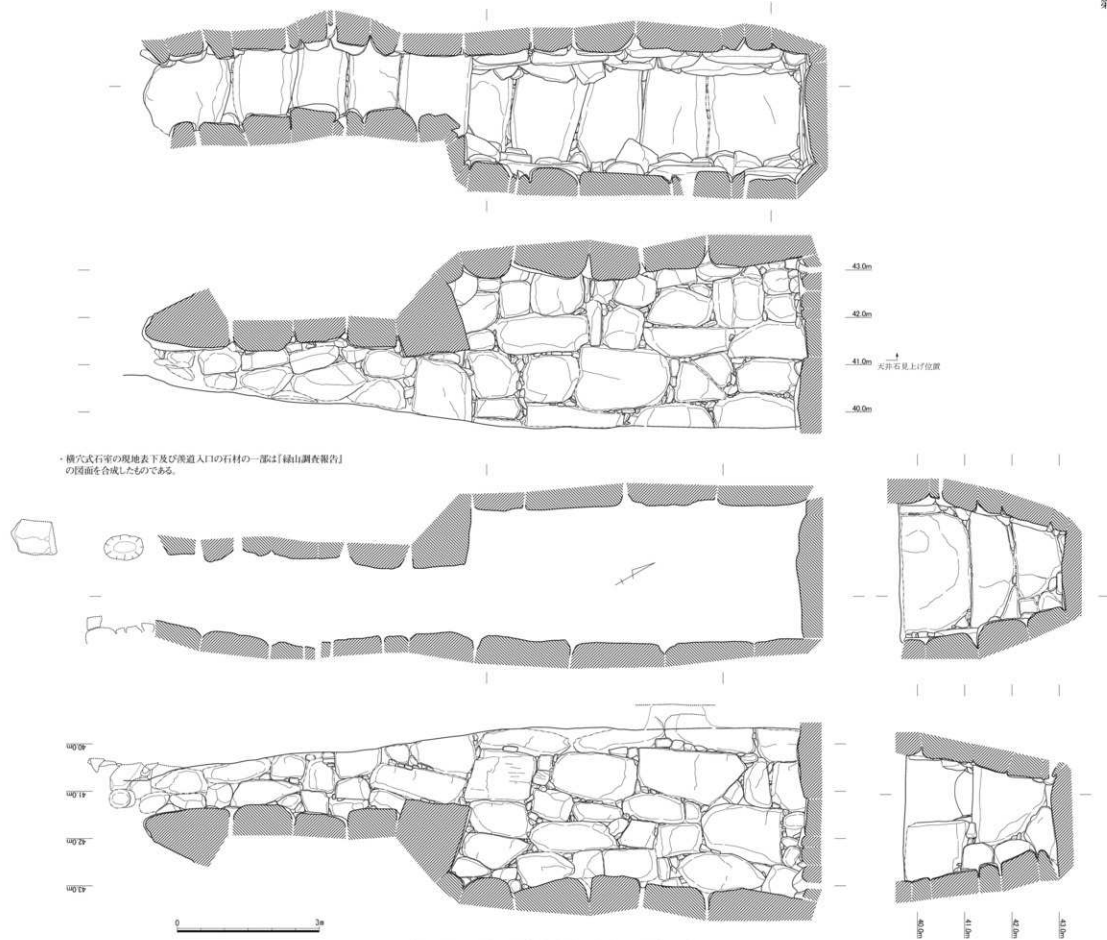
第93図 緑山7・8号墳丘測量図（赤色立体地図）（1/500）

の円墳に復元できる。高さは約6mを測り高い墳丘を持つが、現状では段築などの構造は明瞭でない。『緑山調査報告』でも記載されているが、墳丘の北側あるいは北西側には幅10mほどの緩やかな平坦面が巡っている。このテラス状の遺構については、第92図の等高線による測量図でも確認できるが、第93図の赤色立体地図でみるとより明瞭に視認できる。これによると、緑山8号墳は径約33mの墳丘の周りに幅5～8m程度のテラスが巡っている可能性が考えられる。なお、墳丘上には葺石や埴輪といった外表施設は確認されていない。

横穴式石室（第94図、図版40）

横穴式石室は墳丘のほぼ中心に位置し、N-29度-E（『緑山調査報告』ではN-35度-E）と南西方向に開口する片袖式の石室である。『緑山調査報告』で実測されている入口付近の石材が測量時に埋没していて確認できなかったため、現状での石室残存長は13.9mであるが、『緑山調査報告』の図面をあわせると石室残存長は15.2mに復元できる。玄室長7.0m、玄室幅2.9mで、現在測量できる玄室高は3.6mである。『緑山調査報告』にあるように攪乱坑の底で床面が確認されており、これを床面とすると本来の床面の高さは標高39.2mと考えられ、そこから想定される玄室の高さは4.1mとなる。羨道は長さ8.2m、幅1.8mで、羨道の高さは土砂で埋没しているが現状で約1.3mを測る。しかし、羨道の床面が玄室の床面と同レベルであると考えると約2.3mの高さが推定できる。横穴式石室の石材の大部分は花崗岩であった。

玄室奥壁は3段で構成されている。最下段には幅2.65m、高さ1.45m以上の基底石を据え、その上



第94図 緑山8号墳横穴式石室実測図 (1/80)

に2段積み上げる。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。左側壁の最下段は土砂の堆積で詳細は不明であるが、長さ2mほどの石材を3石並べている。最下段から上については、袖石上面（楣石下面）にあわせるように標高41.2m付近に横目地を明瞭に作り出している。さらにその上部には下段よりやや小振りの石材を積み上げている。右側壁も基底石には大型の石材を並べているが、大部分が埋没しており詳細は不明である。その上面の石材は、標高約41m付近で、奥壁最下段の石材上面や楣石下面の高さにあわせるように石材を積み上げているが、その上面はやや不ぞろいである。右側壁は、そこからさらに上方に2～3段石材を積み上げ、天井石を架橋する。両側壁は内傾しながら積み上げられており、その角度は約80度である。天井石は6石を数え、奥壁側の石材が一番大きい。玄門側の天井石は楣石と天井石の隙間を埋めるように設置されている。袖石には直方体状の石材を使用し、その大きさは幅1.1m、高さ約1.4m以上を測る。楣石は幅1.5m以上、高さ1.5m以上の大型の石材である。自然石を半蒔し、破面となる平坦面を下方に向けている。なお、『緑山調査報告』では玄室内の盗掘坑を清掃し、土層断面図を掲載しているが、それによると、現在の流入土下50cmで河原石による礫敷の床面のほか、追葬面も確認している。

羨道は下半部が埋没しており詳細は不明である。両側壁の石材は玄室より小振りのものを使用しており、その積み方も玄室に比べるとやや乱雑である。天井石は楣石を含め5石を数える。楣石はそのほかの羨道の天井石より20cmほど低く設置されている。『緑山調査報告』によると、測量調査時に墓道から羨道にかけて部分的な発掘調査が実施されており、2～3回分に相当する閉塞による堆積土を確認している。しかし、地山（床面）まで調査しておらず、追葬の正確な回数は不明であるとする。

緑山8号墳の横穴式石室の築造時期であるが、緑山7号墳に比べ石室の大型化が進み、玄室の平面形態も細長くなることから、緑山7号墳より後出すると考えられる。また、緑山8号墳では須恵器等の出土が知られており、そのうち、『吉備郡史』で報告された土器の詳細は不明であるが、『緑山調査報告』では発掘調査により須恵器杯蓋や杯身、甕、器台、土師器直口壺等が出土している。これらの須恵器はTK43型式ないしTK209型式に相当する。横穴式石室の形態や出土遺物の年代から推定すると、緑山8号墳は6世紀中葉頃に築造されたと推定でき、その後、少なくとも2～3回の追葬を経て、7世紀初頭頃まで利用されたと考えられる。

(金田)

参考文献

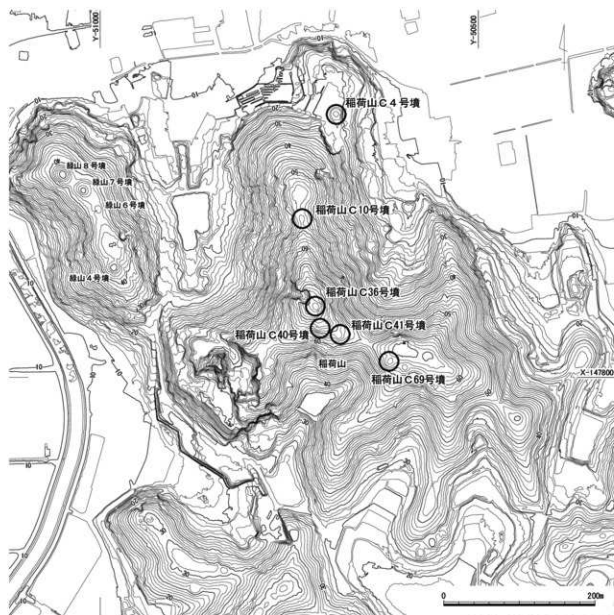
- 岡山県教育委員会 1975『岡山県遺跡地図 第3分冊』
 岡山県教育委員会 2003『改訂 岡山県遺跡地図<第5分冊 倉敷地区>』
 岡山大学考古学研究所 1976『三須丘陵遺跡分布調査報告』
 近藤義郎編 1987『緑山古墳群』総社市文化振興財団
 村上幸雄編 1984『緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡』総社市埋蔵文化財発掘調査報告1 総社市教育委員会
 永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会
 永山卯三郎 1937『吉備郡史』上巻 吉備郡教育会
 新納泉 1987『緑山古墳群の築造年代と形成の過程』『緑山古墳群』総社市文化振興財団
 西川宏 1975『吉備の国』学生社
 藤田憲司 2003『こうもり塚と江崎古墳』吉備考古ライブラリー・9 吉備人出版

第2節 稲荷山古墳群の測量調査

1 調査の経緯と経過

緑山古墳群が所在する緑山の東側に東西約600m、南北約700mの独立丘陵が存在する（第95図）。この丘陵は、岡山大学考古学研究部が昭和51年に刊行した『三須丘陵遺跡分布調査報告』（岡山大学考古学研究部1976、以下『分布調査1976』）では「上林山」と呼称されているが、「稲荷山」と称されることが多いことから、本節では「稲荷山」の名称を使用する。この稲荷山は山頂で標高75mを測り、東西に延びる丘陵の南北に細長い尾根がいくつも取り付いた地形となっている。

この稲荷山には数多くの古墳が存在することが知られてきた。昭和12年の『吉備郡史』（永山1937）



第95図 稲荷山古墳群地形測量図（1/5,000）

に稲荷山の古墳と考えられる横穴式石室の略測図（増弁塚古墳）が掲載されているが、現状の古墳との比定が困難となっている⁽²⁾。昭和50年刊行の『岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会1975、以下『県遺跡地図1975』）では、稲荷山の西半分の古墳群を稲荷山古墳群、東半分をドンドン山古墳群と呼称しており、現在の遺跡地図もこれに従っている。この『県遺跡地図1975』では、稲荷山古墳群として72基が報告されており、そのうち横穴式石室を持つ古墳として11基を記載する。他方、ドンドン山古墳群についても58基の記載があり、そのうち横穴式石室を持つ古墳として7基を報告している。しかしながら、『県遺跡地図1975』では、個々の古墳に関する詳細な情報が少なく、遺跡地図の縮尺も25,000分の1で、現地の古墳との対応関係の把握が難しい。昭和27年に岡山大学考古学研究部が実施した分布調査成果（近藤編1987、以下『分布調査1952』）では、稲荷山・ドンドン山の両古墳群で合わせて113基の古墳が報告されており、そのうち、横穴式石室の存在が確認できる古墳は80基となっている。その後、昭和51年に『分布調査1976』が刊行され、古墳時代前半期の古墳30基と後半期の古墳54基が報告された。

これらの調査成果のうち、もっとも古墳の記録数が多いのは『分布調査1952』であるが、個々の古墳の情報量が充実しているのが『分布調査1976』である。この『分布調査1976』の調査では、稲荷山に所在する古墳群を「上林山西ピーク南斜面密集グループ」「上林山東ピーク南斜面グループ」「上林山南西尾根南斜面グループ」に区分し、各グループにおける古墳を悉皆的に調査した上、各古墳の位置を示しているほか、グループごとの特徴や変遷をまとめている。この分布調査で特筆すべきことは、略測図であるが横穴式石室の実測図が多く掲載されていることである。そのため、現地に残っている古墳との比定が可能な状態となっている。しかし、これ以後、稲荷山に存在する古墳の墳丘や横穴式石室の調査は行われておらず、昭和62年に刊行された『総社市史』においても詳しく言及されていない。こうもり塚古墳の背後に位置し、吉備の重要な地域に存在するだけに、その詳細な現地調査が課題となっていた。

表6 稲荷山古墳群（C4・C10・C36・C40・C41・C69号墳）計測表

古墳名	墳形規模	内部施設	石室全長	玄室			羨道			主軸	備考
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ		
C4号墳	円墳 径約20	横穴式石室 (右片袖)	(8.1)	5.7	2.4	(2.4)	(2.4)	1.5	(0.6)	N-69°-W	後半期 57号墳 (分布調査1976)
C10号墳	円墳 径約13	横穴式石室 (右片袖)	(6.3)	3.5	1.9	(1.6)	(2.8)	1.2	(1.0)	N-77°-E	後半期 63号墳 (分布調査1976)
C36号墳	円墳 径約20	横穴式石室 (左片袖)	9.2	4.0	1.9	1.9	5.2	1.3	1.3	N-23°-W	稲荷山31号墳 (県遺跡地図1975) 後半期 69号墳 (分布調査1976)
C40号墳	円墳 径約8	横穴式石室 (無袖)	(3.6)	-	奥壁 0.9	奥壁 (0.8)	-	-	-	N-1°-E	後半期 76号墳 (分布調査1976)
C41号墳	円墳 径約14	横穴式石室 (右片袖)	(7.5)	4.0	2.0	(2.0)	(3.5)	1.3	(1.1)	N-3°-W	後半期 77号墳 (分布調査1976)
C69号墳	円墳又は方墳 径約18	横穴式石室 (左片袖)	(7.4)	4.5	2.0	(1.9)	(2.9)	1.3	(1.1)	N-41°-E	後半期 94号墳 (分布調査1976)

内容は今回の測量成果による。単位はすべてメートル。括弧内の数値は計測可能な範囲での残存値

このたび、先述した緑山古墳群と同様、この稲荷山に存在する古墳群の調査が、こうもり塚古墳が築造された時期のこの地域における古墳の動向を探る上で極めて重要であると判断し、令和2年度に航空レーザ測量で古墳群の地形測量を行った（図版37-2）。あわせて、同年度に、地権者の協力を得て、以下に報告する6基の古墳について横穴式石室の実測（SIM）と写真撮影を実施した。

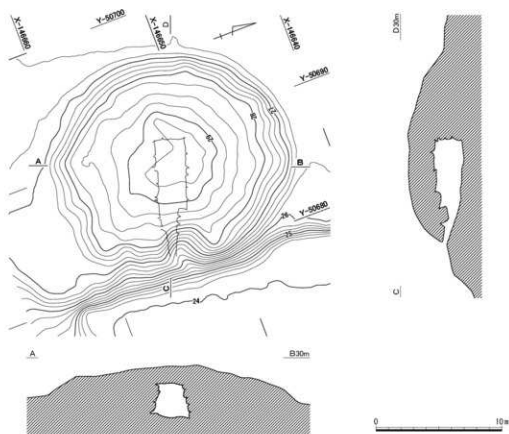
なお、今回、墳丘の測量と横穴式石室の実測を行った古墳は表6のとおりであるが、古墳の名称については、これまで、「分布調査1952」、「県遺跡地図1975」、「分布調査1976」でそれぞれ異なった名称が使用されてきた。そのため、今回呼称する古墳の名称については、稲荷山における古墳をリスト化して、今回調査した古墳との対比が可能である「分布調査1952」の調査成果に基づいた名称を使用する。「県遺跡地図1975」や「分布調査1976」で使用されている古墳名については、対応可能なものについて併記する。（金田）

2 稲荷山C 4号墳

これまでの調査

稲荷山C 4号墳は、稲荷山北麓の低台地に位置する。「分布調査1952」では径15mの円墳と報告されている。「分布調査1976」では後半期57号墳として報告されており、そこでは径20.5m、高さ2.9mの円墳と紹介されている。近年、古墳の南側を除き周辺は墓地造成で地形変化が進み、特に石室開口部のある東側は墳丘近くまで削平が及んでいる。

墳丘（第96図、図版41）

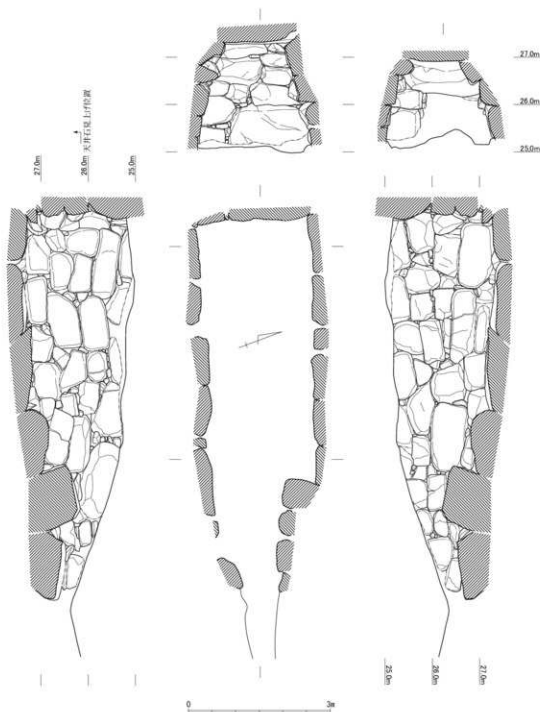


第96図 稲荷山C 4号墳墳丘測量図（1/300）

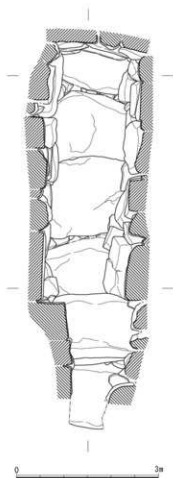
墳丘は、現在、南北約19m、東西約19mの範囲の高さ約3mの高まりとして残存する。墳頂は標高29.3mを測り、高木や石造物がある。全体的に草木が繁茂しているため、埴輪や葺石等の外表施設の確認は難しいが、現在まで発見されていない。周溝の痕跡も現状では観察できず、発掘調査歴もないことから、現状では、径約20m、高さ約2.8mの円墳と考えておきたい。

横穴式石室（第97・98図、図版41）

横穴式石室は東方向に開口し、入口に人がやっと入れる程度の穴がある。内部は入口付近では土が



第97図 稲荷山C4号墳横穴式石室実測図（1/80）



第98図 稲荷山C4号墳
横穴式石室天井
見上げ図(1/80)

天井近くまで堆積するが、玄室内の堆積は少ない。主軸はN-69度-Wで、右片袖式の横穴式石室である。『分布調査1976』には、石室内部は「かなり盗掘されて」とあるが、調査時点においても、石室内には石材の一部が散乱しているほか、堆積土の表面も凹凸がみられ、盗掘の痕跡をうかがわせた。石室は確認できる部分で残存長8.1m、玄室長5.7m、玄室幅2.4mで、玄室の高さは現状で2.4mを測る。羨道は玄門部で幅1.5m、高さは現状で0.6m、長さは石材が残存する部分で2.4mである。石室内埋土は部分的に掘り下げられているが、現状では床面は観察できない。石材は花崗岩を主体とする。

玄室の奥壁下面には幅約1.7m、現状で高さ約0.9mの大型の石材があり、基底石と考えられる。基底石の横には幅約0.55mと幅の狭い石が据え付けられている。基底石上には4段の石が積み上げられ、全体として5段積みとなっている。奥壁は上方がやや内傾するもののほぼ垂直に整えられている。左右側壁の最下段は埋没しており詳細は不明であるが、各々4~5石の基底石が据えられているものと推測される。その上面からは4~5段に石材が積み上げられて、持ち送りで内傾しながら天井に至る。左右側壁の積み方はよく似ており、横長の石材のほか、方形に近い石材も使用されている。右側壁の標高約26m付近には玄室側壁全体を通して横方向の目地がうかがえる。そのほかの部位の目地で明瞭なもののみはみられないが、右側壁で奥壁から約1.6m付近、左側壁で同じく約1.6m、約2.8m付近の基底石上面で、縦方向に石材の端をそろえたような目地がみられる部分がある。玄室の天井石は4石である。天井下面は奥側から玄門方向に向かうにつれ緩やかに傾斜するが、4石目は45cmほど下がった位置に架構される。そして、さらに0.5mほど下がった位置に巨大な石材を利用した楣石が設置される。楣石は玄室奥壁天井から約1m、羨道の天井石から約0.3m低く設置されている。袖石は右側壁に設置されているが、上から2石分が観察できるのみであり、下の石材の下部は埋没している。現状で袖幅約0.7m、埋没していない石材の高さ約0.8mを測る。なお、袖石の反対側の左側壁には長さ約1.6mの大きな石材を設置している。

羨道は大部分が埋没しており、また、羨道入口付近は墓地の造成により削り込まれて崖面となっているため、羨道の詳細な構造は不明である。羨道に使用されている石材は、羨道の上部しか観察できないが、玄室に比べ小振りの石材を使用しているようである。羨道の天井石は楣石を含め2石が残存しているのみである。

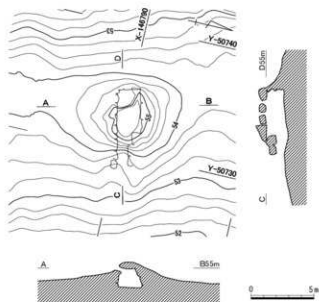
古墳の築造時期であるが、『分布調査1976』に土師器片が1片出土したと報告されるが、実測図が公表されていないため、詳細は不明である。石室の規模が緑山7号墳と近く、また、奥壁の高さの4割程度を基底石が占めている点や、方形に近い石材を使用しながら横目地に加え縦目地も観察できる特徴からも緑山7号墳との類似が指摘できる。このことから、稲荷山C4号墳は緑山7号墳に近い6世紀中葉頃に築造されたものと考えられる。

(金田)

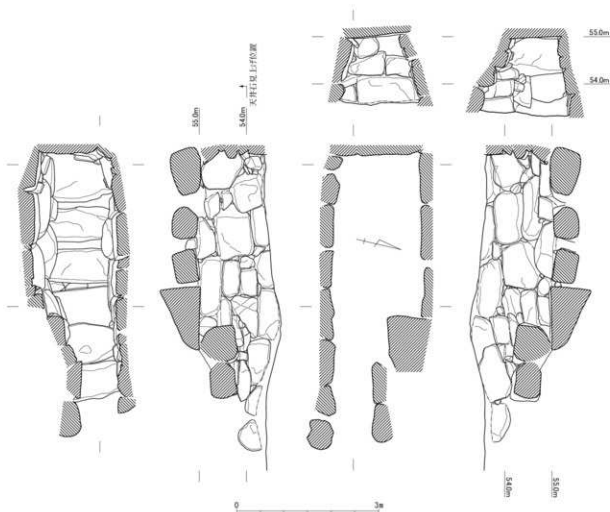
3 稲荷山C10号墳

これまでの調査

稲荷山C10号墳は稲荷山頂部から北側に延びる尾根の頂部に位置する。「分布調査1952」では、推定径12mの円墳と報告されている。一方、「分布調査1976」では後半期63号墳に該当し、こちらでは径10.3mの円墳と紹介されている。古墳の現状であるが、石室を覆っていた盛土の流出が激しく、天井石や奥壁等の一部が露出した状態となっている。また、奥壁最上段や羨道入口付近の石材も一部欠失しており、付近にC10号墳の石材と考えられる石が散在している。したがって、



第99図 稲荷山C10号墳丘測量図 (1/300)



第100図 稲荷山C10号墳横穴式石室実測図 (1/80)

C10号墳の保存状態は良好とはいえない。なお、過去の調査歴に関する記述はなく、またC10号墳に伴うとされる遺物の出土も報告されていない。

墳丘（第99図、図版42）

墳丘は盛土の流出が進んでおり、現状では径約10m、高さ約2mほどの高まりが残るのみである。墳丘の背後に当たる西側は尾根の斜面が迫っており傾斜が急になっているが、前面に相当する東側の傾斜は、それに比べるとやや緩やかである。尾根の稜線上に位置する墳丘の南側と北側は、等高線が狭まる箇所が認められることから、この付近に墳端あるいは墳丘を囲する溝状の掘り込みを想定することが可能である。このことから、稲荷山C10号墳は径13m程度、高さ約2.4mの円墳に復元できよう。なお、葺石や埴輪等の外表施設は確認されていない。

横穴式石室（第100図、図版42）

横穴式石室は右片袖式で、主軸はN-77度-Eで東側に開口する。奥壁や天井部の石材が一部失われていて、空隙となっている部分があるほか、石室の東側緩斜面には石室石材と推定できる石が散在しており、部分的に破壊を受けている。石室残存長6.3m、玄室長3.5m、玄室幅（奥壁）1.6m、玄室幅（玄門付近）1.9m、奥壁の残存高1.4m、玄室羨道側の残存高1.6m、玄門部分の羨道幅1.2m、高さ1.0mを測る。石室内部は堆積土がみられ、床面は埋没する。

奥壁は現在確認できる最下段の石材が基底石と推測できる。奥壁は、幅約1.25m、残存高約0.6mの大きな石材と幅約0.4m、残存高約0.4mの小さい石材で構成されている。奥壁の上面にはさらに2段の石材が2列で積み上げられている（そのうち、右上端の石材は失われている）。奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが、最上段の石材のみ持ち送りで内側に傾斜する。玄室の左右側壁の基底石は床面を確認できていないので、数や規模は不明であるが、現状で観察できる範囲で、左側壁の最下段は小型の石材を6石ほど、右側壁は大型の石材3石を据え付けていることが確認できる。側壁には長さ1mほどの細長い石材のほか、方形に近いやや大きな石材も使用されている。石材は基本的に横積みで、現在観察できる部分で4段ほどの石材が両側壁とも内側に持ち送られながら積み上げられている。左側壁の標高約54m、約54.6m付近、右側壁の標高約54m付近の石材は横の石材と高さをあわせ上面をそろえている。袖部は石材を少なくとも3段に積み上げて構築されている。もっとも大きいものは最下段の石材で袖幅約0.7mを測る。楣石は長さ1.2m以上、幅約0.8m、高さ約0.8mと大型の石材を使用し、玄室天井下面から約0.7m低く架構されている。玄室の天井石は4石残存しており、下面をそろえ、水平に架構している。互いに接しているもの間隙も多いことから、かつて隙間を埋めていた間詰石が存在していた可能性が高いが、現在は失われている。

羨道は大部分が破壊されており、露出している石材で左右側壁それぞれ2～4石程度しか確認できていない。右側壁の石材が袖石よりも羨道中央に寄るが、側壁の石材が内側に崩れて動いているためであり、本来の形状をなしていない。羨道の天井石は楣石を含め2石残存している。ともに天井石の底面は水平にそろっており、この地域で特有の顕著な楣石の垂下は確認できない。周辺に石材が散乱しており、本来の羨道はもっと長かったと推測できる。

稲荷山C10号墳は発掘調査が行われておらず、詳細な築造時期は不明である。しかし、横穴式石室の規模や構造からおよその築造時期を推測することが可能である。石室は流入土により若干埋没しているが、奥壁石材が3段で、基底石が奥壁の高さの2分の1程度を占めることが想定できることから、稲荷山C4号墳や緑山7号墳に近い6世紀中葉に築造された可能性が推測できる。（金田）

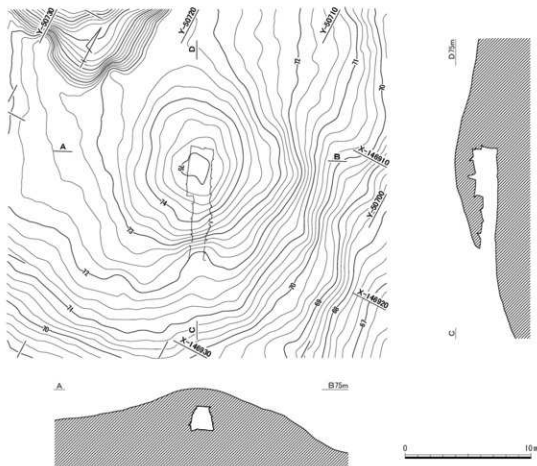
4 稲荷山C36号墳

これまでの調査

稲荷山C36号墳は稲荷山の山頂（標高約75m）に位置する。[分布調査1952]では径16.9m、高さ4mの円墳で、全長9.2m、玄室長4mの横穴式石室を有すると報告されている。[県遺跡地図1975]では稲荷山31号墳に該当し、玄室長3.6m、羨道長5.25mの片袖式の横穴式石室と記載されている。[分布調査1976]では後半期69号墳として報告されており、ここでは径21.1m、高さ3.2mの円墳と紹介されている。横穴式石室内に堆積していたと思われる土砂は取り除かれており、床面近くまで観察することができる。しかし、過去の発掘調査歴に関する情報は伝わっていないが、後述のように若干の遺物が採集されている。なお、稲荷山C36号墳の北東側は幅約15mにわたり、土砂崩れのような痕跡がみられ、墳丘の近くにまで及んでいる。

墳丘（第101図）

墳丘は稲荷山の山頂一帯を占め、現在、径15m、高さ3mほどの円丘状の高まりとして残存している。墳丘の北西部には崖が迫っているが、そのほかの部分の保存状況は良好である。墳丘の東側は斜面が急に下降するが、北側と西側の傾斜は緩やかである。北側と西側の墳端を標高73m前後の等高線付近、南側と東側の墳端を標高71.5m付近とすると、稲荷山C36号墳は、径約17~20m、高さ約3m



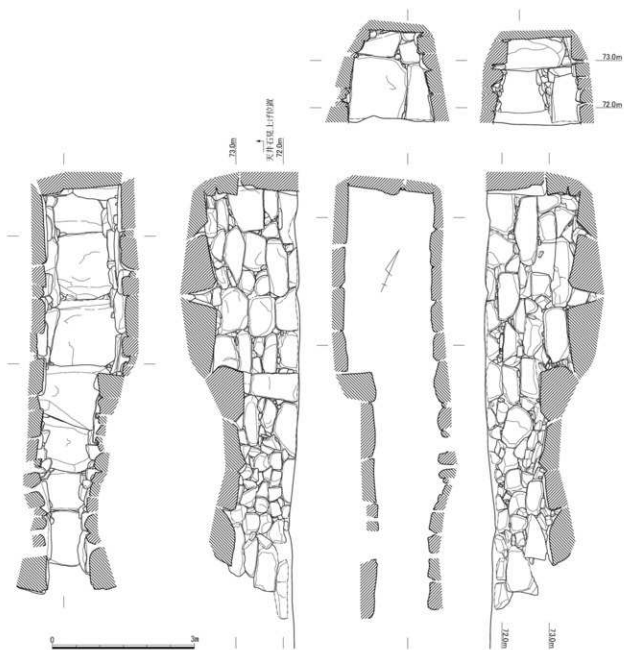
第101図 稲荷山C36号墳墳丘測量図（1/300）

の円墳に復元できる。なお、埴輪や葺石などの外表施設及び周溝やテラスのような外周を区画する施設は、現状では確認できない。

横穴式石室（第102図、図版43）

横穴式石室は、閉塞施設は残っていないが、残存状況は良好で、羨道入口まではほぼ完存していると考えられる。石室は左片袖式で、石室内は床面に近い位置まで掘り下げられている。主軸はN-23度-Wで、南側に開口する。石室全長は9.2m、玄室長4.0m、奥壁幅1.9m、奥壁高1.9m、羨道長5.2m、羨道幅1.3m、羨道高1.3mを測る。石材の大部分は花崗岩である。

玄室奥壁の基底石は大小2石で、左側の大きい石は幅約1.15m、高さ約1.35m、小さい石材である右側は幅約0.6m、高さ1.2mを測る。2石の合わせ目は石室羨道の主軸に近い位置に設置されている。



第102図 稲荷山C36号墳横穴式石室実測図 (1/80)

基底石の高さは奥壁の3分の2以上を占め、基底石上にさらに1～2石を積み上げ、天井石を架構する。奥壁基底石はほぼ垂直に立ち上がる。側壁の構築方法は左右で若干異なっている。左側壁は長さ0.9～1.3m程度の比較的大きな石材を多用する。使用石材は方形に近いものから横長に近いものまで様々である。基底部は4石で構成され、その上に2～4段の石材を積み上げている。標高72.4m及び72.9m付近の高さでは、横どうして上面をそろえながら積み上げており、横方向の目地を確認できる。しかし、玄室奥から約2.8m付近の側壁は、基底石の上に方形の石材を縦に2段積み上げて構築しており、水平方向以外に縦方向も意識しながら積み上げている。左側壁は、奥壁基底石の上面のレベルに相当する標高約73m付近までは90度に近い角度で立ち上がるが、それ以上は約60度の角度で内傾する。右側壁は左側壁に比べ一回り小さな石を使用している。石材は横積みを意識して積み上げているが、その手法はやや乱雑な感が否めない。左側壁は方形あるいは長方形の石材が志向されているのに対し、右側壁は不整形な石材が多い。奥壁に接する基底石上面の標高72.3m付近のレベルで石材の上面がそろっており、石室構築の一工程をうかがわせる。右側壁の傾斜は約80度を測る。なお、奥壁から1.4mほど離れた中ほどの石材は抜け落ちている。袖石は幅0.55m、高さ1.1mの方柱状で、平たい石材を上にして高さ調節をしたのちに楣石を架構する。玄室の天井石は3石で構築され、入口に至るにつれ大きくなる。天井石下面は水平を意図しているようであるが、羨道側の方がやや低くなっている。楣石は長さ約1.45m、幅1.25m以上、高さ0.7m以上の大きなもので、玄室天井石から約0.7m下の高さに下面を設置する。楣石の下面は羨道の天井石の下面とほぼ同じ高さに据えられている。なお、「分布調査1952」には、「河原石を用いた床石あり」と記述されているが、現状では確認することができない。

羨道は玄室側では幅約1.3mを測るが、羨門付近ではやや狭まり1.1mを測る。高さは羨道中央付近が低く1.0m、入口付近が最も高く1.3mを測る。左側壁は基底部や入口に比較的大きな石を使用しているが、そのほかの部分については、径30cm程度の人頭大の石材を使用している。右側壁も同様で、羨門に近い1石と羨門付近の比較的大きな石材を除き、長さ30～50cm程度の不ぞろいな石材を乱雑に積み上げている。羨道入口の両側には、ともに大きな石材が使用されていて天井石を支えるとともに、入口に広い面を向けていることから、羨門としての視覚的な効果もねらっているようである。羨道の天井は4石が確認できる。天井石の下面は基本的に水平を指向しているとみられる。石室入口の天井石の先端の縦断面は約70度を測り、墳丘の傾斜に整合させることを意図していた可能性も考えられる。羨道から古墳の前面にかけては、本来なら閉塞施設が存在していたと考えられるが、現在、すべて取り除かれている。

稲荷山C36号墳の出土遺物について、「分布調査1952」には「土師器散見」と記述されているが、実物を確認できていない。また、「分布調査1976」では墳丘の5mほど南で鉄片（刀子と釘か：著者注）が表採されており、実測図が公表されている。また、同報告では、須臾器片や弥生土器片も採集されたと報告されているが、これについては実測図が公表されていない。したがって、稲荷山C36号墳の築造時期を出土遺物から推測することは困難である。一方、横穴式石室の構造としては、奥壁に2石の基底石が奥壁の高さの3分の2を超える高さまでを占めていることから、緑山8号墳よりも新しく、奥壁基底石が奥壁の3分の2以上を占めるこうもり塚古墳の石室の様相に近いことが指摘できる。したがって、稲荷山C36号墳は、6世紀後半に築造されたと推測できる。（金田）

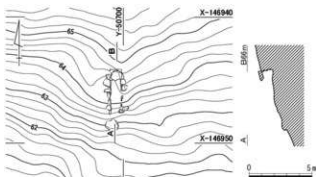
5 稲荷山C40号墳

これまでの調査

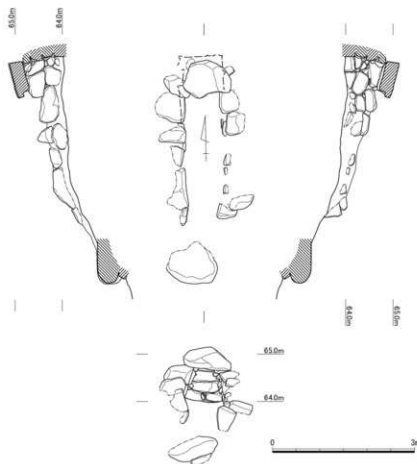
稲荷山C40号墳は、C41号墳の西約30mに位置する。「分布調査1952」には、横穴式石室が残存しているが、「封土消失、石室は破壊され露出。持ち送り石室奥壁残存」との記述がある。「分布調査1976」では後半期76号墳に該当し、墳形は不明、横穴式石室の全長は3.4mと報告されている。これまでに発掘調査の報告はなされていない。

墳丘（第103図、図版44-4）

古墳は稲荷山山頂から南に下る緩斜面上に残存する。盛土は流出しており、墳丘の高まりは顕著ではない。しかし、このたび作成した測量図では、横穴式石室の東西で等高線がやや湾曲する部分が見られた。このことから、これを周溝の痕跡と考えると、径約8m、高さ約2mほどの墳丘が想定できる。墳形は現状では不明であるが、円墳の可能性を考えたい。なお、墳丘から墳輪



第103図 稲荷山C40号墳墳丘測量図 (1/300)



第104図 稲荷山C40号墳横穴式石室実測図 (1/80)

や葺石のような外表施設は検出されていない。

横穴式石室 (第104図、図版44-4・5)

墳丘の等高線に直交する方向に天井石1石が残る横穴式石室が存在する。側壁も上部の数段が露出しているのみで、石室下半は埋没する。石室から下方約1mのところでやや大型の石材が転落しており、元の天井石と推測できる。横穴式石室は無袖式で、主軸はN-1度-Eで南側に開口する。石室残存長3.6m、奥壁幅0.9m、残存している奥壁の高さ0.8m、石材の大部分は花崗岩である。

奥壁は上半部に石材が4段観察でき、いずれも横長の石材を内側に持ち送りながら立ち上がる。奥壁の上から4段目は2石で構成されている。その左側の石材の地上から上の部分は奥壁の左半部を構成しているが、現地表面付近で右側壁近くまで広がることを確認できることから、これが奥壁の基底石である可能性が高い。左右両側壁は奥壁に近い部分では天井石の下まで残存しており、この付近の側壁は10~20度で内傾している。そのほかの部分は露出している石材1~2段分を観察できるのみである。大部分の石材は長軸を横に向けて設置するが、石室入口の右側壁の石材のみ縦方向に設置している。その理由としてここが石室入口の羨門に相当していた可能性がある。石室の本来の床面は不明であるが、この縦に設置されていた石材の底部の標高63.4m付近を床面と想定すると、石室の奥壁の高さは約1.4mに復元できる。

稲荷山C40号墳は残存長3.6mの小型の横穴式石室であったが、奥壁は少なくとも4段以上で、基底石が奥壁の高さの半分程度を占めている可能性が考えられること、奥壁や側壁には持ち送りが認められることなどが特徴としてあげられる。三須丘陵に所在するこのような小型横穴式石室は、奥壁に1枚石を据えたり、基底石の高さが奥壁の半分以上にも及ぶ石材を使用したりするものや、側壁も垂直に近い角度で立ち上がるものが多くみられる。このことから、稲荷山C40号墳は、小型の横穴式石室の中でも古い様相を呈している可能性が考えられる。稲荷山C40号墳からの出土品については、『分布調査1976』で土器片1片の出土が報告されているが、実測図が掲載されていないため詳細は不明である。稲荷山C40号墳は、石室の構造から、6世紀中葉以降に築造されたと推定できる。(金田)

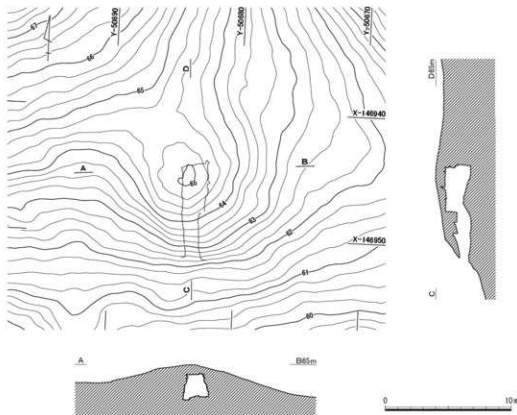
6 稲荷山C41号墳

これまでの調査

稲荷山C36号墳から南東約60mの丘陵南斜面に位置する。『分布調査1952』では、径13m、高さ4mの円墳で、全長8m、玄室長3.8m、玄室幅1.95mの横穴式石室を有すると報告されている。『分布調査1976』では後半期77号墳として報告され、径10.5m、現状で高さ1.7mの円墳と紹介されている。『県遺跡地図1975』では、本墳は稲荷山古墳群に含まれるものの、詳細な内容が不明であることから、その対応関係まで特定できなかった。過去に発掘調査は行われていないが、後述するように多くの遺物が出土したと『分布調査1976』に記されている。

墳丘 (第105図)

墳丘は、稲荷山の山頂から南東方向に舌状に突き出す緩傾斜地に長さ12m、幅13mの高まりとなって残存しており、墳頂の標高は65.0mを測る。墳丘の東・南・西側は緩やかに傾斜しており、周溝のような形状は認められないが、墳丘北側には北に隣接する丘陵との間に鞍部が認められることから、墳丘と尾根を切り離していた周溝が存在していた可能性が高い。等高線の形状からC41号墳は径約14m、高さ約3.5mの円墳と想定できる。なお、墳輪や葺石などの外表施設は発見されていない。



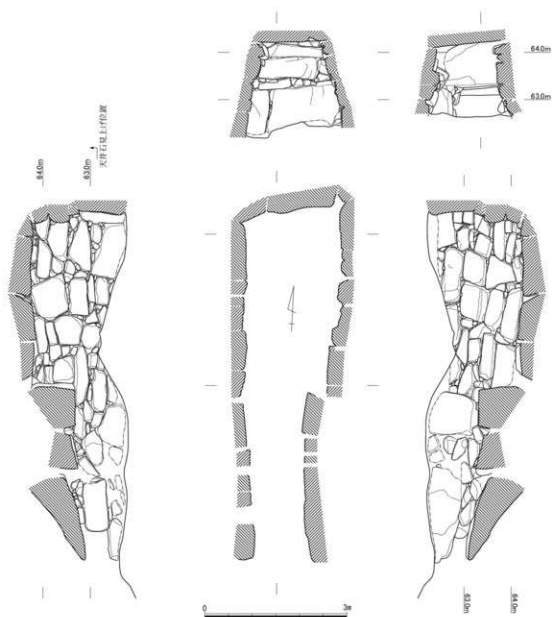
第105図 稲荷山C41号墳丘測量図 (1/300)

横穴式石室 (第106・107図、図版44-1～3)

横穴式石室は、玄室南側の天井石が一部失われているが、そのほかの部分の残存状況は良好である。右片袖式の横穴式石室で、石室残存長7.5m、玄室長4.0m、奥壁幅2.0mを測る。奥壁の残存高は2.0m、玄門部分の羨道幅は1.3m、現在測定できる羨道の高さは約1.1mである。主軸はN-3度-Wで、南側に開口する。石室内部は盗掘を受けていることが報告されており、掘り下げられている部分もあるが、床面は確認できていない。大部分の石材は花崗岩を利用している。

奥壁の基底石は大小2石で構成され、右側の石が大きく幅約1.5m、高さ約1.1m以上、小さい左側は幅約0.5m、高さ約1m以上を測る。基底石上に間詰石を置き、その上に横長の石材を水平に2段積み上げている。奥壁の基底部はほぼ垂直に立ち上がるが、上半部はやや内側に傾斜する。左側壁の基底石は埋没しており詳細に観察できないが、奥壁側に長さ約1.2m、高さ約0.7m以上の大型石材を配置している。この基底石上面の標高63m付近で一旦水平にそろえ、さらに上方に2～4石積み上げている。このとき、側壁中央部では方形の大きな2石を縦方向に積み上げており、そのほかについても縦方向を意識した積み方がみられる。右側壁の基底石は土砂の堆積で詳細はよく分からない。右側壁では横長や方形の石材を使用し、横方向に目地を意識した積み方がみられ、厳密には水平ではないが、標高63m付近に目地が確認できる。側壁は左右とも内傾気味に持ち送られて天井に至っている。袖石は1石で下端は埋没しているが、高さ約1m以上、袖幅約0.4mを測る。天井石は4石残存し、下面を水平にあわせている。

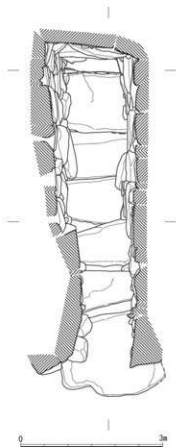
羨道は、埋没している部分があるが、やや大きな石材の周辺に小型の石材を配置して構築されてい



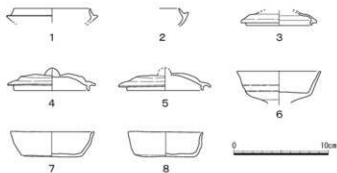
第106図 稲荷山C41号墳横穴式石室実測図 (1/80)

る。観察できる範囲では、積み方は乱雑である。天井石は3石である。楣石は高さ約0.9mを測る大きなもので、下面を羨道の天井石下面とそろえており、下垂しない。

稲荷山C41号墳の横穴式石室の特徴として、奥壁の基底石の高さが玄室の高さの2分の1以上を占め、3段で構成されていること、また、側壁の持ち送りが認められることなどがあげられる。したがって、緑山7号墳や稲荷山C4号墳よりやや新しく、こうもり塚古墳に近い6世紀後半に築造されたと推定できる。なお、稲荷山C41号墳には発掘調査歴はないが、『分布調査1976』に稲荷山C41号墳から出土した遺物が報告されている(第108図)。遺物はすべて須恵器で、盗掘による排土中に散乱していたようで、羨道における副葬品の可能性が指摘されている。そこには、杯Hの杯身2点、杯Gの蓋3点、杯Gの杯2点、高杯1点等が報告されている。いずれも7世紀の遺物で、追葬に伴う遺物の可能性が高い。(金田)



第107図 稲荷山C41号墳
横穴式石室天井
見上げ図 (1/80)



第108図 稲荷山C41号墳出土遺物 (1/4)
(出典:「分布調査1976」)

7 稲荷山C69号墳

これまでの調査

『分布調査1976』でいう「上林山東ピーク南斜面グループ」に属する古墳である。この南斜面は、稲荷山C71、C78、C79号墳など残存状況の良い古墳が等高線に沿うように並んで分布している。今回測量した稲荷山C69号墳はその西端に位置する。『分布調査1952』では径18m、高さ3～3.5mの円墳で、全長6.5m、玄室長4.4m、玄室幅1.9mの片袖式の横穴式石室を有すると記載されている。『分布調査1976』では後半期94号墳として報告され、径18mの円墳で、現状の石室の長さは4.3mと紹介する。一方、稲荷山C69号墳は『県遺跡地図1975』ではドンドン山古墳群に含まれるものの、遺跡地図における記載内容が少なく対応関係を把握できなかった。過去の発掘調査歴は伝わっていない。

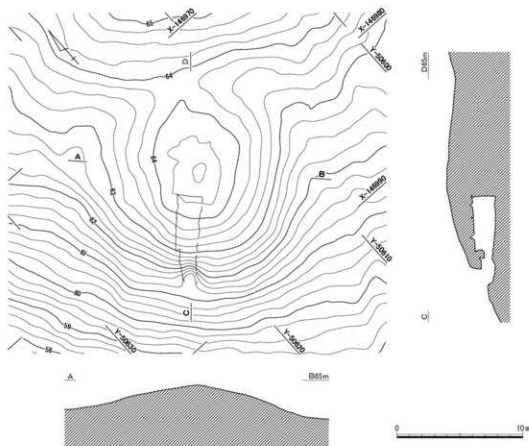
遺跡地図1975』ではドンドン山古墳群に含まれるものの、遺跡地図における記載内容が少なく対応関係を把握できなかった。過去の発掘調査歴は伝わっていない。

墳丘 (第109図、図版45)

墳丘は、稲荷山の東側の山頂からやや下った南斜面に位置し、径約16m、高さ3.5m程度の高まりとして残存している。墳丘は斜面から南西方向に張り出すように構築されている。横穴式石室前面は急斜面となっているが、背面には鞍部があり、堀切のような周溝が存在した可能性がうかがえる。周溝の痕跡は、このほかにも墳丘の東西でも確認することができ、この周溝の痕跡や石室の位置から、稲荷山C69号墳は径18m、高さ約4mの墳丘に復元することが可能である。また、墳形についても、このような等高線の形状から円墳の可能性を考えたいが、隅丸方形気味に屈曲する箇所もあることから方墳の可能性も指摘しておきたい。通常、横穴式石室は、墳頂の直下に玄室がある場合が多いが、稲荷山C69号墳では石室が墳頂より南側に寄っていることが特徴としてあげられる。なお、墳丘から埴輪や葺石のような外表施設は検出されていない。

横穴式石室 (第110図、図版45)

横穴式石室は、左片袖式で主軸はN-41度-Eで南側に開口する。羨道の天井石の奥から3石目以降が外されており、ここから石室内に入ることができる。玄室は流入土が堆積しているが、残存状況は良い。石室残存長7.4m、玄室長4.5m、奥壁幅2.0m、奥壁の残存高1.9m、玄門部分の羨道幅1.3m、



第109図 稲荷山C69号墳丘測量図 (1/300)

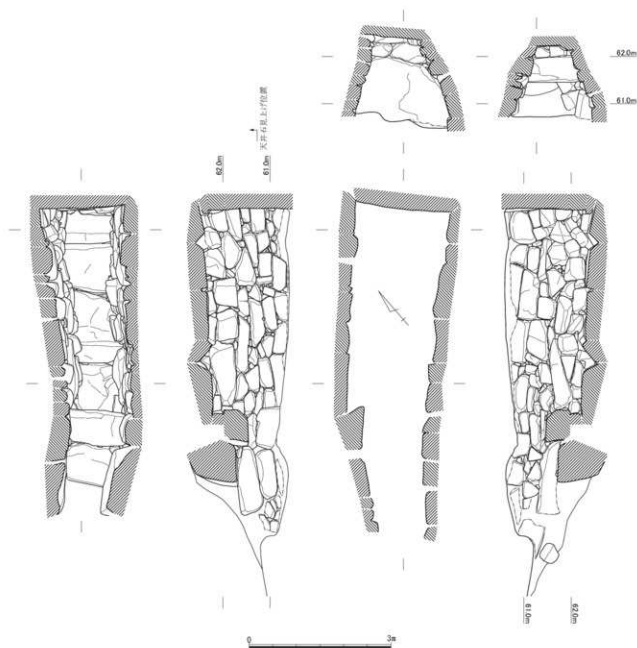
残存高1.1mを測る。石材の大半は花崗岩を利用している。

奥壁は幅2.0m、現存の高さ1.5mの一枚石を基底石としている。基底石上面には石材を2段積み上げており、ほぼ垂直に立ち上がる。左側壁は、方形に近い石材も存在するが、多くは細長い石材で横方向に標高61.7m付近まで積み上げている。右側壁は、横長の石材のほか、方形の石材などを利用しながら積み上げているが、積み上げ方は左側壁に比べ雑然としている。両側壁とも持ち送りをしながら構築されており、10～20度ほど内傾する。天井石は5石確認できる。いずれも下面を水平にそろえている。袖石は大半が埋没しているが、長さ約0.9m、高さ約0.5m以上の方柱状の石材を使用しており、袖幅は0.36mを測る。石室の前壁は2石で構成されていて、高さ0.7mを測る。楣石は羨道の天井石下面から0.3m程度下がっている。羨道は大半が埋没しているが、高さ1.1mほどを観察することができる。横方向に長い石材のほかに、小型の石材を使用し積み上げている。

稲荷山C69号墳の横穴式石室の特徴として、奥壁の基底石が奥壁の高さの7割ほどを占める一枚石であり、石室側壁の持ち送りもやや急であることがあげられる。緑山7号墳より後出で、こうもり塚古墳の横穴式石室に近い6世紀後半期の築造と考えられよう。(金田)

註

西川宏は、氏の著書「古備の国」で、「緑山の東の丘陵の総社市増弁塚古墳の一带には、古い様相の横穴式石室墳が集中して」（西川1975、184頁）と記載しており、稲荷山一带に増弁塚古墳があったことを示唆する。



第110図 稲荷山C69号墳横穴式石室実測図 (1/80)

参考文献

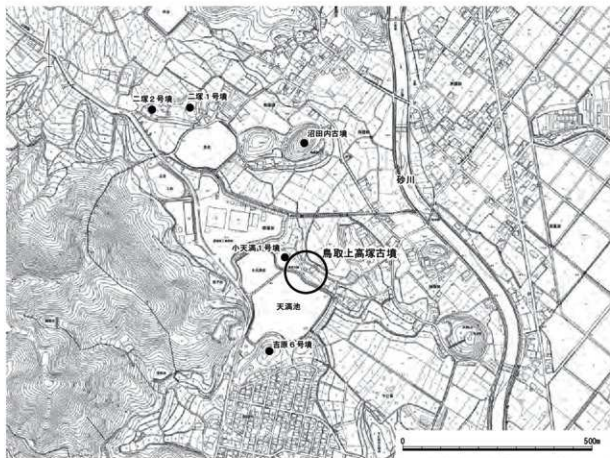
- 岡山県教育委員会 1975『岡山県遺跡地図 第3分冊』
 岡山大学考古学研究所 1976『三須丘陵遺跡分布調査報告』
 近藤義郎編 1987『緑山古墳群』総社市文化振興財団
 永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会
 永山卯三郎 1937『吉備郡史』上巻 吉備郡教育会
 西川宏 1975『吉備の国』学生社
 藤田憲司 2003『こうもり塚と江崎古墳』吉備考古ライブラリー・9 吉備人出版
 松尾洋平 2011『稲荷山古墳群出土の須恵器について』『総社市埋蔵文化財調査年報20(平成21年度)』総社市教育委員会

第3節 赤磐市鳥取上高塚古墳の測量調査

1 調査の経緯と経過

鳥取上高塚古墳は赤磐市西窪田に所在する（第111図、図版46）。赤磐市を南流する砂川の西岸に位置する南東方向に延びる尾根の先端を利用して古墳が築造されている。昭和54年に赤磐市（旧赤坂町）の史跡に指定されている。

鳥取上高塚古墳は『改修赤磐郡誌』（赤磐郡教育会1940）や『岡山縣通史』（永山1930）に紹介されており、古くから前方後円墳と認識されていた。しかし、これまで詳細な実測図が作成されてこなかったことに加え、墳丘が宅地やため池の造成で改変を受けていて墳形が把握しづらいこと、また、後円部が高く、前方部が低平で目立たないことから、前方後円墳ではなく大型の円墳とする説も指摘されてきた。他方、墳丘に所在する横穴式石室も古くから知られており、全長約15m、玄室長約8mもの巨大な石室を有し、県内三大石室であるこうもり塚古墳、箭田大塚古墳、牟佐大塚古墳にも匹敵する石室であると紹介されてきた（西川1975）。しかし、これまでに簡易な石室実測図（山崎1985）等が公表されているのみであった。この鳥取上高塚古墳が前方後円墳であれば、古墳時代後期における備前最大の古墳となり、さらに、これに県内最大級の横穴式石室を有することを考慮すると、鳥取上高塚古墳はこの地域を代表する大首長墓と評価することができ、地域の歴史を考える上で欠くことので



第111図 鳥取上高塚古墳と周辺の古墳 (1/10,000)

きない資料となる。そのため、このような議論の前提となる墳丘測量図や石室実測図の作成が不可欠であった。

この状況を踏まえ、岡山県古代吉備文化財センターでは、「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業で調査している史跡こうもり塚古墳と同時期の横穴式石室の類例調査として、鳥取上高塚古墳の調査を岡山大学考古学研究室及び赤磐市教育委員会と協同で実施した。調査は、地権者の御協力と御理解の基、赤磐市教育委員会による地元調整と情報提供を踏まえ、岡山大学考古学研究室が墳丘測量を、古代吉備文化財センターが横穴式石室の実測を担当して行った。調査は、岡山大学考古学研究室及び古代吉備文化財センターともに令和3年4月18日から開始した。なお、墳丘測量については、その成果の一部を岡山大学考古学研究室が令和4年3月に同大学の機関誌に公表しているが（光本ほか2022）、本稿において改めて玉稿をいただいた。（金田）

2 鳥取上高塚古墳に関する調査研究略史

鳥取上高塚古墳に関するこれまでの調査や所見及び研究について表7・8にまとめた。このうち、墳丘に関する調査等は光本順らにより詳細にまとめられている（光本ほか2020）ため、ここでは概略にとどめる。

鳥取上高塚古墳の墳形については、これまでに前方後円墳説と円墳説の両説が唱えられてきた。前方後円墳と考えた場合、墳長67mあるいは75mが、円墳と考えた場合、直径約30mがその大きさととなる。これについては、現地踏査における各研究者の所見の相違もさることながら、光本らが指摘するように、墳丘を検討しうる基礎的図面の不足がその大きな要因となっていた。しかし、このたびの岡山大学考古学研究室の測量調査によりこの点が解消され、鳥取上高塚古墳の墳丘の検討が可能となった。むしろ、最終的な墳形の確定には、発掘調査など学術的な手続きが必要であるが、今回の測量の結果、鳥取上高塚古墳は墳長75m前後の前方後円墳である可能性が高くなった（光本ほか2020、本節）。また、これまで指摘されていたが、今回の測量調査で鳥取上高塚古墳の墳丘は後円部が高く、前方部が低平であるという特徴も確認できた。古墳時代後期において、このような墳丘の特徴を持つ古墳として、欽明大王墓の可能性が高い奈良県五条野丸山古墳があげられる（土生田2012）。鳥取上高塚古墳の墳形はこの古墳の影響を受けている可能性が推測でき、今後は、両者の古墳の比較研究が重要となろう。

一方、横穴式石室は、現在、羨道が天満池の堰堤に取り込まれていて視認できないが、羨道の天井が開口しており、そこから中に入ることができる。石室は入口付近が埋没しているが、開口部から玄室にかけての保存状態は良好である。玄室の中には稲荷が祀られており、また、入口には手水鉢が設置されていることから、地元で崇拝されていたことが分かる。石室も古くからその存在が知られており、「改修赤磐郡誌」では、石室全長38尺、玄室幅8.2尺に及び石室の大きさが記載されている（赤磐郡教育会1940）がみられる。ここでは、羨道の天井石が失われており、その一つが天満池の中にあるとするが、現状では確認できない⁽⁹¹⁾。その後刊行された文献では、石室の長さ約12～15m、玄室の長さ7.4～約8m、玄室の幅2.7～約3m、玄室の高さ2.6～2.8mといった数値が公表されている。なお、石室の袖については両袖式とするか、片袖式とするかで意見の相違がある。それは、右袖は袖幅が80cmほどあり明らかであるが、左袖については、玄門付近の左側壁に僅かながら石材のせり出しがみられ、これを袖と認識するかどうか起因する。最終的には発掘調査で確認する必要があるが、今

表7 鳥取上高塚古墳に関する調査研究等(1)

文献等	内容
永山卯三郎 1930 『岡山縣通史』	天満池の畔、前方後円墳式、石室を完存す。80尺、行 50 尺
赤磐郡教育会 1940 『改修赤磐郡誌』	前方後円式に属する。後円部径 66 尺、高さ 20 尺。前方部長径 142 尺、短径 25 ～ 90 尺、高さ(前端) 5 尺。石室玄室幅 7.0 ～ 8.2 尺、通 25 尺(向きやや西に偏す)、両袖式。羨道幅 4.2 ～ 4.7 尺、通 13 尺(天満池の中にある五合岩は羨道上にあった天井石の一箇)
今井堯・近藤義彦 1970 『群集墳の盛行』『古代の日本』	前方後円墳。墳丘全長 70 m、石室全長 15 m、玄室長 7.7 m、玄室幅 2.75 m、玄室高 2.8 m。この地域の古墳の頂上に立つ。
山陽町教育委員会 1975 『山陽町の原始・古代』	前方後円墳。全長 75 m、後円部径 30.4 m。巨大な横穴式石室を持つ(玄室長 7.8 m、幅 2.7 m)、羨道一部破壊。出土品不明
西川宏 1975 『古備の国』	6 世紀後半。円墳。石室全長 15.0 m +、玄室奥壁 2.72 m。
赤坂町教育委員会 1984 『赤坂町誌』	前方後円墳。全長 75 m、後円部径 20 m。羨道の一部が池の工事で破壊されるが、玄室は完全(玄室長約 8 m、幅約 3 m、現況の天井石までの高さ 2.7 m。6 世紀初頭の築造と推定)
藤田憲司 1984 『岡山県南部』『古代学研究』第 103 号	全長約 70 m、後円部径約 30 m、前方部幅 35 ～ 40 m。円墳とする考えもあるが、西縁のため池上手のカーブにくびれ部の名残をうかがうことができ、東側斜面と前方部北東コーナー付近はよくその形跡をとどめている。石室は主軸に直交、西南西に開口。玄室は 3 段積み、両袖型式(片方の袖は僅かに認められる程度)。石室全長 15 m 余、玄室長 7.7 m、同幅 2.75 m、高さ 2.8 m
間壁忠彦・間壁霞子 1985 『日本の古代遺跡』	全長 75 m の前方後円墳。横穴式石室。玄室の長さ 7.8 m、幅 2.7 m
山崎信二 1985 『横穴式石室構造の地域別比較研究 - 中・西国編 -』	鳥取上高塚古墳の石室実測図を掲載。摂津耳原古墳に類似と指摘
河本清 1987 『巨石墳』『古備の考古学』	全長 75 m の前方後円墳とされるが、周辺の地形をよくみると円墳の可能性もある。石室は南に開口する両袖式の横穴式石室。石室全長 15 m、玄室の長さ 7.7 m、幅 2.7 m、高さ 2.6 m、羨道幅 1.4 m、高さ 1.1 m、長さ 5 m。なお、石室、羨道とも床面までは 1 m 弱は埋まっているようである。出土遺物不明
村上幸雄 1987 『古墳時代後期』『岡山県の考古学』	全長 75 m の前方後円墳とも、径 30 m の円墳ともいわれるが、前者の可能性が高いようである。石室の巨石で、羨道の先端を欠くが、石室全長 12.05 m、玄室長さ 7.4 m、幅 2.75 m、高さ現高 2.7 m。羨道幅 1.4 m、現高 1 m を測るから、玄室高さは 3.5 m を超えるであろう。平佐大塚古墳に先行する備前の最有力墳であろうか。
宇垣匡雄 1991 『前方後円墳集成』	低丘陵上、標高 30 m、東側の水田からの比高 10 m。前方後円墳。方位 N - 45 度 - W、造り出し、周濠なし。墳長 67 m、後円部径 30 m、高さ 5 m、前方部幅 35 ～ 40 m。墳輪、葎石なし。前方部を中心に墳丘の削平が著しい。横穴式石室全長 15 m、玄室長 7.7 m、高さ 2.6 m、幅 2.7 m。墳丘主軸との関係：直交(南西に開口)
新納泉 1991 『巨石墳の分布と系列』『岡山県史』	前方後円墳であるともいわれているが、円墳の可能性もある。石室は両袖式。副葬品は知られていない。
倉林眞砂斗 1992 『石棺』『古備の考古学的研究』	墳長 75 m の前方後円墳あるいは径 30 m の円墳といわれる。後 II 期の築造
亀山行雄 1993 『鳥取上高塚古墳』『岡山県埋蔵文化財報告』23	ため池改修に伴い確認調査を実施。幅 1.5 m、深さ 0.3 m の墓道が長さ 1.2 m にわたって確認された。墓道の埋土は堅固で上部は砂と反層になっており、土師製の陶棺片が含まれていた。この結果から、円径 30 m、石室全長 15 m 前後であることが判明した。
亀山行雄 1999 『岡山県内の横穴式石室』『論争 古備』	玄室全長 7.5 m、玄室幅 2.7 m、羨道全長 7.5 m、左片袖式。時期は 6 世紀後半
小郷利幸・草原孝典 2000 『古井田、砂川流域の古墳の測量調査』	鳥取上高塚古墳の墳形は前方後円墳とする見方と円墳とする見方があるが、横穴式石室の存在する円丘部の西側には低平ながらも前方部状の地形が認められることや、南側に接する池の岸が前方後円形にめぐることから、前方後円墳の可能性が高いように思われる。墳形が前方後円墳だとすると墳長 67 m ほどになる。
尾上元規 2000 『鳥取上高塚古墳』『古備の古墳(上)』	墳長約 67 m の前方後円墳とも、直径約 30 m の円墳ともいわれ、いまだその判別はつけがたい。横穴式石室は両袖式で、玄室長約 7.7 m、同幅約 2.7 m、現状での高さ約 2.6 m
脇坂光彦 2003 『古備地方の大型横穴式石室の評価』	前方後円墳。横穴式石室は両袖。全長 12 m、玄室長 7.68 m、奥壁幅 2.75 m、奥壁高 2.63 m。奥壁は横長の石を積み、大王墓クラスの基本的奥壁構造を採用。大王墓への依存・従属の関係を強く意識
岡山県教育委員会 2003 『改訂 岡山県遺跡地図』	前方後円墳。墳丘は池の堤に利用され、後円部一部破壊。前方部もかなり削平され、変形。全長 75 m、後円部径 30.4 m、前方部幅 39 m。長大な横穴式石室で、玄室長 7.8 m、幅 2.7 m。床面はかなり埋没しているが、天井まで 2.65 m。

表8 鳥取上高塚古墳に関する調査研究等(2)

文献等	内容
藤田憲司 2003 [こうもり塚と江崎古墳]	前方後円墳。全長67m。後円部径30m。前方部幅35～40m。石室全長約15m、玄室長7.7m、同幅2.7m。その因単位程度の範囲を領域とする最有力首長と推定
宇垣匡雅 2004「吉備の首長墓系譜」	鳥取上高塚古墳とこうもり塚古墳の2基は低平で長い前方部を持っており、見瀬丸山古墳に似た墳形である。
重根弘和 2005「土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡」	陶片の実測図を掲載。赤磐市土井遺跡から供給された可能性を推察
笹栗拓 2010「可食・弥土地区における姉木路古墳群の位置づけ」	鳥取上高塚古墳の石室実測図を掲載。石室奥壁の一枚化への志向性が強いことを指摘
広瀬和雄 2014「7世紀「吉備」に関する基礎的考察」	前方後円墳。規模67m。横穴式石室(左片袖)。石室全長10.6m、玄室全長7.8m、玄室幅2.7m、玄室高さ2.7m。5期(6世紀末頃)に比定
金田善敬 2018「横穴式石室の規格に関する一試論」	前方後円墳?約70m。横穴式石室は右片袖。石室全長約15m、玄室長7.7m、玄室幅約3m、玄室高さ2.7m以上。羨道長3.5m以上、羨道幅1.4m、羨道高1m以上。「赤磐型」横穴式石室として地域で規格を共有していたことを提唱
尾上元規 2020「吉備における横穴式石室の展開と地域性」	石室全長約15mと大規模で地域の頂点に立つ古墳。当地域(備前中・北部)では珍しい両袖式。「非在型」で工人の派遣を伴って築かれた石室
草原孝典 2020「畿内型(横穴式)石室の伝播・変容・収束」	鳥取上高塚古墳が奥壁3段積みの横穴式石室で、同時期のヤマト王権の石室からの影響と考えることが妥当
四田寛人 2021「フォトグラメトリによる文化財の記録と観察」	墳長約67m。後円部径約30mの前方後円墳。横穴式石室全長約15m、玄室の長さ約7.5m、奥壁付近の幅約2.7m、高さ約2.6m。フォトグラメトリによる横穴式石室模式図を作成
光本順・山口雄治・ライアン ジョセフ 2022「LiDAR測量による岡山県赤磐市鳥取上高塚古墳の墳丘の検討」	LiDAR測量による墳丘測量調査。その結果、鳥取上高塚古墳が前方後円墳で、墳長約75mである可能性を指摘
有賀祐史 2022「岡山県における古墳時代後期の副葬係鏡」	鳥取上高塚古墳から出土したと伝わる銅鏡(乳脚文鏡系)を紹介
岡山大学考古学研究室 岡山県教育委員会 2023(本書)	墳丘・横穴式石室の測量調査。前方後円墳。墳長75m前後。横穴式石室(右片袖式)、全長約18.2m(墓道を含む)、石室残存長約12m、玄室長7.8m、玄室幅2.7m、現状の玄室高2.6m、羨道幅1.4m、現状での羨道高0.9m

回の調査では、左側壁のせり出しは認めつつも袖幅は僅かであり、また、右側壁と明らかに袖石の構造が異なることから、本稿では鳥取上高塚古墳の横穴式石室を右片袖式と考える。

横穴式石室の調査については、平成4年度にため池改修に伴う緊急の確認調査が実施された。その結果、墓道の一部が確認され、石室全長が15m前後になることが判明した(亀山1993)。他方、石室の実測については、山崎信二が石室の実測図(山崎1985)を公開しているが、側壁は右側のみで、また、奥壁の図面を欠くなど十分ではなかった。その後、笹栗拓(笹栗2010)や四田寛人(四田2021)により補足あるいは再測量がなされたが、詳細な説明や標高を含む国土地標を欠いていた。そこで、古代吉備文化財センターでは、このたびの調査において、岡山大学考古学研究室から国土地標データの提供を受け、石室を実測した。その結果、鳥取上高塚古墳の石室は玄室長7.8m、奥壁幅2.7m、現状の玄室高2.6m、羨道幅1.4m、現状での羨道高0.9mで、平成4年の確認調査の成果とあわせると、石室全長約18.2m(墓道を含む)を測った。

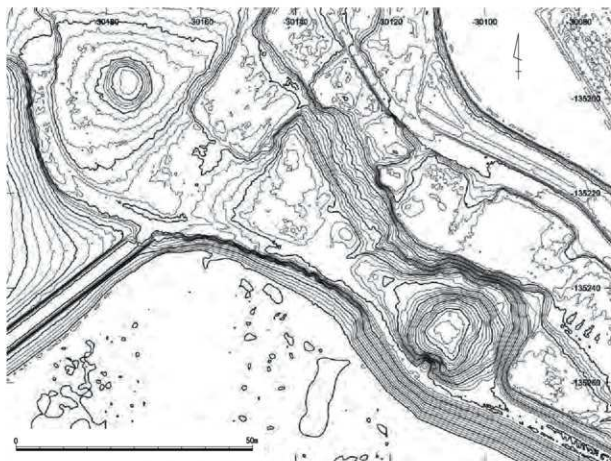
鳥取上高塚古墳の横穴式石室の系譜や変遷については次のような論考がある。山崎は、備前地域における6世紀中葉以降の横穴式石室は畿内型石室の系譜で理解できるとし、鳥取上高塚古墳については大阪府茨木市耳原古墳との類似を指摘した(山崎1985)。また、脇坂光彦は、鳥取上高塚古墳の石室の奥壁が横長の石を積んで構築されており、これが畿内地域において主流の構築法であることから、鳥取上高塚古墳の被葬者のヤマト政権への依存・従属的關係が強かったと考えた(脇坂2003)。同様

に、尾上元規も畿内地域との関係にふれ、鳥取上高塚古墳が同地域で珍しい両袖式であることから、鳥取上高塚古墳の石室は「非在地型」で工人の派遣を伴って築かれたと考えた。一方、金田善敬は、鳥取上高塚古墳と赤磐市域に所在する石室との類似性にふれ、鳥取上高塚古墳が赤磐市域で最大の横穴式石室であることから、鳥取上高塚古墳の被葬者を頂点とした階層性がこの地域に存在していた可能性を指摘した(金田2018)。

なお、鳥取上高塚古墳から過去に出土した遺物について詳しい情報はない。しかし、この古墳で陶棺片が採集されているほか、平成4年の確認調査でも陶棺片が確認されたことが報告されている(亀山1993、重根2005)。また、赤磐市内に鳥取上高塚古墳から出土したと伝わる銅鏡(乳脚文鏡系)が残されている(有賀2022)。(金田)

3 墳丘の測量

岡山大学考古学研究室は、2021年4月18日・19日にかけて、鳥取上高塚古墳を中心に、北方の丘陵に位置する後期の二塚1・2号墳から南の前期前方後円墳である吉原6号墳を含む南北約800mの範囲を対象に、ドローンを用いたLiDAR測量を実施した。LiDARはLight Detection and Rangingの略称で、「光検出と測距」すなわち光レーザ測量を意味する。鳥取上高塚古墳のLiDAR測量成果については、先に詳細を公表した(光本ほか2022)。本稿はその前稿の内容を再構成したものである(第112～115図、図版46-1)。測量方法や検討過程等の詳細については、前稿を参照されたい。



図の中心に鳥取上高塚古墳が、左上に小天満1号墳の円丘がみられる。

第112図 墳丘測量図① (1/800)

墳形について

鳥取上高塚古墳の墳形については、前方後円墳説と円墳説が存在していた。LiDAR測量の結果、本墳は以下の特徴から前方後円墳と考えられる。すなわち、①墳丘北側と、土手側で削平を受けてはいるものの墳丘南側とが対となり前方後円墳の形状をなす点、②前方部前端に相当する箇所について、丘陵切断による掘り割り状をなすものと考えられる点、③前方部相当部分の頂部平坦面について、前端の北側コーナー付近において標高が最も高くなる点、並びに円丘部と前方部状部分の頂部平坦面とがスロープをなして接続する点である。

後円部 まず後円部墳端（裾部）としては、北東部の標高29.75mラインが想定される（第114図-a断面）。この箇所には、本ラインより北側に、本来の地形と思われる箇所が部分的に残存する。後円部東側については等高線が直線的となり一定の改変がうかがえる。上記の墳端と横穴式石室床面の標高を比較した場合、石室実測の成果によると、石室床面の推定標高は30.4mとなり、墓道のスロープを考慮すると両者は整合的に理解される。次に、後円部は二段築成と考えられる。北東部の標高32.25～32.75mにみられる平坦面が一段目テラスと考えられる。

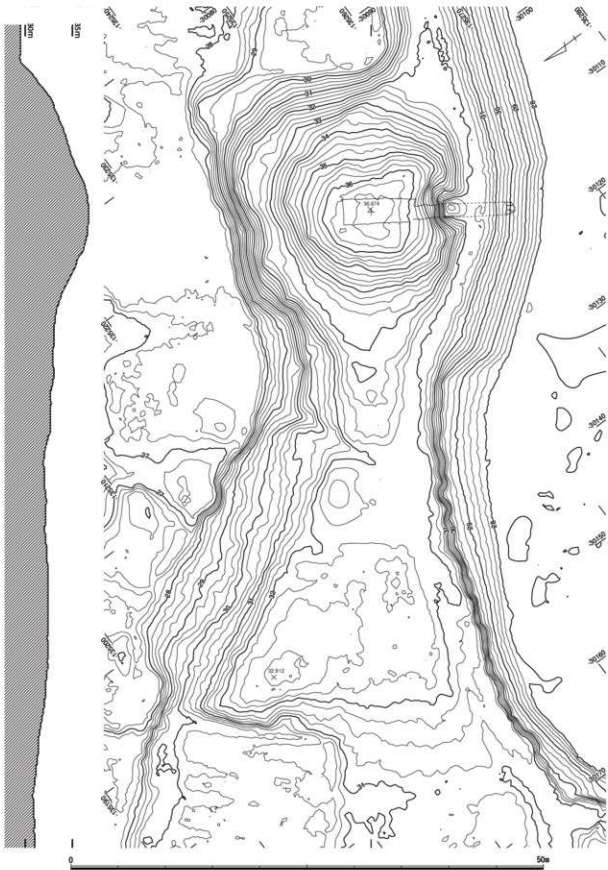
前方部 前方部の平面的形状について、前方部頂平坦面の北コーナー付近は、それを留めると考えられる。すなわち、前方部頂平坦面の前方部前面側の稜線は、前方部北東部の32.50mラインとして認識できる。また、前方部北コーナーに連なる前方部北半の側面部についても、直線的ラインを描くため、本来の形状を留めるものと判断される。一方、両者とも、北コーナーから離れるにつれ、本来の形状を留めない。前者については、前方部頂平坦面南半の等高線が墳丘側に入り込む。後者についても、くびれ部付近に近づくにつれ等高線が墳丘内側に寄る。

前方部前端については、可能性のある傾斜変換線が2か所存在する。一つは、前方部南半における、墳丘側から緩やかに傾斜して標高31.25mラインとなる傾斜変換線である。もう一つは前方部北半であり、南半より土地区画が一段下がる標高30.25m付近（北東部の30.00mから30.50mまで）のラインである。両者は平面・標高ともに一致しないが、両者ともに、前方部前面の本来の斜面を留めているものとは考え難い。前者については、前方部頂平坦面の崩れにより、極めて緩やかな傾斜を形成する。後者については、前方部頂平坦面北コーナー付近の稜線が本来の形を反映すると仮定すると、そこから標高30.25mまで急角度で前方部頂から落ち込むことになるため（第114図-d断面）、本来の斜面を反映するものとみなすことは難しく、現在の土地区画との関連による改変の結果と考えられる。

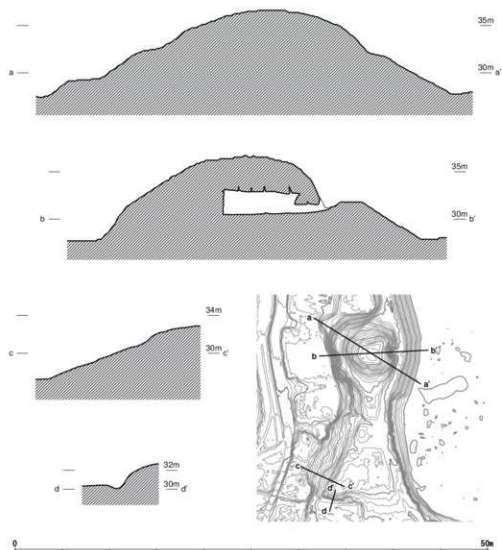
このように前方部前端を直接示す土地形状は残存しないものと考えられる。そのため、29.75mラインと判断した後円部裾部の標高を考慮すると、前方部前端の標高としては北半の30.25m、平面的位置としては南半の31.25mライン付近（本ラインより丘陵側に前端が幾分ずれる可能性も含む）が、そのおよその位置になるものとする。

段築については、明瞭なテラス面を確認することができないことから、一段築成と考えられる。

なお、北半側面において、前端とみなした標高よりも低い27.75mライン付近に、墳頂平坦面ラインと平行する地形が認められる点は注意を要する。しかし、それを前方部側面の墳丘裾部とみなすには、上記で述べた後円部後端との整合性の点で問題が生じる。なお、27.75mライン付近を墳丘外とみなした場合でも、古墳に関わる基壇部分などの何らかの施設の一部である可能性はあるが、現状の遺存状況が部分的であるため、評価は困難である。



第113図 墳丘測量図② (1/400)



断面 a・b の池の上面は水面の標高を示す

第114図 墳丘断面図 (1/400)

墳丘規模について

墳長を考える上で、参考値も含め、以下の数値があげられる (第115図)。

後円部①：墳丘主軸上における現存の後端

後円部②：第114図-a 断面において後円部径を34.4mとした場合の円と主軸との交点 (推定される
後端)

前方部①：前方部北半の標高30.25mラインを主軸上に延長した現存の墳丘端部

前方部②：前方部南半の標高31.25mラインに基づく推定の端部

前方部前端に関しては、上記では前方部②付近と推定したが、墳丘残存長の最小値を知るために前方部①を参考として設定した。上記の組み合わせにより、主軸上の数値を測ると以下となる。

後円部①—前方部① 70.3m

後円部①—前方部② 74.0m

後円部②—前方部① 72.0m

後円部②—前方部② 75.7m

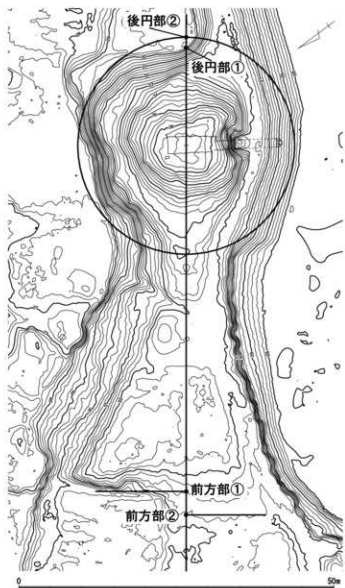
本節においては、「後円部①—前方部②」である74.0mが墳長の候補となる。同時に、後円部径を復元した「後円部②—前方部②」の値を考慮すると、墳長は74.0～75.7mと推定される。後円部後端と前方部前端的残存状況を考慮すると、墳長は約75m、ないしは75m前後と捉えることが可能となる。

墳丘高については、後円部の場合、29.75mラインから頂部最大高までで約6.9mを測る^(a2)。また、後円部一段目を32.25mライン付近とすると、一段目の高さは約2.5m、二段目は約4.4mとなる。後円部一段目よりも二段目の方が1.7～1.8倍近く小高くなる。一方、前方部高については、30.25mラインから頂部までで約2.7mとなる。したがって、後円部が前方部高の2.5倍程度高いものであり、全体として後円部一段目から前方部にかけて低い様相がうかがえる。

傾斜に関しては、第114図-a断面の後円部一段目において底辺：高さで3.6m：2.5m、約35度となる。前方部コーナー付近の前方部側面である第114図-c断面の傾斜は、墳丘裾を標高30.00mライン、前方部頂側を32.50mラインで測ると、5.8m：2.5m、約23度となる。また前方部前面の斜面は残存しないものの北半の標高32.50mラインから前方部②の平面的位置においてその標高が30.25mとなるとした場合、6.5m：2.25m、約19度となる。(光木・山口・ライアン)

4 横穴式石室の測量

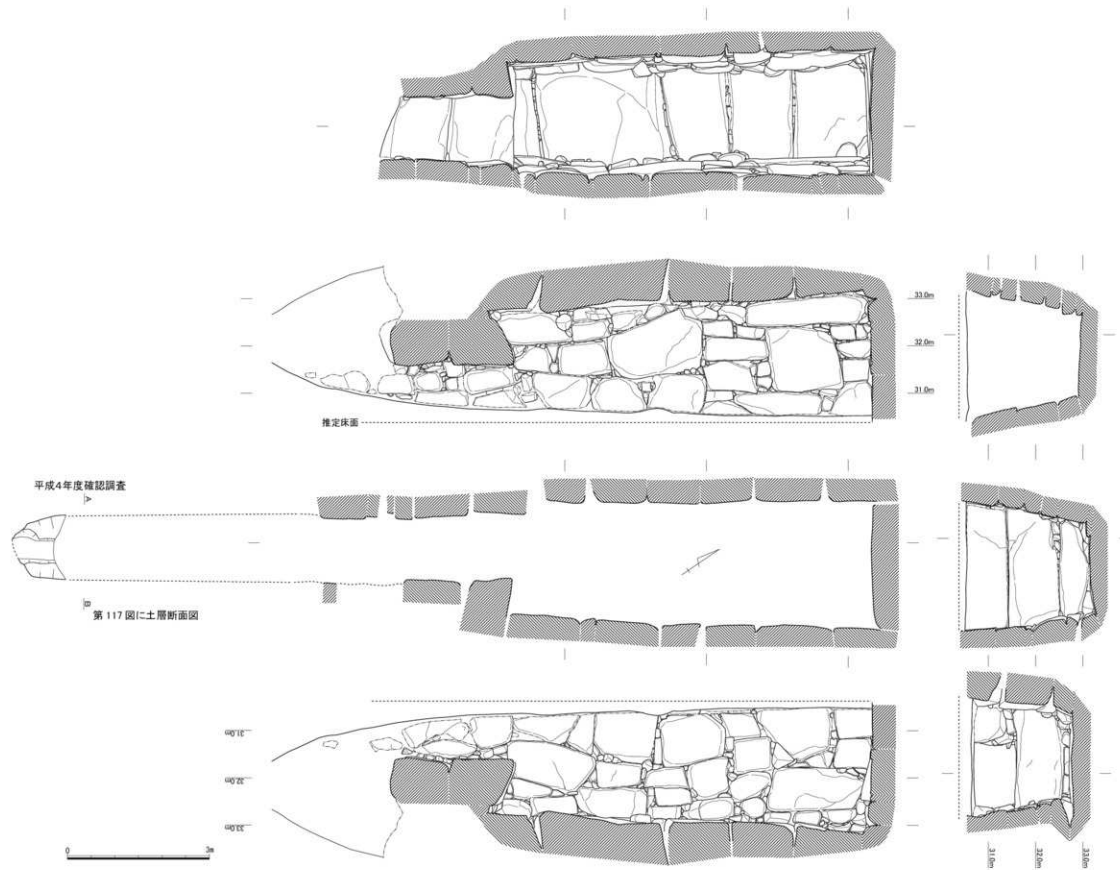
横穴式石室は玄室と羨道の一部が残存している(第116図、図版47・48)。石室は南西に開口し主軸はN-34度-Eを測る。玄室は完存しているが、堆積土のため床面の状況は分からない。羨道は玄門から天井石2石分が残存しているが、3石目以降は確認することができない。「改修赤磐郡誌」に天井石のうちの1石が天満池の中にあると記述されている(赤磐郡教育会1940)が、現在はその石材を確認することはできない。また、羨道の南西半部は池の堰堤となっていて、堰堤下の石室の残存状況については不明である。しかし、先述のとおり、この堰堤の池側で確認調査が実施されていて墓道が検出されている(亀山1993)。現在確認できる横穴式石室の全長は、奥壁から現在の出入口に確認でき



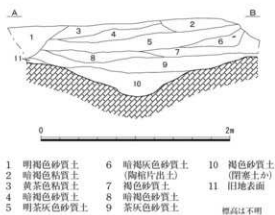
第115図 墳長の計測点 (1/600)

る羨道側壁までの残存長約12mである。しかし、実際の羨道の天井石は堰堤上の通路の端まで延びていた可能性も考えられる。推定ではあるが、奥壁からそこまでの距離が約15mであるため、この数値を石室の推定全長としておく。また、ため池の改修に伴い確認できた墓道の前端から石室奥壁までは18.2mを測るが、これが現在測定可能な墓道を含めた石室の長さとなる。したがって、鳥取上高塚古墳の石室は、残存長約12m、推定全長約15m、検出された墓道を含めると少なくとも18.2mの長さがあったことが分かる。また、先述のとおり、鳥取上高塚古墳の石室は両袖式と片袖式の両説が唱えられてきたが、ここでは片袖式と考えておく。なお、石室内は堆積している土砂のため、本来の床面は確認できないが、後述のとおり、奥壁基底石から床面を推定することができ、床面の高さを標高30.4mと想定する。

玄室は長さ7.8m、奥壁幅は2.7m、現在測ることのできる高さは奥壁付近で2.6m、玄門付近で2.0mである。玄室奥壁は3段で構成されており、最下段の石材の下端は埋没しているが、幅2.7m、高さ0.8m以上を測る。その上に幅2.5m、高さ1m程度の石材をほぼ垂直に積み上げ、さらに最上面に横に長い石材を架構する。なお、奥壁最下段の石材とその上の石材は、奥壁表面の凹凸から元々同じ石材で、奥壁構築に当たり二分割して使用されていることが明らかとなった。最下段の石材が、その上の石材と同じ高さであると仮定すると、最下段の石材の下端は標高30.4m付近を想定できる。この標高を床面と推定すると、奥壁の高さは約2.8mに復元できる。両側壁も下端は土砂が埋積しており基底石の形状は不明である。しかし、奥壁の床面の復元から0.2m程度は埋没しているものと想定できる。使用された石材は両側壁とも横長よりも方形に近いものを多用する。右側壁は下段に長さ1.5m、高さ1m程度の石材を多く並べている。それよりも上方には、玄門と奥壁付近で大きな石材が使用されているが、そのほかはやや小振りの石材を使用している。明瞭ではないが、横方向に高さを意識しながら積み上げている状況がうかがえ、標高32m付近において作業工程の一つの区切りがあったことが想定できる。また、右側壁には、奥壁から3m付近あるいは4.6m付近で縦方向の目地を視察することができる。左側壁は下段に横長あるいは方形の石材を標高31.3m付近でそろえたのち、1.4m四方ないし長さが2mほどの大型の石材を、奥壁近くあるいは左側壁中央に配置している。その後、この大型の石材の間に小振りの石を補填しながら積み上げ、さらにその上で横長の石材や小型の石材を利用して天井の位置をそろえ、最後に天井石を架構している。右側壁は下から水平を意識しながら積み上げたかのようなようであるが、左側壁は大型の石材で一気に上まで構築したような印象を受ける。玄室の天井は6石で構成されている。奥壁から5石目の石材が一番大きく長さ2.8mを測る。すべて平坦な面を下に向けており、高さをそろえながら架構している。しかし、天井石下面は、奥壁から玄門に向かうにつれ緩やかに下がり、最終的に奥壁と玄門付近で0.5m程度の高低差が生まれている。楣石は1石で高さ約1m以上の大型石材を架構する。自然石を割って平坦な部分を下面にしている。右側の袖石は2段で構成され、袖幅は80cmを測る。しかし、袖石の下の石材は高さ70cm以上の大きなものに対し、上の石材は小さい。この小さい石は、楣石を架構する際に高さ等を調整するために使用されたものと考えられる。右側壁の袖石に対応する左側壁の石材として玄門の2石があげられる。その下側の石材は25cmほど内側にせり出しており、これを袖と考える場合、この石室は両袖式と評価できる。一部埋没しているが、現状では右側壁の袖石が基本的に一段を志向するのにに対し、左側壁側は2段で構築しており、構造が異なっている。最終的には、発掘調査により判断すべきことではあるが、ここでは片袖式の横穴式石室として取り扱う。



第116図 横穴式石室実測図 (1/80)



第117図 墓道土層断面図 (1/40)

羨道には天井石が2石残存し、天井石の下面の高さはそろっている。現在、羨道幅1.4m、高さ約0.9mを測るが、奥壁で推測した床面から推定すると本来の高さとして1.2mほどが想定できる。両側壁の大半は土中に埋もれており、また、露出している石材の間隙も土砂に覆われており、詳しい形状を観察することができないが、玄室よりも一回り小さい石材を使用しているようである。羨道から南西側は池の堰堤に当たり、石室を観察することができない。

なお、先述のとおり、平成4年度に確認調査が実施され、墓道の一部が確認できた(第116・117図)。墓道は幅1.5m、深さ0.3mを測り、長さ1.2mにわたって検出できた。埋土は堅固で、上部は砂と互層になっており、中に土師質の陶器片が含まれていた。なお、確認調査時に記録されていた標高値が今回の調査で得られた標高値と整合できず、墓道床面の標高は不明である。(金田)

5 まとめ

LiDAR測定の成果から、鳥取上高塚古墳は墳長75m前後の前方後円墳と考えられる。墳丘は後世の開墾等で大きな変更を受けており、墳形について確実な情報が乏しく、前方後円墳説や円墳説などがあったが、今回の測定の結果、鳥取上高塚古墳が前方後円墳である可能性が高くなった。このことから、鳥取上高塚古墳が古墳時代後期において備前最大の前方後円墳であり、県内でもこうもり塚古墳に次ぐ規模を持つことが明らかとなった。また、こうもり塚古墳や五条野丸山古墳との類似性として指摘されてきたドーム状に小高い後円部に長い前方部が取り付く特徴的形狀(岡山県教育委員会2021、45頁)が、本古墳においても認められるものと考えられる。

横穴式石室についても過去の調査成果ともあわせ、詳細な実測図を提示することができた。石室については、墓道を含めた全長18.2m、石室の推定全長約15m、玄室長7.8m、玄室幅2.7mという規模を測り、これまでも指摘されていたことではあるが、県内においても屈指の規模を誇る。

これらの調査は、ともに鳥取上高塚古墳の構造を解明する上での基礎調査であるが、その成果は古墳時代における当地域と大和政権との政治的な関係等を検討する上で不可欠なものとなろう。これらの調査成果が、今後、鳥取上高塚古墳の保存や活用に、そしてさらなる研究の進展に資することを期待したい。(光本・山口・ライオン・金田)

謝辞

岡山大学考古学研究室による鳥取上高塚古墳のLiDAR測量は、MEXT科研費JP19H05732並びにJSPS科研費JP20H05634の助成を受けている。測量に当たり、アジルジオデザイン株式会社の上遠野輝義氏及び株式会社快適空間FCの鶴飼尚弘氏に御教示いただいた。

また、調査に当たっては、赤磐市教育委員会の有賀祐史氏をはじめ、地元関係者の協力を得た。

註

- (1) 横穴式石室測量時、天満池は改修工事のため池の水が抜かれ、池底がみえる状態であったが、天井石のような石材は見当たらなかった。
- (2) 後円部・前方部における最も高い標高とその地点については第113図に記している（後円部：36.674m、前方部：32.912m）。これは、本稿の基礎となる点群同様に、あくまで得られた点群の範囲によるものである。

参考文献

- 赤磐郡教育会 1940『改修赤磐郡誌』
 赤坂町教育委員会 1984『赤坂町誌』
 有賀祐史 2022『岡山県における古墳時代後期の副葬俵鏡』『古代吉備』第33集 古代吉備研究会
 今井亮・近藤義郎 1970『群集墳の盛行』『古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店
 宇垣匡雅 1991『鳥取上高塚古墳』『前方後円墳集成 中国四国編』山川出版社
 宇垣匡雅 2004『吉備の首長墓系譜』『古墳時代の政治構造 前方後円墳からのアプローチ』青木書店
 宇垣匡雅 2011『山陽』講座 日本の考古学7 古墳時代（上）青木書店
 小郷利幸・草原孝典 2000『吉井川、砂川流域の古墳の測量調査（4）—古墳時代中・後期の首長墓の動向—』『古代吉備』第22集 古代吉備研究会
 尾上元規 2000『鳥取上高塚古墳』『吉備の古墳（上） 備前・美作』乗岡実・行田裕美編 吉備考古ライブラリー・4 吉備人出版
 尾上元規 2020『吉備における横穴式石室の展開と地域性』『横穴式石室の研究』土生田純之編 同成社
 岡山県教育委員会 2003『改訂 岡山県遺跡地図<第9分冊 東備地区>』
 岡山県教育委員会 2021『史跡こうもり塚古墳保存活用計画書』
 金田善敬 2018『横穴式石室の規格に関する一試論—岡山県赤磐市域を中心として—』『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室編
 亀山行雄 1993『鳥取上高塚古墳』『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会
 亀山行雄 1999『岡山県内の横穴式石室』『論争 吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録1 考古学研究会
 草原孝典 2020『畿内型（横穴式）石室の伝播・変容・収束—キビ地域（備前国域・備中国南半域）の例から—』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 岡山市教育委員会
 倉林眞砂斗 1992『石棺』『吉備の考古学的研究（下）』近藤義郎編 山陽新聞社
 河本清 1987『巨石墳』『吉備の考古学』福武書店（『えとのおす』第24・25号 1984年刊）
 笹栗拓 2010『可貞・弥上地区における婦本路古墳群の位置づけ』『婦本路古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告225 岡山県教育委員会
 山陽町教育委員会 1975『山陽町の原始・古代』
 重根弘和 2005『墳輪について』『土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告191 岡山県教育委員会
 永山卯三郎 1930『岡山縣通史』上編 岡山県通史刊行会
 新納泉 1991『巨石墳の分布と系列』『岡山県史』原始・古代Ⅰ 岡山県史編纂委員会
 新納泉 1992『巨石墳』『吉備の考古学的研究（下）』近藤義郎編 山陽新聞社
 新納泉・三浦孝章編 2018『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団
 西川宏 1975『吉備の国』学生社
 則武忠直・高畑富子 1986『古代の繁栄』『山陽町史』山陽町
 土生田純之 2012『墳丘の特徴と評価』『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会
 広瀬和雄 2014『7世紀「吉備」に関する基礎的考察—北房地域の終末期古墳をめぐって—』『古代吉備』第26集 古代吉備研究会

- 藤田憲司 1984「特集 各地域における最後の前方後円墳 岡山県南部」『古代学研究』第103号 古代学研究会
- 藤田憲司 2003「こうもり塚と江崎古墳」吉備考古ライブラリー・9 吉備人出版
- 間壁忠彦・間壁霞子 1985『日本の古代遺跡23 岡山』保育社
- 松木武彦 2022「山陰・瀬戸内・土佐」『出雲・吉備・伊予』シリーズ 地域の古代日本 株式会社 KADOKAWA
- 光本順・山口雄治・ライアン ジョセフ 2022「LiDAR測量による岡山県赤磐市鳥取上高塚古墳の墳丘の検討」『文明動態学』vol.1 岡山大学文明動態学研究所
- 村上幸雄 1987「古墳時代後期」『岡山県の考古学』近藤義郎編 吉川弘文館
- 山崎信二 1985「横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—」(山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社に再掲)
- 四田寛人 2021「フォトグラメトリによる文化財の記録と観察—横穴式石室の写真測量の実践から—」『古代吉備』第32集 古代吉備研究会
- 脇坂光彦 2003「吉備地方の大型横穴式石室の評価」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

第6章 総括

第1節 調査の概要

こうもり塚古墳の発掘調査については、昭和42年の岡山大学・岡山理科大学による主に玄室を中心とした調査、昭和53年度の岡山県教育委員会による羨道及び墓道の調査、令和3・4年度の岡山県古代吉備文化財センターが実施した墳丘の調査と計4回実施されている。これまでに、昭和42年の調査概要は「岡山県史」及び「総社市史」で、昭和53年度の調査成果は「県報告35」で報告されている。そして、令和3・4年度の調査内容は本書に収載した。なお、本書は、昭和42年及び昭和53年度における調査成果も収載している。

1 墳丘

令和2年度に航空レーザ測量を実施し、こうもり塚古墳の墳丘測量図を再作成した。古墳は墳長約96mの二段築成の前方後円墳で、墳丘の主軸はN-43度-Eを測り、後円部が南西方向に向く。調査成果及び復元（第2節）による大きさは、後円部径約43mで、同部の高さは下段約3.4m、上段約5.0mの計約8.4mを測る。前方部の長さは約53mで、同部の高さは下段で2.4～2.8m、上段で3.1mである。また、前方部前端的墳端と前方部頂部の比高は5.4mである。墳丘の傾斜は、後円部は約35度であるが、前方部は下段で約20度、上段で側縁30～35度、前面約20度を測る。テラス面は後円部で標高24.5m付近に想定でき、幅3.0～4.0mと復元できる。前方部のテラス面は、標高25.0～26.2mで、幅は約3～5mと場所により異なっていたと考えられる。

墳丘の築造方法は後円部と前方部で異なる。後円部は、まず内周に溝を掘削し、その内側に盛土（第一次墳丘）を構築して上段とし、その後、溝を埋め戻して、下段（第二次墳丘）を構築する。本書では、この溝を「墳丘内埋没溝」と呼称した。第一次墳丘では異なる土を交互に堅固に積み重ねている部分があったが、第二次墳丘ではそのような工法は認められなかった。前方部の下段の大部分は地山を削り出して整形していたが、部分的に盛土も行っていた（T4）。前方部上段は、まず、前端に主軸と直交方向に土手状の盛土を構築したことが推測できた。その後、互層状の盛土を土手状盛土の内側に積み上げていた。なお、墳丘の構築であるが、古墳の北西側は、墳丘の段築や墳裾の整形が不十分であった。古墳の背面で目立たないため、整形を簡略化した可能性がある。また、古墳の周辺には幅20～40mにわたり緩斜面が巡っていた可能性を想定した。本書ではこれを「周縁部」と呼び、当時、墳丘周辺に一定の区画が存在していた可能性を指摘した。

墳丘調査において、埴輪や葺石といった外表施設は検出されなかった。また、各所で平安時代の土師器が散見された。横穴式石室内にも同時期の土師器が出土していることから、この時期に古墳の再利用が行われた可能性がある。

令和3・4年度に実施した墳丘の調査で出土した遺物は次のとおりである（掲載分のみ）。

須恵器：壺3、甕8 土師器碗5 黒色土器2 鉄斧1 瓦：丸瓦2、平瓦9

2 横穴式石室

横穴式石室は、『岡山県史』等で実測図が公開されているが、令和2年度に三次元測量を行い再実測した。石室は両袖式で南側に開口する。石室の主軸はN-12度-Eで、墳丘の主軸に対しては31度南に振れている。石室の全長は19.9m、玄室長は左側壁（西壁）で8.1m、右側壁で7.9m、玄室奥壁幅は3.6m、玄門近くの玄室幅は3.5m、玄室奥壁の高さは3.6m、玄門近くの玄室高は3.5m、羨道長は右側壁側で12.0m、左側壁側で11.0m、羨道入口幅は1.9m、玄門幅は2.1m、玄門近くの羨道の高さは2.7mである。これまで、こうもり塚古墳の全長は19.4mと報告されていたが、今回は、奥壁から右側壁前端的石材までとし全長19.9mとなった。玄室の長さも、これまで7.7mと公表されていたが8.1mに修正した。石室には、奥壁の基底石に大型の石材を利用したり、一段下がる楣石を設置したりするなどの特徴がある（第3節）。なお、今回の調査にあわせ石室の石材鑑定も実施し、その結果、その大部分は古墳周辺で採取できる石材であった（第4章第1節）。

石室内には石棺と陶棺が発見されている。石棺は、石室の測量にあわせ三次元計測により実測図を再作成した。石棺は蓋石に6か所の縄掛突起を有する貝殻石灰岩（浪形石）製の刳抜式家形石棺である。その大きさは、棺身は全長245cm、最大幅142cm、最大高80cmで、棺蓋は突起を含む現存長243cm、最大幅155cm、最大高57cmを測る。

陶棺は石室内に散在して出土したが、破片を総点検し復元を行った。その結果、全長は約245cm、最大幅約72cm、高さ約91cmを測り、身は長さ約237cm、幅約71cm、高さ約52cm、蓋は長さ約245cm、幅約72cm、高さ約38cmに復元できた。『総社市史』における復元推定長が約2mであったことから、全長が長く復元できた（第4節）。陶棺については胎土分析を実施している（第4章第2節）。

そのほか、こうもり塚古墳では、鉄釘の出土を根拠に木棺が使用されていると説明されてきたが、再整理の結果、鉄釘使用木棺の存在を積極的に裏付ける根拠に乏しかった。

なお、石室内の被葬者の人数を推測することは困難であるが、耳環が3種類出土していることから、最低3人の埋葬が考えられた。

横穴式石室の調査で出土した遺物は次のとおりである（掲載分のみ）。

須恵器：杯蓋24、杯身16、蓋3、高杯12、臚7、提瓶2、壺12、器台11、甕10

土師器：杯1、土師器碗4、黒色土器2、壺1、甕1、高杯10、把手付碗2

金属製品：環頭大刀柄頭1、大刀2、耳環4、馬具（鏡板付轡、辻金具、鞍、障泥、飾金具）

鉄鎌（長頸鎌92、平根鎌12、キャップ形20）、弓金具3

農工具（鉋1、鑿3、鎌2、鎌2、刀子5、その他1）

鉄釘4、鋸1、環3、鉄滓1、不明鉄器10、寛永通宝5

装身具：水晶製切子玉1、ガラス製小玉1

その他：播鉢1、瓦質鍋1、石鎌3、丸瓦7、平瓦12

3 築造時期と埋葬時期

こうもり塚古墳は、6世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる。その後、7世紀前半まで追葬があったと推定できる（第6節）。

（金田）

第2節 墳丘について

今回の墳丘の発掘調査により、こうもり塚古墳は二段築成の前方後円墳で、墳長約96m、後円部径約43m、前方部長約53mを測ることが分かった。しかし、葺石や埴輪などの外表施設はもたず、古墳の背後に当たる北西側では墳丘の整形が簡略化されていることが判明した。また、墳丘の周辺には幅20～40m程度の緩斜面状の周縁部が巡る可能性が指摘できた。墳丘の築造方法についても、後円部では墳丘内埋没溝を先に掘削し、上段（第一次墳丘）構築後、その溝を埋め戻して下段（第二次墳丘）を形成していることが分かったほか、前方部では、下段は地山を利用し、上段は盛土を施していることが明らかとなった。

ここでは、今回の発掘調査成果から、こうもり塚古墳の墳丘構造の検証を行い、それを基にした復元案を提示し、その特徴を考察する。

1 墳丘の築造工程

こうもり塚古墳で想定される墳丘築造工程は次のとおりである（第118図）。

- ・ 後円部の構築
 - ① 地山の整形
 - ② 墳丘内埋没溝の掘削
 - ③ 横穴式石室の構築
 - ④ 後円部上段（第一次墳丘）の構築
 - ⑤ 墳丘内埋没溝の埋め戻しと下段（第二次墳丘）の整形
- ・ 前方部の構築
 - ① 下段（地山）の整形
 - ② 上段の構築
- ・ 周縁部の整備

2 墳丘の築造方法

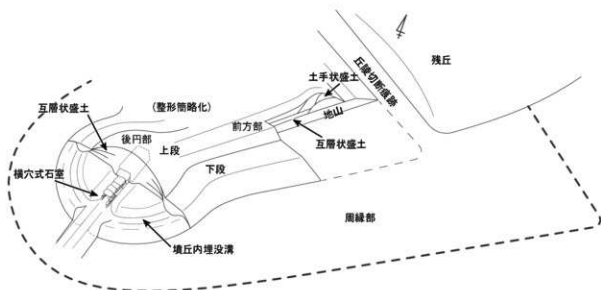
後円部の構築

① 地山の整形

こうもり塚古墳は、古墳北側に位置する三須丘陵から南西方向に伸びる細長い尾根の先端に位置する。本墳は、この尾根を切断して造られた、いわゆる丘尾切断型の前方後円墳である。古墳の構築に当たっては、先立って築造予定地の伐採や整地が行われたと考えられる。この整地作業の有無については、各トレンチの旧地表面の残存状況が手掛かりとなる。後円部のT1では旧地表面が盛土下に検出できておらず、盛土作業以前に既に地山が整地されていた可能性がある。一方、T2やT6では旧地表面と考えられる層が確認できることから、当初の地山の形状をあまり改変することなく、古墳の築造が開始されたと考えられる。

② 墳丘内埋没溝の掘削

今回の調査で、後円部の盛土構築以前に、後円部テラスから下段に相当する位置を巡るように地



第118図 こうもり塚古墳の築造工程模式図

山に溝（墳丘内埋没溝）を掘削していたことが分かった。この墳丘内埋没溝はT1で幅約4.7m、深さ約0.9m、T2で幅約3.5m、深さ約1.1mを測るほか、T6、T7でも確認されている。この墳丘内埋没溝の底面の標高は、南西側のT1で標高22.0mであるのに対し、墳丘背面のT2で標高22.6m、T7西壁で標高23.2m、T7東壁で標高24.4mを測り、墳丘の背面側に至るにつれ底面の標高が高く（溝は浅く）なっている。なお、今回、後円部と前方部の接続部分は調査していないため、この墳丘内埋没溝が後円部を一周していたかどうかは確認できていない。この墳丘内埋没溝の構築目的については後述する。

③ 横穴式石室の構築

後円部には横穴式石室が築かれている。石室は後円部のほぼ中心に位置していることから、石室と墳丘の構築には有機的な関係がうかがえ、一体的に計画されていたことが推定できる。石室の玄室床面の標高は約22.1mと、T2やT6で検出した旧地表面の標高約22.7～23.8mより低いことから、地山を掘り込んで石室の墓坑を構築したことは明らかである。また、後円部の墳端が標高約21mに復元できることから、石室は古墳の外側（墳端）より1mほど高い位置に設置されたことが分かる。他方、T1の墳丘内埋没溝の底は標高22.0mであり、石室床面と高さがほぼ同じである。このことから、石室と墳丘内埋没溝は一体的に設けられた可能性が高い。

④ 後円部上段（第一次墳丘）の構築

横穴式石室構築後、墳丘内埋没溝の内側に凹丘状の墳丘（第一次墳丘）を盛り上げたと考えられる。第一次墳丘の構造については、T1の所見を参照いただきたいが、複数の工程を経て、異なった土を交互に積み上げながら盛土を堅固に構築したことが分かる。

⑤ 墳丘内埋没溝の埋め戻しと下段（第二次墳丘）の整形

第一次墳丘構築後、その外側の溝を埋め戻し下段を造成したと考えられる。埋め戻しに当たっては、周辺の地山の土が利用された可能性が考えられ、しかも短期間に埋め戻された状況が観察できた。このため、下段の構築は墳裾や周縁部の整形とあわせて行われ、その過程で生じた土を下段に利用した可能性が推測できる。しかし、この下段及び墳裾の整形はT7の西端までで終わっており、

それより奥のくびれ部や前方部北側では行われていなかった。その理由として、この付近が、石室の開口部や後の古代山陽道が設置される南側から眺望できない地点であることが考えられる。

前方部の構築

① 下段(地山)の整形

前方部の構築に当たっては、まず、前方部前端の丘陵を主軸に対して直交方向に切断することから始まったと考えられる。前方部で旧地表面が確認できたトレンチとして、T5がある。しかし、T3、T4、T8では確実な旧地表面は確認されておらず、盛土段階まで旧地表面が残っていた箇所は限られていた可能性がある。その後、地山を削り出すことによって前方部前面や側縁を構築したとみるが、T4で確認できたように地山の低い場所には部分的にその箇所を盛土で補填したと推測できる。なお、古墳背後の北西側については、T8でみられたように、テラス及び下段の造作を簡略化していることが分かった。

② 上段の構築

上段は基本的に盛土で構築されている。上段の構築方法がよく分かるのはT3とT9であるが、前方部を構築するに当たって、まず、上段前端に土手状盛土を構築したと推測できる。この土手状盛土の規模としては幅約7m、高さ約2m程度が想定され、後述する互層状の盛土と比べると各層が厚かったり、塊状であったりと差異がみられる。この土手状盛土と似た土層がT4の上段でも観察できることから、この盛土は墳丘主軸に直交して前方部上段の前端全体にわたって造られていた可能性がある。

上段の盛土はT5やT9で詳細に観察できた。特に、T9でみられたように、上段は前方部前端の土手状盛土に擦り付けるように異なる土を交互に重ねて盛り上げていた。この盛土には黄褐色系の砂質土や褐色系のシルトなどが含まれる。前者は地山に由来する土で、古墳周辺の地山を掘削して持ち込んだ可能性がある。しかし、後者は地山には含まれておらず、古墳以外の場所から搬入された可能性が高い。盛土の構築に当たっては複数の工程が想定され、T9では5工程が確認できた。なお、現在残る前方部頂部は古墳の盛土によるものであるが、昭和42年の墳丘測量図によると後部部頂との比高は僅か12cmで前方部頂部の方が低かった。

周縁部の整備

こうもり塚古墳では、以前から、幅15～20mほどの段状の遺構が墳丘の周囲に存在しているのではないかと指摘されており、これを「県報告35」では「最下段」と呼んだ。今回の調査では、古墳築造当時、墳丘周辺が緩やかな斜面状に整地されていた可能性が指摘できたため、この部分を「周縁部」と呼称する。

現在、この周縁部の多くが後世の開墾で改変を受けており、当時の形状がうかがえる部分は少ない。しかし、開墾があまり及んでいないT2からT7にかけての範囲は良好に残存していて、ここでは墳裾から外側に向かって5～10度の緩斜面が広がっている。そのほか、T4の遺物包含層(52・63層)やT5の16層下で、古代以前の地形を残すとみられる緩斜面が確認できる。この緩斜面の形成が古墳造成に伴うものかどうかは慎重に判断すべきではあるが、この斜面角度が5～8度で、T2やT7でみられた傾斜に近いことから、こうもり塚古墳では、古墳の築造にあわせて墳丘の周りを緩斜面状に整形していた可能性が想定できる。

この周縁部について、その外縁を西するような施設(例えば区画溝とか列石)は、今回の調査では

確認できていない。したがって、現段階においては、この周縁部の範囲は厳密には特定できない。しかし、現地に残されている畦畔や段の中にはこの周縁部外縁の形状を反映していると推測できるものがある。むしろ、これらの畦畔や段は後世に整備されたもので、古墳と直接関連付けることは難しい。しかし、前方部側縁と平行に畦畔や段が構築されているものがあることを考えると、これが、あなたが古墳と無関係なものとは考えにくい。いずれにせよ、今回の調査では、これ以上のことは断言できず、周縁部の評価については、今後の検討課題として残しておきたい。

この周縁部は、本来、前方後円墳の周濠などに相当する箇所である。墳丘の周りに段状の基壇を配する古墳はあるが、こうもり塚古墳のように周囲を一定の幅で緩斜面状に整形している大型古墳は管見にない。こうもり塚古墳にこのような周縁部が付属する理由としては、古墳の南側に後の古代山陽道につながる幹線があり、そこからの視認性を高めるためであったことなどが考えられる。

3 墳丘の復元

表9に、今回の調査で明らかになった墳丘各所の計測値（一部復元値を含む。）を掲載した。これを基に、こうもり塚古墳の墳丘の復元を行う。

後円部の復元（第119図）

後円部の墳端は地山を整形することで構築され、それをT1、T2、T7で確認できた。T6の墳端は後世の変更で失われているが、T6の墳丘内埋没溝の底の高さや形状がT1とよく似ていることからT6の墳端もT1と同様に標高約21m付近に想定できる。一方、T2の墳端は標高22.4mでT1やT6と比べて約1.4m高い。このT1、T2、T6の墳端3点で後円部を復元した場合、その円の形状が上段の墳丘形状と微妙にあわない。仮にT2の墳端がT1やT6と同様の高さで施工されていたと仮定した場合、現在のT2の墳端より約1.8m外側の位置に墳端を想定できるので、これを基に後円部を復元した方が上段の形状との整合性がとりやすい。そこで、この方法で後円部の直径を算出すると径約43mとなる。したがって、こうもり塚古墳の下段は径約43mの正円で設計されていたが、T2

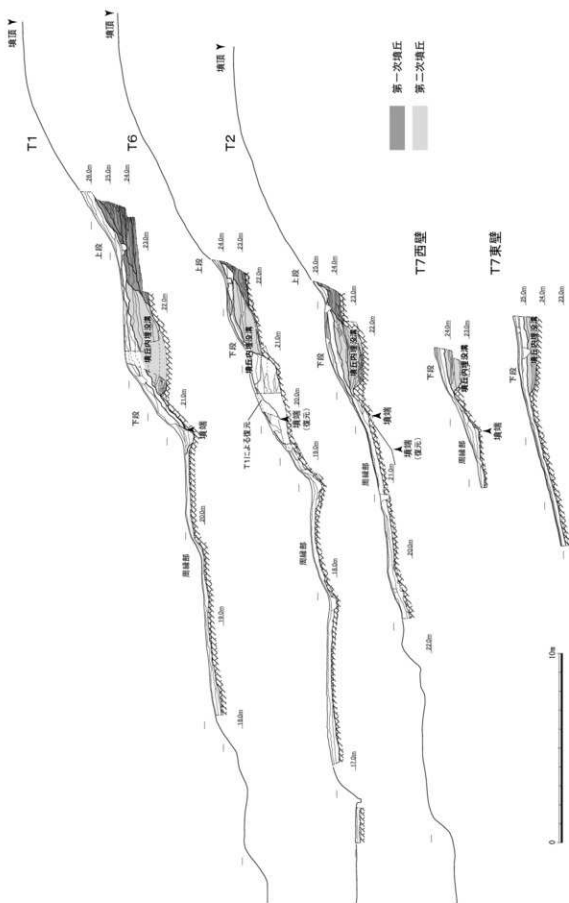
表9 墳丘に関する計測値

トレンチ名	上段			下段				周縁部	
	残存高 (m)	傾斜角度 (度)	墳端の 標高 (m)	残存テラスの 標高 (m)	テラスの 推定幅 (m)	残存高 (m)	傾斜角度 (度)	傾斜推定 角度 (度)	
後 円 部	T1	5.3	30~35	21.1	24.2	約4	3.1	35	5
	T2	5.1	35	22.4	24.4	約3	2.0	35	10
	T6	6.0	35	不明	23.5	約4	不明	不明	10
	T7西壁	—	—	22.5	24.3	2以上	1.8	35	5
	T7東壁	—	—	未施工	25.1	3.5以上	—	15	—
前 方 部	T5	2.2	35	22.5	25.0	約5~6.5	2.5	20	5~8
	T4	3.6	30	22.8	25.6	約3	2.8	20	8
	T8	未施工							
	T9	—	20	—	—	—	—	—	—
	T10	—	—	23.8	—	—	—	20	—
T3	3.0	20	23.8	26.2	約3	2.4	20	—	

後円部上段の残存高は、後円部墳頂の標高（29.5m）から残存テラスの標高を引いた値である。

前方部上段の残存高は、前方部頂部の標高（T5は27.2m、T9は29.2m）から残存テラスの標高を引いた値である。

下段の残存高は、残存テラスの標高から墳端の標高を引いた値である。



第119図 後円部の復元 (1/200)

では地山が高かったため、本来の設計であった正円の内側約1.8mに墳端を移したと推定できる。なお、後円部上段盛土は現況では前方部側に張り出している、その形状は楕円気味となっている。これについては、昭和45年以降の墳丘整備の影響も考慮する必要があるため、築造当初の形状を反映しているかどうか判断できない。

後円部は二段築成で、上段と下段の間にテラスが存在する。各トレンチで確認できたテラスの標高は表9のとおりで、残存テラス面の最高値は24.4mであることから、標高24.5m付近をテラス面と復元できる。上段と下段の墳丘の傾斜は下段で35度、上段で30～35度に想定できるので、場所にもよるが、テラスの幅は約3～4mに復元できる。

後円部の墳頂は現状で標高約29.6mであるが、墳頂の高さを考えるに当たっては、墳丘整備による客土の存在を考慮する必要がある。整備前の昭和42年の墳丘測量図には、後円部の墳頂は前方部の頂部より12cm高いことが記録されている。したがって、現在の未整備の前方部頂部の標高が29.12mなので、整備前の後円部墳頂の標高は29.24mに復元できる。墳頂における古墳盛土の流出をどの程度に見積もるかにもよるが、ここでは古墳築造当時の後円部墳頂の標高を29.5mに復元しておく。

これらの復元作業により、こうもり塚古墳の後円部は直径約43m、テラス幅は3～4mを測り、高さは下段で約3.4m、上段で約5.0mの計約8.4mに復元できる。

前方部の復元（第120図）

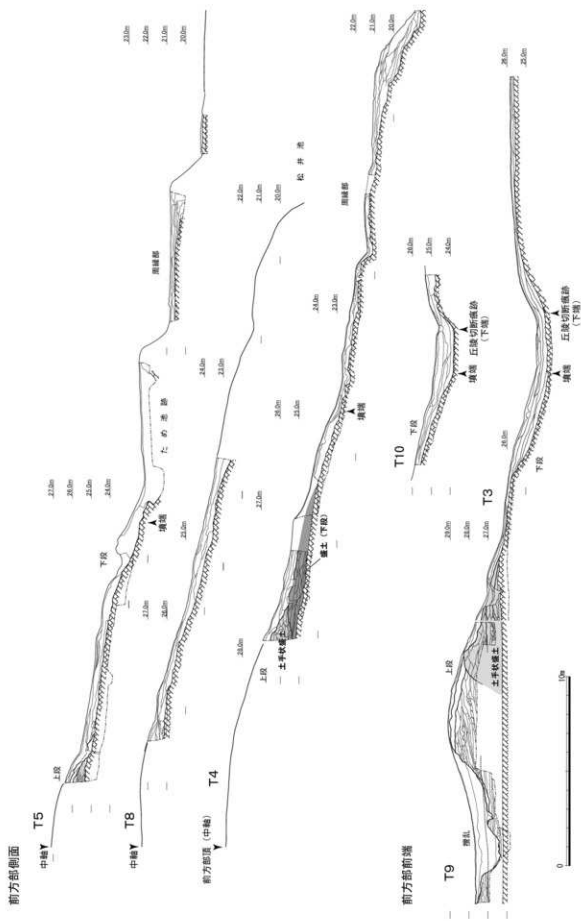
前方部の墳端が確認できたトレンチはT3、T4、T5、T10である。いずれも下段下端における地山の傾斜変換点を墳端と考えた。前方部前端（T3、T10）の墳端の高さはともに標高約23.8mで、南側縁のT4では標高22.8m、T5では標高22.5mを測る。後円部のT1の墳端の標高が21.1mであることから、前方部墳端の高さは前方部前端から後円部に至るにつれて低くなっており、後円部との比高は2.7mである。また、現在の前方部頂部は標高29.1mで、大規模改変の痕跡は認められないことから、古墳築造当初の形状を反映していると考えられる。なお、墳丘測量図では前方部が撥型を示すが、T4上段の墳端の位置を踏まえると、前方部側縁は直線に近い形状に復元できる。

こうもり塚古墳は、細長い丘陵を切断して前方部前端を構築している。その堀状の切断痕跡であるが、T3やT10の調査成果から、切断痕跡の底面幅は南東側で広く、北西側で狭くなっている。切断痕跡の残丘側の法面は主軸に直交と考えられるので、前方部前端ラインが主軸に斜交していることになる。その理由として、前方部の下段は残丘側から掘削を開始したが、特に古墳の背面にあたる北西側の前方部前端の掘削は省力化された可能性が考えられる。ただし、第121図では前方部前端を直線に復元しているが、それがT10より北西側で屈曲している可能性も否定できない。

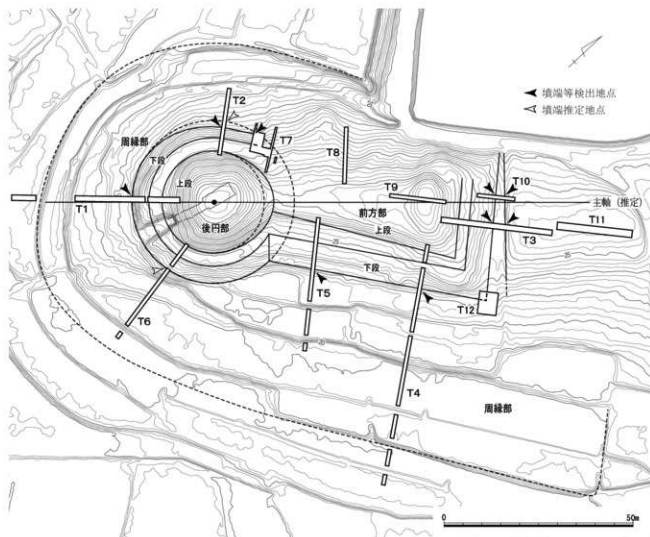
残存するテラス面の標高の最高値はT5で25.0mで、T4で25.6m、T3で26.2mを測り、テラス面は前方部前端の方が高くなる。後円部テラス面の標高を24.5mと復元すると、前方部前端テラス面との比高は約1.7mとなる。テラスの幅は前端で約3m、くびれ部で約5～6.5m、T4付近では約3mと推測できる。上段と下段の墳丘の傾斜は、前方部前端では上・下段とも約20度、前方部側縁では下段20度、上段30～35度と想定できる。

前方部の南東隅部（T12）は後世の開墾で消滅しており、詳細な位置は不明であった。他方、北西隅部は、仮に設けられていたとすると、現在の市道か松井池の中に復元できるが、前方部北西側の墳丘整形が簡略化されていたことから、どの程度の隅部が設けられていたのかは不明である。

これらの復元作業により、こうもり塚古墳の前方部は長さ約53mで、テラス幅はくびれ部で広く約



第120図 前方面部の復元 (1/200)



第121図 こうもり塚古墳の墳丘復元案 (1/1,000)

5～6.5m、前端で約3mを測る。前方部前端の墳端と前方部頂部の比高は約5.4mであり、下段の高さは約2.4m、上段の高さは約3.0mである。なお、前方部北西側は本古墳の背面に当たり、段築等の造成などが簡略化されている。そのため、前方部北西隅の形状は不明である。

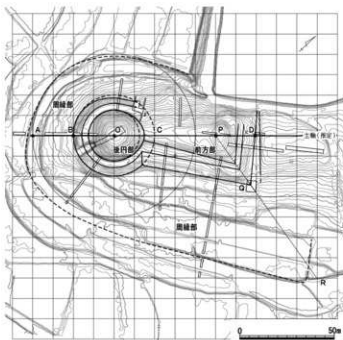
小結 (第121図)

このように、こうもり塚古墳は墳長約96m、後円部径約43m、前方部長約53mに復元できた。墳端は後円部で標高21.1m、前方部前端で23.8mを測ることから、前方部の方が高い。想定される墳丘の高さは後円部で約8.4m、前方部で約5.4mで、後円部の方が高いが、実際の頂部の標高値の差は十数cmと僅かである。主軸はN-43度-Eに復元できた。

4 こうもり塚古墳の墳丘に関する考察

こうもり塚古墳の築造企画 (第122図)

前方後円墳を築造する際に、具体的にどのようなものであったか不明であるが、設計図のようなもの(ここでは、「築造企画」という。)が存在した可能性が高い。ここでは、こうもり塚古墳の復元に基に、築造企画について検討したい。この前方後円墳の築造企画については、これまでも様々な説や



第122図 こうもり塚古墳の築造企画面案 (1/2,000)

方法が提唱されている(北條2011)が、その多くは後円部の径の約数を基準にする場合が多い。ここでは、上田宏範による築造企画論(上田1963)を参考に、こうもり塚古墳の築造企画について分析する。

こうもり塚古墳の後円部の直径は約43mであるので、後円部径43mを4等分して1区画10.75mの方眼を主軸を基準に重ねあわせたものが第122図である。後円部中心をO点、後円部外周及び前方部前線の主軸との交点をそれぞれB~D点とする。また、前方部頂部付近にも方眼の交点が確認できるので、これをP点とする。こうして、墳丘各所の比を求めるとBC:CP:PDが4:3:2となることが分かる。一方、周縁部であるが、

現在観察できる畦畔や段を手掛かりに、T1の園路付近をA点、P点からQ点(前方部南東隅)を延長しA点から続く周縁部外側の畦付近の交点をR点とすると、周縁部は後円部付近で2単位の幅を有する盾形の平面形を想定できる。ただ、この周縁部の範囲を確定する遺構は確認できていないため、周縁部の範囲は将来の課題としておきたい。

岡山県の前方後円墳で、このような築造企画が議論されている古墳として、造山古墳(新納2011)や両宮山古墳(有賀編2018)等があるが、ともにBC:CP:PDが4:1:2に近い値をとっている。こうもり塚古墳はCPが3単位なので、造山古墳や両宮山古墳と比べ前方部が2単位分長く設計されている。このことから、こうもり塚古墳が古墳時代中期の代表的な古墳である造山古墳や両宮山古墳の築造企画と異なっていることが分かる。

墳丘の築造について

古墳時代後期には規模の大きい横穴式石室が出現する。この大きな石室を構築するに当たっては、古墳築造のどの段階で、どのように施工すべきか、当時の土木技術者にとって大きな関心事であったに違いない。これについて、青木敬は、墳丘と横穴式石室の相関関係から、こうもり塚古墳を石室優先型に分類した。そして、古墳時代前・中期の古墳では墳丘の構築が重視されていたが、こうもり塚古墳については、横穴式石室の構築が優先事項になっていると評価した(青木2007)。こうもり塚古墳では、そのほかに、横穴式石室床面と墳丘内埋没溝の底面の高さが近いことから、墳丘と石室の構築に当たって相互に関連性があったことが分かる。

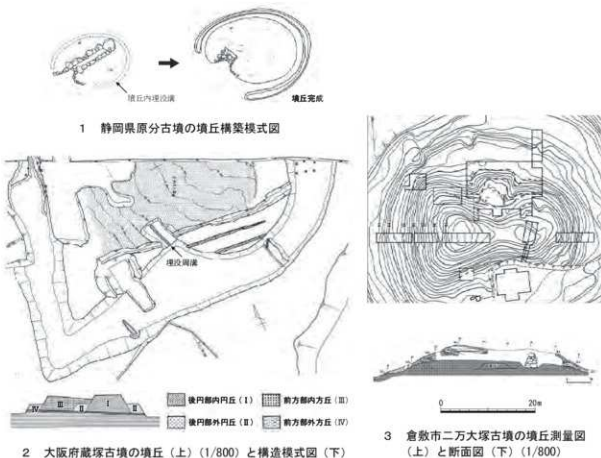
また、こうもり塚古墳は、後円部の墳丘傾斜角度が約35度を測り、後円部がドーム状に小高くなっていることも特徴である。墳丘の斜面角度が約27度を基本とした古墳時代前・中期の前方後円墳(宇垣2010)と比べ急になっており、墳丘の高さが強調されている。青木は、墳丘の高さが増す傾向を「墳丘高大化」と呼び、5世紀後半以降、大陸でこの傾向が成立したとする。そして、大陸で趨勢と

なっていた墳丘高大化というこの情報を得やすかった有力者の墓にこれが採用された可能性を指摘する(青木2016)。こうもり塚古墳の後円部の高大化も、このような動向を反映している可能性がある。

墳丘内埋没溝について(第123図)

こうもり塚古墳では、盛土以前の段階において、墳丘内に相当する位置に後円部の中心を巡るように溝を掘削している。そして、まず、溝の内側に第一次墳丘を構築し、次に、その溝を埋め戻しながら第二次墳丘を造り上げている。このように墳丘内に設けられる溝について、植野浩三は、埋め戻される点と後円部築造の基準となる区画という点に意義を認め、「区画溝」と称している(植野1984)。また、井鍋誉之は、静岡県原分古墳の事例等を基に、このような溝が墳丘の範囲を示す指標になったとして「墳丘内埋没溝」と呼んだ(井鍋編2008・井鍋2010、第123図1)。同様の溝は、「埋没周溝」(江浦編1998、第123図2)や「内周溝」(伊崎ほか1983)と呼称される場合もある。こうもり塚古墳で発見された溝については、これが最終的に埋め戻されることを重視し、「墳丘内埋没溝」という用語を使用する。

このような墳丘内埋没溝を持つ横穴式石室を有する古墳としては、岡山県内では津山市室尾石生谷口古墳(小林編1998、井鍋2010)等で類例があるが、古墳時代後期の横穴式石室を有する前方後円墳での報告事例はない。この墳丘内埋没溝の目的であるが、古墳を築造する際の地割とする説や、中には溝内で須恵器や埴輪などの遺物が出土することから、古墳築造以前の何らかの祭祀行為に関わるものとする説がある。こうもり塚古墳の場合、後者の説については、墳丘内埋没溝内から遺物は確認さ



1 静岡県原分古墳の墳丘構築模式図

2 大阪府蔵塚古墳の墳丘(上)(1/800)と構築模式図(下)

3 倉敷市二万大塚古墳の墳丘測量図(上)と断面図(下)(1/800)

第123図 墳丘の構築方法

れておらず、現状では土器等を用いた祭祀的な用途は想定できない。

他方、こうもり塚古墳の墳丘内埋没溝は、溝を埋め戻すことにあわせて、上段（第一次墳丘）の周囲に下段（第二次墳丘）を構築しているところに特徴がある。このように、墳丘の周囲に一段低い別の段を構築する手法が確認されている古墳として、大阪府葦塚古墳がある（江浦編1998、第123図2）。葦塚古墳は墳長53.5mの前方後円墳で6世紀中葉に築造されたと推測されているが、報告者は、後円部内円丘の後に、後円部外円丘を構築したとを想定する。一方、沼澤豊は、このように内側に急傾斜の円丘を盛り上げ、その後、その周辺に封土を付加するやり方を「腹付工法」と呼び、横穴式石室導入に伴い成立した新工法の可能性を指摘する（沼澤2008）。

ところで、こうもり塚古墳に先行する横穴式石室を有する倉敷市二万大塚古墳は、墳長38mの前方後円墳であり、横穴式石室を持つ前方後円墳の数少ない発掘調査事例の一つである（新納・三浦編2018、第123図3）。こうもり塚古墳と同様に二段築成と報告されているが、横穴式石室の構築と併行して下段から墳丘を積み上げており、墳丘内埋没溝はみつかっていない。こうもり塚古墳とは明らかに異なった工法が採用されている。横穴式石室を有する前方後円墳の築造方法に関しては、資料の蓄積を待つ必要があるが、こうもり塚古墳を契機にこれまで在地になかった新しい工法が導入された可能性は否定できない。

5 「見瀬丸山型前方後円墳」について

こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の墳丘比較（第124・125図）

こうもり塚古墳は、後円部がドーム状に小高く盛り上がり、後円部に比して長い前方部を持つといった特徴があり、奈良県五条野（見瀬）丸山古墳との類似が指摘されている（澤田1999、宇垣2004、土生田2012、松木2022）。五条野丸山古墳は墳丘復元長約330mで全国第6番目の規模を誇るのととも、周濠を含めると総長約360mを測る（一瀬・荒木2013）が、土生田純之は五条野丸山古墳と類似する古墳を「見瀬丸山型前方後円墳」と呼称し、その歴史的意義について論じた（土生田2012）。その論考の中で、「見瀬丸山型前方後円墳」とした古墳との共通点として、次の項目をあげる。

- 1）低い第1段と急傾斜で高い墳頂部に至る第2段の後円部
- 2）前方部は第1段、第2段ともに低い。特に墳頂部は平坦で、くびれ部から前端に近い最高所で緩やかに上昇する。
- 3）くびれ部の外廓線はさほどくびれず、全体に細長い盾形を呈するが、第2段は強くくびれて細くなる。
- 4）後円部に比して前方部が長い。特に第2段が顕著である。

そのほか、いずれも埋葬施設は横穴式石室で、古墳によっては埴輪や葺石を欠くことが指摘されている。今回の発掘調査で判明したこうもり塚古墳の墳丘は前方部頂部が高く、五条野丸山古墳でみられるように前方部頂部は平坦にならないなど当てはまらない点もあるが、そのほかの要素には該当する部分が多い。ここでは、今回の調査成果を基に、こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の墳丘を比較してみたい。

こうもり塚古墳と五条野丸山古墳との比較については、これまで昭和42年に岡山大学考古学研究室が作成した測量図を基に議論されてきたが、ここでは、令和2年度に作成した航空レーザ測量によるこうもり塚古墳の測量図を基に比較を行う。他方、五条野丸山古墳については、平成23・24年度に実

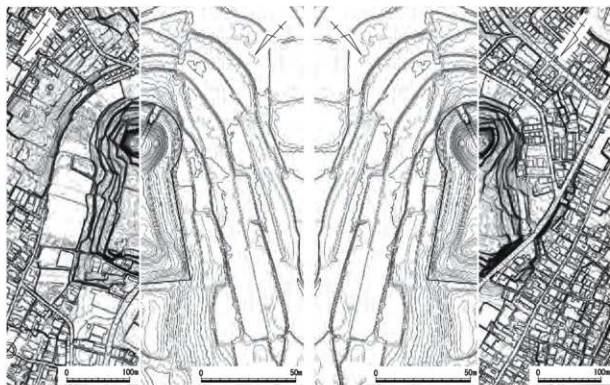


第124図 五條野丸山古墳 (1/6,000)

施された航空レーザ測量による実測図を使用する（第124図、一瀬・荒木2013）。五條野丸山古墳の墳丘復元については様々な説がある（榎原市1982、石部ほか1992、一瀬・村岡2012）が、これらを参考とする。比較に当たっては、五條野丸山古墳の墳丘復元長が約330m、こうもり塚古墳の墳丘長が約96mなので、ここでは、こうもり塚古墳の測量図を3倍に拡大し、五條野丸山古墳と比較した（第125図）。

その結果、墳丘については、増長に対する後円部と前方部の長さの比率など両古墳はよく似ていることが分かる。また、五條野丸山古墳の周濠に相当する位置が、こうもり塚古墳の周縁部に対応する可能性も指摘できる。このことから、古墳の平面プランにおいては、両古墳の間には密接な関係があったことが推測でき、両古墳は築造に当たって、築造企画を共有していた部分があったと考えられる。

他方、相違点もみられる。まず、こうもり塚古墳は二段築成であるが、五條野丸山古墳は現状では後円部四段、前方部三段とする説が有力である。また、先述



第125図 こうもり塚古墳と五條野丸山古墳の墳丘比較 (1/6,000・1/2,000)
 こうもり塚古墳の測量図(左図)は、南半部を反転して掲載している。

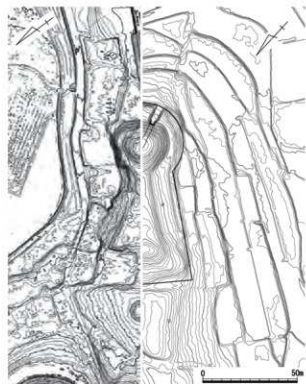
のとおり、五条野丸山古墳の前方部上は比較的平坦であるのに対し、こうもり塚古墳では前方部頂部が盛り上がる。また、復元案によっては、前方部前端を剣菱型のように屈折させるものもある。さらに、横穴式石室の位置であるが、五条野丸山古墳は下段より上の段に構築されている。

このように、こうもり塚古墳と五条野丸山古墳は、墳形や周濠（周縁部）の形状については共通点もみられるが、相違する部分もある。五条野丸山古墳はこれまで墳丘の確認調査が行われていないが、こうもり塚古墳の調査成果は、五条野丸山古墳やその他の古墳の復元においても一石を投じることになろう。

こうもり塚古墳と鳥取上高塚古墳の墳丘比較（第126図）

鳥取上高塚古墳は、推定全長約15mの巨大な横穴式石室を持つ古墳である。墳形は前方後円墳で、墳長は75mあるいは67mともいわれてきたが、詳細な墳丘測量図がなく、円墳とする説もあった。この鳥取上高塚古墳は、こうもり塚古墳と同様、小高い後円部と長い前方部を持つことから、五条野丸山古墳の影響を受けていることが指摘されてきた（宇垣2004）が、これまで詳細な墳丘測量図がなく、十分な検討ができないことが課題であった。このたび、岡山大学考古学研究室と岡山県古代吉備文化財センターは協同で鳥取上高塚古墳の墳丘及び横穴式石室の測量調査を実施した（第5章第3節）が、その中で、岡山大学考古学研究室が墳丘の航空レーザ測量を実施し、詳細な墳丘測量図を作成した（光本・山口・ライオン 2022）。その結果、鳥取上高塚古墳が墳長約75m前後の前方後円墳に復元できることが明らかとなった。

こうもり塚古墳は墳長約96mで、鳥取上高塚古墳は墳長約75m前後と推定されており、鳥取上高塚古墳の方が短い。ここでは同じ縮尺での比較を試みる。まず、注目されるのが、両者は墳長こそ違



第126図 こうもり塚古墳と鳥取上高塚古墳
の墳丘比較（1/2,000）

うものの、後円部の中心の位置と前方部前面の丘陵切断痕跡の残存側の法面の位置は近いことが分かる。この二つの要素は、古墳の規模を決めるに当たって重要であり、これが両古墳で一致するとすれば、両古墳は互いに同じような古墳を造ることを意図していたのではなからうか。仮にそうであれば、宇垣の指摘するように、鳥取上高塚古墳も五条野丸山古墳の影響を受けている可能性も考えられる。残念ながら、鳥取上高塚古墳の墳丘の多くは削平によって失われており、詳細な結論は将来に委ねることになるが、現段階では、こうもり塚古墳と鳥取上高塚古墳には共通点がみられ、それが五条野丸山古墳を介した結果である可能性を指摘するに留めたい。

「見瀬丸山型前方後円墳」の評価

ここまで、こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の墳丘形態に類似点があることを指摘した。また、鳥取上高塚古墳もこうもり塚古墳と共通性があることも述べた。こうもり塚古墳と墳丘形

態が類似することが指摘されている古墳として、ほかに津山市鴻の池2号墳があげられる。鴻の池2号墳は横穴式石室を持つ墳長35mの前方後円墳であるが、澤田秀実は、墳丘形態がこうもり塚古墳と酷似すると評価する(澤田2020)。そのほかに、鳥根県大念寺古墳(前方後円墳 墳長約92m)についても、こうもり塚古墳との墳丘の類似が指摘されている(仁木2019)。

土生田は、先述のとおり「見瀬丸山型前方後円墳」の類型を提唱し、こうもり塚古墳を含め7例が知られることを紹介した。また、松木武彦は山口県大日古墳もこれに該当する可能性があると主張する(松木2022)。ところで、この五条野丸山古墳の被葬者については、近年、欽明大王である可能性が有力になっている(高橋2004)。したがって、五条野丸山古墳と墳形を共有する「見瀬丸山型前方後円墳」の被葬者は、欽明大王との繋がり指摘できる。よって、これらの古墳の中に共有された情報は互いの関係性を示すものであり、また、相違点は、個々における欽明朝との関わり方や顔度の強弱を反映しているともいえる。このように考えたとき、こうもり塚古墳は、ほかの「見瀬丸山型前方後円墳」と比べ、墳丘規模も大きく、また、周濠(周縁部)も含めて共通点が多いことが指摘できる。とすると、こうもり塚古墳の被葬者は、ほかの「見瀬丸山型前方後円墳」の被葬者と比べても格別に深い関係が大和政権との間にあったといっても過言ではないだろう。

こうもり塚古墳の存在する備中南部では、5世紀後半に築造された宿寺山古墳以来、大型前方後円墳の築造がなされていなかった。そして、少なくとも半世紀を経て出現したこうもり塚古墳は、これまでの前方後円墳とは異なった、新しい政治関係や古墳築造技術を反映して造られた古墳と評価できる。(金田)

参考文献

- 青木敬 2007「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第23号 日本考古学協会
- 青木敬 2016「日韓王陵級古墳における墳丘の特質と評価」『日韓文化財論集』Ⅲ 奈良文化財研究所
- 有賀祐史編 2018「両宮山古墳2」赤磐市文化財調査報告第12集 赤磐市教育委員会
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川夢 1992「見瀬丸山古墳の築造企画の検討」『古代学研究』第127号 古代学研究会
- 伊崎俊秋ほか 1983「立山山古墳群」八女市教育委員会
- 一瀬和夫・村岡瑞穂 2012「榎原丸山古墳墳丘模型製作資料」『京都橋大学 文化財調査報告2011』京都橋大学文学部
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2013「榎原丸山古墳測量調査」『京都橋大学 文化財調査報告2012』京都橋大学文学部
- 井鍋啓之編 2008「原分古墳 調査報告編」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 井鍋啓之 2010「無袖石室の構築」『東日本の無袖横穴式石室』土生田純之編 雄山閣
- 上田宏範 1963「前方後円墳における築造企画の展開」『近畿古文化論叢』奈良県榎原考古学研究所
- 植野浩三 1984「前方後円墳の築造方法(1) -鳥取県西徳波16号墳を例にして-」『文化財学報』第3集 奈良大学文学部文化財学科
- 宇垣匡雅 2004「古備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造 前方後円墳からのアプローチ』青木書店
- 宇垣匡雅 2010「古墳の墳丘高」『考古学研究』第57巻第2号 考古学研究会
- 宇垣匡雅 2011「山陽」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店
- 江浦洋編 1998「蔵塚古墳」大阪府文化財調査研究センター調査報告書第24集 大阪府文化財調査研究センター
- 榎原市 1982「史跡丸山古墳保存管理計画書」
- 小林利晴編 1998「室尾石生谷口古墳ほか」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告133 岡山県教育委員会

- 澤田秀実 1999「前方後円墳築造企画の型式学的研究」『シンポジウム 前方後円墳の築造企画』発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 澤田秀実 2020「湖の池2号墳」『新修津山市史 資料編「考古」津山市史編さん委員会
- 高橋照彦 2004「畿内最後の大形前方後円墳に関する一試論—見瀬丸山古墳と欽陵古墳の被葬者—」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 新納泉 2011「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究』第58巻第1号 考古学研究会
- 新納泉・三浦孝章編 2018「二万大塚古墳」二万大塚古墳発掘調査団
- 仁木聡 2019「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集 島根県古代文化センター
- 沼澤豊 2008「千葉市人形塚古墳のいわゆる地割線について」『研究連絡誌』69 千葉県教育振興財団文化財センター
- 土生田純之 2012「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会
- 北條芳隆 2011「墳丘築造企画論の現状」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 松木武彦 2022「山陰・瀬戸内・土佐」『出雲・吉備・伊予』シリーズ 地域の古代日本 株式会社 KADOKAWA
- 光本順・山口雄治・ライアン ジョセフ 2022「LiDAR測量による岡山県赤磐市鳥取上高塚古墳の墳丘の検討」『文明動態学』vol.1 岡山大学文明動態学研究所

挿図出典

- 第123図：原分古墳：井鍋營之編2008「原分古墳 調査資料編」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集 静岡県埋蔵文化財調査研究所、蔵塚古墳：江浦洋編1998「蔵塚古墳」大阪府文化財調査研究センター調査報告書第24集 大阪府文化財調査研究センター、二万大塚古墳：新納泉・三浦孝章編2018「二万大塚古墳」二万大塚古墳発掘調査団
- 第124・125図：五条野丸山古墳：一瀬和夫・荒木瀬奈2013「榎原丸山古墳測量調査」『京都橋大学 文化財調査報告2012』京都橋大学文学部
- 第126図：鳥取上高塚古墳：光本順・山口雄治・ライアン ジョセフ2022（『LiDAR測量による岡山県赤磐市鳥取上高塚古墳の墳丘の検討』『文明動態学』vol.1 岡山大学文明動態学研究所）掲載の図8の原因（岡山大学考古学研究室提供）

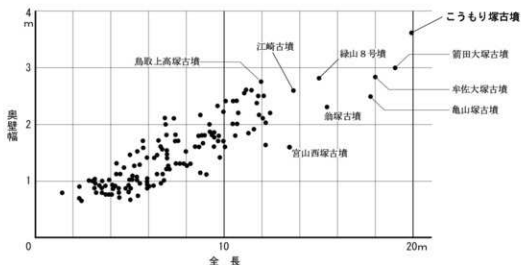
第3節 横穴式石室について

1 こうもり塚古墳の横穴式石室に関する研究略史

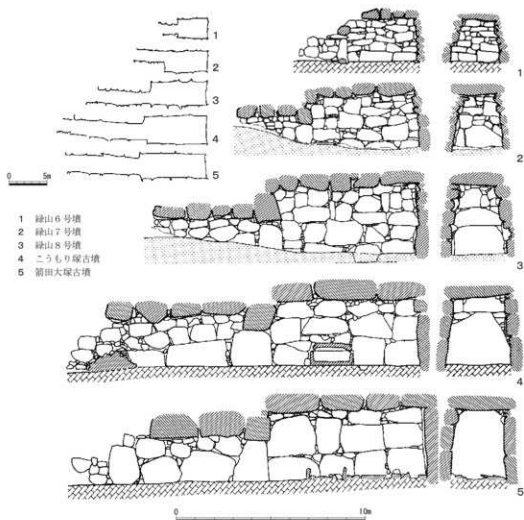
文化庁の統計によると、岡山県における古墳・横穴は総数11,810基を数える（文化庁文化財部記念物課2017）。そのうち、横穴式石室を有する古墳の数については正式な統計がないが、4000基を超えると推測できる^(註1)。こうもり塚古墳は其中でも最大級の規模を誇り、箭田大塚古墳、牟佐大塚古墳とともに、県内三大巨石墳の一つとして横穴式石室の頂点に位置する古墳である（第127図、宇垣編1995）。また、全国的には、畿内の大王墓で全国最大の横穴式石室を持つ五条野丸山古墳（石室全長28.4m）や福岡県宮地嶽古墳（石室全長約23m）に続き、以下、こうもり塚古墳と規模の近い全長19m級の横穴式石室が連なる。厳密な順位は付けがたいが、石室の全長では全国で屈指の規模となる。

岡山県における横穴式石室の最古の事例は千足古墳で5世紀に属する。その後、横穴式石室は6世紀に入り広く普及する。西日本の横穴式石室について、山崎信二は大きく「九州型」と「畿内型」に分類したが、こうもり塚古墳が所在する総社市域及びその周辺には両者がみられ、横穴式石室の導入に当たっては様々な地域からの影響を受けた結果とした。そのうち、こうもり塚古墳については、これを「畿内型」と捉え、大和政権の政治的な支配過程を反映すると考えた（山崎1985）。この「畿内型」に対する評価は、森下浩行や土生田純之にも引き継がれ、特に土生田は6世紀以降の畿内型石室の伝播が葬送儀礼というソフト面も含めて広く浸透したとした（森下1986、土生田1994）。

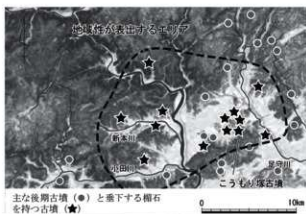
その一方で、山崎は、こうもり塚古墳の時期について、出土した須恵器から備中における両袖式石室としては最古のものであるとし^(註2)、これを畿内型石室の系譜で理解した上で、玄門立柱上の楣石が羨道の天井石より一段低いことから、備中の的に改変されたものであるとの見方を示した（山崎1985）。また、新納泉は、緑山古墳群の調査成果を基にこの地域の横穴式石室の発達過程を検証し、こうもり塚古墳の石室を、緑山古墳群における横穴式石室の発展の延長線上に位置付けた（第128図、新



第127図 岡山県における横穴式石室規模の比較



第128図 横穴式石室の変遷 (1/200・1/500)



第129図 横穴式石室の地域性 (1/400,000)

納1987)。一方、森下は吉備と畿内の横穴式石室を比較し、吉備の横穴式石室は基本的に畿内型の横穴式石室を基に成立しているとしながらも、畿内と違った面もあり、地域型式を生み出しているとした(森下1999)。笹栗拓も当地域の横穴式石室の地域性に着目し、総社平野の石室に奥壁の大型化と一枚化志向、一段下がる玄門の楣石、縦位の袖石などがみられることを特徴としてあげ、その分布範囲を示した(第129図、笹栗2010)。また、脇坂光彦は、このような特徴を示す横穴式石室を「備中型横穴式石室」と呼称し、吉備の強い個性が

認められるとした（脇坂2015）。太田宏明は、畿内型石室の影響下に成立した畿内系石室で吉備に分布しているものを「吉備型」とし、用石技術で畿内と違いがみられるとした（太田2016）。同様に、この地域における横穴式石室の地域性については、宇垣匡雅（宇垣2018）や尾上元規（尾上2020）も指摘する。

一方、こうもり塚古墳の規模について、脇坂は畿内の横穴式石室と比較し、こうもり塚古墳の横穴式石室は超大型（A類）で、その古墳を吉備地方全体を統治した超広域首長墓と考えた（脇坂2003）。また、沼澤豊は、こうもり塚古墳の横穴式石室の企画法について分析し、こうもり塚古墳が石舞台古墳にも匹敵する超大型規格の石室であることを述べた。さらに、設計に当たっては、畿内型企画法によっているとしながらも、中央政権による石室規格の制限を受けることが基本的になかったのではと推測している（沼澤2011）。

こうもり塚古墳の編年的な位置付けや実年代に関する研究として、次のものがあげられる。西川宏はこうもり塚古墳を6世紀前半とし、牟佐大塚古墳と箭田大塚古墳が後出する説を提唱した（西川1964）。春成秀爾らは、牟佐大塚古墳の調査から三大巨石墳について、箭田大塚古墳→こうもり塚古墳→牟佐大塚古墳という変遷を考えた（春成ほか1971）。また、新納は、緑山古墳群や江崎古墳の調査事例を基に、横穴式石室の時間的な変化を分析し、玄室や羨道の長さを増すことで石室の大形化が図られるとともに、奥壁が1枚石に近づいていくという方向性を示した。その上で、緑山6号墳→こうもり塚古墳→江崎古墳→箭田大塚古墳の順を提示し、こうもり塚古墳は6世紀中葉にはさかのぼらない、6世紀後葉の可能性を示した（新納1987・1992）。

一方、畿内における横穴式石室の変遷を踏まえ、岡山県の横穴式石室の変遷や時期に言及した議論として、次のものがある。白石太一郎は、吉備における前方後円墳の終末時期に関する議論の中で、吉備の横穴式石室の変遷や年代観に言及した（白石2008）。これに対して、新納は、白石の畿内における横穴式石室の変遷案に反論し、両者で議論が続いている。新納は、両地域における横穴式石室の用石技法の共通性や出土した須恵器から両地域の石室の併行関係や前後関係を提示した（新納2009）が、白石は系統を異にする両地域の石室形態の単純な比較だけからそれぞれの前後関係を想定することは無理ではないかとし、須恵器による対応関係あるいは前後関係を検討した（白石2010）。この両者の論争の背景には、畿内における横穴式石室の編年観や古墳被葬者の比定、さらに、須恵器の型式変化等に関する意見の相違があるのであって、吉備における主要横穴式石室の変遷順序自体に問題がある訳ではない。その中で、こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の前後関係について、白石はこうもり塚古墳の横穴式石室を五条野丸山古墳より新しく考えるが、新納は、こうもり塚古墳の「奥壁は丸山古墳（五条野丸山古墳：筆者注）のものに著しく類似しているが、側壁の段数から」五条野丸山古墳より古く位置付ける（新納2009）。しかし、両者とも、こうもり塚古墳から出土した須恵器をTK43型式段階とし、その時期を6世紀第4四半期に位置付ける。一方、広瀬和雄は、畿内の横穴式石室の編年に基づいて吉備の横穴式石室の変遷を検討しており、こうもり塚古墳を五条野丸山古墳と同期の畿内横穴式石室6期とし、その時期を7世紀初め頃とする（広瀬2014）。

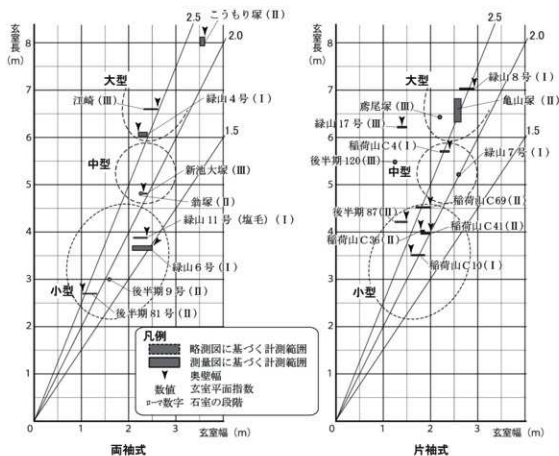
このように、横穴式石室の編年上におけるこうもり塚古墳の位置付けは、単に三須丘陵だけに留まらず、岡山県における横穴式石室の変遷ないしは畿内における横穴式石室の動向を考える上でも重要である。

2 三須丘陵における横穴式石室の分類

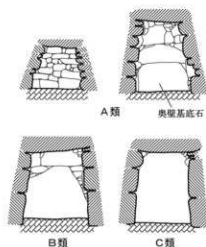
こうもり塚古墳が存在する丘陵是三須丘陵と呼ばれ、緑山古墳群を含め県内有数の横穴式石室を含む古墳が分布して有名である。三須丘陵では、これまでも古墳を中心に分布調査が行われており、緑山古墳群や稲荷山古墳群を含め約164基の横穴式石室が報告されている（近藤編1987）。その中で、特に昭和51年に刊行された岡山大学考古学研究室による分布調査では、計52基の横穴式石室の略測図が作成され、三須丘陵における横穴式石室の概要が分かる貴重な成果となっている（岡山大学考古学研究室1976）。また、昭和57年から行われた岡山大学考古学研究室による緑山古墳群の調査のほか、江崎古墳など同丘陵内で横穴式石室の調査が行われてきた。このような状況の中で、岡山県古代古備文化財センターは令和2年度に緑山・稲荷山古墳群を含む三須丘陵の航空レーザ測量を行った。あわせて、緑山・稲荷山古墳群の横穴式石室計9基について実測あるいは再実測を実施した（第5章第1・2節）。ここでは、これらの成果を踏まえ、三須丘陵における横穴式石室を検討し、こうもり塚古墳の同丘陵内における位置付けを明らかにする。

横穴式石室の平面形態による分類

三須丘陵に所在する横穴式石室は、その平面形から両袖式、片袖式、無袖式に分類できる。さらに、両袖式、片袖式については、玄室の大きさを基に、概ね玄室長6m以上を大型、4.5m以上を中型、それ以下を小型と細分できる（第130図）。また、検討に当たっては、必要により玄室の全長と幅の比率



第130図 三須丘陵における横穴式石室の大きさの分布（左：両袖式 右：片袖式）



第131図 横穴式石室の奥壁による分類

(玄室平面指数：玄室長／玄室幅×100)を使用する。無袖式については、奥壁の幅を基準に、幅約1.2～1.6mのものを中型、それより幅が狭いものを小型、広いものを大型とする。

両袖式の横穴式石室は、大型としてこうもり塚古墳、江崎古墳、緑山4号墳が、中型として新池大塚古墳が、小型として緑山6号墳、同11号墳(塩毛古墳)などがある。また、片袖式では、大型として緑山8号墳、亀山塚古墳、鳶尾塚古墳^(註3)が、中型として緑山7号墳、稲荷山C4号墳が、小型として稲荷山C10、C36、C41、C69号墳などがある。無袖式は多数あるが、今回測量を行った稲荷山C40号墳は小型に分類できる。

横穴式石室の奥壁による分類と段階設定

三須丘陵の横穴式石室の中には、こうもり塚古墳や江崎古墳、緑山6・17号墳など発掘調査が実施されていて、古墳の築造時期が分かるものも存在するが、大部分については発掘調査が未実施のため、具体的な内容は不明である。したがって、これらの未調査の古墳が営まれた時期の比定については慎重を期する必要があるが、当地域の横穴式石室の変遷については、先述のように奥壁の基底石の大型化や一枚化が時期的な変遷を示すと指摘されている。ここでは、横穴式石室分類の基礎作業として、奥壁の石材の構成から横穴式石室を次のようにA～C類に分類する(第131図)。

A類：奥壁基底石の高さが奥壁の半分程度以下に収まるもの

B類：奥壁基底石の高さが奥壁の6～8割程度を占めるもの

C類：奥壁を1石で構成するもの及び奥壁基底石の高さが奥壁の9割以上を占めるもの

このA～C類については、これが横穴式石室の時期的な変遷を反映している可能性があることから、A類の横穴式石室が営まれた段階をⅠ段階、B類をⅡ段階、C類をⅢ段階と設定する。各段階の横穴式石室が営まれた時期の目安については、発掘調査が行われた古墳の年代が参考となる。Ⅰ段階に属する緑山6号墳はTK10型式、Ⅱ段階のこうもり塚古墳はMT85～TK209型式、Ⅲ段階の江崎古墳はTK43～TK209型式、緑山17号墳はTK209～TK217型式の須恵器が出土している。これらを参考に各段階のおおまかな時期を示すと、Ⅰ段階が6世紀中葉頃、Ⅱ段階が6世紀中～後葉頃、Ⅲ段階が6世紀後葉以降となろう^(註4)。

この分類を基に三須丘陵における横穴式石室の変遷を整理したものが第132図である。次に、この図から分かる当地域における横穴式石室の変遷とその特質について考える。

3 三須丘陵における横穴式石室の変遷

Ⅰ段階(6世紀中葉頃)

両袖式石室では、大型の緑山4号墳、小型の緑山6号墳と同11号墳(塩毛古墳)があげられる。平面指数は、緑山4号墳は2.8で玄室平面は長方形に近く、後2者は1.5～1.6で方形に近く、両者で異なる。緑山4号墳は畿内の影響を受けた横穴式石室と評価されている一方、緑山6・11号墳は畿内型石室とみる向きもあるが、玄門立柱や柵石の存在から九州などの影響が強い横穴式石室と考えられてい

る。片袖式石室では緑山7・8号墳、稲荷山C4・C10号墳などがあげられる。緑山8号墳は大型、緑山7号墳と稲荷山C4号墳は中型、稲荷山C10号墳は小型に属し大きさに差異がある。しかし、緑山7号墳と稲荷山C4号墳の平面形はよく似ており、また、稲荷山C10号墳の玄室は緑山8号墳の2分の1の大きさとなっているなど互いに関連性がある。したがって、この段階の片袖式石室は、被葬者の階層にあわせて大きさを異にしつつも、石室の規格自体が互いに共有されていた可能性が考えられる。なお、無袖式石室でA類の奥壁を持つ横穴式石室もこの段階から出現するが、中型以下の大きさに留まっている。

このように、I段階では、両袖式では複数の種類の石室が、片袖式では大きさによる階層性を反映しつつも規格の似通った石室が確認できる。ただ、両袖式石室も片袖式石室も、規模においては大型から小型まで存在するため、両者の間に顕著な格差は認めがたい。

II 段階 (6世紀中～後葉頃)

この段階の両袖式石室として、大型のこうもり塚古墳がある。そのほか、小型の石室(後半期9、81号墳)も報告されているが、踏査できておらず実態は不明である。箭塚古墳はB類の奥壁を示唆する図面が残っている(永山1937)が、滅失しており詳細は不明である⁽²⁵⁾。この段階の両袖式石室では、こうもり塚古墳が突出した規模を誇る状況となっている。片袖式石室では、大型の亀山塚古墳、小型の稲荷山C36、C41、C69号墳などがあげられる。中でも、稲荷山C36号墳とC41号墳は、袖の方向が異なるものの玄室規模の大きさはほぼ同じである。したがって、この段階でも石室の規格を共有するような状況があった可能性が指摘できる。無袖式石室はこの時期から増加傾向を示し、両袖式、片袖式を凌駕する。さらに、大きさも大型から小型まで確認できる。

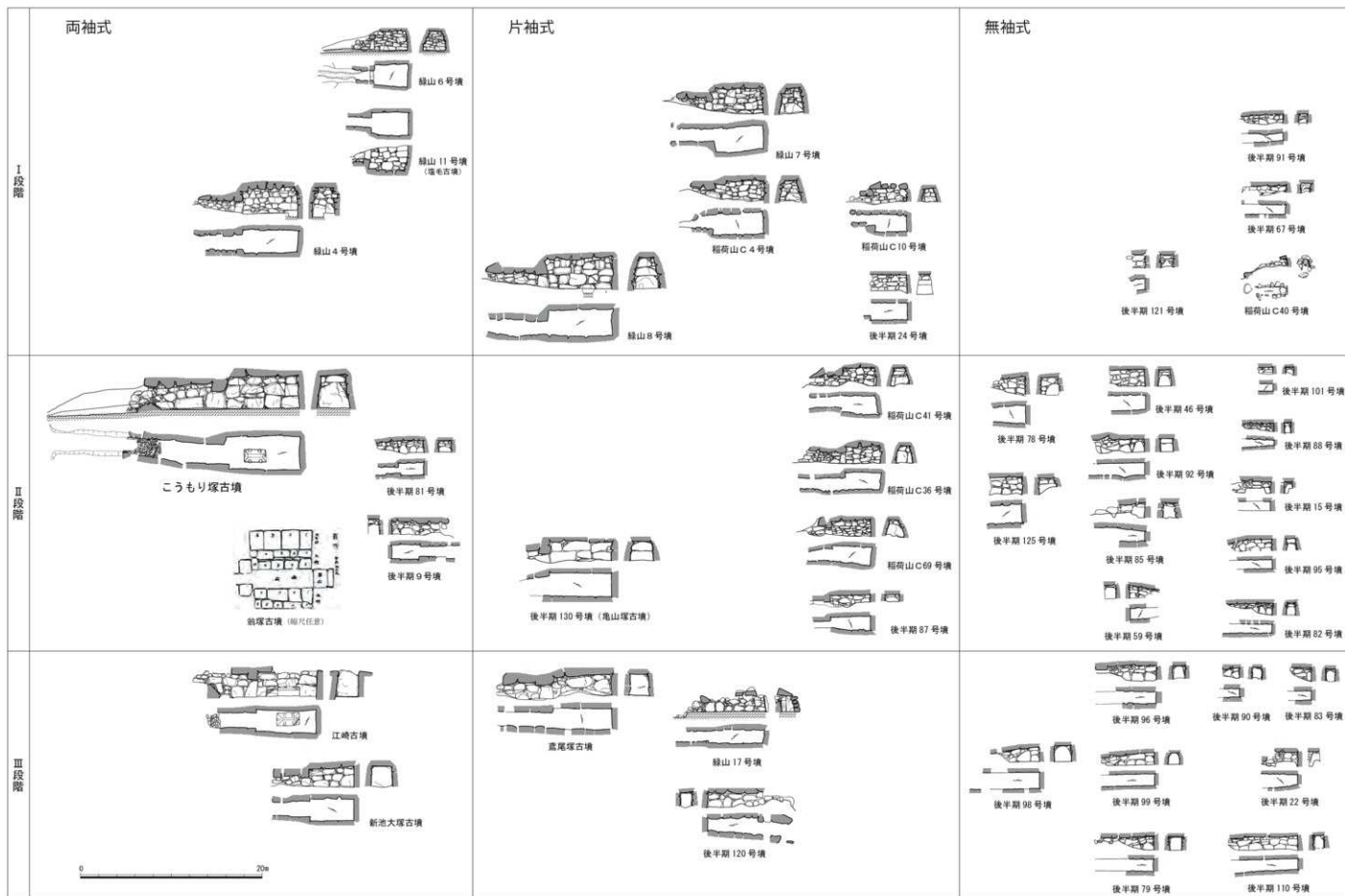
I段階では、規模的にあまり大きな差がみられなかった両袖式と片袖式であったが、II段階では、こうもり塚古墳の出現により大きな格差が生じている。片袖式石室については大型と小型があり、I段階同様、大きさによる階層性を保持している。一方、無袖式石室は、この段階で大型から小型までそろい、大きさによる階層性が確認できる。

III 段階 (6世紀後葉以降)

この段階では、無袖式石室の数が増し、有袖式石室は少なくなる。両袖式石室として、大型の江崎古墳と中型の新池大塚古墳があげられる。ただ、江崎古墳の玄室平面形は細長く、新池大塚古墳は幅広になっており、両者は別系統の横穴式石室と推測できる。片袖式石室としては大型の鷹尾塚古墳、緑山17号墳、後半期120号墳があげられる。ただし、緑山17号墳と後半期120号墳は報告書の記述から片袖式に分類したが、ともに無袖式の可能性が考えられる⁽²⁶⁾。無袖式石室は、前段階と同様に多くの石室が知られ、大きさも大型から小型までみられる。

この段階の特徴として、両袖式石室の江崎古墳と新池大塚古墳は、前段階のこうもり塚古墳と比べ、石室規模が小さくなる。また、片袖式石室の鷹尾塚古墳は、前段階の大型片袖式石室の系譜を踏襲していると考えられる。この段階では、片袖式石室において中型や小型の石室がみられず、これまで片袖式石室にみられた階層性はこの段階で解消している。代わって多数の無袖式石室が築造されるようになる。

このように、III段階の横穴式石室は、少数の有袖式石室と多数の無袖式石室で構成される。有袖式石室の分布は散発的であるのに対し、無袖式石室は地域に広く分布するようになる。



第132図 三須丘陵における横穴式石室の変遷 (1/400)

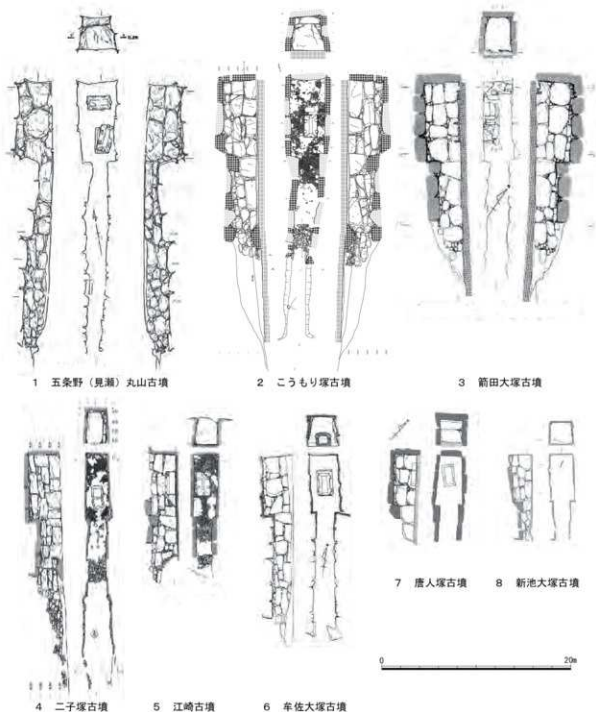
4 三須丘陵における横穴式石室の様相

前項の分析から、両袖式、片袖式、無袖式石室は同じように変遷するのではなく、各段階において、それぞれ異なった様相で展開していることが分かった。したがって、石室における形態差は、それぞれの石室が担った社会的役割やその時期の差を反映していると推測できる。

両袖式石室は、Ⅰ段階では大きさにおいて片袖式石室と大きな差が認められなかったが、Ⅱ段階のこうもり塚古墳の出現で片袖式石室と大きな格差を体現する。Ⅲ段階では、Ⅱ段階から規模は縮小するものの、地域内においては比較的大型で優位性を保っている。しかし、両袖式石室はいずれの段階においても少数で、その立地も独立して存在する傾向が強い。また、地域内においても両袖式石室のみでは目立った階層性を示さない。一方、片袖式石室は、Ⅰ期からⅢ期まで存続するが、特にⅠ・Ⅱ期においては大きさによる階層差を反映するかのように大型・(中型)・小型の石室が存在する。また、群集して存在する傾向も認められることから、地域内に広く採用された形態ともいえる。特に、同段階において、同規模の石室が存在したり、玄室平面指数が近い値を示すものが複数あったりと、互いの関係性を示す事例も認められる。無袖式石室は、Ⅱ段階から数を増し、この段階から規模において階層性がみられる。片袖式石室に代わって地域内で普及した形態と考えられる。

以上の分析から、片袖式・無袖式石室は、地域内において広く普及し、地域内における階層差が石室規模に反映している可能性がみられた。しかし、両袖式石室は単発的に築造される傾向が強く、地域内における階層性の発現に乏しい。このことから、この地域においては、特に両袖式石室と片袖式石室を採用した背景にはそれぞれ異なった原理が存在していた可能性が高い。このことは、両袖式石室の採用をも持って出現したこうもり塚古墳の性格を考える上で重要である。こうもり塚古墳が在地における階層関係を反映して築造されたと考える場合、その形態は片袖式石室か無袖式石室がふさわしい。しかし、こうもり塚古墳が両袖式石室を採用したことは、横穴式石室の形態の選定に当たり、在地以外の要素を考慮した可能性がある。これについて、脇坂光彦は、畿内の大型の横穴式石室には両袖式石室が多く、片袖式石室は定型化した大型石室成立以前の古式の横穴式石室あるいは両袖式石室に從属する地位の被葬者のものが想定される(脇坂2003)とし、被葬者が政権中枢と関わりとみられる石室は両袖式石室を基本とする(脇坂2018)とした。また、広瀬和雄は、こうもり塚古墳や江崎古墳などの横穴式石室の出現について、これまでの古備では主流にならなかった両袖式プランを採用していることから、前代の延長にありながらもそれとは一線を画した石室系譜といえそうである(広瀬2014)とした。このように、こうもり塚古墳における両袖式石室の採用は、単なる地域における墓制の踏襲ではなく、畿内において両袖式石室が体現する政治的な地位や意図を踏まえた結果と推測できる。

ところで、三須丘陵に存在する両袖式石室については、共通した点を有する横穴式石室が他地域に展開するなど広域性が指摘できる(第133図)。こうもり塚古墳の横穴式石室は、壁面構造に違いはあるものの奥壁は五条野丸山古墳との類似を示唆する意見もある(新納2009)。また、こうもり塚古墳は、箭田大塚古墳と全体的な石組みや配石が似ていることがいわれている(脇坂2003)。さらに、江崎古墳は、広島県二子塚古墳(後円部)との規模の類似が言及されている(脇坂2018)。そのほか、新池大塚古墳も石室の平面形において牟佐大塚古墳や唐人塚古墳と類似していることが指摘されている(寒川ほか2014)。このように、三須丘陵の両袖式石室には複数の系列が認められ、それぞれ大和政権



第133図 関連する横穴式石室 (1/400)

を含め広域的な政治関係などを反映して導入された可能性が考えられる。

5 横穴式石室の用石技術

先述の研究史で言及したとおり、この三須丘陵を含む総社平野を中心とする横穴式石室の構築技法には地域性が指摘されている。その大きな特徴として、奥壁基底石の大型化と一枚化志向、一段下がる玄門の楣石の存在があげられる。

奥壁基底石の大型化と一枚化志向は、有袖式、無袖式に関わらず、この三須丘陵の古墳で普遍的に

確認できる。岡山県では、こうもり塚古墳の段階から奥壁に大きな石材を用いており（亀山1999）、このころから、奥壁基底石の大型化が進んだと考えられる。当地域においても袖の有無や石室の大きさに関わらずこの傾向がうかがえ、地域において石室の構築技法が共有されていた可能性がある。この奥壁基底石の大型化は九州を起源とする用石技法と考えられており、畿内より吉備で先行したと認識されている。しかし、こうもり塚古墳の石室と類似する五条野丸山古墳の奥壁石材がこうもり塚古墳と同様に大型石材を使用している点は注目すべきである。こうもり塚古墳の奥壁基底石の大型化が在地における独自の变化によるものとも考えられるが、五条野丸山古墳の用石技法の影響を受けた結果である可能性も検討すべきである。

また、一段下がる玄門の楣石については、三須丘陵の無袖式石室では良好な事例は確認されていないが、有袖式石室では両袖式と片袖式の両方で確認することができる。その出現は、こうもり塚古墳築造以前のI段階までさかのぼる。したがって、こうもり塚古墳における楣石の用石技法は、前段階からの技法を踏襲したものと推定できる。しかし、その楣石の入口側の段差については高低があり、こうもり塚古墳や江崎古墳のように段差が大きいものから、緑山8号墳のように段差の小さいものもある。また、緑山4号墳のように段差のみられないものもあり、その形態は一様ではない。その理由は定かでないが、石室構築工程の相違あるいは複数の工人の存在を示唆するものであろうか。

このように、三須丘陵の横穴式石室の用石技法には、石室の形態（有袖式、無袖式）や規模に関わらず共通する点が確認できた。これは、石室の構築に当たって、地域で共有された技法が活用されたことを示している。そして、こうもり塚古墳の石室の構築に際しては、従来からの構築技術に加え、新しい工法も導入された可能性が考えられる。そして、そこで培われた技術は再び在地工人に還元され、地域内のほかの石室の築造にも活用された可能性が高い。

6 こうもり塚古墳の横穴式石室出現の意義

こうもり塚古墳の横穴式石室に先行する石室としては、緑山4号墳や緑山8号墳がある。こうもり塚古墳と同じ両袖式の緑山4号墳は畿内の影響を受けた石室と考えられるが、こうもり塚古墳より玄室の規模が小さく、また、奥壁石材も多段に組まれており、また、楣石の架設もみられないなど、こうもり塚古墳の石室とは様相が異なる。こうもり塚古墳のような巨大な両袖式石室という意匠は、単に在地の横穴式石室の自律的發展だけでは説明できないであろう。その規模や意匠の採用については、特に畿内や他地域との関わりの中で選択された可能性が高いのではないだろうか。

また、こうもり塚古墳の特徴である奥壁の巨大な基底石についても、地域における漸移的な変化の中で理解する意見もあるが、五条野丸山古墳の石室など、他地域からの影響により出現した可能性も考えられる。このことから、こうもり塚古墳の石室の構築を契機として、これまでになかった技法がもたらされた可能性も考えられる。しかし、楣石の架設にもみられるように、石室の基本的な構築は在地工人を中心になされたものであろう。

このように考えると、こうもり塚古墳の横穴式石室は、以前から在地に伝わる用石技術をベースにしながらも、それ以外に、他地域、特に畿内からの情報も加わって構築された可能性が推測できる。こうもり塚古墳の横穴式石室は、当地域だけでなく他地域に向けても、こうもり塚古墳の政治的な優位性や地域間関係を誇示できるような石室であった可能性が高い。（金田）

注

- (1) 岡山県遺跡地図を基に概数を算出した(岡山県教育委員会2003)。
- (2) 山崎信二は、こうもり塚古墳出土の長脚一段透かしを持つ須恵器高杯について、T K10型式までさかのぼらせる見解を示している(山崎1985)が、これについて、新納泉は透かしが一段である点を除けば器形の細部はT K10型式とは異質なものと考えた(新納1987)。
- (3) 鷲塚古墳は両袖式横穴式石室と報告されている(清家・四田編2019)が、右袖部はあまり突出していないことから、ここでは片袖式とする。
- (4) 仮にA類の横穴式石室がⅢ段階に造られることも想定できるので、ここで取り上げる古墳の段階は、そこに属する古墳の築造年代の上限を示すと考える。
- (5) 鷲塚古墳の横穴式石室の大きさは、全長15.5m、玄室長4.8m、幅2.3m、高さ2.5mと報告されている(村上編1984)、『吉備郡史』の記載と一致しない部分があり詳細は不明である。
- (6) 緑山17号墳は右側壁に袖石を持つ片袖式横穴式石室と報告されている(村上編1984)が、この袖石については石室の羨門の石材の可能性を考えたい。未踏査であるが、後半期120号墳も同様である。

参考文献

- 今井亮・近藤義郎 1970『群集墳の盛行』『古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店
- 宇垣匡雅編 1995『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会
- 宇垣匡雅 2018『吉備からみた畿内』講座 畿内の考古学第Ⅱ巻 古墳時代の畿内 広瀬和雄・山中章・吉川真司編 雄山閣
- 太田宏明 2016『横穴式石室と古墳時代社会』雄山閣
- 岡山県教育委員会 2003『改訂 岡山県遺跡地図』第1～9分冊
- 岡山大学考古学研究所 1976『三須丘陵遺跡分布調査報告』
- 尾上元規 2020『吉備における横穴式石室の展開と地域性』『横穴式石室の研究』土生田純之編 同成社
- 亀山行雄 1999『岡山県内の横穴式石室』『論争 吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録1 考古学研究会
- 寒川史也・佐々木新吾・三浦由美子 2014『新池大塚古墳の測量調査』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 岡山市教育委員会
- 草原孝典 2001『唐人塚古墳石室の測量調査』『岡山市埋蔵文化財調査の概要—1999(平成11)年度—』岡山市教育委員会
- 葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅 1986『箭田大塚古墳』『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 近藤義郎 1987『江崎古墳』『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 近藤義郎編 1987『緑山古墳群』総社市文化振興財団
- 笹栗拓 2010『横穴式石室の展開過程と地域社会の構造—吉備の分析を中心に—』『古代学研究』第188号 古代学研究会
- 白石太一郎 2008『吉備の大型横穴式石室をめぐる問題』『古代学研究』第180号 古代学研究会
- 白石太一郎 2010『前方後円墳終末の暦年代をめくって—新納泉氏の批判に答える—』『埋文行政と研究のはざまで』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 清家章・四田寛人編 2019『鷲塚古墳Ⅰ—墳丘測量調査・石室実測調査報告—』岡山大学考古学研究室
- 高田荘爾・畑信次 2006『広島県史跡 二子塚古墳発掘調査報告書』福山市教育委員会
- 永山卯三郎 1937『吉備郡史』上巻 吉備郡教育会
- 新納泉 1987『緑山古墳群の築造年代と形成の過程』『緑山古墳群』総社市文化振興財団
- 新納泉 1992『巨石墳』『吉備の考古学的研究(下)』近藤義郎編 山陽新聞社
- 新納泉 2009『前方後円墳廃絶期の暦年代』『考古学研究』第56巻第3号 考古学研究会
- 西川宏 1964『吉備政権の性格』『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集刊行会
- 沼澤豊 2011『横穴式石室設計論』『日本古墳の構造研究』早稲田大学博士論文
- 土生田純之 1994『畿内型石室の成立と伝播』『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5 荒木敏夫編

名著出版

- 春成秀爾・出宮徳尚・近成久美子 1971「岡山市牟佐大塚古墳」『古代吉備』第7集 古代吉備研究会
- 広瀬和雄 2014「7世紀『吉備』に関する基礎的考察—北房地域の終末期古墳をめぐって—」『古代吉備』第26集 古代吉備研究会
- 福尾正彦・徳田誠志 1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部
- 文化庁文化財部記念物課 2017「埋蔵文化財関係統計資料—平成28年度—」
- 村上幸雄編 1984「緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡」総社市埋蔵文化財発掘調査報告1 総社市教育委員会
- 森下浩行 1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』第111号 古代学研究会
- 森下浩行 1999「畿内からみた吉備地域の横穴式石室」『論争 吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録1 考古学研究会
- 山崎信二 1985「横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—」(山崎信二 2003「古代瓦と横穴式石室の研究」同成社に再掲)
- 脇坂光彦 2003「吉備地方の大型横穴式石室の評価」『考古学に学ぶII』同志社大学考古学シリーズVIII 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 脇坂光彦 2015「広島県に運ばれている竜山石製の石棺」『森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学シリーズXI 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 脇坂光彦 2018「史跡・二子塚古墳造営の歴史的意義・背景について」『芸備』第50集 芸備友の会

挿図出典

- 第127図：宇垣匡雅1995「(川戸古墳群発掘調査報告書) 岡山県大原町教育委員会」を基に一部改変
- 第128図：新納泉1987「(緑山古墳群の築造年代と形成の過程)『緑山古墳群』総社市文化振興財団」を基に一部改変
- 第129図：笹栗拓2010「(横穴式石室の展開過程と地域社会の構造—吉備の分析を中心に—)『古代学研究』第188号 古代学研究会」を基に一部改変、地図は国土地理院発行「地理院地図」より引用、著者改変
- 第132図：緑山4号墳：近藤義郎編1987「緑山古墳群」総社市文化振興財団、緑山17号墳：村上幸雄編1984「緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡」総社市教育委員会、緑山11号墳：山崎信二1985「横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—」、翁塚古墳：永山卯三郎1937「吉備郡史」上巻 吉備郡教育会、江崎古墳：近藤義郎1987「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会、新池大塚古墳：寒川史也・佐々木新吾・三浦由美子2014「新池大塚古墳の測量調査」岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 岡山市教育委員会、鳶尾塚古墳：清家章・四田寛人編2019「鳶尾塚古墳1—塚丘測量調査・石室実測調査報告—」岡山大学考古学研究室、その他(後半期古墳)：岡山大学考古学研究室1976「三須丘陵遺跡分布調査報告」を基に再トレース
- 第133図：五条野丸山古墳：福尾正彦・徳田誠志1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部、簡田大塚古墳：葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅1986「簡田大塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会、二子塚古墳：高田荘爾・畑信次2006「広島県史跡 二子塚古墳発掘調査報告書」福山市教育委員会、江崎古墳：同上、牟佐大塚古墳：春成秀爾・出宮徳尚・近成久美子1971「岡山市牟佐大塚古墳」『古代吉備』第7集 古代吉備研究会、新池大塚古墳：同上、唐人塚古墳：草原孝典2001「唐人塚古墳石室の測量調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要—1999(平成11)年度—』岡山市教育委員会

第4節 石棺・陶棺について

1 石棺について

こうもり塚古墳の石棺は、6世紀では吉備最古級の家形石棺であり、古墳築造の背景や被葬者像を探る上で重要な資料である。ここでは、これまでの研究でこうもり塚古墳石棺がどのように位置付けられてきたかを整理した上で、石棺の編年的な位置付けや導入の背景について考察する。

こうもり塚古墳石棺の研究史

こうもり塚古墳石棺の存在については古くから認知されており、昭和30年には佐上静夫がその石材を「山ノ上部落」（現岡山県井原市）付近の「化石岩」（貝殻石灰岩、通称「浪形石」）と特定している（佐上1955）。こうもり塚古墳石棺の全容が明らかになったのは昭和42年に実施された玄室内の発掘調査以降である。その実測図が昭和61年に『岡山県史』（葛原ほか1986）に掲載されると、その位置付けについて本格的な議論が行われるようになった。

村上幸雄は、吉備における浪形石製家形石棺の分布を示した上で、その使用は畿内政権の部族連合解体にむけての有力家族体の掌握に対する部族連合体制の存続の証と考え、畿内勢力の浸透を受けつつも、なお独自性を保とうとする勢力の存在を想定した（村上1987）。倉林眞砂斗は、こうもり塚古墳石棺を集成編年の10期に比定し、浪形石製家形石棺の変遷を王墓山→こうもり塚→金子石塔塚→江崎→牟佐大塚の順とした上で、その分布を吉備独自の石材供給ネットワークと考え、背景に畿内勢力との確執の中で発現した備中勢力の独自性と求心性の高まりを想定した（倉林1992、2005）。亀山行雄は、浪形石製家形石棺の変遷をこうもり塚・王墓山→江崎・金子石塔塚と考え（亀山1999）、こうもり塚古墳石棺の年代をTK43型式の範疇とした上で、畿内の剣拔式石棺を忠実に模倣したものとして、奈良県都塚古墳石棺との類似を指摘した（亀山2010）。浪形石製家形石棺の背景については、備中南部の中核勢力が畿内の棺制にならなながらも独自の古墳秩序を表現する目的で直接開発に当たったものと推測している。増田一裕は、こうもり塚古墳石棺を「畿内系家形石棺」に含め、その主系列（A2種1類）でも古いグループ（A2種1a類）に分類し、出土須恵器や型式的な特徴から第Ⅲ期第1段階（MT85～TK43）の中で最も新しい時期に位置付けた。また、浪形石製家形石棺成立の背景としては畿内系の土工集団による石切場の開拓と、ヤマト政権による設計企画の分配を想定している（増田2003a・b・2004）。山本ジェームズは、「畿内系家形石棺」の突起に注目し、その変遷を示した上で、こうもり塚古墳石棺を畿内における「同列化」以前の石棺（2期・TK43期）と位置付けた。また、浪形石製家形石棺については、畿内の石棺との型式的な変遷の一致から、両地域の密接な関連を指摘している（山本2008）。亀田修一は、浪形石製家形石棺は吉備の大首長や地域首長の墓に使用されていることを指摘した上で、吉備の首長たちの表象として使用されたとした（亀田2008）。草原孝典は、浪形石製石棺の変遷を王墓山→こうもり塚→江崎・金子石塔塚→牟佐大塚と考えた上で、浪形石製家形石棺は旧備中国域の首長層によって創出された石棺とした（草原2012）。石橋宏は、吉備の浪形石製家形石棺は畿内の墓制をこうもり塚古墳の被葬者が主導して採用した結果とし、規模・突起型式・構造（剣拔式と組合式）からなる畿内3期（MT85～TK209）の石棺秩序を正確に導入し首長層で共有していたと指摘した。その上で、こうもり塚古墳石棺については突起の配置が畿内の石

棺秩序でも上位に位置する一方、規模は畿内の最上位の石棺に及ばないことから、在地の石材を使っても畿内の石棺秩序を無視したものは製作できない状況であったとした。こうもり塚古墳の被葬者については、屯倉経営に協力した在地の有力者であり、倭王権の承認を得て畿内の石棺とその秩序を導入したと想定している（石橋2013）。

これまでの研究により、こうもり塚古墳石棺は王墓山古墳石棺と並んで浪形石製家形石棺の中では古式となること、形態的な特徴から、導入の背景には畿内勢力との関わりが想定されることなどが明らかにされてきたといえる。時期については、TK43型式段階に比定する意見が多く、浪形石製家形石棺の使用については、吉備の独自性を強調する意見（村上1987、倉林1992、草原2012）に対し、あくまで畿内のヤマト王権（倭王権）による承認の下での運用を想定する意見（増田2003a・b・2004、石橋2013）が出されている状況である。

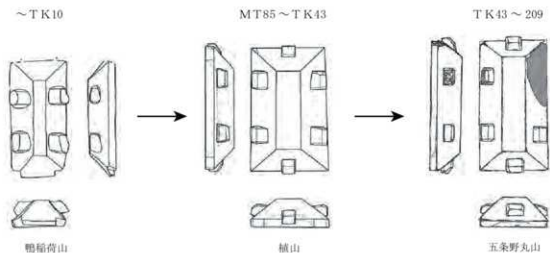
こうもり塚古墳石棺の編年の位置付け

先述のように、6世紀の家形石棺の編年については増田や山本の研究があり、突起の形状・大きさが系統ごとに不ぞろいな段階（～TK10）から、突起の形状が方形に統一される段階（MT85～TK43）を経て、全ての突起の形状・大きさ・取り付け位置が斉一化する段階（TK43～209）への変遷が示されている（第134図）（増田2003a・b・2004、山本2008）。こうもり塚古墳石棺は、突起形状が方形で統一されている一方、短側辺の突起が小形で突起の大きさが不ぞろいであることから、その年代はMT85～TK43型式段階と想定される^(註1)。

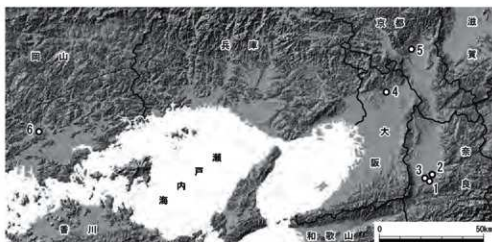
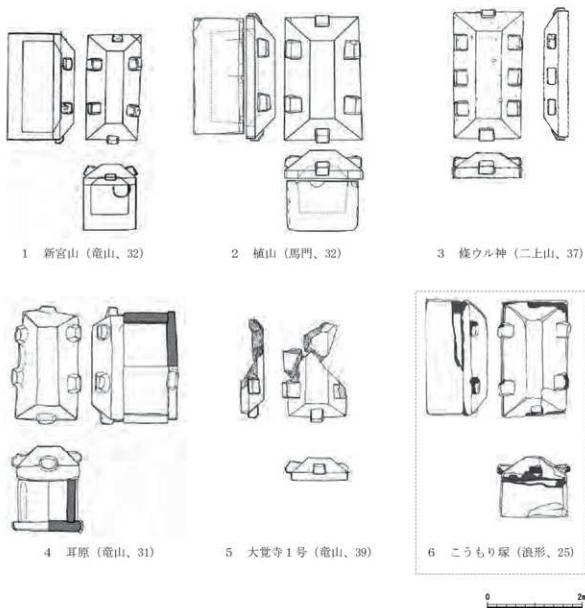
こうもり塚古墳石棺と同様の特徴を有する石棺は、植山古墳（奈良県橿原市）、新宮山古墳（奈良県御所市）、條ウル神古墳（奈良県御所市）^(註2)、耳原古墳（大阪府茨木市）、大覚寺1号墳玄室入口側石棺（京都府京都市）などがあり、類例は少ないが、奈良盆地南部に分布の集中が認められる（第135図）。ただ、こうもり塚古墳石棺に最も近いと思われるのは京都府の大覚寺1号墳石棺で、突起が傾斜部と垂直部の境の稜線に下端をあわせて取り付けられている点や、蓋の縁から外へ大きく突出している点などがこうもり塚古墳石棺と共通している^(註3)。

こうもり塚古墳石棺導入の背景

6世紀の家形石棺が奈良盆地南部に集中する背景について、当時権勢を誇った蘇我氏によって石棺



第134図 石棺の型式変遷（概略）



第135図 こうもり塚古墳石棺と同じ特徴を有する石棺 (1/80) とその分布
 ((内は石材及び頂部平坦面指数を示す))

製作が主導されていた可能性が指摘されている（和田1976）。6世紀後半の蘇我氏と吉備の関係について、『日本書紀』には欽明天皇の下で大臣として活動していた蘇我稲目の吉備派遣と白猪屯倉の設置（欽明天皇16年（555））や、稲目の後継者である蘇我馬子の吉備派遣と屯倉の増益（敏達天皇3年（574））など、密接な関係をうかがわせる記述が続いている。想像を逞しくするならば、こうもり塚古墳の石棺は、当時家形石棺の製作を主導していたと思われる蘇我氏と、白猪屯倉を通じて密接な関係を結んだ吉備の首長によって導入された可能性を想定することができる⁽²⁴⁾。蘇我氏との関係は推測の域を出ないが、少なくともこうもり塚古墳の石棺は、奈良盆地南部の勢力と関係を深めていく中で導入されたことは間違いないと考えられる。

先述のように、こうもり塚古墳石棺を含む浪形石製石棺出現の背景として、6世紀後半における吉備の、畿内に対する独自性を想定する意見（村上1987、倉林1992）もあるが、その黎明期に当たるこうもり塚古墳石棺の製作は、その型式的な特徴の類似から畿内との関係を抜きに考えることはできない。6世紀以降の家形石棺は畿内、特に奈良盆地南部の勢力によって発展・整備されてきたことは明らかであり、その導入はむしろ、そうした勢力との関係の深さを表していると考えの方が自然である。石材については吉備の独自性が認められるものの、こうもり塚古墳石棺以前に浪形石を用いた石製品は存在しておらず、技術的な蓄積がない状態から突如として家形石棺を製作することができたとは考えにくい。程度はともかく、先んじて石棺製作を行っていた畿内との技術的な交流は必要であったはずであり⁽²⁵⁾、そのような点からも、この段階に吉備と畿内の対立的な構図を想定することは難しいと考えられる。

2 陶棺について

こうもり塚古墳出土の陶棺は、岡山では最古型式に位置付けられ、6世紀後半から7世紀にかけて盛行する吉備の陶棺について考察する上で重要な資料である。この陶棺の実測図及び想定復元図は既に『総社市史』に掲載されているが（近藤1987）（第136図上）、ここでは今回新たに実測した破片資料を含めて改めて復元図を作成し、その系譜や製作時期、出現の背景について考察する。

こうもり塚古墳出土陶棺の復元

まず身の大きさを復元する。身の高さは身1から約51cmということが分かる。一方、身の長さを明らかにできる破片は出土しておらず、脚数と脚どうしの間隔から全長を推定するほかない。身1の底部裏面には、中央列の脚のほかに、側面側の脚の接合痕と考えられる僅かな膨らみが認められ、ここから脚と脚の間隔（行間）が14cm前後だったことが分かる⁽²⁶⁾。現在残っている脚の直径は15～18cmなので、等間隔で並んでいたと仮定した場合、身の全長は6行脚で160～180cm前後、8行脚で220～240cm前後に復元することができる。脚の行数は現状の資料では断定できないが、吉備における古式の陶棺は8行脚が多く、時期が下るにつれて脚数が減少するという陶棺の変遷を考慮すれば、吉備の出現期の陶棺に位置付けられるこうもり塚陶棺は8行脚、身の全長220～240cm前後に復元するのが妥当と考えられる。なお、脚の列数は3列であることは確実である。身の幅については、身1を推定中軸線から折り返して復元すると、最大幅72cm前後、口縁部幅66cm前後になる。この数値は、蓋の幅約67cmとも整合しており、概ね正しいと判断できる。

続いて、身の装飾を復元する。確認できる身側面の破片の全てにおいて、横方向の三条の突帯と、その間に上下で互い違いになるよう配置された縦方向の突帯が貼り付けられている。よって、身側面

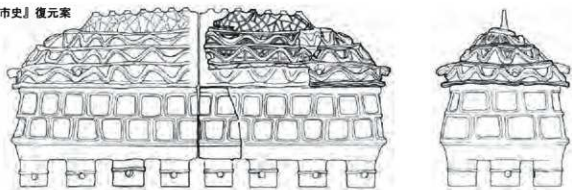
には同様の装飾が全周していたと考えて問題はない。脚の装飾は、一条の突帯と一对の透かし孔で統一されている。しかし、透かし孔の向きについては、主軸に対して斜め45度に向いている破片や、外側に向いている破片など、様でない。脚に透かし孔がある畿内の陶棺の例を参考に、外側に面した脚は透かし孔を外側に向け、中央の脚については向きの制約が緩かったと想定しておきたい。

さて、身の復元において最も問題となるのは、中央切断部の形状である。「総社市史」の復元案では、身は中央で直線に切断されたように復元している。しかし身1を側面からみると、脚が切断部から飛び出した位置にあり、側面を切断した位置のまま直線的に切断すれば、脚まで切断することになってしまう。美作の古式の陶棺には、身の切断部を底部上面で鍵状にクランクさせている資料があり⁽¹⁷⁾、下端に切断痕がある身2とそれに対応する可能性が高い破片身12などから、こうもり塚陶棺でも同様の工夫があったと考えられる。

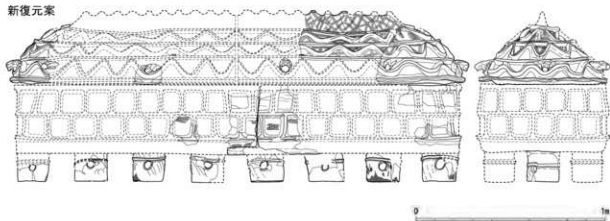
次に、蓋の復元を行う。大きさは、蓋1と蓋2から、高さは約38cm、幅は約67cmに復元できる。蓋の長さを断定できる破片はないが、身の復元長に突起分を加味して、230～250cm程度を想定するのが妥当であろう。

蓋の意匠は、側面と小口に差し込まれた鉤状突起、三条の横突帯とその間の波状突帯、天井部にトサカ状に張り出した飾り板と、飾り板の両面及び波状突帯の隙間に描かれた櫛描き文様がある。横突帯と波状突帯は破片の状況から陶棺を全周していたと想定され、波状突帯は各段が平行になるよう貼

『総社市史』復元案



新復元案



第136図 こうもり塚古墳出土陶棺の復元案 (1/20)

り付けられている。

突起の装着位置については、最下段の波状突帯凹部に装着されるという点以外、規則性は見出し難い。蓋1から、小口の一つずつと、側面の小口寄りの位置の一つずつ装着されていたことが分かり、全体のバランスを考えると側面にもう一つずつ装着されていた可能性が高い。突起は合計6点出土しているが、想定される全体の突起数は10か所と考えられる。

中段には、小口側に直径1cmほどの孔が二つと（蓋1）、側面に直径6cmほどの孔が認められる（蓋2）。小口側の孔の性格は不明で、両小口側に二つずつ、計4か所開けられていたと考えられる。側面の孔は突起の差し込み孔に似ており、現在、石膏で突起が復元されているが（図版22）、ほかの突起の差し込み孔と比べて径がやや大きいこと、現状で二段目に突起が装着されていた可能性を示す破片がないこと、孔は突帯凸部に開けられており、凹部に装着されるという規則性から外れることなどから、突起の差し込み孔とは断定できず、現状ではその性格は不明である。

蓋は、身と同様に何らかの方法により中央付近で二つに分割されていたと考えられるが、分割部分の破片が全く出土しておらず、詳細は不明である。ただし、こうもり塚古墳陶棺の祖型と考えられる河内の陶棺は、二分割した蓋に受け部とかぶせ部を造り出して印籠繋ぎにする場合が多く、こうもり塚古墳陶棺も同様の工夫が施されていた可能性が想定される。

以上の考察を踏まえ、改めて作成したこうもり塚陶棺の復元図が第136図下である。全長は約245cm、最大幅約72cm、高さ約91cmを測り、身は長さ約237cm、幅約71cm、高さ約52cm、蓋は長さ約245cm、幅約72cm、高さ約38cmとなる。全長や身・蓋の長さについては10cm程度の誤差が想定されるが、他の計測値については概ね妥当な数値と考えられる。

さて、今回新たに提示した復元案と、『総社市史』の復元案では、特に推定全長に大きな差異が生じることとなった。その原因の一つとしては脚の想定間隔の違いがあげられ、『総社市史』の復元案では9～10cm程度であるのに対し、今回の復元案では身1に残された痕跡から14cm前後としており、その分全長が長くなっている。また、『総社市史』の復元案では脚の径を残存している脚よりも1～2cmほど小さく復元していることも、復元全長に違いが生じている要因となっている。『総社市史』における復元の経緯やその根拠は不明であるが、当時大型の陶棺の出土例は少なく、陶棺の一般的な大きさである200cm前後に取めようとした結果、このような復元案となった可能性が想定される。このほか、今回の復元案との大きな違いとなっている身切断部のクランクに関しても、類例が出土したのはごく最近のことであり、当時としては一般的であった直線的な切断方法を復元案に採用したものと想定される。

こうもり塚古墳出土陶棺の製作技法

次に、細部の製作技法について述べる。こうもり塚古墳陶棺では主に脚部と蓋に特徴的な技法が観察できる^(註8)。

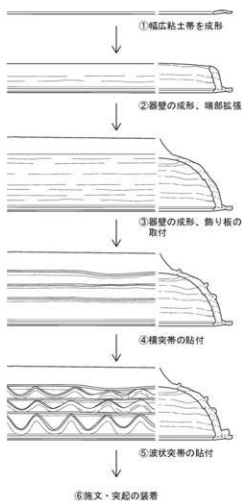
脚は、縦幅4～5cmの粘土板を輪状にして基部とし、その上から粘土紐を内傾接合で積み上げて成形している（第137図）。外面は基本的にナデ仕上げである一方、内面は接合時の指ナデ・指オサエの痕跡が明瞭に残りほとんど調整が行われない。高さ20cmほどの円筒形に仕上げると、脚の外面に突帯を貼り付け、その直下に透かし孔を穿っている。その後、脚上端の輪に沿って上からドーナツ状の粘土帯を被せ、中央の穴から手を入れて脚内面に貼り付けた後、中央の穴に渦巻き状に丸めた粘土塊を詰めて閉塞し、上面をなでて底部とする。脚内面にみられる特徴的な痕跡は、脚を裏返すことなく身を成形するための工夫であったと考えられる。



第137図 脚部の製作工程



写真14 蓋1 端部裏面と粘土接合痕



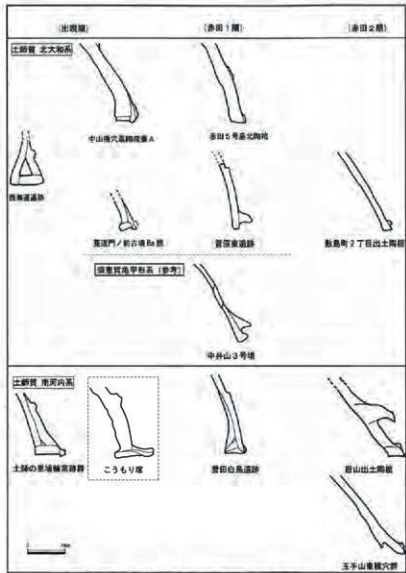
第138図 蓋の製作工程

蓋は、まず予定される大きさにあわせて幅7cm程度の粘土帯を配置し、外側にさらに粘土帯を重ねることで幅広粘土帯を作る。その後、粘土を積み上げつつ外側の端部を拡張し、飾り板を含む全体を成形した後、横→波状の順で突帯を貼り付け、最後に施文と突起の装着を行っている(写真14・第138図)。最初に幅広粘土帯を作るのは、蓋身別造りのため、両者が確実に噛み合うようにするための工夫と考えられ、同様の工夫は滋賀県草津市西海道遺跡出土陶棺や大阪府藤井寺市土師の里植輪窯跡群出土陶棺など、畿内の古式の陶棺にみられる。

こうもり塚古墳出土陶棺の系譜と製作時期

こうもり塚古墳陶棺の系譜については、波状突帯や鉤状突起などの外見的特徴から、畿内、特に河内の陶棺に求める意見が古くからあるが(間壁1983、杉山1987、光本2001、宮岡2012)、鐘方正樹は外見的特徴のほかに、脚を正立で製作するという技術的な面でも河内の陶棺と類似することを指摘した(鐘方2018)。現状、岡山においてこうもり塚古墳陶棺に先行すると考えられる陶棺は出土しておらず、その系譜は畿内・河内の陶棺に求めるのが妥当であると考えられる。

河内の陶棺は、鐘方によってその変遷が示されている(第139図)(鐘方2017、2019)。蓋端部の肥



第139図 出現期～赤田2期における陶棺蓋下端部の形状と変遷



第140図 出現期～赤田1期における陶棺身上端部の形状と変遷

厚度合いが厚いものから薄いものへと変化する点が編年の重要な指標とされており、技法的には蓋下端部の成形に幅広粘土帯を使用する出現期から、粘土帯を使用しなくなる赤田1期への変遷が想定されている。こうもり塚古墳陶棺の蓋端部は幅約8～10cmを測り、河内の出現期の陶棺とされる土師の里埴輪窓跡群出土陶棺（幅約8cm）と同じか、やや広い。また、蓋下端部の成形には先述のように幅広粘土帯が用いられており、技法的にも畿内における出現期の陶棺と同様の特徴を有しているといえる^{〔29〕}。

畿内の出現期の陶棺の年代について、西海道遺跡では同じ流路からTK10～MT85窯段階の須恵器が出土しており、奈良市中山横穴墓からは出土状況が不明なもの、MT85～TK43型式段階の須恵器が、京都府菟道門ノ前古墳では、周溝からMT85～TK43型式段階の須恵器が出土している。出現期の陶棺の初現はTK10号窯段階までさかのぼる可能性があるが、おおむねMT85号窯段階にその中心があると考えられ、こうもり塚古墳陶棺もそれに併行する可能性が高い。

ここで問題となるのは、河内系の陶棺の初現が畿内と吉備のどちらに求められるかという点である。こうもり塚古墳陶棺が出現期の特徴を有する以上、吉備から畿内へ伝わった可能性も想定される。現在、河内系で最古の陶棺とされているのは土師の里埴輪窓跡群出土陶棺であるが、土器が伴っていないため、こうもり塚古墳陶棺との先後関係は型式学的に検討するしかない。

まず注目されるのは、身上端部の形態である。土師の里陶棺は側壁から大きく張り出した逆L字を呈するのに対し、こうもり塚古墳陶棺は側壁の上端に突帯を貼り付けているだけで、逆L字を志向する意識は薄い。北大和系の陶棺では逆L字から上端部に突帯を貼り付けるタイプへの変遷が想定されており（第140図）（鐘方2019）、同様の變遷を想定するならこうもり塚古墳陶棺が後出的な様相を示すといえる。また、脚の裏面に注目すると、土師の里陶棺は脚の上端を閉塞した後、裏返して内面を調整している^{〔30〕}のに対し、こうもり塚古墳陶棺は先述のように閉塞後の内面調整を省略していて、型式的には後出と考えられる。以上の点から、こうもり塚古墳陶棺は土師の里埴輪窓跡群出土陶棺に後出すると考えられ、河内系陶棺はまず畿内で製作された後、吉備に伝播したと考えられる。

こうもり塚古墳陶棺製作の背景

こうもり塚古墳陶棺製作の背景について、杉山尚人や宮岡昌宣は、河内の陶棺との類似から、吉備が畿内の勢力下に入ったことの証と考えた（杉山1987、宮岡2012）。一方、鐘方はさらに踏み込んで、「日本書紀」にみられる、河内に本拠を置いていた葛井氏の祖、胆津の白猪屯倉派遣記事と関連させ、白猪屯倉を通じて河内の埴輪や陶棺の製作技術が吉備地方に及んだ可能性を指摘している（鐘方2018）。仮に陶棺の製作と胆津の派遣を関係させた場合、陶棺の製作年代は胆津が派遣された569年が上限となる。その妥当性について考えるには須恵器の実年代の問題となるため、ここではあまり深くは触れないが、「日本書紀」には欽明天皇の下で大臣として活動していた蘇我稲目が、555年に白猪屯倉設置のため吉備に派遣されたとの記述があり、胆津の派遣以前にも陶棺製作技術が吉備に伝わる機会はあったと考えられる。細かい時期については不確かな点が多いが、白猪屯倉を通じて陶棺が吉備に伝播したという点については、妥当な評価といえよう。

陶棺は、6世紀中頃、畿内において横穴式石室の導入に伴う新たな墓制が整備されていく中で創出された棺であり、それが6世紀第3四半期のいずれかの段階で吉備に伝わったと考えられるわけであるが、これほど早い段階に陶棺を導入している地域は吉備を除いてほかになく、当時の両地域の墓制における関連の強さ、すなわち政治的な紐帯の強さをうかがい知ることができる。（藤井）

注

- (1) なお、増田、山本らは短側辺の突起の取り付け位置や取り付け角度から、齊一化直前段階の資料と位置付け、TK43型式かそれに近い時期を想定している。しかし、家形石棺編年の重要な指標の一つとされる頂部平坦面の指数（平坦面積/棺幅×100）をみると、こうもり塚古墳石棺は25と、同じ特徴を持つ石棺の中では最も小さい数値を示している。どの指標を重視するかによってその位置付けは変化する可能性が想定されるため、ここではある程度の時期幅をもって理解するに留めておく。
- (2) 條ウル神古墳石棺は、突起数が他の石棺よりも多いが、ここでは突起形状が方形となる一方で、その取り付け位置が不ぞろいな段階である点を重視し、同じ特徴を持つ石棺に含めている。
- (3) 大覚寺1号墳玄室入口側の石棺は組合式であり、その格式は剣拔式であることもり塚古墳石棺より一段劣る。しかし、棺材に使用されている竜山石は五条野丸山古墳や牧野古墳など、同時代の最高位の石棺に用いられている石材であり、石橋が指摘するように、使用石材や棺型式などで複雑な階層性が表現されていた可能性が想定される（石橋2013）。また、同じ竜山石で製作された同型式の組合式家形石棺を有する耳原古墳は、安閑天皇元年（534）に設置された竹村屯倉との関連が指摘されており（菱田2019）、注目される。
- (4) 白猪屯倉の位置については諸説あるが、吉備の広い範囲に及んでいたとする指摘（狩野2005、亀田2019）に従う。また、備中と蘇我氏との関わりについて、岡山市政所遺跡・津寺遺跡で出土した奥山久米寺式軒丸瓦と、同様の文様を施した鬼板を大和豊浦寺に関連する平古遺跡に供給していた総社市末ノ奥窯跡の存在などから、7世紀第1・2四半期にはこの地域の瓦生産に蘇我氏が関与していたことが指摘されている（亀田1995）。末ノ奥窯跡はこうもり塚古墳の南約1kmの地点であり、こうもり塚古墳の造営にも蘇我氏が関わっていた可能性は十分に想定される。
- (5) この点について、二上山系石材の岩屋峠西タイプと浪形石との材質的な類似が指摘されており（増田2004）、注目される。
- (6) 玄室の調査では、陶棺の脚が3本、L字に並んで出土している（第44図、図版18-3）。脚どうしの間隔は列間6~7cm、行間14~15cm前後となり、身に残された痕跡と概ね数値が一致している。
- (7) 底部付近のクランクは、津山市桑山南1号墳1号陶棺や、細畝1号墳陶棺などに認められる（尾土・小嶋編2022）。
- (8) 製作技法の特徴については、鐘方正樹氏に御意見・御指導をいただいた。
- (9) ただし、蓋頂部の飾り板や櫛描き文様、脚に底部突帯がみられない点などはこうもり塚古墳陶棺独自の特徴とされている（宮岡2010、鐘方2018）。
- (10) 土師の里墳輪窯跡群出土陶棺の製作技法については、鐘方正樹氏に御意見・御指導をいただいた。

参考文献

- 石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房
- 尾土元規・小嶋善邦編 2022『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告255 岡山県教育委員会
- 鐘方正樹 2016『陶棺』『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第4冊 奈良市教育委員会
- 鐘方正樹 2017『近畿地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪』『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会
- 鐘方正樹 2018『吉備地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪』『埴輪論叢』第8号 埴輪検討会
- 鐘方正樹 2019『奈良市中山横穴墓出土陶棺の検討』『和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集—』ナベの会考古学論集第1集 ナベの会
- 狩野久 2005『白猪屯倉と蘇我氏』『古代を考える 吉備』吉川弘文館
- 亀田修一 1995『瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦』『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流6 松原弘宣編 名著出版
- 亀田修一 2008『吉備と大和』『古墳時代の実像』吉川弘文館
- 亀田修一 2019『考古学からみた備前地域の屯倉』『両宮山古墳以後—古墳時代後期の赤磐と倭王権—』シン

- ボジウム記録集2 赤磐市教育委員会
- 亀山行雄 1999「岡山県内の横六式石室」『論争 吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録1 考古学研究会
- 亀山行雄 2010「山陽」『日本考古学協会2010年度兵庫大会 研究発表資料集』日本考古学協会
- 草原孝典 2012「上道氏と下道氏の相克—石棺の分布が示す地方の分断施策—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第4号 岡山市教育委員会
- 葛原克人・近藤義郎・鎌木義昌 1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 倉林眞砂斗 1992「石棺」『吉備の考古学的研究(下)』近藤義郎編 山陽新聞社
- 倉林眞砂斗 2005「石棺と陶棺」吉備考古ライブラリ・12 吉備人出版
- 小林行雄 2001「岡山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」『書陵部紀要』第53号 宮内庁書陵部
- 近藤義郎 1987「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 佐上静夫 1955「興味ある石棺の石質に就て」『私たちの考古学』5 考古学研究会
- 杉山尚人 1987「陶棺の研究」『考古学研究』第33巻第4号 考古学研究会
- 菱田哲郎 2019「畿内からみた手工業生産とミヤケ」『両宮山古墳以後—古墳時代後期の赤磐と倭王権—』シンポジウム記録集2 赤磐市教育委員会
- 岡壁霞子 1983「岡山の陶棺—白猪屯倉への一私見—」『岡山の歴史と文化』福武書店
- 増田一裕 2003a「家形石棺の基礎的分析(上)」『古代学研究』第162号 古代学研究会
- 増田一裕 2003b「家形石棺の基礎的分析(中)」『古代学研究』第163号 古代学研究会
- 増田一裕 2004「家形石棺の基礎的分析(下)」『古代学研究』第164号 古代学研究会
- 光本順 2001「6・7世紀における陶棺の変容とその特質—定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて—」『定東塚・西塚古墳』北房町教育委員会
- 宮岡昌宣 2010「吉備の陶棺」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報XIV』広島大学考古学研究室紀要第2号 広島大学大学院文学研究科考古学研究室・帝釈遺跡群発掘調査室
- 宮岡昌宣 2012「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』第59巻第1号 考古学研究会
- 村上幸雄 1987「石棺と陶棺」『岡山県の考古学』福武書店(『えとのおす』第24・25号 1984年刊)
- 山本ジェームズ 2008「畿内家形石棺にみる棺蓋短側面突起の変化」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』53 早稲田大学大学院文学研究科
- 吉田晶 1989「吉備の部民」『岡山県史』古代Ⅱ 岡山県史編纂委員会
- 和田晴吾 1976「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号 史学研究会

挿図出典

- 第134図・第135図上：鴨橋山古墳：「近江國高島郡水尾村の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第8冊 京都帝国大学、植山古墳：石坂泰士2014「史跡 植山古墳」福原市埋蔵文化財調査報告第9冊 福原市教育委員会、五条野丸山古墳：福尾正彦・徳田誠志1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部、新宮山古墳：奈良県教育委員会1980「奈良県指定文化財」昭和54年度版、條ウルク古墳：金澤雄大2019「條ウルク古墳」御所市文化財調査報告書第56集 御所市教育委員会、耳原古墳：有井宏子ほか1996「耳原古墳の研究」『平成6・7年度有形文化財・無形文化財等総合調査報告書』大阪府教育委員会、大覚寺1号墳：小林行雄2001「岡山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」『書陵部紀要』第53号 宮内庁書陵部
- 第135図下：国土地理院発行「地理院地図」より引用、著者改変
- 第136図上：近藤義郎1987「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 第139・140図：鏡方2019より引用、一部著者改変

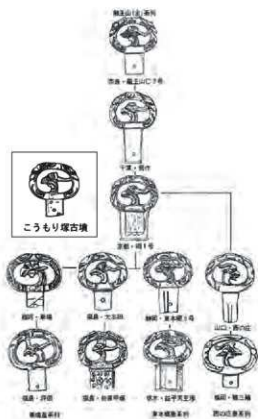
第5節 出土遺物について

1 単鳳環頭大刀

単鳳環頭大刀は、古墳時代後期に使用された装飾付大刀の一種で、こうもり塚古墳では羨道からこの柄頭が1点（M2）出土している。この単鳳環頭大刀については、その変遷や製作年代、さらに製作技法など多岐にわたる研究がなされている。ここでは、これらの研究を参考に、こうもり塚古墳から出土した単鳳環頭大刀柄頭の編年上の位置付けやその意義について検討する。

編年上の位置付け

単龍・単鳳環頭大刀の編年について考察した新納泉によると、こうもり塚古墳の環頭大刀柄頭は、口に嚙んでいた玉がないことや、文様の退化が進んでいることから、氏の分類のV式に相当する。新納はこのV式の属する段階は、単鳳環頭大刀の量産期に当たると評価する（新納1982）。その後、この新納の研究を基に穴沢味光・馬目順一は単龍・単鳳環頭大刀を幾つかの系列に整理したが、その中で、こうもり塚古墳の柄頭は、嘴に玉を含まない龍王山系列に属するとした。両氏は、この龍王山系列は単龍・単鳳環頭大刀の全出土例の3分の1に達する、もっとも「普通」にみられる大刀とする（穴沢・馬目1986a・b）。その生産と供給について、穴沢・馬目は、系列に属する単龍・単鳳環頭大刀は型的に少しずつデリケートに変化していることから、一時期の大量生産ではなく、必要に応じてその都度製作供給された可能性が高いとし、その変遷案を提示した（穴沢・馬目1986b、第141図）。



第141図 龍王山系列の変遷

これによると、龍王山系列に属する柄頭は、文様が凹凸に富むものから簡略化されたものまで幅があるが、その中でも、こうもり塚古墳の柄頭は装飾としては簡略化が進んでおり、龍王山系列の中でも福島県大志田古墳出土のものに近い。しかし、この柄頭の変遷については、その製作技法の解明など検討すべき課題も多いのが現状で、こうもり塚古墳出土の柄頭の評価は、これらの研究動向を見極めながら判断していく必要がある。

製作技法

この龍王山系列であるが、大谷晃二は、この時期で多数派を占め、朝鮮半島に類例がないことから、倭における製作を想定した（大谷2006）。穴沢・馬目は、この時期の単鳳環頭大刀柄頭の大半は環頭長軸がほぼ6cmの規格で作られており、儀刀の長さや装飾に一定の制約があったことを想定する（穴沢・馬目1986b）。こうもり塚古墳の柄頭も環頭長軸が6.1cmでこれに合致する。

こうもり塚古墳の柄頭は、X線撮影を行って観察

した結果、一鑄式の可能性が高い。また、仕上げは環部の内外とも鍍金と考えられる（澤田編2022）。こうもり塚古墳の柄頭では鑄型に関する情報は得られていないが、同時期の事例から合わせ鑄型が使用された可能性が高い（大谷2006、金2017）。

こうもり塚古墳の柄頭は、鑄造段階である程度までおおまかな形状を作りあげ、その後には彫金を施して製作されたと考えられる。基本的に線刻であり、これは金字大によるC3技法に相当する（金2017）。こうもり塚古墳の柄頭の彫金技法については、上柙武による詳細な観察報告がある（上柙2019）。氏は、鈴木勉の成果（鈴木2003）を援用し、柄頭の太く深い線刻は蹴り彫りやなめくり打ちによるものであるとする。しかし、これらの線刻は基本的に鑿による切削加工によるもので、鈴木のような蹴り彫りやなめくり打ちとは別の技法とすべきであろう。

なお、こうもり塚古墳の単鳳環頭大刀は、柄頭以外の装具は出土していない。

製作時期

こうもり塚古墳の環頭大刀の製作・使用時期であるが、新納は、こうもり塚古墳の環頭大刀が属するV式の時期を570～580年頃に推測する（新納1987a）。また、穴沢・馬目は、龍王山系列の属する第4段階の下限を遅くとも最古の仏教寺院である飛鳥寺の建立以前とし、580年頃を想定する（穴沢・馬目1986a・b）。持田大輔は、一鑄式の単鳳環頭大刀が主流となる時期を第三段階とし、この時期を6世紀第4四半期とする（持田2011）。一方、金は、完全な量産体制が実現される龍王山系列などの製品群の製作時期を600年前後する時期に考える（金2017）。これらの研究成果から想定されるこうもり塚古墳の単鳳環頭大刀の製作時期は6世紀第3四半期から7世紀初頭前後の中ということになり、詳細な時期比定については各研究者によって差異がある。

意義

単鳳・単鳳環頭大刀の性格や意義については、松尾充晶がこれまでの研究史を踏まえて整理している（松尾2003）。こうもり塚古墳の環頭大刀に関する政治的背景について、穴沢・馬目は、未だ確証はないとしながらも、龍王山系列が盛行した背景に571年の敏達天皇即位による物部氏主導の政権発足を想定する（穴沢・馬目1986b）。また、新納は単鳳・単鳳環頭大刀を大伴氏と関連付け、こうもり塚古墳を含む瀬戸内を中心とする政治的なネットワークの形成に重要な役割を果たした豪族に配布されたと考えた（新納2001）。そのほか、環頭大刀製作の背景に蘇我氏を想定する説もある（清水1983）。

一方、裝飾付大刀の付与を階層や職能と結び付ける議論もある。町田章は環頭大刀を軍事権の象徴と考えた（町田1976）。新谷武夫は、ヤマト政権が在地豪族に対し政権への服属のしるしとして、又は、軍事権のシンボルとして下賜したとする（新谷1977）。新納は、裝飾付大刀を地域における軍事組織の頂点を示すものと考えた（新納1983）。また、穴沢・馬目は、単鳳・単鳳環頭大刀の佩用者を大和政権に武官的職能をもって奉仕する国造や舍人など地域集団の主導者とみる（穴沢・馬目1986b）。

単鳳・単鳳環頭大刀は、岡山県内ではこうもり塚古墳以外に箭田大塚古墳や岩田14号墳でも出土しており、この大刀が配布された理由については、これらの古墳も含めた検討が必要である。単鳳・単鳳環頭大刀に関する議論は多岐にわたるが、その中で、こうもり塚古墳については、大和政権と密接な繋がりの中で、地域の政治・軍事力を統括した大首長の表徴としての役割があったと考えられる。

（金田）

2 馬具

馬具の特徴や編年上の位置付け

こうもり塚古墳では馬具が出土している(第142図)。横穴式石室の内部が盗掘を受けていたため、滅失した馬具がある可能性は十分にあるが、それでも、心葉形十字文透鏡板付轡、辻金具、鞍、障泥、鉸具、飾金具といった馬具の基本的なセットが出土している。以下、主要な馬具について考察する。

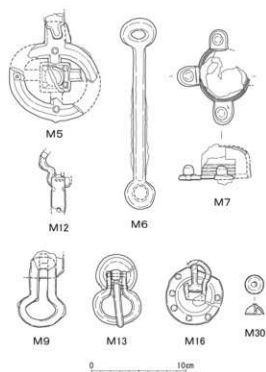
心葉形十字文透鏡板付轡は、古川匠によると、6世紀第3四半期(TK43型式段階)に出現し、6世紀第4四半期に日本列島で生産が開始されたようであるが、7世紀初頭(TK217型式段階)までは生産が継続されないとする(古川2019)。この心葉形十字文透鏡板付轡については、松尾充晶が全国的な集成を経て、特に鉸の位置や数、鏡板と轡の連結構造等に着目してその変遷を示した(松尾1999)。その後、桃崎祐輔は、新資料を加えて松尾の変遷を再検討し、新たな段階設定を行った(桃崎2019)。桃崎の集成によれば、心葉形十字文透鏡板付轡は関連型式も含め、平成29年現在で約30例を数え、岡山県内では、こうもり塚古墳のほか、岡山市塚段古墳(草原編2016)でも出土している。

こうもり塚古墳から出土した心葉形十字文透鏡板付轡(M5)は、残存状況が悪く詳細な観察が難しい状態ではあるが、鉸の配置や鏡板と轡の連結方法から、松尾・桃崎による変遷の第Ⅱ段階に相当すると考えられる。桃崎は第Ⅱ段階を形状が定型化した段階ととらえ、TK43型式段階頃に成立したと推測するが、松尾は個々を比較すると個性が大きく、一括連鎖的な生産体制は考えにくいことも指摘する。この心葉形十字文透鏡板付轡は、原則として杏葉を伴わない馬装と指摘されている(桃崎2019)が、そのためか、こうもり塚古墳では杏葉は出土していない。

なお、桃崎は心葉形十字文透鏡板付轡が「各田部臣」銘の銀象嵌銘大刀が出土した鳥根県岡田山1号墳で出土していることなどとあわせ、この馬具と額田部の関係を追究するが、こうもり塚古墳については、特に直接的な関係は明らかになっていない(桃崎2019)。

辻金具は鉢部が残っているものが1点(M7)出土する。鉢部下部に数条の凹線が施されていることから坂本美夫の有脚半球形辻金具^e類に分類することができる。氏によると、この型式の辻金具は6世紀第2四半期から6世紀第4四半期まで存在するという(坂本1985)。

鞍は、鞆以外に金属製品が出土しておらず、木装鞍であったと考えられる。鞆金具として2種類(M9・M10、M13)が出土していることから、鞍が2点存在したか、両輪に別型式の鞆を取り付けたものが1点あったのかどちらかである。鞆は刺金を有するものとそうでないものが存在する。鞆は刺金を持つものから持たないものへと切り替わることが指摘されており、TK43型式段階の中に入れ替わるとされる(宮代1996)。また、鞆の座金具では円形のもの



第142図 こうもり塚古墳の馬具 (1/4)

の(M13)や方形のもの(M9)がみられるが、前者はTK10型式新段階からTK217型式段階まで、後者はTK43からTK209型式段階に盛行する(宮代1996)。したがって、鞍については、TK43からTK209型式段階を中心とする6世紀後半のものであった可能性が考えられる。なお、こうもり塚古墳が、大型の前方後円墳でありながら金銅装鞍ではなく木装鞍であったことは、鞍としてランクの低いものが副葬されたと考えられることもできるが、木装鞍は、群馬県八幡観音塚古墳や栃木県竹下浅間山古墳などの前方後円墳でも出土していることから、これは馬具の階層性を示すものではなく、あくまでも系列の違いによるものとする説がある(宮代1996)。

障泥では吊り金具が3点(M16~M18)出土しており、いずれも円形の座金具の中央にT字形の刺金を持つ連結装置を配している。古墳時代の障泥を分析した片山健太郎の分類では「円ⅡB」に相当し、片山のいう2段階(古墳時代後期後半)を中心に位置付けられる。あわせて、この段階に障泥が岡山県南部に集中して出土するという興味深い指摘がなされている(片山2018)。

飾金具として、鉢部の直径1.8~2.0cm、高さ0.7~1.0cmの半球形飾金具がある。こうもり塚古墳では15点(M19~M33)が出土した。これは飾金具として革帯など繫帯を中心に使用されたとする説がある。したがって、ある程度の数を必要とする金具で、奈良県牧野古墳では80点以上が出土している(河上編1987)。半球形飾金具を分析した宮原佑治は、この飾金具は例外はあるがTK43型式段階前後をおおよその初現として、TK209型式段階頃の古墳から出土する傾向が強いとす(宮原2012)。

このように、こうもり塚古墳では主な馬具として鏡板付轡、辻金具、障泥が出土しており、個々の製作時期も6世紀後半に収まるものが多い。そのため、馬装として一セット分が副葬されていた可能性が考えられる。

岡山県内で関連する馬具を出土した古墳

こうもり塚古墳では、心葉形十字文透鏡板付轡、辻金具、鞍、障泥、飾金具といった馬具のセットが確認されている。その中には、県内において時期の近い古墳で出土した馬具と共通する器種も含まれる(表10)。中でも、江崎古墳では、心葉形十字文透鏡板付轡、辻金具、鞍、障泥など、こうもり塚古墳と共通する馬具が出土しており密接な関係がうかがえる(近藤1987)。こうもり塚古墳と共通する型式の馬具が古墳時代後期後半に吉備の各首長にもたらされていた可能性が指摘できる。(金田)

表10 岡山県におけるこうもり塚古墳と共通する馬具を出土する古墳の例

古墳名	墳形	轡(鏡板)	鞍	鏡	辻金具	障泥	半球形飾金具	参考文献
こうもり塚	前方後円	心葉形十字文透	木装		半球鉢	あり	あり	本書
王紫山	円か方	鏡形格子文楕円形	金銅装	鉄輪鏡	半球鉢多角形鉢	あり	あり	西川1986、片山2018 山本ほか1974
塚段	前方後円	心葉形十字文透	金銅装		あり		あり	草原編2016、山口2022
江崎	前方後円	心葉形十字文透	木装	密鏡	半球鉢	あり		近藤1987、片山2018
前田大塚	円墳	串文格子文楕円形?				あり		葛原・中野ほか1986 中野編1984、片山2018
八幡大塚2号	円墳	矩形立開環状	木装	密鏡		あり		鎌木ほか1986 片山2018
金子石塔塚	円墳	心葉形十字文透? 鏡具立開環状	金銅装?		あり	あり		鎌木ほか1987 片山2018

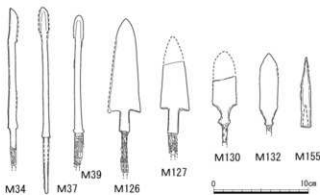
3 鉄鎌

本書作成に伴う整理作業で確認した鉄鎌の内訳は、長頸鎌82点以上、平根鎌12点、後述する「鉛筆のキャップ形」の鉄鎌20点である。長頸鎌の種類は片刃形、柳葉形の2種類で、平根鎌も長三角形、柳葉形の大きく2種類である(第143図)。全長100mに近い墳丘規模を持つ古墳としては種類が少ない感が否めない。しかし、長頸鎌が少なくとも82点以上確認できたことは重要である。県内の横穴式石室で鉄鎌が100点以上出土した古墳としては、江崎古墳(近藤1987)、岩田14号墳(神原編1976)、三輪山6号墳(西川1963)、二万大塚古墳(新納・三浦編2018)があげられるが、こうもり塚古墳でも100本以上の鉄鎌が副葬されていたことは容易に想像できる。

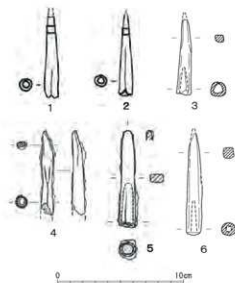
ところで、鉄鎌とした中に、いわゆる「鉛筆のキャップ形」と称した鉄鎌がある。これらの鉄鎌は、石棺の北西側の左側壁際で比較的まとまって出土している。これまでも『総社市史』で鉄鎌の一種と報告されてきた(近藤1987)。大きさは長さ6.3~8.1cmで、幅は0.9~1.4cmを測る。袋部に径0.4~0.7cm程度の木柄を挿入して使用したと考えられる。長頸鎌の矢柄の径が0.7~0.9cmであるので、この鉄鎌に長頸鎌の矢柄と同程度の柄を着装して使用したと考えることは可能である。また、「鉛筆のキャップ形」鉄鎌の重さは10~20gで、ほぼ完形で出土した長頸鎌(M37)が17.4gを量ることから、鉄鎌と同程度の重さを量る。また、先端も鋭利に仕上げていることも特徴で、実用性は備えているようである。

このような鉄鎌の類例について、管見の範囲である古墳時代後期のものを紹介しておく(第144図)。1・2は岡山県真庭市空古墳(田仲編1976)で出土したもので、横穴式石室内から2点が近接して発見された。報告書では工具の一部とするが、形態的にこうもり塚古墳のものに近い。6世紀中葉以降のものである。5は岡山県赤磐市八塚3号墳(尾上編2009)のもので、鉄鎌や刀子とともに1点が出土している。報告者は鉄鎌の一種の可能性に言及する。6世紀中葉のものである。4は奈良県桜井市風呂坊4号墳(福辻編2012)から出土したものである。袋部が欠損しているため、こうもり塚古墳と同じ形態かどうか不明である。蛇行状の用途不明品に伴っていて、「鉛筆のキャップ形」の鉄製品が鉄鎌でないとするれば、このような儀器に伴う可能性がある。いずれにせよ、類例の増加が期待される。

(金田)



第143図 こうもり塚古墳の鉄鎌(1/4)

1・2: 岡山県空古墳 3・6: 岡山県こうもり塚古墳
4: 奈良県風呂坊4号墳 5: 岡山県八塚3号墳

第144図 「鉛筆のキャップ形」鉄鎌の例(1/3)

4 須恵器

こうもり塚古墳からは108点の須恵器が出土している。大半は横穴式石室内の調査で出土したものであるが、繰り返し追葬が行われたと考えられる上、後世に激しい攪乱を受けており、出土状況から得られる情報は少ない。その上、散逸した土器の存在を考慮すると、出土した資料が当時の状況をどこまで反映しているのかは不透明である。しかし、こうもり塚古墳には埴輪などの外表施設がなく、その築造年代を考える上で須恵器は重要な指標となる。よって、ここでは型式的な変化を把握しやすい杯・高杯・甕・提瓶を中心に分析を行い、その年代について考察する。

杯

こうもり塚古墳から出土した杯は、A～G類に分類できる（第145図）。

A類 蓋の口径15.4～15.8cm、器高4.3～4.7cm、身の口径14.1cmを測り、灰色を呈する。蓋には稜に凹線を持つものがある（第52図19・20、第53図43・44）。

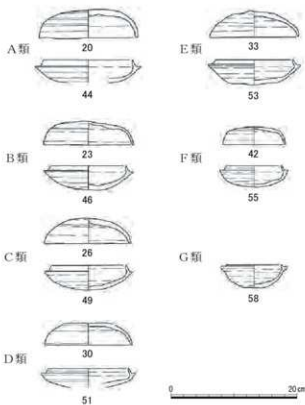
B類 蓋の口径13.5～15.0cm、器高3.5～3.8cm、身の口径11.8cm、器高4.0cmを測り、灰～灰白色を呈する。ヘラケズリがやや粗く、粒の大きい砂粒を含む。色調や胎土、調整の特徴が一致することから、同一窯で焼成された可能性が高い（第52図22～24、第53図46）。

C類 蓋の口径13.2～14.1cm、器高4.0～4.9cm、身の口径11.1～11.8cm、器高4.0～4.2cmを測り、灰～暗灰色を呈する。天井部が丸いドーム形で蓋・身ともにヘラ記号を有する。色調や胎土、器形の特徴が一致しており、同一窯で焼成された可能性が高い（第52図25～29、第53図47～50）。

D類 蓋の口径13.6～13.8cm、器高3.5cm、身の口径12.8cmを測り、外面灰～黒色、断面灰赤色を呈する。体部や天井部が直線的で、身の口縁の立ち上がりがやや低い。蓋にヘラ記号を有するものがある。胎土に砂粒をほとんど含まず、非常に硬く焼き締まっている。色調や胎土が一致することから、同一窯で焼成された可能性が高い（第52図30・31、第53図51）。

E類 蓋の口径13.9cm、器高4.3cm、身の口径12.3cm、器高4.1cmを測り、灰～青灰色を呈する。ヘラケズリが省略されている点を最大の特徴とする（第52図33、第53図53）。

F類 蓋の口径9.8～10.6cm、器高2.8～3.5cm、身の口径8.3～9.0cm、器高3.1～3.7cmを測り、灰～暗灰色を呈する。A～E類の杯と比べて径が小さく、胎土には砂粒を多く含む。色調や胎土、調整や器形の特徴が一致することから、同一窯で焼成された可能性が高い（第52図34～



第145図 こうもり塚古墳出土杯の分類 (1/6)

42、第53図(54~57)。

G類 身の口径8.7cm、器高3.8cmを測り、灰色を呈する。大きさはF類に似るが、色調や口縁部の立ち上がりの高さ、胎土に違いが認められ、底部のヘラケズリも省略されている(第53図58)。

以上の分類を陶邑編年(田辺1981)に当てはめると、A類はMT85号窯段階、B類はTK43型式、C・D・E類はTK209型式、F・G類はTK217型式にそれぞれ対応させることができる。ただし、C類については、特に杯身の特徴はB類とほとんど変わらないことから、TK43型式からTK209型式への過渡期に位置付けられる可能性が高い。

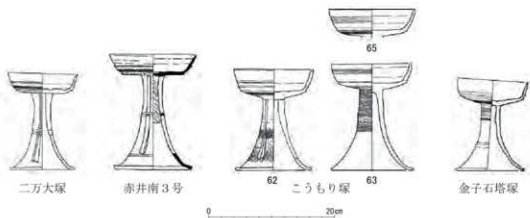
高杯

高杯は、杯の形状が底部から口縁部に向かって丸く緩やかに立ち上がるA類(第55図64)と、直線的に立ち上がるB類(第55図62・63・65)に分類できる。陶邑編年に対応させると、A類はTK43型式に比定できる。一方、B類については、長脚一段透かしの62をTK10型式段階(TK10号窯~MT85号窯段階)に比定する意見がある一方(山崎1985)、そこまでさかのぼらせることはできないという意見もある(新納1987b)。そこで、実際に備中南部で出土した高杯B類をみると、杯の屈曲部及び口縁下の稜が凹線に退化していく様子を確認することができる(第146図)。こうもり塚古墳の高杯B類は二万大塚古墳や赤井南3号墳に比べて稜が退化傾向にあることから、TK43型式以降に比定するのが妥当と考えられる。

甕

甕は、口縁部から頸部にかけて縞描き波状文が施されるA類(第56図75・77・78)と、縦位の沈線文が施されるB類(第56図74・79・80)に分けられる。備中南部から出土した甕をみると(第147図)、波状文が施される甕はTK10~MT85号窯段階に比定される二万大塚古墳から多く出土している一方、縦位の沈線文が施される甕はTK43~TK209型式段階に比定される江崎古墳や緑山17号墳などから出土しており、A類とB類は時期差を表していると理解できる。

こうもり塚A類と二万大塚古墳例を比較すると、こうもり塚A類の甕の方が、口縁部の立ち上がりが高く、新しい様相を示している。一方、こうもり塚B類と、江崎・緑山17号墳例を比較すると、こうもり塚B類の方が器高に対する口縁部の立ち上がりの割合が小さく、やや古く位置付けられる。よって、二万大塚古墳例→こうもり塚A類→こうもり塚B類→江崎・緑山17号墳例という変遷を想定することが可能である。



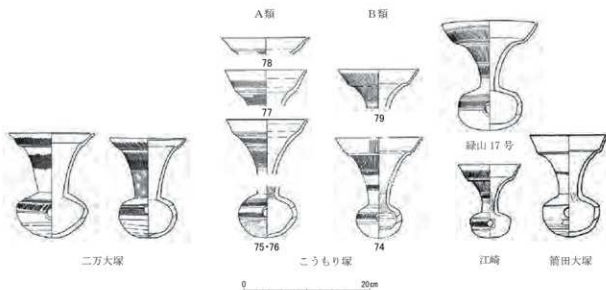
第146図 備中南部 高杯(B類)の変遷(1/6)

縦位の沈線文が施される甕は、中村編年ではⅡ型式第5段階に位置付けられており（中村1981）、田辺編年のTK209型式併行と考えられる。一方、これをTK43型式併行とする意見もあることから（山本ほか1992）、こうもり塚B類はTK43～TK209型式の資料と理解しておく。こうもり塚A類の甕については、陶色において良好な標識資料がないが、TK10～MT85号窯段階の二万大塚古墳よりも一段階新しく、B類よりも一段階古いと考えられることから、TK43型式でも古い段階に比定するのが妥当であると考えられる。

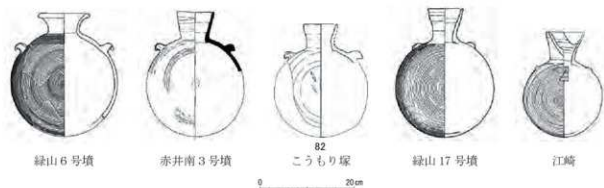
なお、A類の甕は、いずれも特徴的な赤紫色の色調を呈している。このほか、高杯B類のうち透かしのないもの（第55図63・65）、脚付壺（第57図84）、装飾須恵器の子器（第57図85）も同様の色調を呈しており、これらを同一窯焼成と考えて良いならば、高杯B類及び甕A類の想定時期から、TK43型式でも古い段階の一群として理解することができる。

提瓶

2点出土しているが、形状が把握できるのは1点のみで、直口の口縁と鉤状の小把手を有する（第56図82）。一般に、提瓶は時期が下るにつれて把手が矮小化していくことが知られるが、それ以外にも、端部が肥厚しラッパ状に外反する口縁部から直口の口縁への変化があり、陶色編年ではTK43型



第147図 備中南部 甕の変遷 (1/6)

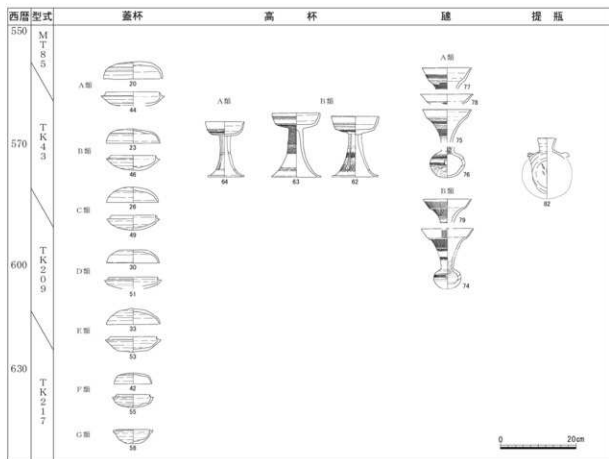


第148図 備中南部 提瓶の変遷 (1/6)

式段階頃にその境があるようである。備中南部の古墳から出土した提瓶を比較してみると(第148図)、TK10～MT85号窯段階に比定される緑山6号墳の提瓶は、鉤状の把手と外反し端部が肥厚する口縁部を有している。一方、TK43～TK209型式段階に比定される江崎古墳や緑山17号墳の提瓶は口縁部が直口で、把手は形骸化して瘤状の粘土が貼り付けられているだけとなっている。こうもり塚古墳の資料は緑山6号墳と江崎古墳・緑山17号墳の間に位置付けられ、直口口縁の出現時期からTK43型式段階に比定するのが妥当であると考えられる。

以上の検討により、杯はMT85、TK43、TK209、TK217の4段階、高杯はTK43、甌はTK43、TK209の2段階、提瓶はTK43段階にそれぞれ比定した(第149図)。また、透かしのない高杯及び甌A類と色調が一致する装飾須恵器の子器と脚付壺を同じTK43型式段階と想定した。杯A類が若干古い様相を呈するが、最も器種が豊富なのはTK43型式段階の資料である。杯A類を古い資料の混入と解釈し、TK43型式段階を初葬(=築造時期)と考えることも可能ではあるが、冒頭に述べたように石室内は相当な攪乱を受けており、その中で失われた須恵器も多く存在すると考えられる。よって、現状ではMT85号窯段階を上限、TK217型式を下限とし、その間に複数回の埋葬が行われたことを指摘するに留める。

なお、これらの須恵器を焼成した窯としては、こうもり塚古墳の南東約2kmの地点の倉敷市矢部に位置する江田池窯跡(阿部・中岡1987)が有力な候補地である。(藤井)



第149図 こうもり塚古墳出土須恵器の時期 (1/10)

参考文献

- 阿部奈久・中岡敬吾 1987「倉敷市矢部・江田地周辺の窯跡と陶板」『古代古備 第9集 古代古備研究会』
- 穴沢味光・馬目順一 1986a「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単鳳環頭大刀に寄せて—」『福島考古』第27号 福島県考古学会
- 穴沢味光・馬目順一 1986b「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布」『考古学ジャーナル』266 ニュー・サイエンス社
- 上村武 2019「岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀」『文化財と技術』第9号 工芸文化研究所大谷院二
- 2006「龍鳳環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター
- 尾上元規編 2009「八塚古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告218 岡山県教育委員会
- 片山健太郎 2018「古墳時代の障泥とその系譜」『古文化談叢』第81集 九州古文化研究会
- 鎌木義昌・亀田修一 1986「八幡大塚2号墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 鎌木義昌・亀田修一 1987「金子石塔塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 金宇大 2017「金工から読む古代朝鮮と倭」京都大学学術出版会
- 河上邦彦編 1987「史跡 牧野古墳」広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会
- 草原孝典編 2016「塚段古墳・坂口古墳」岡山市教育委員会
- 葛原克人編 1979「備中こうもり塚古墳—「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査—」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会
- 葛原克人・近藤義郎・鎌木義昌 1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅 1986「箭田大塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 神原英朗編 1976「碧田古墳群」岡山県営山岡新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6) 山岡町教育委員会
- 近藤義郎 1987「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 近藤義郎編 1987「緑山古墳群」総社市文化振興財団
- 坂本美夫 1985「辻金具・雲珠考」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 澤田秀実編 2022「日本列島における銅、鉛原材料の産出地特定と使用開始年代に関する学際的研究」くらしき作陽大学
- 清水みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会
- 鈴木勉 2003「彫金」『考古資料大観』7 小学館
- 総社市史編さん委員会 1987「総社市史」考古資料編 総社市
- 田仲満雄編 1976「空古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11 岡山県教育委員会
- 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 中野雅美編 1984「箭田大塚古墳」真備町教育委員会
- 中村浩 1981「和泉陶器窯の研究」柏書房
- 新谷武夫 1977「環状柄頭研究序説」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』松崎寿和先生退官記念事業会
- 新納泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会
- 新納泉 1983「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会
- 新納泉 1984「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古文化研究会』創刊号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 新納泉 1987a「戊辰年銘大刀と裝飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号 考古学研究会
- 新納泉 1987b「緑山古墳群の築造年代と形成の過程」『緑山古墳群』総社市文化振興財団
- 新納泉 1998「後期群集墳の時代」『総社市史』通史編 総社市史編さん委員会

- 新納泉 2001「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』第48巻第3号 考古学研究会
- 新納泉・三浦孝章編 2018「二万大塚古墳」二万大塚古墳発掘調査団
- 西川宏 1963「備中三輪山第6号墳」『古代吉備』第5集 古代吉備研究会
- 西川宏 1986「王墓山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 福辻淳編 2012「風呂坊古墳群」桜井市内埋蔵文化財2008年度発掘調査報告書2 桜井市文化財協会
- 古川匠 2019「古墳時代の裝飾馬具生産体制」雄山閣
- 町田章 1976「塚刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報28 奈良国立文化財研究所
- 松尾充晶 1999「上塩治築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩治築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書4 鳥根県古代文化センター
- 松尾充晶 2003「身分表徴としての裝飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究会 鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所
- 宮代栄一 1996「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- 宮原佑治 2012「半球形飾金具の検討」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会
- 持田大輔 2011「古墳時代後期・終末期の裝飾付環頭大刀」『考古学ジャーナル』616 ニュー・サイエンス社
- 桃崎祐輔 2019「額田部の馬具と鈴—心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって—」『国家形成期の首長権と地域社会構造』鳥根県古代文化センター研究論集第22集 鳥根県古代文化センター
- 山口香織 2022「塚段古墳出土の鉄製品」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 岡山市教育委員会
- 山崎信二 1985「横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—」(山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社に再掲)
- 山本悦世・土井基司・田代健二 1992「須恵器」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社
- 山本雅靖・間壁忠彦・三木文雄 1974「王墓山古墳」『王墓山古墳群』倉敷市教育委員会

挿図出典

- 第141図：穴沢味光・馬日順一1986(「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列」『福島考古』第27号 福島県考古学会)を基に一部改変
- 第144図：空古墳：田中満雄編1976「空古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11 岡山県教育委員会、風呂坊4号墳：福辻淳編2012「風呂坊古墳群」桜井市内埋蔵文化財2008年度発掘調査報告書2 桜井市文化財協会、八塚3号墳：尾上元規編2009「八塚古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告218 岡山県教育委員会
- 第146～148図：二万大塚古墳：新納泉・三浦孝章編2018「二万大塚古墳」二万大塚古墳発掘調査団、緑山6号墳：近藤義郎編1987「緑山古墳群」総社市文化振興財団、緑山17号墳：村上幸雄編1984「緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡」総社市埋蔵文化財発掘調査報告1 総社市教育委員会、箭田大塚古墳：中野雅美編1984「箭田大塚古墳」真備町教育委員会、葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅1986「箭田大塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会、江崎古墳：近藤義郎1987「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会、赤井南3号墳：山本雅靖・間壁忠彦・三木文雄1974「王墓山古墳」『王墓山古墳群』倉敷市教育委員会

第6節 こうもり塚古墳の歴史的意義

1 埋葬について

こうもり塚古墳で確認できた埋葬施設として石棺と陶棺がある。そのほか、これまでに鉄釘の出土から木棺の存在が示されてきたが、今回の再整理で確認した鉄釘を根拠に木棺の存在を証明するのは困難であると判断した。しかし、横穴式石室が攪乱を受けている状況を考慮すると、木棺の存在を完全に否定するものではない。

玄室には石棺が1基残されている。発掘調査時において、石棺の蓋は既に外されており、かつ、棺内に人骨や遺物などは残されていない状況であった。石棺は床面の敷石の上であり、奥壁まで約3.6mを残し、玄室でも入口に近い場所に置かれていた。石室内で石棺を二次的に移動したような痕跡は見当たらないことから、石棺は当初からこの位置に設置されていた可能性がある。ここに石棺が置かれた理由として、ここが後円部の中心に位置することをあげる説がある（藤田2003）。

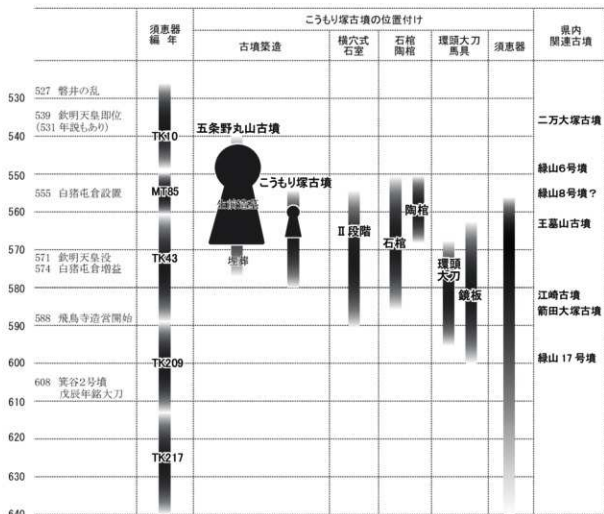
こうもり塚古墳では陶棺も出土した。出土したすべての破片を検証したが、複数個体の破片は確認できなかったため、埋葬された陶棺は1基のみであったと推定できる。陶棺は盗掘の影響を受けており、玄室や羨道で破片が散在した状態で出土したため、石室内における陶棺の安置場所は推測するほかない。陶棺は復元に全長約245cm、最大幅約72cm前後を測るため、陶棺の設置場所の候補としては、石棺の奥か横、あるいは手前の3か所が想定できる。本文でも示したとおり、特に、石棺の北東側でまとまって陶棺片が出土したことから、玄室奥側に陶棺が設置されていた可能性は高いと考える。石棺の奥に陶棺を設置したと仮定すると、こうもり塚古墳では、石棺よりも陶棺が先に配置されていた可能性も否定できない。しかし、石棺を先に設置し、その横を通して奥に陶棺を配置することも不可能ではない。

こうもり塚古墳の被葬者の人数であるが、まず、石棺と陶棺の被葬者が想定でき、最低2名の埋葬があったことは明らかである。それぞれの棺における複数埋葬の可能性も考えるべきであるが、それを示す資料はない。また、被葬者の人数を推測できる資料として耳環がある。耳環は4点出土しており、そのうち2点はセット関係にあると考えられるため、少なくとも3体の埋葬が推定できる。さらに、こうもり塚古墳では副葬された須恵器の型式から7世紀前半まで追葬が続いていた可能性があり、さらに多くの埋葬を想定することができる。特に奥壁近くで新しい時期の土器がまとまって出土しており、この付近に追葬があった可能性も考えられる。

2 築造時期と埋葬時期

こうもり塚古墳が築造された時期及びここに被葬者が埋葬された時期について検討する（第150図）。その手掛かりとして、既存の研究や、今回の調査成果を基に、こうもり塚古墳の横穴式石室、石棺と陶棺、副葬品それぞれの年代を考える。

こうもり塚古墳の横穴式石室の築造時期に関する学説については第3節で紹介したが、その時期は6世紀中葉から7世紀初頭までと幅がある。本書では、こうもり塚古墳を含めた周辺の横穴式石室を時間的な変化を示すと推測できる奥壁の形態から3段階に分類し、こうもり塚古墳をⅡ段階に位置付



第150図 こうもり塚古墳の位置付け

けた。そして、このⅡ段階を6世紀中～後葉頃と推定した。

こうもり塚古墳の石棺は浪形石製の家形石棺である。畿内の棺制を採用しながらも、石材は在地で調達していることに特徴がある。その変化は畿内で出土している家形石棺や岡山県内の浪形石製の家形石棺の変遷で説明できる(第4節)。これによると、こうもり塚古墳の石棺の時期はMT85～TK43型式段階と想定できる。また、陶棺は岡山県内で最古型式に位置付けられ、河内の陶棺の影響を受けている可能性が高い(第4節)。畿内における出現期の陶棺の年代については、陶棺に随伴する須恵器などから概ねMT85号窯段階に中心があると推測できる。したがって、吉備への陶棺の波及はそれ以後と考えられるため、こうもり塚古墳の陶棺はMT85号窯段階以後の6世紀第3四半期頃に製作された可能性が高いといえよう。

環頭大刀柄頭については、柄頭の文様の変化等からその変遷が明らかとなっている。こうもり塚古墳の柄頭の時期については研究者により見解の相違があるが、6世紀第4四半期を中心とする時期が想定できる(第5節)。また、馬具については、心葉形十字文透鏡板付轡、辻金具、鞍金具、障隠金具や飾金具があるが、器種によって想定する時期に幅がある。そのうち、心葉形十字文透鏡板付轡はTK43型式頃の年代が推測できる(第5節)。

こうもり塚古墳に副葬されている須恵器であるが、MT85号窯段階～TK217型式段階のものが副葬されている（第5節）。その中で、出土量も多く、器種も充実しているのはTK43型式段階のものである。

このように考えると、こうもり塚古墳への埋葬時期は概ね6世紀後半から7世紀前半（TK43型式～TK217型式段階）の中でとらえることができる。このうち、こうもり塚古墳の築造や初期段階の埋葬に関わる石棺・陶棺及びこれらに伴う可能性のある副葬品の年代は、おおむね6世紀第3～4四半紀に比定することが可能であろう。

ところで、今回の墳丘調査の結果、こうもり塚古墳の墳形が奈良県五条野（見瀬）丸山古墳に類似している可能性が指摘できた（第2節）。こうもり塚古墳は、これまで、いわゆる「見瀬丸山型前方後円墳」と評価されてきたが、今回の調査でもこれを追認できた。五条野丸山古墳では墳丘確認調査が行われておらず、墳形に関して不確かな点が多い上、復元案も複数提起されているが、こうもり塚古墳の墳形は五条野丸山古墳の約3分の1の規格で築造された蓋然性は高いといえるのではないだろうか。そうすると、こうもり塚古墳と五条野丸山古墳の築造時期は近いことが推測できる。

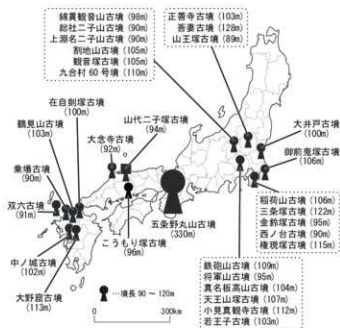
ところで、近年、この五条野丸山古墳の被葬者は欽明大王であると説が強くなっている（高橋2004）。欽明大王の即位については複数の説があるが530年代であり、没年は571年である。古墳が被葬者死後に築造された没後造墓であったとすると、五条野丸山古墳は571年以後の築造となる。ところが、これについて、岸本直文は、五条野丸山古墳は生前造墓であることは明らかであるとし、欽明大王在位中に築造されたと主張する（岸本2011）。あわせて、岸本は、畿内の大王墓の相似墳は大王が存命中に築造された可能性が高いことも指摘した（岸本2020）。このように考えると、五条野丸山古墳と墳形が類似するこうもり塚古墳は、欽明大王在位中に築造された可能性が高く、その築造開始時期は、欽明大王死没前の6世紀第2～3四半期の中で造られた可能性が高いといえる。さらに、こうもり塚古墳では6世紀後半期に相当するTK43型式段階の出土遺物が多いことを考えると、こうもり塚古墳は6世紀第3四半期頃に築造された可能性が推定できる。

以上を踏まえると、こうもり塚古墳は、五条野丸山古墳との墳形の類似や、年代を推測することのできる遺構や遺物の時期から6世紀第3四半期頃に築造され、その後、7世紀前半まで追葬が続いたと推定できる。こうもり塚古墳と五条野丸山古墳との墳形の類似性は今後の調査研究等で検証する必要があるが、現段階においてこの両古墳には畿内と吉備の編年を繋ぐクロスディティンギングの役割を期待することができる。

3 吉備最後の大型前方後円墳

墳形と規模

吉備では、古墳時代前期から墳長約100m以上の大型前方後円墳を築造してきたが、備中南部では古墳時代中期後半に築造された宿寺山古墳（墳長116m）以降、大型前方後円墳が築造されてこなかった。しかし、およそ半世紀以上の空白期間を経てこうもり塚古墳がこの地に築かれた。このように、古墳時代中期後葉から後期前葉の段階に前方後円墳の築造が低調になっていた地域に、後期後半に入り再び中・大型の前方後円墳が出現するという状況は、当地域以外にも、備前の二塚山古墳（墳長約55m）、鳥取上高塚古墳（墳長約75m）、備後の二子塚古墳（墳長68m）でもみることができる。この動きは、一度衰退した吉備勢力の復権と評価する説がある一方、畿内で欽明陵とされる五条野丸山古



第151図 6世紀後半における100m級以上の前方後円墳

墳の出現と有機的に連動するとする説も提唱されており（松木2004、松木2022）、こうもり塚古墳の出現も、このような政治的動向と一致する可能性が高い。

こうもり塚古墳は、今回の調査で明らかになったとおり、墳長約96mを測る前方後円墳であるが、古墳時代後期後半に築かれた古墳としては、中国・四国・九州で最大級である（第151図、仁木2019）。この時期、墳丘復元長約330mを誇る五条野丸山古墳がほかの古墳と倍以上の格差で君臨していることが分かるほか、そのほかの古墳が墳長100m規模で並立していることもうかがえる。これは、大王陵と考えられ

る五条野丸山古墳に次ぐ古墳の規模については、大和政権からの規制が働いていた可能性が考えられる。

こうもり塚古墳の墳形は、これまでも「見瀬丸山型前方後円墳」の一つに数えられ（土生田2012）、今回の調査においても五条野丸山古墳との類似が指摘できた（第2節）。一方、こうもり塚古墳との墳形の類似については、島根県大念寺古墳でも指摘されている（仁木2019）。また、第2節で示したとおり、古墳時代後期で備前最大の前方後円墳である鳥取上高塚古墳とも共通点がうかがえる。古墳時代後期における各地の前方後円墳の墳形の類似については、今後の研究の進展が望まれる。

墳丘の構築方法

こうもり塚古墳は三須丘陵から南西方向に張り出した低い尾根上に築かれており、尾根を直交方向に切断することで墳丘を造り出す、いわゆる丘尾切断型の前方後円墳である。こうもり塚古墳自体は、高さ8mほどであるが、古墳周辺に幅20～40m、高さ5m程度の緩斜面状の周縁部が付随しており、さらに下位に位置する谷筋から見上げると、古墳が尾根全体と一体化して見え、実際の墳丘規模以上の大きさを感じさせる。こうもり塚古墳の南側には、後に古代山陽道として整備される幹線道が東西に伸びており、そこからこうもり塚古墳全体を見渡することができる。今回の調査では、こうもり塚古墳がこの幹線道からの眺望を意識して築造されたことが明らかとなり、特に、幹線道から展望できない古墳の背面側（T7、T8付近）においては、墳裾や段築の造作が簡略化されていたことが確認できた。このように、こうもり塚古墳を含め、江崎古墳、簡田大塚古墳など備中の大型横穴式石室は、いずれも古代山陽道に近く、当時から幹線道を意識した古墳の築造が行われたとする（広瀬2014、菱田2020）が妥当であろう。

また、こうもり塚古墳は、墳丘に葺石や埴輪を設けておらず、しかも、傾斜が急で小高い後円部を持っていることを特徴とする。青木敬は、6世紀中頃から後半にかけて、このように墳丘傾斜が急で腰高な墳丘が散見される傾向を指摘する。そして、その背景として、大陸や朝鮮半島との接点を有す

る有力者が、かの地で趨勢となっていた墳丘高大化の情報を得ていたためと推測する（青木2016）。

このような墳丘の高大化は、巨大な横穴式石室の構築工程とあわせ、墳丘築造方法にも大きな影響を与えたと想定される。この点について、青木はこうもり塚古墳が石室の構築を重視した築造方法を採用している点を指摘している（青木2007）。これに関連するかどうかは不明であるが、今回の調査で、こうもり塚古墳の後円部においては、先に墳丘内埋没溝を掘削し、石室及び第一次墳丘構築後、最後にこれを埋め戻して第二次墳丘を築造するといった工法が採用されていることが分かった（第2節）。このように、こうもり塚古墳の築造に当たっては、これまで地域で継承されてきた前方後円墳の築造方法とは異なる工法が導入された可能性が高い。

前方後円墳の終焉

吉備では、こうもり塚古墳築造以後、1世紀を待たずして前方後円墳の築造が停止する。備中南部においても、後続する江崎古墳をもって前方後円墳の築造が終焉を迎える。江崎古墳はこうもり塚古墳よりも規模が小さいことから、こうもり塚古墳は吉備における最後の大型前方後円墳と評価できる。

前方後円墳消滅に関する学史的な理解としては、前方後円墳を築造することで首長間の身分を相互に承認していたシステム（都出1996）が、律令体制成立に向けて整備されていく中で、制度的な身分秩序に変わっていったためと考えることができる。このような政治的な変化を背景に、こうもり塚古墳の存在する備中南部においても、6世紀末葉以後、これまで古墳の被葬者の政治権力を具現化し続けてきた前方後円墳の築造が終焉を迎えることになる。

4 吉備最大の横穴式石室

こうもり塚古墳の横穴式石室は今回の再計測により全長19.9m、玄室長8.1mの規模を持つことが分かった。横穴式石室の全長としては、五条野丸山古墳、宮地嶽古墳に続き、全国でも屈指の規模を持ち（表11）、畿内型の横穴式石室に限定すれば、五条野丸山古墳に次ぐクラスに属する。五条野丸山古墳に次ぐ規模の横穴式石室について、奈良県石舞台古墳を含め全長19m級の横穴式石室が並立していることから、横穴式石室の全長についても、墳丘と同様に大和政権による規制が働いていた可能性も考えられる。

こうもり塚古墳の横穴式石室は両袖式で、畿内型石室と評価されている。こうもり塚古墳が出現する以前の段階の三須丘陵では片袖式石室の方が多く分布しており、畿内型の両袖式石室は少数であった。このような状況の中で、こうもり塚古墳の埋葬施設に両袖式石室が採用された背景としては、こうもり塚古墳の被葬者が地域で多数を占めていた片袖式という墓制の踏襲ではなく、畿内や他地域に対して、その政治的な立場や地位を主張できる両袖式という石室形態を採用した結果と考えられる（第3節）。

一方、こうもり塚古墳の横穴式石室には、奥壁基底石に大型の石材を使用したり、玄門に一段下がる楣石を架構したりといった地域性が指摘されてきた。前者については、備中南部ではこうもり塚古墳築造を契機に始まった可能性が高いが、後者は、こうもり塚古墳以前からこの地域で採用されてきた技法である。このことから、こうもり塚古墳の横穴式石室の構築に当たっては、従前の用石技術をベースにしながらも、新しい工法も採用したことが考えられる。そして、こうもり塚古墳で採用された工法は、こうもり塚古墳以外の周辺の横穴式石室構築にも活用され、域内外で広く共有されていった可能性が高い。

表11 関連する横穴式石室

古墳名 (都道府県名)	墳形 規模(墳長)	内部施設	石室全長	玄室			羨道			文献
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ	
五条野丸山古墳 (奈良県)	前方後円墳 約330	両袖式 家形石棺2基	28.4	8.3	4.1	(3.9)	20.1	2.5	(2.6)	福尾・徳田1994 一瀬・荒木2013
宮地嶽古墳 (福岡県)	円墳 約30	軍室?	約23	—	2.5	3.0	—	—	—	梅原1937
こうもり塚古墳 (岡山県)	前方後円墳 約96	両袖式 家形石棺、陶棺	19.9	8.1	3.6	3.6	12.0 (右側)	2.1	2.7	本書
練塚古墳 (福岡県)	円墳 約40	複室構造 家形石棺	19	3.5	3.5	3.6	—	—	—	井上編2021
箭田大塚古墳 (岡山県)	円墳 約46	両袖式 組合式石棺3基	19.1	8.4	3.0	3.9	10.7	2.3	2.4	葛原ほか1986
石舞台古墳 (奈良県)	方墳 約50	両袖式 石棺?	19.1	7.6	3.5	4.7	11.5	2.6	2.4	河上2006a
牟佐大塚古墳 (岡山県)	円or方墳? 約30	両袖式 家形石棺	18.0	6.0	2.8	3.2	12.0	1.8	2.0	春成ほか1971
岩屋山古墳 (奈良県)	方墳 約40	両袖式	17.8	4.9	2.8	3.0	12.0	2.3	2.2	河上2006b
赤坂天王山古墳 (奈良県)	方墳 約52	両袖式 家形石棺	(15.3)	6.5	3.2	(4.2)	(8.8)	1.8	(1.9)	橋本編2018
緑山8号墳 (岡山県)	円墳 約33	左片袖式	(15.2)	7.0	2.9	4.1	(8.2)	1.8	2.3	本書
二子塚古墳 (広島県)	前方後円墳 68	両袖式 組合式石棺、木棺	14.9	6.8	2.1	3.3	8.1	1.8	2.6	高田・畑2006
藤ノ木古墳 (奈良県)	円墳 約48	両袖式 家形石棺	14.0	6.0	2.7	4.4	8.3	2.1	2.4	榎原考古学研究所 編1990
江崎古墳 (岡山県)	前方後円墳 約45	両袖式 家形石棺、木棺?	13.8	6.6	2.6	2.9	7.2	1.7	2.5	近藤編1987b
燕尾塚古墳 (岡山県)	円墳 23	両袖式or片袖式	12.5	6.4~ 7.5	2.3	(2.3)	5~6	1.6	(1.8)	清家・四田編 2019
鳥取上高塚古墳 (岡山県)	前方後円墳 約75	右片袖式 陶棺?	(約12)	7.8	2.7	(2.6)	(4.2)	1.4	(0.9)	本書
大念寺古墳 (島根県)	前方後円墳 約92	複室構造 家形石棺2基	12.8	5.8	2.9	3.3	—	—	—	島根県教委1980

単位はすべてメートル。括弧内の数値は計測可能な範囲での残存値
計測値には実測図を基に測定したものが含まれる。

5 石棺と陶棺

こうもり塚古墳の石棺は、備中南部(井原市)で産出される浪形石(貝殻石灰岩)で作られた家形石棺である。畿内の家形石棺と類似する点が指摘できることから、この石棺を製作するに当たっては、中央からの工人派遣ないし設計図の下賜があったと想定でき、そのための石材を域内で調達したということであろう。この浪形石製の石棺は5例しか知られておらず、吉備中核のごく一部の首長に利用されたことから、被葬者の自主性や独自性を示すとの意見もある。しかし、石棺による身分表徴や葬送儀礼における所作といった主要素は、基本的に畿内の棺制にならっているとみるべきであろう。

陶棺は、畿内の影響で出現し吉備で盛行するが、吉備においては、こうもり塚古墳の陶棺がその祖型として位置付けられている。こうもり塚古墳の陶棺は「総社市史」で復元図が提示されていたが、今回の再整理の結果、全長が長く復元できるなど成果があった(第4節)。また、陶棺の製作技法や施文方法の比較から、河内の影響を受けている可能性が高くなった。陶棺は、この後、備前や美作を中心に普及するが、こうもり塚古墳の被葬者が後の陶棺生産に与えた影響は大きいと推測できる。

6 こうもり塚古墳の築造背景

手工業生産と集落動態

こうもり塚古墳が築かれた6世紀後半以降、県内では各種の手工業生産が盛行する。こうもり塚古墳周辺には、日本で最古級の製鉄遺跡である千引カナクロ谷遺跡や、大規模な鍛冶遺跡として知られる窪木葉師遺跡などが存在する。こうもり塚古墳では鉄滓が出土しており、これまで被葬者が鉄あるいは鉄器生産に関与していたとする説が提唱されてきた（葛原編1979）。しかし、鉄滓は床面から出土しているとはいえ、周辺の瓦の中には敷石上から出土しているものがあり、攪乱の可能性が否定できない出土状況を鑑みると、鉄滓が古墳時代の副葬品であるという確証は得られていない。したがって、この鉄滓を根拠に被葬者が鉄及び鉄器生産に関与していたと判断することは慎重にあるべきである。しかし、こうもり塚古墳が営まれた6世紀第3四半期以降、周辺で鉄・鉄器生産が行われていたことは確かであり、こうもり塚古墳の被葬者がこれらに深く関与していたことは否定できない。また、こうもり塚古墳から出土した須恵器も在地生産の可能性が高く、こうもり塚古墳の被葬者が、地域の手工業生産と不可分の関係にあったことは十分想定できる。

吉備における古墳時代の集落動態を分析した松木武彦は、こうもり塚古墳が築造された古墳時代後期には周辺の竪穴住居数が増加する傾向があると分析する（松木2010）。こうもり塚古墳の築造を可能にした背景として、このような集落動態をも考慮する必要がある。

屯倉について

こうもり塚古墳の墳形が五条野丸山古墳と類似していることから、両者は近い関係にあったことがうかがえる（第2節）。五条野丸山古墳の被葬者は、欽明大王とする説が有力になっているため、こうもり塚古墳の被葬者は、欽明大王と同世代の人物であったと考えられる。これに関して、『日本書紀』における欽明天皇が吉備に屯倉を設置したとする記事は示唆的である。

『日本書紀』には、欽明天皇16年（555）に吉備に蘇我稲目と穂積磐弓が遣わされ、吉備五郡に白猪屯倉を設置したと記載されている。白猪屯倉がどこに設置されたかについては議論があるが、美作・備前・備中に及ぶとする説がある（狩野2000）。これに備中南部が含まれているとすれば、こうもり塚古墳の被葬者がこの動向に無関係とはいえず、屯倉設置の結果として、大型前方後円墳や横穴式石室造営が承認されたとも考えられる（葛原2003）。

もちろん、文献に記載された出来事を考古資料に援用することは慎重であるべきだが、白猪屯倉設置に関わった人物の中に河内に本拠地を置いていた氏族が含まれており、屯倉の設置が吉備への陶棺波及の契機になった可能性も指摘されている。また、石棺の普及にも蘇我氏の関与を示唆する見方もある（第4節）。このように、こうもり塚古墳の出現背景に、大和政権による屯倉の設置に関わる動きも無視できない。

こうもり塚古墳の被葬者の性格

こうもり塚古墳では石棺に埋葬された被葬者がこの古墳の主と考えられるが、その政治的な性格について検討してみたい。

まず、影響を及ぼした領域であるが、備中南部といった範囲を推測する説や、備中のみならず、吉備全域に想定する説がある。これについては、墳長約96mもの規模を誇る前方後円墳や全国屈指の横穴式石室の性格をどのように考えるかによって評価が異なる。近藤義郎は、岡山の三大巨石墳（簡田

大塚古墳、こうもり塚古墳、牟佐大塚古墳)をそれぞれの地域に鼎立する最有力首長墓と考え、こうもり塚古墳については、高梁川から旭川における支配域を想定する(近藤1987a)。また、笹栗拓は、横穴式石室の地域性が表出する範囲を統括範囲と考え、第129図に示した足守川と高梁川に挟まれた範囲を明示した(笹栗2010)。一方、脇坂光彦は、こうもり塚古墳の横穴式石室を超大型石室とし、その統括範囲を吉備全体とした。その上で大和政権と対抗し強力な統率力を保持した超広域首長の存在を指摘した(脇坂2003)。同様に藤田憲司も吉備の大首長墓と考えた(藤田2003)。今回の調査では、備前に位置する鳥取上高塚古墳が墳長約75mで、こうもり塚古墳より墳長が短い、古墳時代後期後半において備前最大の前方後円墳である可能性が指摘できた。また、鳥取上高塚古墳の横穴式石室は玄室長7.8mと、こうもり塚古墳の石室に匹敵する。両者は墳形もよく似ており、同世代の首長墓と考えると、こうもり塚古墳が備前まで含めた地域を統括していたと考えるのは難しく、やはり、備中南部を中心とした範囲を支配した首長と考える方が妥当なのではないかと考える。

こうもり塚古墳の被葬者と大和政権との関係であるが、大和政権の影響をどの程度にとらえるかによって意見が分かれる。畿内からの影響を強く考える意見の根拠としては、こうもり塚古墳の墳形が五条野丸山古墳と類似していること、横穴式石室や石棺・陶棺が近畿地方で創出された墓制の影響を受けていること、環頭大刀や馬具といった金銅製品が畿内からもたらされていることなどがあげられる。また、畿内の影響は否定しないものの、吉備の独自性を強調する意見としては、石棺の石材が在地産である点や、横穴式石室の構造に地域色が認められるといった点があげられる。

こうもり塚古墳の規模や墳形、横穴式石室、石棺、陶棺、副葬品の検討から、こうもり塚古墳の被葬者と大和政権との政治的な繋がりとは否定できない。特に、墳形や棺の形態、金銅製品の格式など、大和政権内における集団関係の表徴ともなるべき事象については畿内の要素が強いといえる。逆に、石室構築技法とか石棺石材の調達など、関係する集団内部あるいは集団間で運用または保持されるような面においては在地の要素がうかがえる。これまで、こうもり塚古墳の被葬者における独自性を強調した意見もあるが、これについては、石室構築や棺の製作に当たって、在地の経済力や技術力が活用されていたことに意義があったと評価したい。

このような議論を踏まえ、これまで検討してきた考古資料を基に想定される被葬者像としては、軍事権を分与された武人、中央勢力の元で奉仕した官人、あるいは、地方に配置された国造級支配者、さらには屯倉の管理者などの性格が考えられる。ただ、実態としては、これらの性格は不可分な関係であったと想定でき、在地の支配者でありながらも、大和政権と密接な関係を持ち、政権の一翼を担った大首長であったと考えられよう。しかし、一方で、横穴式石室に排水溝を持たないことや、環頭大刀以外に飾履や冠帽など第一級品を欠くことから、大和勢力における位置は必ずしも第一級ではなく、政権基盤の一定の弱さを露呈していると評価する説もある(近藤1987a、葛原2003)。なお、被葬者については、下道臣一族説(狩野2000)などがある。

7 こうもり塚古墳の意義

こうもり塚古墳の築かれた6世紀は、国造制や部民制、屯倉の設置など大和政権が地方に対して、政治的・経済的・軍事的な統治を推し進めた時期である。岸本直文は、6世紀中頃における前方後円墳の築造は「倭王権への従属、国造への任命、官家の設置」といった、6世紀における中央集権化を反映するものとする(岸本2012)。こうもり塚古墳が築造されたのは、まさにこの時期に相当し、こ

うもり塚古墳の研究は、この時代の中央と地方の関係を把握する上で極めて重要である。

また、こうもり塚古墳は、吉備における最後の大型前方後円墳であり、これ以後、前方後円墳は終焉を迎え、新たな政治秩序の中で方墳を中心とする墓制等が採用されていく。その背景には、対外的な緊張関係の中、大陸の思想や文化を取り入れながら、新たな政治体制の構築をめざすとともに、地方への関与を強める中央の意図が看取できる。こうもり塚古墳の時代背景を解明することは、このような動きが地方に浸透する過程を考える上でも重要である。(金田)

参考文献

- 青木敬 2007「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第23号 日本考古学協会
- 青木敬 2016「日韓王陵級古墳における墳丘の特質と評価」『日韓文化財論集』Ⅲ 奈良文化財研究所
- 一瀬和夫・荒木潮奈 2013「榎原丸山古墳測量調査」『京都橘大学 文化財調査報告2012』京都橘大学文学部
- 井上信隆編 2021『みやこ町内遺跡群Ⅻみやこ町文化財調査報告書第18集 みやこ町教育委員会』
- 今井亮・近藤義郎 1970『群集墳の盛行』『古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店
- 梅原末治 1937「日本古墳巨大石室聚成」『大和島庄石舞臺の巨石古墳』京都帝国大学文学部考古学研究所報告第14冊 福川書店
- 榎原考古学研究所編 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書 斑鳩町・斑鳩町教育委員会』
- 狩野久 2000「吉備の国づくり」『岡山県の歴史』山川出版社
- 河上邦彦 2006a「石舞台古墳(島庄)」『続 明日香村史』上巻 明日香村
- 河上邦彦 2006b「岩屋山古墳(越字岩山)」『続 明日香村史』上巻 明日香村
- 亀田修一 2008「吉備と大和」『古墳時代の実像』吉川弘文館
- 岸本直文 2011「横穴式石室の型式は被葬者の活躍期を示す」『考古学研究』第58巻第1号 考古学研究会
- 岸本直文 2012「墳丘と周濠」『講座日本の考古学8 古墳時代(下)』青木書店
- 岸本直文 2020「前方後円墳と古墳時代史」『倭王権と前方後円墳』塙書房
- 葛原克人編 1979「備中こうもり塚古墳—「吉備路風土記の丘」環境整備に伴う調査—」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会
- 葛原克人・中野雅美・宇垣匡雅 1986「箭田大塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会
- 葛原克人 2003「後期古墳の時代」『山手村史』本編 山手村
- 近藤義郎 1987a「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 近藤義郎 1987b「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会
- 笹栗拓 2010「横穴式石室の展開過程と地域社会の構造—吉備の分析を中心に—」『古代学研究』第188号 古代学研究会
- 鳥根県教育委員会 1980『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』
- 杉山尚人 1992「陶棺」『吉備の考古学的研究(下)』近藤義郎編 山陽新聞社
- 清家章・四田寛人編 2019『鹿尾塚古墳Ⅰ—墳丘測量調査・石室実測調査報告—』岡山大学考古学研究室
- 高田莊爾・畑信次 2006『広島県史跡 二子塚古墳発掘調査報告書』福山市教育委員会
- 高橋照彦 2004「畿内最後の大型前方後円墳に関する一試論—見瀬丸山古墳と欽明陵古墳の被葬者—」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 都出比呂志 1996「国家形成の諸段階—首長制、初期国家、成熟国家—」『歴史評論』551号 歴史科学協議会
- 仁木聡 2019「継体・欽明朝における出雲の商期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』鳥根県古代文化センター研究論集第22集 鳥根県古代文化センター
- 西川宏 1964「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集刊行会
- 橋本輝彦編 2018『赤坂天王山古墳群の研究—測量調査報告書—』桜井市文化財協会調査研究報告第1冊 桜井市文化財協会
- 土生田純之 2012「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会

- 春成秀爾・出宮徳尚・近成久美子 1971 『岡山市牟佐大塚古墳』『古代吉備』第7集 古代吉備研究会
- 菱田哲郎 2020 『大型横穴式石室と交通』『横穴式石室の研究』土生田純之編 同成社
- 広瀬和雄 2014 『7世紀「吉備」に関する基礎的考察—北房地域の終末期古墳をめぐって—』『古代吉備』第26集 古代吉備研究会
- 福尾正彦・徳田誠志 1994 『故傍陵墓参考地石室内現況調査報告』『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部
- 藤田憲司 2003 『こうもり塚と江崎古墳』吉備考古ライブラリー・9 吉備人出版
- 松木武彦 2004 『中国地方における前方後円墳の消滅過程』『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 松木武彦 2010 『吉備地域における巨大古墳形成過程の研究』2006-2009年度科学研究費基盤研究(B) 成果報告書
- 松木武彦 2022 『山陰・瀬戸内・土佐』『出雲・吉備・伊予』シリーズ 地域の古代日本 株式会社KADOKAWA
- 脇坂光彦 2003 『吉備地方の大型横穴式石室の評価』『考古学を学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

挿図出典

- 第151図：仁木聡2019 『継体・欽明朝における出雲の両期』『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集 島根県古代文化センター) を基に作成、一部改変

遺物観察表

凡 例

土器

- 1 「出土地区」の項目で、「石室内」は昭和42年及び昭和53年度の横穴式石室の発掘調査で出土した遺物で、出土位置が定かでないものを示す。
- 2 「計測値」の項目で、「口径」と「底径（脚径）」の数値は実測値又は復元値を示し、「〈数値〉」は残存率が約1/6以下のものの復元値であることを示す。また、「器高」の「〈数値〉」は現存最大値を示す。
- 3 「色調」は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるが、現物が確認できていないものに関しては原因に記載された色調をそのまま記載している。
- 4 「備考」の項目で、「県史」は「岡山県史」、「市史」は「総社市史」、「県35」は「県報告35」を示す。「武田論文」は武田恭彰1990（『古代土器生産についての一予察（2）—備中の10・11世紀の土器様相を中心に—』『古代吉備』第12集 古代吉備研究会）を示す。その他、記号・番号（コ〇〇など）は対象遺物に記載されている注記を示す。

金属製品

- 1 「重量」は、クリーニング後、含浸処理後の数値である。
- 2 「備考」の項目で、「市史」は「総社市史」、「県35」は「県報告35」を示す。また、「澤田報告」は澤田秀実編2022（『日本列島における銅、鉛原材料の産出地同定と使用開始年代に関する学際的研究』くらしき作陽大学）を示す。

玉類

- 1 「色調」は「新版色の手帖」（永田泰弘監修2002 小学館）による（木品を除く）。
- 2 「備考」の項目で、「県35」は「県報告35」を示す。

石製品

- 1 石材の鑑定は、岡山大学名誉教授 鈴木茂之氏が行った。
- 2 「備考」の項目で、「県35」は「県報告35」を示す。

土器

掲載番号	出土地区	種別	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面・断面)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考
				口径 (胴径)	器高						
1	T1	須恵器	甕		(3.8)	灰 (N5/) 灰 (N6/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒少 (石英・長石・雲母)	良好	口縁部 破片	口縁：沈線と連続斜行沈 線文	106 と同一個体 か
2	T1	須恵器	甕		(6.5)	灰 (7.5Y4/1) 褐灰 (7.5YR6/1) 褐灰 (7.5YR6/1)	1mm 以下の砂粒少 (石英・長石・雲母)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ後カキ メ 内面：同心円状当て具痕	
3	T1	須恵器	甕		(5.3)	緑黄 (5G2/1) 灰 (5Y5/1) 褐灰 (5YR6/1)	2mm 以下の砂粒少 (石英・長石)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	
4	T1	須恵器	甕		(6.4)	灰 (N5/) 灰 (N6/) 赤灰 (5R5/1)	2mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	
5	T1	黒色 土器	椀		(2.1)	にぶい黒 (7.5YR5/3) 暗灰 (N3/) にぶい黒 (7.5YR5/3)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	底部 破片	内面：ヘラミガキ、黒色 化	
6	T7	須恵器	甕		(6.8)	灰 (5Y5/1) 灰 (5Y5/1) 灰 (5Y6/1)	1mm 以下の砂粒少 (石英・長石)	良好	体部 破片	外面：格子目タタキ 内面：同心円状当て具痕	
7	T7	須恵器	甕		(7.4)	灰黄 (2.5Y7/2) 黄灰 (2.5Y6/1) 灰黄 (2.5Y6/2)	2mm 以下の砂粒少 (石英・長石・雲母)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	
8	T7	土師器	椀	6.0	(2.3)	橙 (5YR6/8) 橙 (5YR6/8) 橙 (5YR6/8)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	高台部 破片	3/4	
9	T5	黒色 土器	椀 (15.3)	7.4	(6.2)	橙 (5YR7/8) 暗灰 (N3/) にぶい赤黒 (10YR7/4)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	口縁部 高台部 破片	1/6	内面：ヘラミガキ、黒色 化
10	T5	土師器	椀	6.2	(4.6)	橙 (7.5YR7/6) 橙 (7.5YR7/6) 浅黄橙 (10YR8/3)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	体部 高台部 破片	1/2	内面：ヘラミガキ
11	T5	土師器	椀	(1.0)		橙 (5YR6/8) 橙 (5YR6/8) 橙 (5YR6/6)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	高台部 破片		
12	T5	須恵器	壺		(5.2)	淡黄 (2.5Y8/3) 灰白 (2.5Y8/2) 灰白 (2.5Y7/1)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	不良	高台部 破片		
13	T4	須恵器	壺	(13.6)	(1.3)	灰 (N5/) 灰白 (N7/) 灰白 (N8/)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	高台部 破片	1/8	
14	T4	須恵器	壺	(11.0)	(2.2)	灰 (N6/) 灰 (N6/) にぶい赤黒 (5YR5/4)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	底部 破片	1/8	
15	T4	土師器	椀	(8.3)	(1.2)	橙 (5YR7/6) 橙 (5YR7/6) 黒 (7.5Y2/1)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	高台部 破片	1/6	
16	T4	土師器	椀	5.6	(1.4)	黄橙 (10YR5/6) 黄橙 (10YR5/6) にぶい黄黒 (10YR5/3)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母 ・赤色酸化鉄)	良好	高台部 破片	1/4	
17	T3	須恵器	甕		(6.0)	灰白 (N7/) 灰白 (N7/) 灰白 (5YR7/1)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	
18	T12	須恵器	甕		(6.4)	灰 (5Y5/1) 灰オリーブ (5Y5/2) 灰黄 (2.5Y6/2)	2mm 以下の砂粒少 (石英・長石・雲母)	良好	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	
19	玄室	須恵器	杯蓋	15.8	(4.3)	灰 (N5/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラク ズリ (反時計) 内面：当て具痕	コ・ス118 歴史
20	玄室	須恵器	杯蓋	15.4	4.7	灰 (N5/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラク ズリ (反時計)	コ・ス109 史実178図1
21	玄室	須恵器	杯蓋	14.9	4.3	灰 (N4/) 灰 (N4/) —	1mm 以下の砂粒 (石英・長石)	良好	2/3	外面：天井部回転ヘラク ズリ (反時計)	コ玄陶館西付近 コ・ス135 史実178図2
22	石室内	須恵器	杯蓋	15.0	(3.7)	灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y7/1) —	1mm 以下の砂粒 (石英・長石多)	良好	1/2	外面：天井部回転ヘラク ズリ (反時計)	コ5区
23	玄室	須恵器	杯蓋	14.2	3.8	黄灰 (2.5Y6/1) 黄灰 (2.5Y6/1) —	1mm 前後の砂粒少 (石英・長石)	良好	2/3	外面：天井部回転ヘラク ズリ (反時計)	コ・ス134・138・ 148

土器

掲載番号	出土地区	種別	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面・断面)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径 (脚付)						
24	玄室	須恵器	杯蓋	13.5	3.5	灰 (5Y6/1) 灰 (5Y6/1) —	1mm 前後の砂粒 (長石・石英)	良好	1/3	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 124 県史・市史 178 図 4
25	玄室	須恵器	杯蓋	13.6	4.2	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 139
26	玄室	須恵器	杯蓋	13.7	4.1	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部にヘラ記号	コ・ス 144
27	玄室	須恵器	杯蓋	13.2	4.9	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰赤 (5YR5/2)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部にヘラ記号	コ・ス 137
28	玄室	須恵器	杯蓋	13.3	4.0	灰 (N5/) 黒灰 (N3/) 明灰 (7.5YR2/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	ほぼ 完形	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部にヘラ記号	コ・ス 132 市史 178 図 5
29	玄室	須恵器	杯蓋	14.1	4.1	灰 (N4/) 灰 (N4/) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部にヘラ記号、口縁部に割目	コ・ス 133-142 県史・市史 178 図 3
30	石室内	須恵器	杯蓋	13.8	(3.5)	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰赤 (2.5YR4/2)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英少)	良好	1/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部にヘラ記号	
31	石室内	須恵器	杯蓋	13.6	(2.6)	黒 (N2/) 灰 (N4/) 灰赤 (2.5YR4/2)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英少)	良好	口縁部 1/5	外面：口縁部に割目	
32	石室内	須恵器	杯蓋	14.9	(2.6)	黒灰	赤紫褐色の緻密な胎土・砂粒ほとんど含まず	良好	口縁部 1/5		未確認 (30と同一か?)
33	墓道	須恵器	杯蓋	13.9	4.3	灰 (N5/) 灰白 (N7/) 灰白 (N7/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	3/4	外面：天井部未調整	県 35 第 2 図 1
34	石室内 墓道 流土	須恵器	杯蓋	10.4	(3.2)	暗灰 (N3/) 灰 (N4/) 灰赤 (7.5R4/2)	1 ~ 2mm 前後の砂粒多 (石英・長石多)	良好	1/2	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	県 35 第 2 図 6 (石室内出土破片と接合)
35	玄室	須恵器	杯蓋	10.6	(3.5)	灰 (N4/) 灰 (N5/) —	1mm 前後の砂粒多 (石英・長石)	良好	1/2	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 122
36	石室内	須恵器	杯蓋	10.3	(3.1)	灰 (7.5YR6/1) 褐色灰 (7.5YR4/1) 褐色灰 (7.5YR4/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	口縁部 1/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ 1 区
37	玄室	須恵器	杯蓋	10.4	3.3	灰 (N4/) 灰 (N5/) —	1mm 前後の砂粒多 (石英・長石多)	良好	2/3	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・玄・ス 125・149 市史 178 図 6
38	玄室	須恵器	杯蓋	9.8	(3.4)	暗灰 (N3/) 灰 (N4/) —	1mm 前後の砂粒多	良好	1/2	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 119 県史・市史 178 図 7
39	石室内	須恵器	杯蓋		(2.8)	灰 (N6/) 灰 (N5/) 赤灰 (10R5/1)	1mm 前後の砂粒多 (石英・長石多)	良好	天井部 1/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	
40	墓道 流土	須恵器	杯蓋		(1.9)	灰 (N5/) 灰 (N4/) 灰褐色 (7.5YR4/2)	1mm 以下の砂粒多 (長石・石英)	良好	天井部 破片	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	県 35 第 2 図 7
41	玄室	須恵器	杯蓋	9.9	2.8	暗灰 (N3/) 灰 (N4/) —	1 ~ 2mm 前後の砂粒多 (石英・長石)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 123 市史 178 図 8
42	石室内	須恵器	杯蓋	9.8	2.9	灰 (N5/) 灰 (N4/) 赤灰 (2.5YR4/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	口縁部 1/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)	コ 5 区 県史・市史 178 図 9
43	玄室	須恵器	杯身	14.0	(3.1)	灰 (N5/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 前後の砂粒少 (石英・長石)	良好	口縁部 1/4	外面：底部回転ヘラケズリ	コ・ス 112 県史・市史 178 図 10 44 と色調・胎土異なる
44	玄室	須恵器	杯身	14.1	(3.7)	灰 (N5/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 前後の砂粒少 (石英・長石)	良好	口縁部 1/4	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 114 43 と色調・胎土異なる
45	墓道 流土	須恵器	杯身		(2.6)	青灰 (10BG6/1) 青灰 (10BG6/1) 青灰 (10BG6/1)	1mm 以下の砂粒 (長石)	良好	1/8		県 35 第 2 図 4
46	玄室	須恵器	杯身	11.8	4.0	灰白 (N7/) 灰白 (2.5Y7/1) —	2mm 前後の砂粒少 (石英・長石多)	良好	完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 129 県史・市史 178 図 12

土器

掲載番号	出土地区	種別	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面・断面)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考	
				口径 (附径)	器高							
47	玄室	須恵器	杯身	11.1	4.1	灰 (N6/) 暗灰 (N3/) 灰赤 (2.5YR4/2)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)、底部にヘラ記号	コ・ス 143	
48	玄室	須恵器	杯身	11.5 ～ 12.2	4.0	灰 (10Y5/1) 灰 (10Y5/1) —	1mm 前後の砂粒少 (長石・石英)	良好	3/4	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 145 市史 178 図 11	
49	玄室	須恵器	杯身	11.8	4.0	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)、底部にヘラ記号	コ・ス 115 市史 178 図 14	
50	玄室	須恵器	杯身	11.2	4.2	灰 (N5/) 灰 (N4/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)、底部にヘラ記号	コ・ス 140 県史・市史 178 図 13	
51	石室内	須恵器	杯身	12.8	(3.1)	灰 (N5/) 灰 (N4/) 灰赤 (2.5YR4/2)	砂粒をほとんど含まない	良好	口縁部 1/5	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 5 区イ	
52	墓道 流土	須恵器	杯身	(12.0)	(2.9)	灰 (N5/) 灰 (N4/) 灰褐色 (5YR5/2)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	口縁部 1/9		県 35 第 2 図 3	
53	墓道	須恵器	杯身	12.3	4.1	灰 (10Y5/1) 青灰 (5B5/1) —	1mm 以下の砂粒多 (長石・石英)	良好	完形	外面：底部未調整	県 35 第 1 図 3	
54	玄室	須恵器	杯身	9.0	3.4	灰 (N5/) 暗灰 (N3/) 暗灰 (N3/)	1mm 前後の砂粒 (長石多・石英)	良好	ほぼ 完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 150 内面に赤色顔料 付着、県史・ 市史 178 図 17	
55	玄室	須恵器	杯身	8.7	3.5	灰 (N6/) 灰 (N4/)	1mm 前後の砂粒多 (長石多)	良好	ほぼ 完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 121 付近、 コ・ス 120 市史 178 図 15	
56	玄室	須恵器	杯身	8.3	3.7	灰白 (N7/) 灰 (N4/)	1mm 前後の砂粒多 (石英・長石多)	良好	3/4	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 121	
57	玄室	須恵器	杯身	8.4	3.1	灰 (N5/) 灰 (N4/) —	1mm 以下の砂粒多 (長石・石英)	良好	ほぼ 完形	外面：底部回転ヘラケズリ (反時計)	コ・ス 151 県史・市史 178 図 16	
58	墓道	須恵器	杯身	8.7	3.8	灰 (N6/) 灰 (N6/) —	1mm 前後の砂粒少 (石英・長石)	良好	ほぼ 完形	外面：底部未調整	コ・ス 104 県史・市史 178 図 18 県 35 第 1 図 4	
59	石室内	須恵器	蓋	12.4	(4.8)	褐灰 (7.5YR5/1) 灰褐色 (5YR4/2) に近い赤褐色 (5YR5/3)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	天井部 1/2	外面：肩に一条の凹線、天井部に襷描き連続刺突文	94 と色調・胎土 異なる	
60	石室内	須恵器	蓋	9.8	4.1	青灰 (10B6.5/1) 青灰 (10B6.5/1) 青灰 (10B6.5/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	3/4	外面：天井部回転ヘラケズリ (反時計)、天井部に襷描き連続刺突文	県史・市史 178 図 25	
61	墓道 流土	須恵器	蓋		(2.0)	灰 (N4/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石)	良好	口縁部 1/10	外面：天井部に襷描き連続刺突文	県 35 第 2 図 5	
62	墓道	須恵器	高杯	12.5	11.7	灰 (N4/) 灰 (N4/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：口縁部に凹線、杯底部に襷描き連続刺突文 脚部：襷描波状文、一段三方透かし	県 35 第 1 図 5	
63	玄室	須恵器	高杯	12.5	13.2	17.1	灰褐色 (5YR4/2) 褐灰 (7.5YR4/1) 黒褐色 (7.5YR3/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	ほぼ 完形	外面：杯底部に襷描き連続刺突文、口縁部・脚部に凹線 脚部：カキマ	コ・ス 111 県史・市史 178 図 24
64	玄室	須恵器	高杯	10.1	9.5	14.6	灰 (N4/) 灰 (N5/) 灰 (N4/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	3/4	外面：杯部に連続斜線文 脚部：凹線、二段三方透かし	コ・ス 146・147 県史・市史 178 図 23
65	石室内	須恵器	高杯	13.5	(4.6)	(4.6)	に濃い赤褐色 (5YR4/3) に近い赤褐色 (5YR4/3) に近い赤褐色 (5YR5/3)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	杯部 1/2	外面：杯底部に襷描き連続刺突文	コ 5 区ホ
66	墓道 流土	須恵器	高杯		(1.9)		灰 (N6/) 灰 (N6/) 灰 (N6/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英少)	良好	杯部 破片	外面：杯部に連続刺突文	県 35 第 2 図 13
67	墓道	須恵器	高杯		(5.3)		青灰 (5B6/1) 青灰 (5B5/1) 青灰 (5B5/1)	1mm 以下の砂粒多 (長石・石英)	良好	杯～ 脚部 破片		県 35 第 2 図 2
68	石室内	須恵器	高杯		(4.5)		灰 (N6/) 灰 (N6/) 明褐色 (7.5YR7/2)	1mm 以下の砂粒少	良好	脚部 1/4	二段三方透かし	

土器

掲載番号	出土地区	種別	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面・断面)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考	
				口径	底径 (脚付)							
69	葛道 流土	須恵器	高杯	(13.4)	(1.0)	青灰 (5BG5/1) 青灰 (5BG6/1) 青灰 (5BG5/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	脚底部 1/8		根 35 第 2 図 8	
70	葛道 流土	須恵器	高杯	11.0	(2.7)	青灰 (10BG5/1) 灰ナリ青 5YR5/2 青灰 (10BG6/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	脚底部 1/4		根 35 第 2 図 9	
71	石室内	須恵器	高杯	(10.7)	(2.3)	灰 (5Y5/1) 灰 (N6/) 灰濁 (7.5YR5/2)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	脚底部 1/10 以下			
72	石室内	須恵器	高杯	(1.0)	(1.0)	灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y7/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英少)	良好	脚底部 破片			
73	石室内	須恵器	脚部	8.1	(2.9)	明褐色 (5YR5/6) にぶい赤濁 (5YR5/4) 橙 (5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石)	良好	脚底部 破片			
74	葛道 流土	須恵器	甕	(13.6)	(15.9)	灰 (N4/) 灰 (N6/) 灰白 (5YR7/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	1/6	外面：口縁部～頸部に 位置の連続沈線文、体部に 連続斜交文	根 35 第 2 図 11	
75	石室内	須恵器	甕	12.8	(8.8)	暗赤灰 (7.5R4/1) 赤灰 (7.5R5/1) 赤灰 (7.5R5/2)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石)	良好	口縁部 2/3	外面：頸部に横置き波状 文	コ・ニ 昭史・市史 178 図 26 76 と色調・胎土 異なる	
76	石室内	須恵器	甕	(8.3)	(8.3)	灰赤 (10R5/2) 濁灰 (5YR4/1) 濁灰 (5YR4/1)	1mm 前後の砂粒 (石英・長石)	良好	体部 のみ 完形	外面：体部に横置き連続 斜交文、底部ヘラケズリ	コ・ス 135 昭史 75 と色調・胎土 異なる	
77	玄室	須恵器	甕	12.9	(5.6)	にぶい濁 (7.5YR6/4) 灰濁 (5YR5/2) にぶい橙 (5YR6/4)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石)	良好	口縁部 1/2	外面：口縁部～頸部に 横置き波状文	コ・ハ 205	
78	石室内	須恵器	甕	14.0	(2.7)	赤灰 (10R5/1) 赤灰 (10R5/1) 赤灰 (10R5/1)	0.5～1mm 前後の砂 粒多 (長石・石英)	良好	口縁部 1/8	外面：頸部に横置き波状 文		
79	葛道 流土	須恵器	甕	12.7	(6.3)	灰 (N5/) 灰白 (N7/) 暗赤灰 (7.5R4/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	口縁部 1/4	外面：口縁部～頸部に 位置の連続沈線文	根 35 第 2 図 12	
80	石室内	須恵器	甕	(14.0)	(2.5)	灰 (N6/) 灰 (N6/) 灰 (N6/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英少)	良好	口縁部 1/10	外面：口縁部に位置の連 続沈線文		
81	葛道	須恵器	提瓶	(11.8)	(11.8)	灰 (7.5Y6/1) 灰 (7.5Y6/1) 灰 (7.5Y6/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	体部 1/2	外面：体部回転ヘラケズ リ (反時計)、不明瞭な カキメ	根 35 第 1 図 7	
82	葛道	須恵器	提瓶	4.5	(14.6)	灰 (10Y5/1) 灰 (10Y5/1) 灰 (10Y5/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	1/3	外面：体部回転ヘラケズ リ (反時計)	根 35 第 1 図 6	
83	茂道	須恵器	広口 壺	22.6	28.6	灰 (N6/) 灰 (N6/) 明オリブ灰 (2.5GY7/1)	3mm 以下の砂粒 (石英・長石多)	良好	完形	外面：頸部に横置き波状 文、体部上半に横置き連 続斜線文 (一部波状文)、 カキメ、胴部下手ヘラケ ズリ	コ・ス 101・105・ 107・108 昭史・市史 178 図 21	
84	玄室	須恵器	脚付 直口 壺	16.0	15.3	28.1	灰赤 (2.5YR4/2) 灰赤 (2.5YR4/2) 灰赤 (2.5YR4/2)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：頸部に横置き波状 文、体部にカキメ (下半 部ヘラケズリ) 三方透かし	コ・ス 110 昭史・市史 178 図 22
85	茂道	須恵器	子持 壺	7.9	(6.8)	にぶい赤濁 (2.5YR5/3) にぶい赤濁 (5YR5/3) 濁灰 (7.5YR4/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	子器 破片	広口壺形の子器	根 35 第 1 図 2	
86	玄室	須恵器	脚付 直口 壺	7.9	11.1	16.4	灰白 (5Y7/2) 灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y7/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	やや 不良	ほぼ 完形	外面：体部下半回転ヘ ラケズリ (反時計)	コース 113
87	玄室	須恵器	脚付 壺	16.4	(11.3)	灰白 (N7/) 灰 (N6/) 灰 (N5/)	1mm 前後の砂粒 (石英・長石)	良好	脚部～ 底部 3/4	三方透かし	コ・ス 136	
88	玄室	須恵器	脚付 壺	13.2	(4.8)	暗灰 (N3/) 灰白 (N7/) 灰 (N6/)	1mm 前後の砂粒少 (石英・長石)	良好	底部 2/3	三方透かし	コ・ス 116・117	
89	葛道 流土	須恵器	脚付 壺	15.0	(7.0)	にぶい橙 (5YR6/4) にぶい橙 (2.5YR7/4) にぶい橙 (5YR6/4)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英多・赤色酸 化粒)	不良	底部 1/4	三方透かし	根 35 第 2 図 19	
90	玄室	須恵器	脚付 壺	19.4	(7.7)	灰 (N6/) 灰 (N6/) 灰 (7.5Y6/1)	砂粒をほとんど含ま ない	良好	底部 1/2	外面：胴部に縦状工具に よる位置の連続直線文 内面：赤色顔料付着	コ・ス 亥ハ	
91	茂道	須恵器	直口 壺	8.6	17.1	灰 (N5/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	完形	外面：体部下半回転ヘ ラケズリ (反時計)	コ・ス 102 市史 178 図 20	

土器

掲載番号	出土地区	種類	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面 調)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径 (脚径)						
92	墓道 流土	須恵器	直口 壺		(11.2)	青灰 (5B6/1) 青灰 (5B6/1) —	1mm 前後の砂粒 (石英・長石)	良好	頸部～ 胴部	底部回転ヘラズリ (反 時計)	根 35 第 2 図 10
93	玄室	須恵器	短頸 壺	6.4	7.8	灰 (N6/) 灰 (N5/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	完形	外面：体部に横書き波状 文、体部下半回転ヘラズ リ (反時計)	コ・ス 141 根 史・中史 178 図 19
94	石室内	須恵器	有蓋 壺	8.8	(4.4)	褐灰 (7.5YR4/1) 灰濁 (7.5YR4/2) に赤い赤褐色 (5YR5/3)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	口縁部 1/4		59 と色調・胎土 異なる
95	墓道 流土	須恵器	器台	(42.1)	(8.1)	灰 (N4/) 赤灰 (5P5/1) 赤灰 (7.5R6/1)	1mm 前後の砂粒多 (長石・石英)	良好	口縁部 1/10	外面：受け部外面に 2 条 の間線、不明瞭なカキメ ヘラズリ (反時計)	根 35 第 2 図 21
96	墓道 流土	須恵器	器台		(4.4)	青灰 (10BG5/1) 青灰 (10BG5/1) 灰 (10Y6/1)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石多)	良好	口縁部 破片	外面：口縁端部に 1 条の 間線	根 35 第 2 図 23
97	墓道 流土	須恵器	器台		(3.8)	青灰 (5B5/1) 青灰 (5B6/1) オリーフ灰 (2.5GY6/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英)	良好	口縁部 破片	外面：口縁端部に 1 条の 間線	根 35 第 2 図 18 色調・胎土が 102 に似る
98	墓道 流土	須恵器	器台		(3.6)				受部 破片	外面：3 条の間線と横掃 き波状文	根 35 第 2 図 24 未確認
99	墓道 流土	須恵器	器台		(3.9)				受部 破片	外面：2 条の間線と横掃 き波状文	根 35 第 2 図 27 未確認
100	墓道 流土	須恵器	器台		(3.3)	暗青灰 暗灰 暗青灰	2mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	受部 破片	外面：2 条の間線と横掃 き波状文	根 35 第 2 図 26 未確認
101	墓道 流土	須恵器	器台		(2.6)				受部 破片	外面：2 条の間線とその 間に列点文	根 35 第 2 図 25 未確認
102	墓道 流土	須恵器	器台		(3.2)	青灰 (5B6/1) 青灰 (5B6/1) オリーフ灰 (2.5GY6/1)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英)	良好	受部 破片	外面：3 条の間線と横掃 き波状文	根 35 第 2 図 22 色調・胎土が 97 に似る
103	墓道 流土	須恵器	器台		(3.1)		1mm 以下の砂粒 (長石多・石英)	良好	脚部 破片	外面：透し孔の下に 2 条の間線と横掃き列点文	根 35 第 2 図 28 未確認
104	墓道 流土	須恵器	器台		(3.8)	青灰 (5B5/1) に赤い赤褐色 (2.5YR3/3) 青灰 (5B5/1)	1mm 前後の砂粒多 (石英・長石多)	良好	脚部 破片	外面：透し孔の下に 3 条の間線	根 35 第 2 図 29
105	墓道 流土	須恵器	器台	(23.2)	(2.8)	灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y7/1) 灰白 (5Y8/1)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	脚部 破片		根 35 第 2 図 20
106	墓道 流土	須恵器	甕	(64.9)	(20.2)	暗灰 暗灰 暗赤紫～暗灰	3mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	口縁部 ～頸部 1/8	外面：口縁部連続斜行沈 降文、胴部外面平行タキ キ 内面：同心円状当て具痕	根 35 第 2 図 30 未確認 1 と同一個体か
107	羨道	須恵器	甕	25.3	50.5	灰 (N4/) 暗灰 (N3/) 暗灰 (N3/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英多)	良好	ほぼ 完形	外面：平行タキ後カキ メ 内面：同心円状当て具痕	根 35 第 1 図 1
108	墓道 流土	須恵器	甕	(25.7)	(4.5)	青灰 (5B6/1) 灰白 (7.5Y7/1) 灰 (7.5Y6/1)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	口縁部 1/10		根 35 第 2 図 14
109	墓道 流土	須恵器	甕		(5.6)	灰黄 (2.5Y7/2) 黒褐 (2.5Y3/1) 赤灰 (2.5YR5/2)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英)	良好	口縁部 破片	外面：口縁部～頸部にカ キメ	根 35 第 2 図 15
110	墓道 流土	須恵器	甕		(2.1)	青灰 (10BG5/1) 青灰 (5B5/1) 青黒 (10BG2/1)	1mm 前後の砂粒 (長石多・石英)	良好	口縁部 破片		根 35 第 2 図 17
111	墓道 流土	須恵器	甕		(2.1)	灰 灰 暗灰	1mm 以下の砂粒 (長石・石英)	良好	口縁部 破片		根 35 第 2 図 16 未確認
112	石室内	須恵器	甕		(6.2)	灰 (N4/) 黄灰 (2.5Y6/1) 灰 (N6/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	破片	外面：平行タキ後カキ メ 内面：同心円状当て具痕	
113	石室内	須恵器	甕		(6.7)	灰 (N4/) 灰 (5Y6/1) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	破片	外面：格子目タキ 内面：同心円状当て具痕	
114	石室内	須恵器	甕		(11.1)	灰 (7.5Y6/1) 灰白 (2.5Y7/1) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	破片	外面：格子目タキ後カ キメ 内面：同心円状当て具痕	

土器

掲載 番号	出土 地区	種類	器種	計測値 (cm)		色調 (内面・外面・底面)	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など	備考	
				口径 (胴径)	器高							
115	石室内	須恵器	甕		(15.5)	灰 (N5/) 灰 (N6/) 灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒 (長石多・石英少)	良好	破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕		
116	玄室	土師器	直口 壺		(14.6)	明赤褐 (5YR5/6) 明赤褐 (5YR5/6) に濃い黄褐 (7.5YR6/4)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英・赤色酸化 粒多)	良好	底部～ 胴部 1/2	外面：胴部ハケメ	玄室遺跡 市史 179 図 4	
117	玄室	土師器	甕	(12.6)	(6.8)	橙 (5YR6/6) 橙 (5YR6/6) 橙 (5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英・赤色酸化 粒少・雲母多)	良好	口縁部 ～ 体部 破片	外面：ハケメ、赤色顔料	コ・ハ 208、 202、201 市史 179 図 3	
118	玄室	土師器	高杯	15.9	10.9	12.3	橙 (7.5YR6/6) 橙 (7.5YR7/6) に濃い黄褐 (7.5YR6/4)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	完形	外面：杯部に段 内面：脚ケズリ、赤色顔 料	コ・ハ 217 市史 179 図 2
119	玄室	土師器	高杯	17.3		(5.2)	橙 (7.5YR6/6) に濃い黄褐 (10YR6/4) 橙 (7.5YR6/6)	1mm 以下の砂粒多 (長石・石英・雲母)	良好	杯部 のみ 完形	外面：杯部に段	コ・ハ 219
120	石室内	土師器	高杯	12.8		(4.0)	橙 (5YR6/6) 橙 (7.5YR6/6) 橙 (7.5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英多・赤色酸化 粒少・雲母少)	良好	口縁部 1/6	外面：赤色顔料 内面：赤色顔料	
121	玄室	土師器	高杯	13.5	10.7	11.2	橙 (5YR6/6) に濃い黄褐 (7.5YR6/4) に濃い黄褐 (7.5YR6/4)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英・赤色酸化 粒多・金雲母少)	良好	杯部～ 脚部 1/3	外面：赤色顔料 内面：赤色顔料	コ・ハ 218 市史 179 図 1
122	玄室	土師器	高杯		11.0	(7.6)	橙 (5YR6/6) に濃い黄褐 (10YR6/4) に濃い黄褐 (10YR5/4)	1mm 以下の砂粒 (石 英・長石・赤色酸化 粒・雲母)	良好	脚部～ 底部 2/3	内面：脚ケズリ	コ・ハ 209
123	玄室	土師器	高杯		11.5	(6.0)	橙 (7.5YR7/6) 橙 (7.5YR6/6) に濃い黄褐 (10YR7/2)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	脚部 1/2	外面：底部に黒斑、赤色 顔料 内面：脚ケズリ	コ・ハ 210
124	石室内	土師器	高杯		9.0	(4.7)	橙 (5YR6/6) 明赤褐 (5YR5/6) に濃い黄褐 (7.5YR6/4)	1mm 以下の砂粒 (長 石・石英多・赤色酸化 粒少・雲母少)	良好	脚部 1/4	内面：脚ケズリ	
125	玄室	土師器	高杯		(4.5)		橙 (5YR6/8) 橙 (7.5YR7/6) 明黄褐 (10YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	脚部～ 杯部破 片	外面：脚部に段 内面：赤色顔料	玄室遺跡
126	玄室	土師器	高杯		(3.8)		橙 (7.5YR6/6) 橙 (7.5YR6/6) に濃い黄褐 (10YR5/4)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	脚部～ 杯部破 片		コ・ハ 210 123 と注記同じ だが別個体
127	玄室	土師器	高杯		(1.9)		に濃い黄褐 (10YR6/4) に濃い黄褐 (10YR6/4) 浅黄 (2.5Y7/3)	1mm 以下の砂粒 (石英・長石・雲母)	良好	脚部～ 杯部破 片		玄室 出土地点不明
128	玄室	土師器	把手 付椀	8.1	4.0	6.6	橙 (7.5YR6/6) 橙 (5YR6/6) 橙 (5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多)	良好	1/2		コ・ハ 207、208 市史 179 図 6
129	玄室	土師器	把手 付椀	8.0	4.2	6.7	橙 (7.5YR6/6) 橙 (7.5YR6/6) 橙 (7.5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (長石・石英多・赤色 酸化粒少)	良好	3/4	外面：一部ハケメ	コ・ハ 204 市史 179 図 5
130	石室内	埴器	鉢鉢		18.0	(5.0)	に濃い黄褐 (5YR5/3) 褐灰 (7.5YR4/1) 褐灰 (7.5YR4/1)	1mm 以下の砂粒 (石英多・長石)	良好	底部 破片 1/5	内面：すり目	土器中出土
131	石室内	瓦質 土器	鍋	(23.1)		(5.4)	黒 (N2/) 灰 (N5/) に濃い黄褐 (10YR7/2)	1mm 以下の砂粒 (石英多・長石)	良好	口縁部 破片 1/9	内面：ハケメ	
132	石室内	土師器	杯	5.4	(3.1)		に濃い黄褐 (10YR7/4) に濃い黄褐 (10YR6/3) 黒 (10YR2/1)	1mm 以下の砂粒 (石英多・長石)	やや 不良	底部 破片	外面：底部にヘラオコシ 痕	
133	羨道	土師器	椀	12.6	6.8	4.1	淡黄褐 灰褐 ？	2～3mm 大の石英・ 長石	良好	4/5	外面：口縁部に黒斑	羨道遺跡 武田論文第 5 図 120 未確認
134	羨道	土師器	椀		(2.7)		黄褐 黄褐 ？	3mm 大の石英・ 1mm 大の長石多く 含む	やや 不良	杯部 破片 4/5	外面：底部に黒斑	羨道遺跡 未確認
135	羨道	土師器	椀	10.7	5.8	4.1	淡茶褐 淡茶褐 ？	2mm 大の砂粒 (石 英・長石・金雲母) 多	良好	3/4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	羨道遺跡 武田論文第 5 図 121 未確認
136	羨道	土師器	椀	13.7	5.7	6.8	灰白 灰白 ？	2～3mm 大の石英 多	良好	1/3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	羨道遺跡 武田論文第 5 図 119 未確認
137	羨道	黒色 土器	椀	7.6	(3.9)		－ 暗黒 ？	2mm 大の石英・長 石	良好	1/3	内面：ヘラミガキ・暗文 黒色化	羨道遺跡 未確認
138	石室内	黒色 土器	椀	7.8	(1.2)		橙 (5YR6/6) 黒褐 (5YR2/1) 橙 (5YR6/6)	1mm 以下の砂粒 (石 英・長石多)	良好	底部 1/2	内面：黒色化	

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M1	T4	有袋鉄斧	67	39	16	93.8		鉄	完形		
M2	美道	環頭大刀柄頭	66	61	10	99.3		銅	完形	鍍金	昭 35 第 4 図 1、市史 181 図 1
M3	玄室	大刀	(136)	36	(15)	106.4		鉄		錆付着	〒 402
M4	玄室	大刀	(167)	36	12	184.2		鉄		木質残存	〒 402
M5	玄室	鏡板	(116)	(93)	25	-		鉄		鉄地金剥張、3片残存、M6に付着	〒 304・〒 394、他に 1 片ありか (未確認)、市史 181 図 5
M6	玄室	引手	201	38	12	170.0		鉄	完形	鏡板 M5 と半球形鍔金具 M30 が錆着	〒 387、市史 181 図 6
M7	玄室	辻金具	100	(76)	42	84.9		鉄		鉄地金剥張	〒 406、市史 181 図 2
M8	玄室	辻金具	(46)	21	15	17.7		鉄		鉄地金剥張	〒 389、市史 181 図 2
M9	美道	鍔金具	(77)	49	(25)	53.7		鉄		木質残存	昭 35 第 4 図 12
M10	美道	鍔金具	(81)	48	(28)	54.9		鉄			昭 35 第 4 図 11
M11	美道	鍔金具	34	(29)	(36)	19.7		鉄		木質残存	昭 35 第 4 図 6
M12	玄室	鍔具	(62)	(32)	(25)	14.6		鉄		鉄地金剥張	〒 349
M13	玄室	鍔金具	77	51	(29)	61.6		鉄			〒 400、市史 181 図 3
M14	玄室	馬具?	(54)	(28)	12	16.2		鉄			〒 386
M15	玄室	馬具?	(35)	(18)	8	6.1		鉄			〒 318
M16	美道	障泥金具	67	60	(21)	53.8		鉄			昭 35 第 4 図 9
M17	美道	障泥金具	63	66	20	45.7		鉄			昭 35 第 4 図 10
M18	玄室	障泥金具	65	(66)	(22)	46.0		鉄			〒 403、市史 181 図 4
M19	玄室	半球形鍔金具	18	17	(11)	2.7		鉄		鉄地金剥張	〒 355
M20	玄室	半球形鍔金具	18	17	(11)	3.0		鉄		鉄地金剥張	〒 350
M21	玄室	半球形鍔金具	18	18	(12)	3.1		鉄		鉄地金剥張	
M22	玄室	半球形鍔金具	18	18	(13)	3.5		鉄		鉄地金剥張	〒 358
M23	玄室	半球形鍔金具	18	18	(10)	2.7		鉄		鉄地金剥張	〒 346

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M24	玄室	半球形飾金具	19	19	(8)	3.2		鉄		鉄地金剛張	〒361
M25	玄室	半球形飾金具	19	18	(10)	3.1		鉄		鉄地金剛張	〒354
M26	玄室小	半球形飾金具	19	18	(8)	3.1		鉄		鉄地金剛張	〒360小
M27	玄室	半球形飾金具	20	20	(10)	3.6		鉄		鉄地金剛張	〒395
M28	玄室	半球形飾金具	19	19	(9)	2.7		鉄		鉄地金剛張	〒347
M29	玄室	半球形飾金具	19	19	(8)	3.1		鉄		鉄地金剛張	〒359
M30	玄室	半球形飾金具	20	20	(11)	—		鉄		鉄地金剛張、引手 M6に銲着	〒387
M31	玄室	半球形飾金具	20	20	(12)	4.4		鉄		鉄地金剛張	〒357
M32	玄室	半球形飾金具	20	20	(8)	2.7		鉄		鉄地金剛張	〒352
M33	玄室小	半球形飾金具	19	20	(8)	4.0		鉄		鉄地金剛張	〒346小
M34	玄室	鏃	(166)	10	6	15.8	長頸片刃	鉄		木質残存	〒341、市史180図3
M35	羨道	鏃	(65)	9	5	6.3	長頸片刃	鉄			S53思調査
M36	玄室	鏃	(63)	9	5	5.8	長頸片刃	鉄			〒304
M37	玄室	鏃	196	(10)	6	17.4	長頸鏃葉	鉄	完形		〒307、市史180図1
M38	玄室	鏃	(152)	11	7	19.3	長頸鏃葉	鉄		木質残存	〒318付近遺跡
M39	玄室	鏃	(158)	12	6	15.7	長頸鏃葉	鉄		木質・樹皮残存	〒386～405、市史180図2
M40	玄室	鏃	(162)	11	6	14.5	長頸鏃葉	鉄		木質・樹皮残存	〒386～405
M41	玄室	鏃	(141)	11	6	12.3	長頸鏃葉	鉄		木質・樹皮残存	〒386～405
M42	玄室	鏃	(98)	14	5	10.2	長頸鏃葉	鉄			2区
M43	玄室	鏃	(88)	(1.0)	5	12.4	長頸鏃葉	鉄			〒324
M44	玄室	鏃	(84)	(1.0)	4	7.1	長頸鏃葉	鉄			〒386～405
M45	玄室	鏃	(67)	(10)	5	8.0	長頸鏃葉	鉄			〒318付近下
M46	玄室	鏃	(71)	(11)	5	6.5	長頸鏃葉	鉄			〒373

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M47	玄室	鏝	(71)	(9)	5	7.0	長頭鏝	鉄			〒 330
M48	玄室	鏝	(57)	(10)	5	7.3	長頭鏝	鉄			〒 318 付近遺跡
M49	玄室	鏝	(62)	(11)	5	5.6	長頭鏝	鉄			〒 307
M50	玄室	鏝	(53)	(11)	5	5.6	長頭鏝	鉄			〒 386 ~ 405
M51	玄室	鏝	(48)	(9)	4	3.1	長頭鏝	鉄			〒 372
M52	玄室	鏝	(58)	11	4	4.6	長頭鏝	鉄			〒 397
M53	玄室	鏝	(54)	11	4	4.4	長頭鏝	鉄			〒 386 ~ 405
M54	玄室	鏝	(49)	9	4	3.3	長頭鏝	鉄			〒 318
M55	玄室	鏝	(38)	(10)	6	4.1	長頭鏝	鉄			〒 343
M56	玄室	鏝	(47)	(10)	5	5.2	長頭鏝	鉄			〒 313
M57	玄室	鏝	(42)	(10)	4	3.5	長頭鏝	鉄			〒 317
M58	玄室	鏝	(42)	10	5	3.2	長頭鏝	鉄			〒 373
M59	玄室	鏝	(41)	(9)	5	3.4	長頭鏝	鉄			〒 307
M60	玄室	鏝	(40)	11	5	3.6	長頭鏝	鉄			
M61	玄室	鏝	(35)	9	4	2.3	長頭鏝	鉄			〒 373
M62	羨道	鏝	(29)	11	3	2.0	長頭鏝	鉄			S53 照調査
M63	玄室	鏝	(131)	11	6	12.2	長頭	鉄	木質・樹皮残存		〒 386 ~ 405
M64	玄室	鏝	(114)	10	6	11.0	長頭	鉄	木質・樹皮残存		〒 392-398
M65	玄室	鏝	(100)	10	6	14.7	長頭	鉄	鏝 M66 と 錆着		〒 328
M66	玄室	鏝	(30)	7	5		長頭	鉄	鏝 M65 と 錆着		〒 328
M67	玄室	鏝	(100)	10	6	8.0	長頭	鉄	木質・樹皮残存		〒 373-379
M68	玄室	鏝	(98)	9	6	9.4	長頭	鉄	木質・樹皮残存		〒 350 ~ 385
M69	玄室	鏝	(94)	9	6	8.5	長頭	鉄	木質残存		〒 386 ~ 405

金属製品

掲載 番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M70	玄室	鏝	(89)	10	6	10.6	長頭	鉄			〒318 付近
M71	玄室	鏝	(90)	8	6	10.6	長頭	鉄			〒373
M72	玄室	鏝	(76)	11	6	11.0	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒320
M73	玄室	鏝	(81)	11	6	9.0	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒386 ~ 405
M74	羨道	鏝	(79)	9	6	11.9	長頭	鉄		木質・樹皮残存	昭 35 第 5 図 3
M75	玄室	鏝	(80)	11	6	9.3	長頭	鉄			〒321・324
M76	玄室	鏝	(72)	7	6	8.4	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒336
M77	玄室	鏝	(72)	11	6	7.4	長頭	鉄			〒369
M78	玄室	鏝	(73)	9	6	7.4	長頭	鉄			〒401
M79	玄室	鏝	(67)	10	4	5.1	長頭	鉄			〒370
M80	玄室	鏝	(67)	10	7	8.0	長頭	鉄		木質残存	〒320
M81	玄室	鏝	(60)	11	6	6.8	長頭	鉄			〒386 ~ 405
M82	羨道	鏝	(60)	10	6	10.1	長頭	鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 5
M83	玄室	鏝	(55)	10	7	9.0	長頭	鉄		木質残存	〒307
M84	玄室	鏝	(57)	10	6	4.9	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒372
M85	玄室	鏝	(52)	9	6	5.7	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒304
M86	玄室	鏝	(53)	9	6	6.5	長頭	鉄		木質残存	〒330・332
M87	玄室	鏝	(42)	10	5	3.5	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒375
M88	羨道	鏝	(73)	9	6	8.3	長頭	鉄		木質・樹皮残存	昭 35 第 5 図 2
M89	玄室	鏝	(67)	9	7	6.8	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒337
M90	玄室	鏝	(69)	11	6	7.6	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒373
M91	玄室	鏝	(71)	9	6	6.1	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒392
M92	玄室	鏝	(69)	10	6	7.9	長頭	鉄		木質残存	〒339

金属製品

掲載 番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M93	玄室	鏝	(67)	10	6	6.7	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒382
M94	玄室	鏝	(54)	9	5	4.9	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒373
M95	玄室	鏝	(51)	9	6	4.8	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒393
M96	玄室	鏝	(73)	9	6	6.5	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒350～385
M97	玄室	鏝	(70)	10	6	5.1	長頭	鉄		木質残存	〒306
M98	玄室	鏝	(70)	10	6	5.7	長頭	鉄		木質・樹皮残存	〒373
M99	玄室	鏝	(64)	12	6	5.7	長頭	鉄		木質残存	〒324・〒318 付近
M100	玄室	鏝	(54)	7	5	3.4	長頭	鉄		木質残存	〒307
M101	羨道	鏝	(78)	10	5	4.8	長頭	鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 8
M102	玄室	鏝	(47)	10	5	3.3	長頭	鉄		木質残存	〒368
M103	玄室	鏝	(46)	6	4	2.8		鉄		木質残存	〒323
M104	玄室	鏝	(54)	6	4	2.6		鉄			〒373
M105	玄室	鏝	(37)	4	4	1.2		鉄		木質残存	〒318 付近
M106	玄室	鏝	(37)	4	3	1.1		鉄		木質残存	〒336
M107	玄室	鏝	(33)	4	3	0.7		鉄		木質残存	〒386～405
M108	玄室	鏝	(27)	4	4	0.8		鉄		木質残存	〒348
M109	玄室	鏝	(31)	4	4	1.0		鉄			〒307
M110	玄室	鏝	(31)	4	4	0.9		鉄		木質残存	〒307
M111	羨道	鏝	(44)	3	3	2.5		鉄			昭 35 第 5 図 21
M112	玄室	鏝	(64)	5	5	12.2	長頭	鉄		鏝 M113 と鏝着 木質・樹皮残存	〒373
M113	玄室	鏝	(69)	5	5		長頭	鉄			鏝 M112 と鏝着
M114	玄室	鏝	(29)	7	5	14.6	長頭	鉄		鏝 M115～117 と 鏝着	〒309

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M115	玄室	鏝	(39)	7	4	14.6	長頭	鉄	鏝 M114・116・117 と銕着	テ 309	
M116	玄室	鏝	(31)	5	4		長頭	鉄	鏝 M114・115・117 と銕着	テ 309	
M117	玄室	鏝	(35)	6	4		長頭	鉄	鏝 M114 ~ 116 と銕着	テ 309	
M118	羨道	鏝	(35)	6	5	10.1	長頭	鉄	鏝 M119 と銕着、木質・樹皮残存	根 35 第 5 図	
M119	羨道	鏝	(29)	7	5		長頭	鉄	鏝 M118 と銕着	根 35 第 5 図	
M120	羨道	鏝	(26)	9	5	3.8	長頭	鉄	鏝 M121 と銕着	根 35 第 5 図 16	
M121	羨道	鏝	(11)	5	4		長頭	鉄	鏝 M120 と銕着	根 35 第 5 図 16	
M122	玄室	鏝	(35)	6	4	10.5	長頭	鉄	鏝 M123 と銕着	テ 307	
M123	玄室	鏝	(50)	6	4		長頭	鉄	鏝 M122 と銕着	テ 307	
M124	玄室	鏝	(24)	7	5	7.9	長頭	鉄	鏝 M125 と銕着	テ 308	
M125	玄室	鏝	(30)	6	5		長頭	鉄	鏝 M124 と銕着	テ 308	
M126	玄室	鏝	(162)	(33)	6	35.6	平根長三角	鉄	木質・樹皮残存	テ 350 ~ 385・テ 373、市史 180 図 4	
M127	玄室	鏝	(98)	30	7	26.0	平根長三角	鉄	木質・樹皮残存	土師器 216 F (注: 216 の注記をもつ土師器は不明)	
M128	玄室	鏝	(72)	28	7	12.2	平根長三角	鉄	木質残存	テ 373	
M129	玄室	鏝	(70)	24	4	9.3	平根柳葉	鉄	木質・樹皮残存	テ 373	
M130	玄室	鏝	(70)	26	4	10.1	平根柳葉	鉄	木質残存	テ 379	
M131	玄室	鏝	(65)	21	5	9.0	平根柳葉	鉄	木質残存	テ 373	
M132	玄室	鏝	(82)	20	4	9.8	平根柳葉	鉄	木質残存	テ 373	
M133	玄室	鏝	(82)	20	3	11.1	平根柳葉	鉄	木質残存	テ 371	
M134	石室内	鏝	(69)	20	4	8.5	平根柳葉	鉄	木質残存		
M135	玄室	鏝	(63)	20	3	8.1	平根柳葉	鉄		テ 385	
M136	玄室	鏝	(49)	20	3	7.4	平根柳葉	鉄		テ 384	
M137	玄室	鏝	(48)	20	2	6.0	平根柳葉	鉄		テ 373	

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M138	玄室	鏝	(43)	12	12	10.5	キャップ形	鉄		木質残存	テ 373
M139	玄室	鏝	(48)	9	9	7.7	キャップ形	鉄		木質残存	テ 376
M140	玄室	鏝	(51)	12	11	11.1	キャップ形	鉄		木質残存	テ 373
M141	玄室	鏝	(59)	10	10	10.7	キャップ形	鉄			テ 373
M142	玄室	鏝	(60)	12	12	11.1	キャップ形	鉄			土師器 218 下 (注: 土師器 218 は本報告書の 121 の土師器に相当)
M143	玄室	鏝	64	10	10	9.6	キャップ形	鉄	完形	木質残存	テ 373、市史 180 図 7
M144	玄室	鏝	(63)	12	10	11.4	キャップ形	鉄		木質残存	テ 368
M145	玄室	鏝	(63)	13	11	14.7	キャップ形	鉄		木質残存	テ 350 ~ 385
M146	玄室	鏝	(63)	12	11	12.7	キャップ形	鉄		木質残存	テ 350 ~ 385
M147	玄室	鏝	67	12	11	14.6	キャップ形	鉄	完形	木質残存	テ 383
M148	玄室	鏝	69	11	10	10.2	キャップ形	鉄	完形	木質残存	テ 373、市史 180 図 8
M149	玄室	鏝	(68)	12	12	12.3	キャップ形	鉄		木質残存	テ 380
M150	石室内	鏝	71	10	10	11.0	キャップ形	鉄	完形		
M151	玄室	鏝	(71)	10	10	14.2	キャップ形	鉄		木質残存	テ 374
M152	玄室	鏝	(71)	12	11	14.0	キャップ形	鉄		木質残存	土師器 218 下 (注: 土師器 218 は本報告書の 121 の土師器に相当)
M153	玄室	鏝	70	14	13	17.5	キャップ形	鉄	完形	木質残存	テ 373
M154	玄室	鏝	(69)	14	14	17.0	キャップ形	鉄		木質残存	テ 373
M155	玄室	鏝	74	10	10	14.1	キャップ形	鉄	完形	木質残存	テ 373
M156	玄室	鏝	(77)	10	10	14.5	キャップ形	鉄		木質残存	テ 373
M157	玄室	鏝	(81)	11	10	21.6	キャップ形	鉄		木質残存	テ 377
M158	玄室	弓金具	(34)	5	5	2.3		鉄		木質残存	テ 364
M159	玄室	弓金具	(33)	7	7	2.6		鉄		木質残存	玄室遊離
M160	玄室	弓金具	(28)	5	5	1.4		鉄		木質残存	テ 318 付近遊離

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M161	玄室	鏝	(169)	17	6	不明		鉄		木質残存	未確認、テ 385、市史 180 図 5
M162	玄室	鏝	159	15	13	51.0		鉄	完形	木質残存	テ 356
M163	玄室	鏝	(36)	15	10	17.9		鉄			テ 385 小
M164	玄室	鏝	(99)	11	11	23.5		鉄		木質残存	玄室東より奥遊離
M165	玄室	鏝	(105)	8	7	14.3		鉄		木質残存	テ 401
M166	玄室	鏝	(82)	5	5	6.0		鉄		木質残存	テ 401
M167	玄室	曲刃鏝	(51)	28	4	13.8		鉄			土師器 210 下 (註: 土師器 210 は本報告書の 123 の土師器に相当)
M168	玄室	鏝	(57)	28	4	15.6		鉄		木質残存	テ 363
M169	玄室	工具	(37)	16	4	6.5		鉄			テ 318 付近遊離
M170	玄室	刀子	(123)	20	11	不明		鉄		木質残存	未確認、テ 399
M171	羨道	刀子	(55)	15	6	不明		鉄		木質残存	未確認、テ 405
M172	玄室	刀子	(114)	14	4	不明		鉄		木質残存	未確認、テ 351、市史 180 図 6
M173	石室内	刀子	(34)	15	4	4.1		鉄			
M174	玄室	刀子	(18)	7	4	1.1		鉄			玄室遊離
M175	玄室	釘	(110)	18	13	不明		鉄			未確認、テ 396
M176	羨道	釘	(48)	10	7	11.1		鉄			S53 照調査
M177	羨道	釘	(41)	6	6	5.5		鉄			照 35 第 5 図 20
M178	羨道	釘	(30)	5	4	1.8		鉄			照 35 第 5 図 30
M179	羨道	釘	(48)	7	7	6.3		鉄			照 35 第 5 図 22
M180	羨道	不明鉄器	(152)	14	5	35.8		鉄			照 35 第 4 図 8
M181	玄室	不明鉄器	(123)	12	3	14.8		鉄			玄室遊離
M182	羨道	不明鉄器	(70)	16	3	10.8		鉄			S53 照調査
M183	羨道	不明鉄器	(63)	17	4	13.7		鉄			S53 照調査

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
M184	羨道	工具?	(40)	12	10	6.8		鉄		木質残存	根 35 第 5 図 6
M185	羨道	環	50	34	12	30.4		鉄	完形		根 35 第 4 図 7
M186	羨道	環	24	22	19	10.0		鉄	完形		S53 照調査
M187	羨道	環	34	30	13	16.9		鉄	完形		S53 照調査
M188	玄室	不明鉄器	(49)	9	8	7.4		鉄			〒 386
M189	羨道	不明鉄器	(70)	6	5	8.8		鉄			根 35 第 5 図 15
M190	羨道	不明鉄器	(28)	7	4	3.4		鉄			根 35 第 5 図 25
M191	羨道	不明鉄器	(41)	11	5	5.1		鉄			根 35 第 5 図 23
M192	羨道	不明鉄器	(32)	11	3	3.6		鉄			根 35 第 5 図 24
M193	羨道	鉄滓	86	80	29	250.1			完形		根 35 第 4 図 13
M194	玄室	耳環	28	32	6	17.3		銅	完形	銅芯金葉	〒 367、浮田報告による耳環 1
M195	玄室	耳環	27	30	5	12.4		銅	完形	銅芯金銀張	〒 303、浮田報告による耳環 2
M196	玄室	耳環	26	32	5	3.8		銅		銅芯金葉	頸骨付近遊離、浮田報告による耳環 3
M197	玄室	耳環	(20)	(25)	5	1.7		銅		銅芯金葉	〒 362 頸骨付近遊離、浮田報告による耳環 4
M198	不明	寛永通宝	24	24	1	3.3		銅	完形		
M199	流土	寛永通宝	22	22	不明	不明		銅	完形		未確認、根 35 目次裏
M200	流土	寛永通宝	22	22	不明	不明		銅	完形		未確認、根 35 目次裏
M201	流土	寛永通宝	22	22	不明	不明		銅	完形		未確認、根 35 目次裏
M202	流土	寛永通宝	21	21	不明	不明		銅	完形		未確認、根 35 目次裏
	羨道	刀片?	(41)	(20)	(4)	12.1		鉄			根 35 第 4 図 2
	羨道	刀片?	(66)	(15)	(2)	6.2		鉄			根 35 第 4 図 3
	羨道	刀片?	(37)	(13)	(5)	3.0		鉄			根 35 第 4 図 4
	羨道	刀片?	(30)	(12)	(5)	2.6		鉄			根 35 第 4 図 5

金属製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	分類	材質	残存状況	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ						
	羨道	鏝	(59)	10	6	5.2		鉄		木質・樹皮残存	昭 35 第 5 図 4
	羨道	鏝	(36)	10	6	4.8		鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 1
	羨道	鏝	(20)	8	5	2.1		鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 10
	羨道	鏝	(22)	8	5	1.9		鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 7
	羨道	鏝	(28)	6	4	2.8		鉄			昭 35 第 5 図 17
	羨道	鏝	(27)	6	5	2.9		鉄			昭 35 第 5 図 18
	羨道	鏝	(12)	4	2	不明		鉄			未確認、昭 35 第 5 図 19
	羨道	鏝	(14)	6	(3)	1.3		鉄			昭 35 第 5 図 12
	羨道	鏝	(23)	6	5	2.6		鉄		木質・樹皮残存	昭 35 第 5 図 11
	羨道	鏝	(20)	4	3	0.9		鉄			昭 35 第 5 図 31
	羨道	鏝	(29)	4	4	1.2		鉄			昭 35 第 5 図 28
	羨道	鏝	(24)	4	4	1.5		鉄		木質残存	昭 35 第 5 図 9
	羨道	鏝	(31)	5	5	1.6		鉄			昭 35 第 5 図 29
	羨道	鏝	(28)	6	4	2.0		鉄			昭 35 第 5 図 13
	羨道	鏝	(24)	3	2	0.8		鉄			昭 35 第 5 図 32
	羨道	鏝	(23)	7	6			鉄			昭 35 第 5 図 14 上
	羨道	鏝	(26)	9	5			鉄			昭 35 第 5 図 14 下
	羨道	鉄片	(16)	(11)	2	0.4		鉄			昭 35 第 5 図 26
	羨道	鉄片	(12)	(11)	2	0.8		鉄			昭 35 第 5 図 27

玉類

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	状態	備考
			最大長	最大幅	孔径 (大)	孔径 (小)					
J1	羨道	切子玉	21.0	14.7	4.2	2.7	5.05	水晶	透明	完形	昭 35 第 5 図 1 一部に敲打痕を残す 片面穿孔
J2	羨道	小玉	3.5	2.0	1.4	1.2	0.03	ガラス	サックス ブルー (1PB5/4.5)	一部 欠損	昭 35 第 5 図 2 J1 孔内から発見

軒丸瓦・軒平瓦

掲載番号	出土地区	種別	計測値 (cm)				色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など		備考
			瓦当部	丸・平部							瓦当部	凸面・凹面	
R10	T12	軒丸瓦	高さ: (10.3) 幅: (8.4) 厚さ: (3.3)				瓦当部: にぶい 黄橙 (10YR7/4)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	瓦当部 1/5	単弁蓮華文?		
R12	石室内	軒丸瓦	高さ: (9.3) 幅: (12.7) 厚さ: (4.0)				瓦当部: 灰白 (10YR8/2)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	瓦当部 2/3	単弁八葉蓮華文		
R13	石室内	軒平瓦	長さ: (11.0) 幅: (13.8) 厚み: (5.0) 深さ: (0.3)				凹面: 灰白 (2.5YR8/2)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	瓦当部 破片	均整唐草文	凹面: 糸切り痕・ 布目	
R14	石室内	軒平瓦	長さ: (18.9) 幅: (9.2) 厚み: (4.2) 深さ: (0.3)				凹面: 灰 (7.5Y6/1)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	1/5	均整唐草文	凹面: 糸切り痕・ 布目 凸面: 縄目き	
R15	石室内	軒平瓦	長さ: (3.8) 幅: (7.2) 厚み: (5.1) 深さ: -				凹面: 灰白 (2.5YR8/2)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	瓦当部 破片	均整唐草文		
R16	石室内	軒平瓦	長さ: (31.9) 幅: 27.0 厚み: (4.0) 深さ: 5.0				凹面: 橙 (7.5YR7/6)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	3/4	上外区二重線 一部均整唐草文	凹面: 布目	

丸瓦・平瓦

掲載番号	出土地区	種別	計測値 (cm)				色調 (凸/外) 面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など		備考
			長さ	幅	厚み	深さ					凸面 (外面)	凹面 (内面)	
R1	T7	平瓦	(7.1)	(5.3)	1.4		にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	破片	縄目き	布目	
R2	T4	平瓦	(6.1)	(6.4)	2.2		明黄褐 (10YR7/6)	4mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片	縄目き	布目?	
R3	T4	平瓦	(7.8)	(4.5)	1.8		明黄褐 (10YR7/6)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片			風化により 調整不明瞭
R4	T4	平瓦	(5.3)	(5.1)	(2.6)		にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片			風化により 調整不明瞭
R5	T4	平瓦	(5.0)	(4.6)	1.6		灰白 (N7/)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片			風化により 調整不明瞭
R6	T10	平瓦	(5.0)	(8.8)	1.9		橙 (5YR6/6)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片	縄目き	布目	
R7	T3	丸瓦	(5.9)	(5.1)	1.7	(5.3)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片	縄目き	布目	
R8	T3	平瓦	(6.1)	(8.9)	2.3		明黄褐 (10YR7/6)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片	縄目き	布目	
R9	T3	平瓦	(7.1)	(9.2)	2.1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	破片		布目	
R11	T12	平瓦	(9.8)	(11.1)	2.0		明褐 (7.5YR5/6)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	破片	縄目き	布目	
R17	石室内	丸瓦	35.7	(13.8)	2.7	4.7	橙 (7.5YR6/6)	3mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	一部欠損	縄目き	布目	玉縁
R18	溝道	丸瓦	(27.8)	(12.9)	2.4	5.7	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	端部・側 片部残存	ナデ	布目	玉縁
R19	溝道	丸瓦	(29.4)	(13.5)	2.9	5.1	橙 (7.5YR7/6)	4mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	一部欠損	ナデ	糸切り痕・ 布目	玉縁
R20	石室内	丸瓦	(19.3)	(14.1)	3.1	5.1	灰白 (10YR8/2)	1mm 以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	端部・側 片部残存	縄目き	布目	玉縁

九瓦・平瓦

掲載番号	出土地区	種類	計測値 (cm)				色調 (凸(外)面)	胎土	焼成	状態	形態・手法的特徴など		備考
			長さ	幅	厚み	深さ					凸面(外面)	凹面(内面)	
R21	石室内	丸瓦	(28.9)	(13.7)	2.0	4.8	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	端部・側 片部残存	縄印き	糸切り痕・ 布目	玉縁
R22	石室内	丸瓦	(14.9)	(14.3)	2.8	4.9	褐灰 (10YR6/1)	4mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	端部・側 片部残存	印き?	布目	玉縁
R23	羨道	平瓦	34.7	27.5	2.5	4.5	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒多 (石英・長石)	良好	ほぼ完形	縄印き	糸切り痕 布目	
R24	羨道	平瓦	36.1	(27.7)	2.4	4.4	にぶい黄橙 (10YR6/3)	4mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	一部欠損	糸切り痕 縄印き	糸切り痕	
R25	石室内	平瓦	(32.0)	(25.0)	2.6	3.3	にぶい橙 (10YR7/2)	4mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	端部・側 片部残存	縄印き	布目	
R26	石室内	平瓦	(24.0)	(23.7)	2.5	(3.3)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	端部・側 片部残存	糸切り痕 縄印き	布目	
R27	石室内	平瓦	(24.5)	(20.0)	2.9	(3.0)	灰 (N5/)	4mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母・ 赤色酸化鉄)	良好	側片部残	格子目印き	布目	
R28	石室内	平瓦	36.6	(13.2)	2.0	(1.8)	灰白 (N8/)	4mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	端部・側 片部残存	縄印き	糸切り痕・ 布目	
R29	石室内	平瓦	(15.8)	(15.8)	2.5	(2.8)	灰 (N5/)	2mm以下の砂粒多 (石英・長石)	良好	端部・側 片部残存	縄印き	布目	
R30	石室内	平瓦	(10.1)	(7.5)	2.5	(1.3)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒多 (石英・長石・雲母)	良好	側片部残	格子目印き	布目	

石製品

掲載番号	出土地区	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	状態	備考
			長さ	幅	厚さ				
S1	羨道流土	簾	(13.8)	(10.8)	2.2	0.28	サヌカイト	1/3	凹基式 卑35第5図5
S2	不明	簾	19.6	11.6	2.7	0.55	サヌカイト	完形	平基式 S53 卑調査
S3	羨道流土	簾	17.7	15.2	2.4	0.58	サヌカイト	完形	凹基式 卑35第5図4
S4	羨道流土	簾	34.5	17.6	4.3	2.54	サヌカイト	完形	平基式 卑35第5図3
S5	不明	伐採坪	(68.2)	67.6	35.2	174.21	安山岩質凝灰岩	刃部のみ	卑35第5図6
S6	不明	礫石	(45.6)	(56.1)	(21.0)	34.17	シルト質泥岩	破片	卑35第5図7
S7	不明	礫石	(42.7)	(23.8)	8.1	16.46	流紋岩	破片	卑35第5図8



1 こうもり塚古墳周辺 (南西上空から)

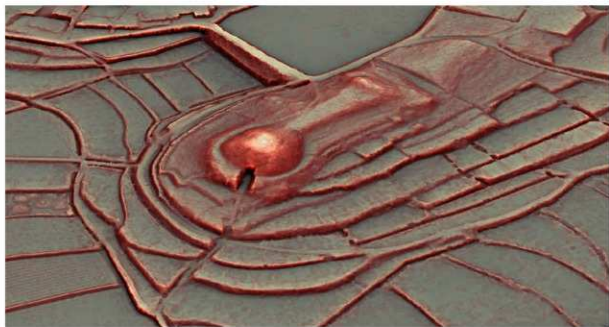


2 こうもり塚古墳 (南上空から)

図版 2



1 こうもり塚古墳丘陵測量図 (1/1,000) 航空レーザ測量による赤色立体地図



2 こうもり塚古墳鳥瞰図 (南から) 赤色立体地図

1 こうもり塚古墳全景
(南東から)



2 こうもり塚古墳全景
(西から)



3 こうもり塚古墳
石室入口 (南から)



図版 4



1 後円部（西から）



2 後円部（北東から）



3 前方部前面（東から）



1 T1周縁部(南から)



2 T1下段(南から)



3 T1上段(南から)

図版 6



1 T1上段
(南西から)



2 T2 (北西から)



1 T 2下段 (西から)



2 T 6下段 (南西から)



3 T 6上段 (南西から)

図版 8



1 T7 (西から)



2 T7 (東から)



3 T7西壁 (北から)

1 T 5 (南から)



2 T 8 (西から)



3 T 4 (南から)



図版 10



1 T 4 (南から)



2 T 4 (南から)



3 T 9 (南から)



1 T9 (東から)



2 T10 (東から)



3 T3 (東から)

図版 12



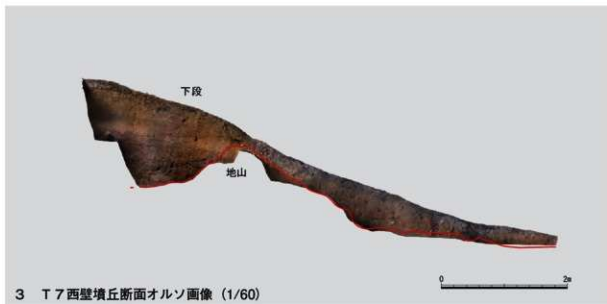
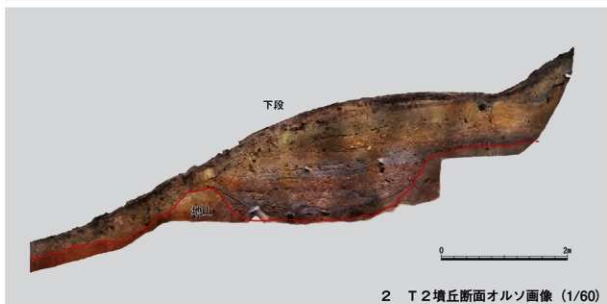
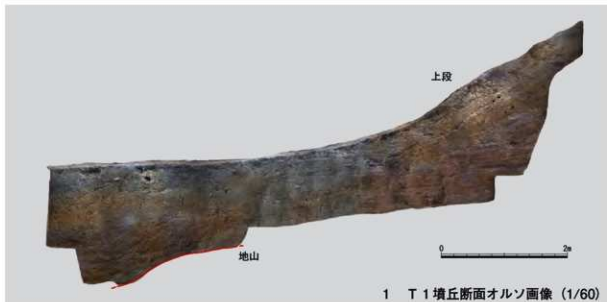
1 T 3 (北東から)

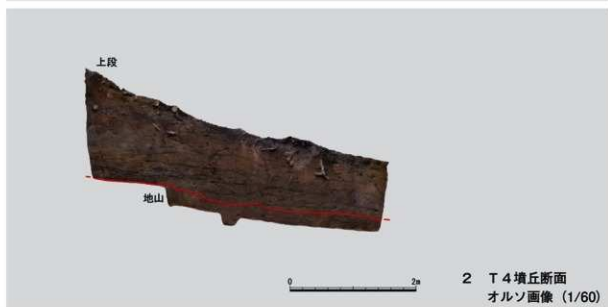
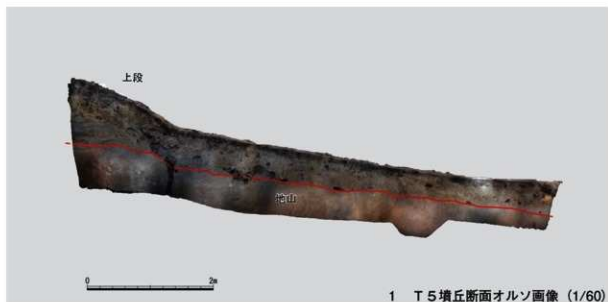


2 T 11 (北東から)



3 T 12 (東から)







図版 16



1 玄室 (北から)



2 羨道 (南から)



3 石室入口 (南から)

1 玄室内石棺
(発掘調査前) (北から)
岡山大学考古学研究室提供



2 玄門付近
(発掘直後) (南から)
岡山大学考古学研究室提供



3 羨道閉塞石 (南から)





1 玄室遺物出土状況
(南から)

岡山大学考古学研究室提供



2 玄室遺物出土状況
(北東から)

岡山大学考古学研究室提供



3 陶棺脚部出土状況
(東から)

岡山大学考古学研究室提供

1 石棺東側遺物出土
状況（西から）

岡山大学考古学研究室提供



2 羨道遺物出土状況
（北から）

岡山大学考古学研究室提供



3 羨道遺物出土状況
（南から）





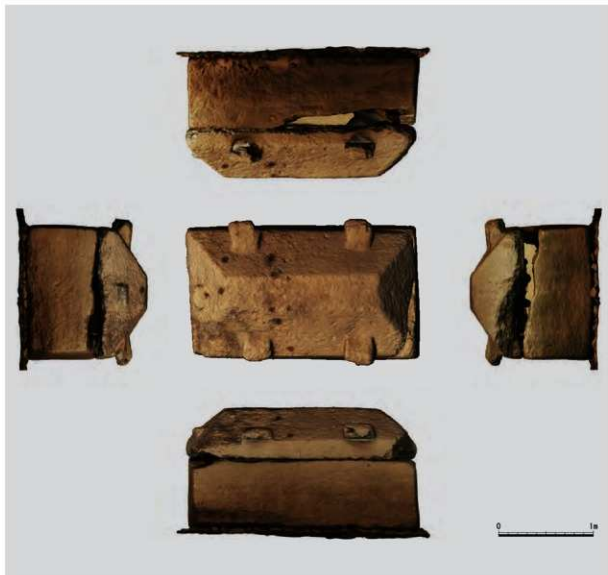
1 墳丘盛土断面
(南から)



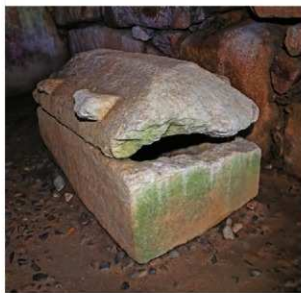
2 閉塞石及び墓道
充填土 (北から)



3 左：墓道肩口
(北から)
右：墓道内一括
須恵器 (西から)



1 石棺オルソ画像 (1/40)



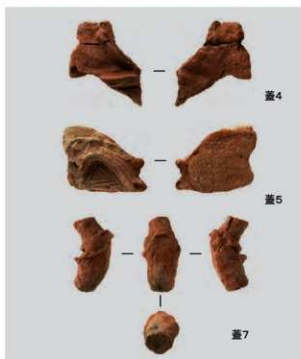
2 石棺 (南西から)



3 石棺 (北西から)



出土遗物（陶棺①）



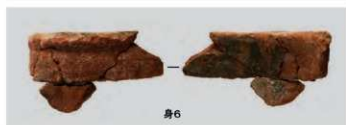
出土遗物 (陶棺②)



身1・2 脚4・9



身4



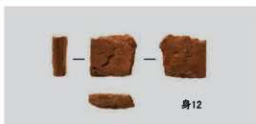
身6



身3



身11

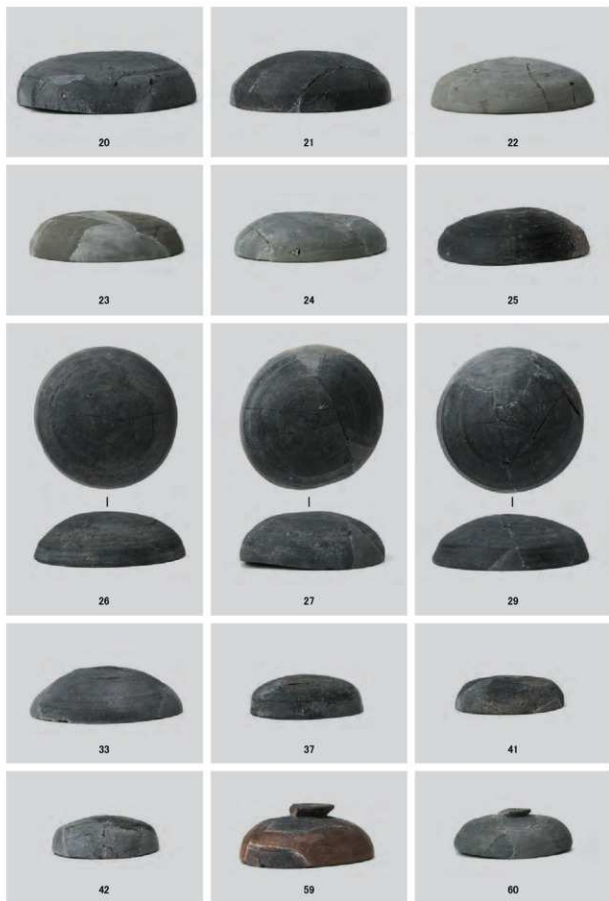


身12

出土遺物 (陶棺③)



出土遺物 (陶棺④)



出土遺物 (須恵器①)



出土遺物（須惠器②）



出土遺物 (須惠器③)



出土遺物 (須惠器④・土師器)



M2

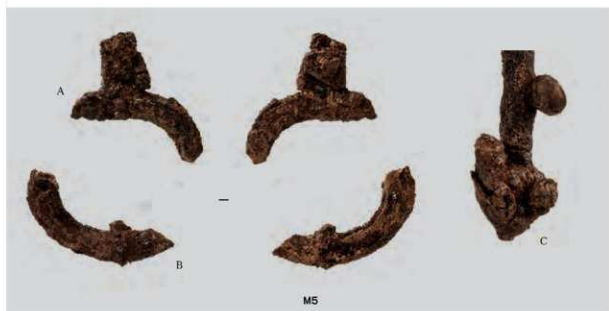
1 環頭大刀柄頭



M3

M4

2 大刀



A

B

C

M5

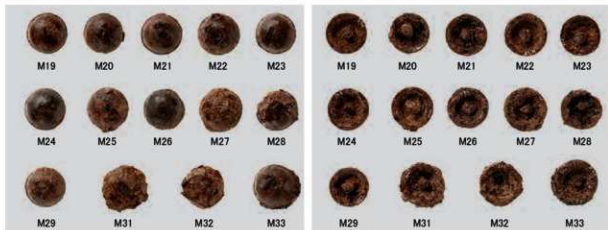
3 馬具①

出土遺物 (金屬製品①)



馬具②

出土遺物 (金屬製品②)



1 馬具③(左:表 右:裏)



2 鉄鍬①

出土遺物 (金属製品③)



1 鉄鏃②

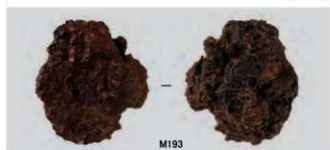


2 鉄鏃③ほか

出土遺物 (金属製品④)



1 農工具ほか



2 鉄滓



3 耳環・玉



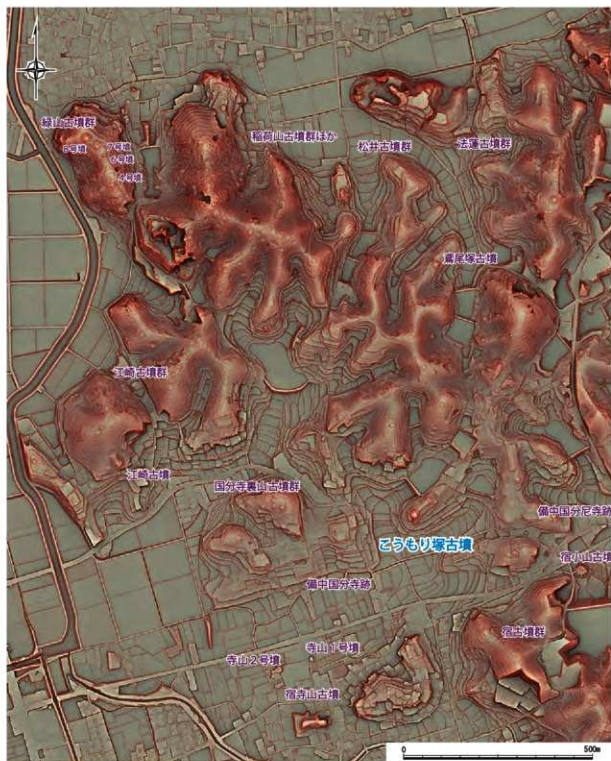
4 石鏃・石斧



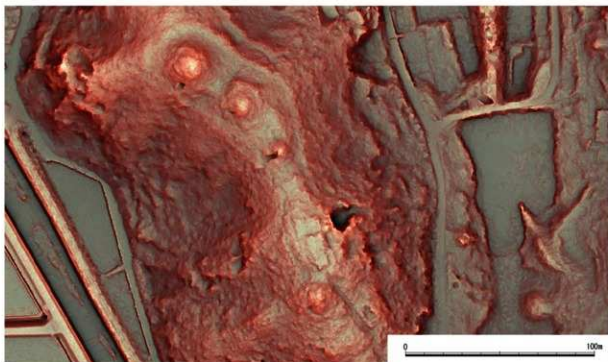
5 鉄斧



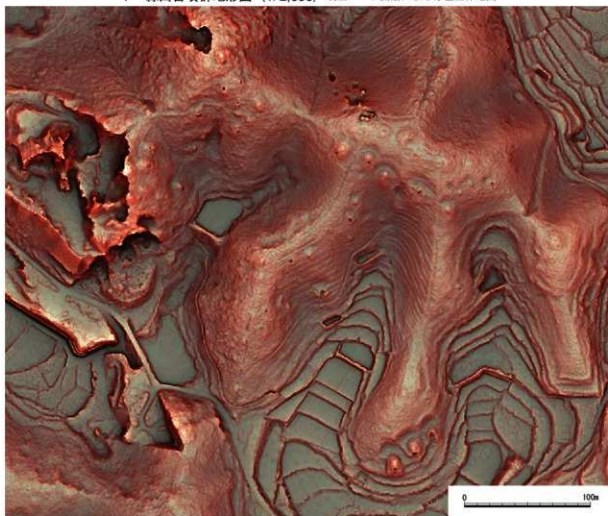
出土遺物 (瓦)



こうもり塚古墳周辺地形図 (1/10,000) 航空レーザ測量による赤色立体地図



1 緑山古墳群地形図 (1/2,000) 航空レーザ測量による赤色立体地図



2 稲荷山古墳群ほか地形図 (1/3,000) 航空レーザ測量による赤色立体地図



1 緑山6号墳奥壁（西から）



2 緑山6号墳石室入口（西から）



3 緑山6号墳玄門（東から）



4 緑山6号墳右側壁（北東から）



5 緑山6号墳左側壁（南東から）



1 緑山7号墳奥壁（南西から）



2 緑山7号墳石室入口（南西から）



3 緑山7号墳玄門（北東から）



4 緑山7号墳左側壁（南から）



5 緑山7号墳右側壁（西から）



1 緑山8号墳奥壁（南西から）



2 緑山8号墳右側壁（北から）



3 緑山8号墳左側壁（東から）



4 緑山8号墳玄門（北東から）



5 緑山8号墳羨道（南西から）



1 稲荷山C4号墳奥壁（東から）



2 稲荷山C4号墳全景（南から）



3 稲荷山C4号墳玄門（西から）



4 稲荷山C4号墳左側壁（東から）



5 稲荷山C4号墳右側壁（南東から）



1 稲荷山C 10号墳奥壁（東から）



2 稲荷山C 10号墳石室入口（東から）



3 稲荷山C 10号墳玄門（西から）



4 稲荷山C 10号墳右側壁（南西から）



5 稲荷山C 10号墳左側壁（北西から）



1 稲荷山C 36号墳奥壁 (南東から)



2 稲荷山C 36号墳右側壁 (西から)



3 稲荷山C 36号墳左側壁 (北から)



4 稲荷山C 36号墳玄関 (北西から)



5 稲荷山C 36号墳羨道 (北西から)



1 稲荷山C 41号墳奥壁（南から）



2 稲荷山C 41号墳玄門（北から）



3 稲荷山C 41号墳羨道（北から）



4 稲荷山C 40号墳全景（南東から）



5 稲荷山C 40号墳奥壁（南から）



1 稲荷山C 69号墳奥壁（南西から）



2 稲荷山C 69号墳石室入口（南西から）



3 稲荷山C 69号墳玄門（北東から）



4 稲荷山C 69号墳左側壁（南から）



5 稲荷山C 69号墳羨道（北東から）



1 鳥取上高塚古墳
オルソ画像

岡山大学考古学研究室提供



2 鳥取上高塚古墳
遠景（東から）



3 鳥取上高塚古墳
全景（西から）



1 鳥取上高塚古墳
奥壁と天井
(南西から)



2 鳥取上高塚古墳
玄門 (北東から)



1 鳥取上高塚古墳
左側壁（南から）



2 鳥取上高塚古墳
右側壁（西から）



3 鳥取上高塚古墳
石室入口（南西から）

報告書抄録

ふりがな	しせき こうもりづかこふん							
書名	史跡 こうもり塚古墳							
副書名	「古備路の歴史遺産」魅力発信事業に伴う保存活用総合調査							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	266							
編著者名	金田善敬(編)・藤井翔平・鈴木茂之・白石純・光本順・山口雄治・ライアン ジョセフ							
編集機関	岡山県古代古備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL.086-293-3211 FAX086-293-0142 URL. https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL.086-224-2111							
発行年月日	2023年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こうもり塚 古墳	岡山県 総社市 上林	33208	332081657	34° 40° 2"	133° 47° 9"	196703～ 19781201～19790209 20210901～20211224 20220506～20220629	— — 225.7 145.0	学術調査 史跡整備 保存目的
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
こうもり塚 古墳	古墳	古墳時代	古墳	石棺・陶棺 須恵器、土師器 金銅製品(環頭大刀柄頭・大刀・馬具・ 鉄鎌・弓金具・農工具・釘・耳環) 玉類、鉄滓、瓦、石器(石鎌・石斧)、 磁石、古銭			墳長約96mの前方後円墳。横 穴式石室には家形石棺が残る。 石室から陶棺のほか、単環環頭 大刀柄頭、須恵器、土師器、武 器、農工具等が出土した。	
要 約	<p>丘陵尾根の先端に築造された墳長約96mの前方後円墳。古墳時代後期としては県内最大の規模を誇る。本書は、令和3・4年度に実施した墳丘確認調査に加え、過去に実施された横穴式石室の調査成果も収載した。墳丘は前方部・後円部とも二段築成で、外周には周縁部を盛り出していた可能性が想定される。前方部下段は主に地山削り出しである一方、上段は互層状の盛土で築造されている。後円部は、上段を互層状の盛土で構築(第一次墳丘)した後、下段(第二次墳丘)を造成していた。第一次墳丘の外周に沿って溝状の掘り込み(墳丘内埋没溝)が認められ、第二次墳丘はその溝を埋め戻しながら構築されていた。また、古墳の背面に当たる北西側の墳丘は段築を形成しておらず、整形が簡略化されていたことが明らかとなった。</p> <p>横穴式石室は全長19.9mを測り、県内では最大、中・西国でも最大級の規模となる。棺は石棺と陶棺がある。石室内は攪乱を受けていたが、副葬品として単環環頭大刀柄頭をはじめ、武器、馬具、須恵器、土師器等が出土している。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 266

史跡 こうもり塚古墳

「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業に
伴う保存活用総合調査

令和5年2月28日 印刷

令和5年3月15日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5